怨嗟の使い魔

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
怨嗟の使い魔

【Ｎコード】
Ｎ６７２２Ｗ

【作者名】
タゴサク

【あらすじ】
ガンダールヴの復讐の才人のリベンジの話です。

設定（前書き）

キャラの設定説明です。

設定

怨嗟の使い魔

アホリエッタです。
本作はアンチで通します。

主人公は前作のアンチの主人公、サイトの生まれ変わりです。
以前の記憶を継承しており、ブリミル、そして貴族社会を憎んでおります。
前作で煮え切らなかった点を反省し、出来る限り温くならないアンチを目指します。
追記、魔法は殆ど使いません。才人本人がブリミルを嫌ってるので、魔法よりは現代兵器。
そして母国日本愛です。

本作の出演者は以下が基本です。

平賀才人
ガンダールヴの復讐の才人の生まれ変わりです。
時代背景はサイトの生まれた時代と同じ。召喚も同じくルイズに召喚されます。
記憶は完璧にサイトの記憶を継承していますが、
ブリミルも魔法も毛嫌いしています。
いずれはルイズに召喚されてしまうのが避けられない事を知るサイトがどう言う人生を
歩むかが本作の趣旨です。

平賀隼人

才人の父です。（原作でも彼の父の名前が分からなかったのでオリキャラとします。）

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
本作の第二の主人公です。
サイト以外の出演者は記憶の伝承はありません。
ルイズも原作当初の勝気な貴族の三女のままです。
平民を虫けら以下に考えており、爆発魔法で何人もの平民を虐殺しています。

アンリエッタ・ド・トリステイン
トリスティンの王女です。
能天気なお姫様です。

マリアンヌ大后
トリスティンの恥部です。引き篭もりです。

マザリーニ
トリスティン唯一の良心です。苦労人です。
サイトの親友となります。

ウェールズ・テューダー
ゼロ魔のキーとなる人物です。
話の流れで生死が別れる方です。
本作ではどうなるか・・。

以上の人物が基本となります。
その他の方も基本的にゼロ魔原作の方が出演しますが、性格は徹底的に

貴族至上主義。平民はゴミ虫以下の扱いとなります。
こんなのはゼロ魔では無いと言う方は、見ずにお帰りください。
また１５歳以下のお子様にはキツイ話が連発します。
性表現には留意しますが、残酷なシーンも多々出ます。
お子様は見ないで下さい。

Ｒ１５です。

現代の日本帝國の設定。
内閣制度から大統領制度への変更。
クーデターに近い騒動となったが、国民を巻き込み現内閣及び政党を追放。
新制度の政府となる。
教育関連からは帝國教育委員会を設立。

設定追記します。９／２０

本作は原作の設定を元に違う話になっております。
時期は同じですが、色々と変った話です。
原作と違う事を了承して見てください。
また本作は作者の妄想の権化です。
現実世界とは懸け離れた世界観ですのでご容赦を。
他国を侮蔑する内容には〇などで変更します。

設定（後書き）

次回からストーリーの投下を始めます。
９／２０追記追加

撤き戻し（前書き）

壊れてしまった才人の第三回目の人生の始まりです。

撒き戻し

オギャーオギャー・・・・・・。

（煩いな?何だ、この泣き声は?）

オレは平賀才人・・だよな?
確かトリスティンとか言う国のバカ三女に召喚された哀れな男。
そして戦死してしまい、生まれ変わった・・・ハズだったが。
色々と手を貸してくれたブリミルに人生を握られてしまい・・。

壊れたんだ。

今のオレの現状は・・・。

赤ん坊だ。

また輪廻出来なかったのか。
恐らく、オレは平賀サイトとして、撒き戻し人生を送る事になろう。
そして17の春に糞ルイズに召喚されてしまう。

もうイヤだ。アイツ等に関わるのは。

頑張っても地球に帰る事も出来ず、異界の土になるのは。
オレは、普通の暮らしがしたい。
それだけなのだ。
だが、オレはどうやらブリミルのオモチャらしい。
以前、オレが壊れた時、ブリミルはハッキリと言った。

（（サイト、お前の魂はワシが縛っているのだ。未来永劫。
ハルケギニアが危機に訪れる度に現れるイーデルヴァイの役目としてな。））

魂を縛る??
冗談じゃ無い。

だが、このままではまた、オレは同じ様な運命に弄ばれるのだろう。
どうしたらいいのだ?
もう異界の神を信じるのは危険だ。
神を頼らず、異界で生き延びる方法を考え、ブリミルを叩き潰したい。
オレは、自分の運命は自分で決めたいのだ。
前回はブリミルにすべてを握られたのが失敗の元だった。
今度はどう生きたらいいのだ?
生半可な方法では、また同じ人生を送ってしまう。
それではダメだ。
科学を持ち込む?

それこそ神頼みとなる。
またブリミルの言いなりになるのがオチ。
家族に相談しても、幼児が将来、異界に召喚されてしまうと告げたら発狂してると
思われるだろう。
どうしたらいいのだ・・・。

（（サイトきゅんよ。ワシが協力しよう♪））

誰だ?まさか神とか言わないだろうな。

（（いや、その・・。神なのだが。））

また神かよ。そして最後にはオレを壊すためのオモチャにするのだろ?

（（天に誓ってそれは無い。ワシはブリミルとは違うわい。））

へ?ブリミルじゃ無いの?

（（アタボーよ。ブリミルみたいな己の子孫のためだけに異界の魂を弄ぶ事はしないぞ。
少なくともワシ等はな。））

そう言う貴方達はどんな神なんスか?

（（ワシは天界の神。そして闇魔と輪廻の神も居るぞ。））

輪廻の神様も居るんですか。
だったらもう才人以外にしてください。
お願いします。
もうあの異界に取り込まれオモチャにされるのはイヤなんです。

（（すまんが、それは出来ないのじゃ。既に平賀才人としてお前は産声を上げ、
この世界の子供として組み込まれてる。
いくら未来が暗黒でも今すぐお前を死なす事はワシ等でも出来ない事。
だが・・。
お前の暗黒の未来を出来る限り回避する術を与える事は可能じゃ。））

あの暗黒の未来を回避出来るのですか？
でもどうやって。

（（簡単じゃよ。お前等がヤツ等以上の化け物になれば済む事じゃよ。））

前回も相当頑張ったつもりでしたがね・・。
アレ以上になるにはどうしたら良いのですか？

（（日本を丸ごと召喚させるのじゃよ。ルイズにな。））

ゲッ。日本を丸ごとですか？

（（いくらヤツ等がバカでも、日本の現実を見ればビビルじゃろ。
ついでじゃから、ハルケギニアのガン。ロマリアを日本とトレードさせよう。

そしたら迷惑な国同士で潰し合いしてくれるじゃろ♪））

でも大丈夫ですか？勝手にトレードしたりして。

（（今の日本もガタガタじゃろ？戦争に負けてからは、近隣諸国にバカにされ、
コケにされ、他国の言いなりにされ。
それよりは異界で大国となり、世界をリードして見たらどうじゃ？
スゲー楽しいと思うぞ。））

そりゃ楽しいでしょうが、他の日本人には迷惑では？

（（そのためにも、色々とチートしないといけないのだよ。
オヌシのオトン、一応、東大は出てたよな？））

・・。そう言えば酔っ払うと良く戯言を言ってたな・・。
オレは東大を出た学士様だぞぉぉって。ヨッパの戯言と思ってたけど。

（（いや、本当に出てたのだよ。お前のオトンは。
ただ、運に恵まれず、情け無いサラリーマンとして生きてただけじゃ。
そこでだ・・・。））

神の話を要約すると、ウチのオヤジを日本の初代大統領にすると言う事だ。
総理では傀儡にしかならない。
そこで大統領制度を強引に導入。
腐れ政党のアホはネ申力で叩き潰す。

オヤジが大統領になったら、自衛隊を国防軍にし、
日本に巣食う特別亜細亜の連中を速やかに偉大な祖国に帰らせる。
モチロン竹島と北方領土は取り返す。

オレは国防幼年学校に入り、戦闘全般を勉強し心身を鍛えておく。
召喚する際は日本国土全部を召喚させるので、邪魔な連中は全員叩きだしておく。
ハルケギニア全土合わせても日本の国民よりも少ない人間だ。
武器関連なら、数百年はリードしてるだろう。
魔法はチートだがそれだけ。
日本でハルケギニアを征服か・・。
何か楽しそうだな。
確か、ロマリアのヴィットーリオが鏡でコッチの世界を覗き見してたよな。
今度はお前等がコッチの世界で苦労して見ろ。

フフフ・・。

ワーハハハハハハハハ。

糞ルイズ、ブリミル。
そしてハルケギニアの魔法使い共よ。
次回ではお前等で楽しく遊ばせて貰うぞ。
そのためにも、オヤジを何とかしないとな。

オレは呂律が回る様になったら、オヤジ達に神からの言葉を話した。

「オヤヂィ、オレは三回目の転生をさせられた三代目サイトでちゅ。・・・」

生まれて半年にも満たない赤子が喋りだしたら、お袋は狂気乱舞。
オヤジは真っ青。
そして・・ネ申様も降臨。
バックの資金や閣僚もネ申力で多数ゲット。
数年後、初代日本国大統領、平賀隼人が誕生。

オレが六歳になる頃には、日本に非協力な迷惑な害人は偉大な祖国にお帰り頂き、
米軍も順次撤退を始めた。
自衛隊はキッパリと日本陸海空軍となり、アジア最強の軍事力を誇る様になる。
竹島??
住み着いてた野性のサルを軍事演習で潰したら、文句言わなくなりましたが。

尖閣??
レーダーサイトとヘリ基地を設置。
そしたら海賊も近寄らなくなりました。

北方領土??
巨大化した海軍にビビったか、ロシアから返してくれましたよ。

やはり国力は軍事力ですよ。
米軍とは今もフレンドですが、もうすぐ日本が消えます。

オレはオヤジのコネでは無く実力で国防幼年学校に入学。
（日本軍設置と共に立ち上げられてました。）

腐れルイズに召喚されるまで、いくら鍛えても足りないのだ。
武器全般はガンダールヴに頼らなくても扱えるレベルにしておこう。
日々努力を続け、武道は全般が三段以上。
十四の春には戦闘機も操縦可能となり、後には国防軍少年部少将を拝命する。
竹島を奪い返す際は戦闘機搭乗員として、多くのイーグルＫを撃墜。
勲章も授与された。

そして・・・。
十七の春。
日本は地球から消えた・・。

撤き戻し（後書き）

このネ申様、キモ男に出てたネ申様です。
才人くん大好きネ申様です。
次回は御馴染みの召喚の場です。

召喚（前書き）

才人、三回目の召喚の儀式です。

召喚

やっぱり変らぬツルペタのツンデレ桃髪幼女が目の前に居た。

「すまぬが少し待ってて欲しい。すぐに答えるから。」

オレはルイズがギャーギャー騒ぐのを無視し、手元の携帯でオヤジに電話を入れた。

「オヤジか?オレだ。
魔法学院の召喚会場に転移してるぞ。」

「おお、そうか。お前の位置はレーダーで確認してる。
すぐに戦闘機を数機寄越す。待ってろ。」

「あんがとよ。オヤジ。」

オレは電話を切るとルイズを無視し、コルベールを捕まえ、今からオレの
国の特使が来るから契約は出来ないと話す。

「ハテ・・。ミスタ??。
貴方はこのルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエール嬢の

・・・・。

使い魔として召喚されたのです。
もし良かったら交渉に応じて頂けませんか？」

「今は出来ない。オレも一国の王の息子。
勝手な事は出来ない。まあ少し待て。」

数分するとスクランブルで飛んで来た海軍戦闘機「海燕」が飛来。
パイロットは・・。オレの部下か。

「平賀才人少将。お迎えに上がりました。」

「ウム、ご苦労。さて、トリスティンとか言う小国の皆様。
オレは日本帝國の海軍の人間。サイト・ヒラガ少将だ。
拉致してくれた事に対するお礼をしないとね。
そこの糞女。名は何と言う？」

「く、糞女ぁぁぁ？？このヴァリエール家の三女の私に？？」

「どんな家かは知らぬが、オレも一国の王の息子。
ケンカを売るなら買うぞ。」

アイコンタクトをすると、護衛の兵士が軽機関銃でヤツラの足元に
機銃掃射をする。
ルイズも魔法を放とうとしてたしね。

「今のは威嚇だ。もしお前等が不当な行為に及ぶなら、我が国の戦
闘軍団が
お前等を一瞬で滅ぼす。ココの最高責任者は誰だ？」

「わ、私ですが。サイト・ヒラガ殿。」

「フム。少しは頭が冷静になったか？他国の人間を拉致し、使い魔と称する
奴隷にしようとしてたな。申し開きは出来るか？」

「ど、奴隷とは・・。」

「お前は先程、オレに対し使い魔として召喚されたから契約しろと迫ったな？
オレの考えは無視して。
オレは使い魔とは犬猫と同系列の奴隷と思った。
違うか？」

「・・・・・。」

「無言が答えだ。
まあ良い。
お前はタダの現場責任者らしいからな。
この国の地理は把握した。王都も分かったので、今から王都に攻め込むとしようか。」

「御待ちください。
先程のご無礼は深くお詫びします。
どうか考えを改めて頂けませんか？」

「・・・お前。
名も名のらずに詫びが出来るか？この無礼者めが。」

「失礼しました。私はこの魔法学院の火の教師。
ジャン・コルベールと申します。サイト・ヒラガ殿。」

「そうか・・。ヨシ。
では王都に攻め込むのは棚上げにしておこう。
だがオレを拉致した事実は変らぬ。その侘びはどうする気だ？」

「私では責任を口にする事が出来ません。
この学院の校長、オールド・オスマン氏がこの地区の最高責任者です。
彼にお話して頂きます。」

それから俺達はルイズとコルベールの案内でオスマンに会う事になった。
戦闘機は数人の護衛に任せ、軽機動車に乗せてね。
（海燕の他にも輸送機が来てます、ＶＴＯＬ機なので荒地でも着陸可能です。）

コルベールは馬も居ないのに走る馬車は初めて見たと騒いでた。
戦闘機も見たろうに。
ルイズは真っ青になってガタガタと震えてたが。

（ど、どうしよう・・。
使い魔を召喚したら、他国の王子？
下手すると私達の国が滅ぼされてしまう。
あの怪鳥が王都や私の実家を襲ったら。
お母様でも瞬殺されてしまうわ。
どうしてこうなるのよ。
普通の使い魔が出てくれたら問題無かったのに・・。）

数キロ程走ると、愚か者の巣。

トリスティンアホー学院が見えて来た。

シエスタもあそこに居るのだろう・・。

マルトーさんは元気かな。

この国の貴族には興味は無いが、平民の皆はオレと仲良くしてくれた。

ルイズに叩かれメシを抜かれて困ってたオレを助けてくれた彼等は何とかしてあげたい。

オレの第三回目のハルケギニアでの人生はこうして始まった。

召喚（後書き）

アンチですが無法はしないです。
いかにハルケギニアと日本を絡ませるかが今後の課題です。
次回はオスマンとの交渉。
そして平民の仲間との再会です。

恫喝（前書き）

ルイズ達に対する恫喝の話です。

恫喝

オレ達は護衛を引き連れ、オスマンに面会する事にした。

「始めまして。この学院の校長殿。
オレはお前等の学院の小娘の魔法で拉致された日本帝國の王の息子、サイト・ヒラガと言う。
さて、お前等の仕出かした不始末。
どう責任を取るか、見せて貰いに来たぞ。」

「始めまして・・。異国の王の息子殿。
ワシはこの学院の校長、オールド・オスマンじゃ。
さて拉致とはどう言う事かの？」

「トボけるか？このタヌキが。
オレは異国の王の息子として帝國軍の士官として訓練に励んでた。
しかしお前等の仕出かした魔法により、オレはこの国に強制的に拉致されたのだ。
ああ、別にトボけるならそれでもいいぞ。
オイ、護衛兵士。
待機させてある海燕を出撃させろ。
手始めのこの学院を破壊しても良いぞ。」

「ハッ、平賀少将。了解しました。」

「ま、待ってくれんかの？サイト・ヒラガ殿。」

「待たぬ。お前はオレが名前を告げたにも関わらずシカトしようとしたな。

それは宣戦布告とコチラは理解した。
お前等は魔法とかを使うのだろう？
ならコチラは武器を使わせて貰うだけ。」

「御待ちください。ヒラガ・サイト殿。ご無礼は深く謝罪します。
どうか、破壊する事だけは御待ち頂けませんか？」

「・・誠意の篭らぬ謝罪だが。
まあ良い。一応聞いてやろう。
だが、無礼と感じたらオレは即刻、祖国から援軍を呼ぶぞ。
オレを殺すと生体反応が消える。
そうしたら、この国。
いや・・。
このハルケギニアとか言う大陸はこの世界から消える。
試して見たいなら試しても良いぞ。」

「とんでもございません。
どうか短絡な事だけはご容赦お願いします。」

「・・・短絡もナニも・・。
他国の子弟を拉致し、謝罪もしない国に何の遠慮が要る？
オイ、そこのオレを拉致した糞女。
お前もオレに謝罪もしていないな。
手始めにお前の実家を灰にしてやろうか？」

（ゲッ。わ、私の実家を灰に？？
冗談とは言えない。
あの怪鳥だと、音よりも早く飛ぶらしい。
そんな事はウインドドラゴンでも不可能。
だけどあの怪鳥は轟音と共にこの国に飛来した。

どうしよう・・。）

「・・・わ、私の召喚魔法で貴方様を召喚してしまい、本当に申し訳ございません。
どうかお許しして頂けませんでしょうか？
サイト・ヒラガ様。」

「・・お前、オレが力も何も無い普通の人間だったらムリヤリ恫喝して、
強制的に使い魔と言う名の奴隷にしただろう？
その程度の謝罪でオレが許すと思うか？
逆の立場になって考えて見ろ。」

（確かに。
もし、彼が力の無い平民だったら、私は即座に使い魔にしてただろう。
そして私が彼の立場になってたとしたら。
絶対にブチキレていたと思う。
彼の怒りは理解出来るが、ハンパな謝罪では逆に怒らせてしまいそう。
どうすれば良いの？？？）

ルイズは靴も服も下着も脱ぎ捨て、裸になり頭が割れる勢いで土下座し、
サイトに謝罪を始めた。

「サイト・ヒラガ様。私の至らぬ魔法で貴方様を召喚してしまった事を
心より深くお詫びします。
どうか、私達の仕出かした事を許して下さいとは申しません。

謝罪だけでも受け入れて貰えませんでしょうか？
私如きの謝罪が足りないと言われるのでしたら、命も差し出します。
どうか、お許しください。」

（もうコレが限界よ。これ以上の謝罪なんてレビテーション無しで
この部屋から飛び降りるしかないわ。
何とかコレで勘弁してよ。）

「・・・フム。
若い小娘が躊躇もせずにすべてを脱ぎ捨てての謝罪。
いかにオレでも無碍には出来ない。
ヨシ。
拉致に対する謝罪。確かに受け取った。
だが、国に対する謝罪は別だぞ。」

「へ？？？国？？？」

「そうだ。
お前の召喚魔法はオレだけではなく、オレの国もこの世界に召喚したのだ。」

「どう言う事でしょ？？」

「分からぬか・・。ヨシ。
説明するよりも見せた方が理解出来るな。
オイ、そこの無能校長。そしてハゲ教師。
お前等も来い。
オレの国を空から見せてやる。」

才人は彼等を空燕に乗せ、空から転移した日本を見せる事にしたの

だ。

恫喝（後書き）

話に出て来る航空機や武器はすべて妄想の権化です。
後に武器スペックは紹介しますので御待ちください。
次回は空から見せる日本の話です。

ようこそ日本帝國へ。（前書き）

ルイズ達に日本を見せます。

ようこそ日本帝國へ。

轟轟と言う爆音と共に虚空を飛来する空燕。
長閑な空のドライブでは無く、ギンギンに冷えた空間となってた。

「オイ、そこのハゲ。この航空機の速度はどの程度と思う？」

「わ、私ですか・・。すいません。
想像も出来ない速度と高度と言うのは理解できますが。」

「フム。教師らしい満点の答えだな。
この空燕は音の二倍の速さで飛んでる。
現在の高度は一万五千メートル。
ああ、ココで魔法は使うなよ。
与圧されてるからお前等も含め全員圧死するからな。」

音の二倍の速さとは・・。それに高度一万五千？？
単位は我が国とほぼ同じと言う感じだから、およそ一万五千メイル？
窓から眺める下界を見下ろした感じからは雲と異常な速さで後方に消える
トリスティンの大地が見える。
ウソでは無いだろう・・。
それにココで暴れる事は我々全員の死と繋がる。
大人しくしておくか・・。

「平賀少将、間もなく羽田海軍基地に到着します。

大統領も御待ちだそうです。」

「おお、そうか。ご苦労。
さすがに速いな。」

何と、もう国に到着とは。
トリスティン魔法学院を飛び立って一時間も経っていない。
ハンパでは無い速度で移動できるとは。
恐ろしい速度だ。

「オイ、お前等。ベルトを締めろ。
もうすぐ着陸だぞ。」

才人の指示に従い、ルイズ、コルベール、オスマンの三人は黙ってベルトを締めてた。
そして羽田に到着。

「な、ナニよ。コレは？」

「むう・・。天に届けとばかりに聳える塔が数え切れない。
そして、我が国とは比較にならない物資の豊富さ。人の多さ・・。」

「ようこそ、日本帝國へ。ルイズ、オスマン、コルベールよ。
コレが俺達の国。日本帝國だ。」

「才人、大変だったな。我が国の混乱も少しは落ち着いたが・・。
ああ、始めまして。私がこの国の大統領、平賀隼人だ。
才人の父親でもある。」

「始めまして。私は・・。」

「今は聞かないでおこう。話の進展次第では貴方達の国と交戦する覚悟もあります。
さて、ルイズさんだったかな？
私達の国は貴女の魔法とかによって、この異界に転移させられてしまいました。
位置を把握するＧＰＳ衛星が消えてしまいましたので、今まで日本が存在してた地球とは
別の惑星と判断しています。
いや、大変な事をしてくれましたね。
我が国のインフラは大混乱に陥っていますよ。
さて、どう国として責任を負って頂けるのでしょうか？
我が国に対し・・・。」

ど、どうしよう・・。
こんな巨大な国なんてハルケギニアには絶対に無い。
私も自分の実家が巨大な家と思ってたけど、この国に来たら霞むわ。
何なのよ。
あの巨大な塔は？
三百メイルはある巨大な塔が山とあるなんて冗談でしょ？
でも現実なのよね。
どうしたら、こんな事になるのよ。
私が召喚をしなかったら、今もバカにはされてるだろうけど、平和な世界だったのね。
お母様やお父様にどう謝罪したらいいのだろう・・。

「ヒラガ・ハヤト様、彼女の学院の校長を勤めてるオールド・オスマンと言います。
彼女では責任を口に出す事も出来ません。
また私達でも国の責任までは負えません。

今回の召喚により、貴方達の国に対しての贖罪をどうしたら良いのか。
今はお答えが出来ないと言うのが私達の現在言える最高の誠意です。
彼女も先程はサイト様に対し、すべての着衣を脱ぎ捨て土下座して謝罪していました。
どうか、寛大な対応をお願い出来ないでしょうか？」

オスマンは土下座して隼人に謝罪を続けた。
もちろんルイズもコルベールもだ。
周囲は軽機関銃を装備した護衛兵士が山と居る。
暴れても数人の犠牲ですべてのヤツを抹殺出来るだろう。
オヤジの周囲はＳＰが身体を張って守ってる。

「オヤジ、コイツ等では話にならないみたいだな。
だからコイツ等の国の王にでも交渉して来るよ。
オレが日本帝國の代表でいいよな？」

「ああ、構わんよ。才人。オレが国を離れる事は出来ないし。
コイツ等を連れて王に面会して来い。
今度は護衛を百機は連れて行け。いい恫喝になるだろ？」

「クックックッ。オヤジ。ヤリ杉だぞ。
まあいい恫喝にはなるな。オイ、ジジイ。お前等の国の王家に会いに行くぞ。
立て。」

オレはそう言うと、ヤツ等を拘束し、再び空の旅にとシャレこんだ。
あのアホ姫。
相変わらずアホなんだろうな・・。
会うのもイヤだが、話の展開上、会わなければいけないのよね。

トホホホホ・・・・。

ようこそ日本帝國へ。（後書き）

ルイズ達では話が進みません。
脳の沸いた姫との再会は次回です。
あぁイヤだイヤだ。
アホ姫は前作異常のアホです。
アホが嫌いな人は見ないでください。

再会（前書き）

シエスタとの再会です。

再会

俺達はルイズ達を連れ、再び空の旅に旅立った。
時間も遅いので、今夜は学院に泊まる事にしたのだが。

「サイト様、本日は本当に申し訳ありませんでした。
王家には私の方から連絡しておきますので、明日にはこの学院に王家の
皆様が来賓されます。
どうか今宵はこの学院の来賓室にお泊りして下さい。」

「ウム。構わぬ。
護衛の兵士は外に駐屯させるが問題は無いな？」

「モチロンで御座います。食事の方はどう致しますか？」

「護衛の兵士は兵糧食があるから心配は要らぬ。
オレは・・。そうだな。この国の食事を出して貰おうか？」

「分かりました。手配しますので、しばらく御待ち頂けますか？」

オスマンめ。
完全にビビってるな。
いいザマよ。
コルベールは外の戦闘機や車が気になるのか？チラチラ見てる。
ルイズは・・。
蒼白を通り越してブッ倒れる寸前だ。
いいザマよ。
貴族だナンダと騒いでも親の庇護が無かったらタダの小娘。

まあ、オレも今回は国と言うバックボーンを使わせて貰ってるが。
個人で出来る事なんて国の力の前には何にもならないと言う事を痛感したもんな。
いくらガンダールヴとか言われても、最後は擦り切れて壊れてしまってた。
もう、あんな最後はイヤだ。

食事の事は、この学院の平民と交流したかったからだ。
特にシエスタ。
日本の佐々木家も転移してる。
何とか彼女と親族を会わせてあげたい。
本当に心の優しい娘だったからな。
彼女は。

しばらくするとメイドが食事を運んで来た。
オスマン達には、メシが不味くなるから消えろと言い、帰らせた。
メイドは・・。
やはりシエスタだ。
懐かしいそばかす顔の昔の恋人。
今度こそは幸せにしてあげたいな・・。

「サイト・ヒラガ様、メイドのシエスタと申します。
給仕を申し使いましたので、何なりと仰って下さい。」

「ああ、そんなに硬くならなくてもいいよ。
オレは貴族とか魔法使いは嫌いだが、平民には優しい人間だ。
シエスタと言ったかな?
オレはサイト・ヒラガと言う。

宜しくな♪」

「ありがとうございます。サイト様。
洗濯とかございましたら、申し付けてください。」

「うん。ありがとう。」

あまり最初から砕けては、不審に思うだろう。
ファーストコンタクトはこんなモンか？
おっ、やはり手荒れが酷いな・・。
コレでもプレゼントしておくか。

「シエスタ。かなり手荒れが酷いね。
オレの国の手荒れをケアする薬だ。プレゼントするから仲間と使いなさい。」

「こんな高価な秘薬、頂けません。」

「遠慮するな。見た所、ガサガサじゃ無いか。
仕事にも差し支えるだろ？
寝る前に手に摺り込んで寝ると、朝には少し回復出来てると思う。
オレ達は平民には優しい民族だ。
敵には容赦しないがね。」

「そ、そうでございますか・・。
分かりました。ありがたく頂きます。」

「ウン、それでいいよ。遠慮は要らない。
そう言えば君の目と髪。オレと似てるね。」

「ハイ？？
言われて見ますと、私と同じで黒い髪に目ですね。
私のお爺さんがタルブ村に龍の羽衣と言うマジックアイテムで飛来したそうですが。
他の民族と違う容姿してたので、馴染むまで苦労したと聞いています。」

「聞きたいのだが、御爺様の名前は？」

「ササキ・タケオと名乗ってました。」

（ビンゴ。やっぱり以前と同じ世界だ。）

「確実な事は言えないが、君のお爺さんは俺達の国の人と思う。
オレの知り合いに佐々木さんと言う家庭があるが、そこのお爺さんが戦争中に航空機の戦いで戦死されているんだ。
その人の名前も佐々木武雄と言う。」

「本当ですか？」

「うん。シエスタの顔とそっくりな女の子も居るから、多分間違い無いと思う。
今度会わせてあげるよ。そうだ、ちょっと待っててくれ。」

オレは携帯を取り出すと佐々木家に電話した。

「もしもし、夜分遅くすいません。佐々木さんですか？
平賀才人です。以前お話してた異界の話ですが。
ええ、やはり一緒でした。今シエスタと言う子が居るのですが、やはりお爺さんは

武雄さんでしたよ。顔も佐々木さんの御家族にそっくりです。
ハイ?? 今ココに居るから代わりますね。言葉は通じますからゆっくりと喋ってください。」

オレはシエスタに携帯を渡し、佐々木さん一家と会話させる事にした。

シエスタは耳に響く声にビックリしてたが、タルブ村の父親に良く似た声の主に驚いてた。
しばらく会話してたが、やがて・・。

「ハイ。ありがとうございます。御爺様も喜ぶと思います。ハイ。では・・。サイト様に代わりますね。」

オレはシエスタから携帯を受け取ると佐々木一家にお礼の言葉を述べ、電話を切った。

「シエスタ。どうだった?」

「ハイ。タルブ村に私の家族が住んでいるのですが、お父様と同じ声をされていました。
そして従兄弟と名乗るシズコさんと言う女の子の声は私にそっくりでした。
御爺様の話は本当だったのですね。」

「ウン。オッ、ちょっと待ってな・・。佐々木さんからだ。
コレがキミのお爺さんの乗ってた戦闘機だが、見覚え無いか?」

携帯に添付画像が入ったメールが届いたのだ。
佐々木武雄が生前、戦地から送った愛機との画像だ。

「こ、これは・・。龍の羽衣・・。コレ、私のお爺さんです。」

「やはりか？シエスタ。明日にでも暇を貰って欲しい。
明日、日本に連れて行くから。」

「そんな・・。私、クビになってしまいます。」

「心配するな。オレ達の国で衣食住は保障する。こんな国で働く必要は無い。」

オレはそれからシエスタに明日、日本に連れて行く事を説得し、食事を終え帰らせた。
明日はマルトーさんにも会っておかないとな。

来賓室のフカフカのベッドにダイブし、オレは異界の三回目の夜を迎えた。

再会（後書き）

アホ姫には学園に来させます。
次回はマルトーとの再会とアホ姫降臨です。

厨房にて。（前書き）

マルトーとの再会。
そしてある平民の最後です。
かなり残虐なシーンとなりますので、お子様は見ないでください。

厨房にて。

翌朝。

オレは独り、貴賓室での目覚めを迎えてた・・が。

ノックの音がしたのだ。

誰だ??

「サイト・ヒラガ様、おはようございます。メイドのシエスタです。お目覚めでしょうか?」

「シエスタか。少し待っててくれ。今起きたばかりだから、身支度をする。」

オレは海軍士官服に着替え、武器装備の点検を済ませておく。

コレばかりは他人には見せられない、オレの命だ。

護衛の兵士も異常は無かったとの報告が入る。

今日はアホ姫との再会か・・。

イヤなのよね。

オカンは引き篭もりで娘とマザリーニに国を丸投げ。

親の資格ゼロじゃん。

アホ姫もあのオカンの血を引いてたからな。

ルイズが変っていない事から推察してもヤツもアホのままだろ?

オヤジが見たら絶対にブチキレるぞ。アレは。

まあ、俺達の国もこの世界で生きて行かないといけないから、無碍な事はしないけどね。

そこらは今後の取引よ♪

朝飯はどうしよう・・。

やっぱり厨房だわな。

マルトーとも会いたい。
彼も同じだと思う。
我等が剣か・・。
もう数十年も前の話になるのか。

オレの中では・・。＞サイトは三回目の転生なので、
既に精神年齢は父親と同じ位です。

「シエスタ。待たせたね。ワルイ。」

「いいえ、メイドとして当然の勤めです。」

「朝食なんだがな。厨房で取らせてくれないか？」

「厨房でですか？騒がしいですよ。」

「うん。構わない。」

オレはシエスタと並んで厨房へと歩きながら話してた。

「昨日の秘薬、本当にありがとうございました。
ガサガサだった手が、かなり綺麗に治りましたわ。」

「そうか・・。そりゃ良かった。
それと、日本行きの話だが、少し待ってて欲しい。
色々と準備もあるから。」

「ええ、モチロンですわ。従兄弟が居たなんて。本当に驚きました。
」

「その話は絶対に他人には漏らさないで欲しい。
この国は欺瞞と危険に満ちてる。
安全な所だけでのみ話して欲しいのだよ。」

「・・分かりました。誰にも言いません。」

それから厨房に着くまでは、一言も会話せず俺達は黙って歩いた。

「マルトーさん、ニホンの貴族様のサイト・ヒラガ様がコチラで朝食を
お召し上がりになりたいそうです。お願い出来ますか？」

「おお、シエスタか。構わないが・・。
異国の貴族様。こんなむさ苦しい所で食事されても宜しいのですか？」

「ああ、モチロンだ。
おっ、挨拶していなかったな。始めまして。

オレは日本帝國の軍人、サイト、ヒラガと言う。
マルトーさんで良かったかな?始めまして。」

「サイト・ヒラガ様で良いのですか?オ、自分はマルトーと言います。
このトリスティン魔法学院の厨房をまかされている料理人です。
宜しくお願いします。」

「堅苦しい話は貴族相手だけでいいですよ。
オレも日本では普通の家庭の子供です。」

「ワハハハハ。そうかい。オレも硬いのは苦手なんだよ。
そう言えば朝飯を食べに来たんだったな。サイト殿。」

「殿も要りません。呼び捨てで結構ですよ。ココでは。」

「そうかい?じゃサイトと呼ぶぞ。」

「お願いします。」

俺達はマルトーや調理人とワイワイ話しながら楽しい朝食を食べた。
途中で厨房の調理人が材料を取りに倉庫に出かけて席を外してた時だ。

外から異様な音と悲鳴が聞こえたのは。

見ると、マルトーは黙って下を向いてた。
他のメイドや調理人も・・。

「どうしたのだ?黙り込んで。」

「今、席を外した部下が貴族の子供に殺されたのです。恐らく。」

「何故だ？」

「理由はありません。多い時は週に数人も殺される時もあります。私達は犬や猫以下の平民ですから・・。」

オレは黙って席を立ち、悲鳴の聞こえた方向に歩いて行った。
その先には・・。

先程までマルトーとワイワイ騒いでた陽気な少年が、モノを言わぬ躯となってた。
その躯の近くに、見た目はあどけない少年が杖を揮ってたのだ。

「フン。この偉大なメイジのボクの身体にぶつかるとは。
失礼な平民だ。
地獄でもどこでも消えてしまえ！！」

そう叫び、何やら呪文を唱えると少年の躯は業火に包まれ、やがて灰になってしまった。

「フム、今日もオレ様の魔法は絶好調だな。試し切りには丁度いい平民だったわい。
ワハハハ。」

高笑いして彼等は食堂の方へと歩いて行った。

オレは黙ってその光景を見てるしか無かった。

今は行動に出せない。
許してくれ・・。
オレは彼の遺灰をかき集め、穴を掘り埋めて黙祷を捧げた。
「サイト様・・・。」
「シエスタか。間に合わなかった。すまん。
許してくれ。」
「いいのです。私達平民は彼等には絶対に逆らえないのですから。」
「許せん。だが今はオレも行動に出れない。
シエスタ。危険な目に遭いそうになったら、オレの部屋に逃げて来い。
絶対に助けてやる。」
「いいのです。サイト様。
サイト様まで危険な目に遭わせる訳には行きません。
私達トリスティンの平民は、貴族様のペットなのです。」
「今のこの国では、こんな光景は溢れてるのか?」
「もう慣れてしまいましたわ。
私の弟も貴族の面前を横切ったと言う罪で焼き殺されました。
亡くなった御爺様も貴族様に殺されてしまいました。」
「・・・そうか・・。信じられない程、この国は腐っていたのだね。
」

「私達にはこの国で生きるしかありませんから。」

シエスタも泣きながら、亡くなった彼の灰を埋めたささやかな墓碑に祈りを捧げてた。

まったく、以前の時代以下の腐った国だ。

こんな国に命を捧げてたなんて。

オレは絶対にこの貴族の連中だけは潰すと改めて心に誓った。

さて、アホ姫との交渉も始まるな。

どう料理してやろうか？

厨房にて。（後書き）

次回はアホ姫との再会です。

姫と枢機卿（前書き）

お馴染み、マザリーニとアンリエッタの馬車会談です。

姫と枢機卿

「ふぅぅぅぅ。」

「これで十三回目ですぞ。殿下。」

困った声でマザリーニは言った。

「なにがですの？」

「溜息です。
王族たるもの、無闇に臣下の前で溜息などつくものではありませぬ。
」

「王族ですって！！まぁぁっ！！」

アンリエッタは大声で言った。

「このトリスティンでの王様は貴方でしょ？枢機卿。
今、街で流行っている小唄はご存知ですかしら？」

「存知ませんな。」

大嘘である。
彼はこのハルケギニアの事なら大陸に住むドラゴンの鱗の数まで知っている。
都合が悪いので、知らぬフリをしてるだけである。

「それならば聞かせて差し上げますわ。」

「トリスティンの王家には、美貌はあっても杖が無い。
杖があるのは枢機卿。灰色帽子の鳥の骨♪」

「街女が歌う様な小唄など口にしてはなりませぬ！！！」

「いいじゃないの。小唄くらい。わたくしは貴方の言いつけ通りに学院の貴族の尻拭いに来たのです。何故、私がこんな仕事をしないといけないの？
お母様は私にすべてを投げ出して、王室の奥に引き篭もってるというのに。
私もすべてを投げ出して悲しい悲しいと泣いて暮らしたいですわ。」

「姫・・。それを言ってはいけません。王妃は・・・・。」

「喪に服してると言いたいのでしょ？そうね。
私もお父様の喪に服して暮らそうかしら？」

「姫、それはなりません。
国が潰れてしまいます。トリスティンがあるのは・・。」

「マザリーニが居るからでしょ？
私達親子では、国を潰してしまいますからね♪」

マザリーニは頭を抱えていた。

何故、こんな王室になったのだ？

王が生きてた頃は明るく素晴らしい王室だった。

王の崩御後、この国はガタガタだ。

王妃は喪に服し、王室の奥に引き篭もってしまってた。
王政もすべて投げ出して。

残されたのは私とアンリエッタ王女のみ。

アンリエッタもまだ子供だ。

だが、彼女まで引き篭られたら、王室では無くなってしまう。
何とか引き止めないといけない。

だが、昨夜の知らせでこの国も終わるかも知れないと痛感してしまってた。
まさかルイズ嬢が他国の王？の息子を召喚してしまうとは。

しかも異界の国らしい。
それだけで無く、その国そのものまで召喚するとは。
恐ろしい兵器や怪鳥を扱うとか。
アンリエッタに色々と説き伏せてはいるが、彼女の幼い頭では理解出来ていない。
どうしたモンかな??

そんな事を考え、悩んでると学院が見えて来た。
学院の近くには恐ろしい数の怪鳥が舞い降りてたのだ。

「マザリーニ。アレは何ですか?」

「恐らくルイズ嬢が召喚した国の怪鳥でしょう。
そして怪鳥を操る兵士と思います。
間違っても彼等に手を出さない様に釘を刺しておかないと。」

そう・・。この国のメイジは無礼と見るや、簡単に他人の命を奪い続けて来た。
魔法至上主義の権化の国になってた。
彼等には罪は無い・・と思う。
我々がメイジに対し、キチンと規制をかけていなかったせいだ。

「護衛のメイジ諸君。
前方に見える怪鳥や駐屯兵士には絶対に手出しはならぬぞ。
彼等は異国の騎士だ。
彼等の背後には巨大な国が控えてるそうだ。
間違っても手出しはならぬ。」

マザリーニは護衛メイジに釘を刺すと、隣のアンリエッタにも釘を刺しておいた。

「姫、彼等に近づいてはなりませぬぞ。
異国の騎士です。
無碍な事はしないと思いますが、実態が分かるまでは油断出来ません。」

「そ、そんな事は考えてませんわ?ただ凄い綺麗な鳥と思いまして・・。」

「フム。言われて見ると、確かに綺麗な鳥ですね。
まるで作り物みたいな??」

アレはどうやって飛来したのだろう?
オスマンが乗せてもらったと聞いてるので、会談の後にでも詳しく聞いておくか。

私達を乗せた馬車は、静かに彼等の横を通過。
トリスティン魔法学院の門へと入って行った。

そして・・・・・。

王室の馬車、多くの護衛のグリフォン軍団、
そしてラ、ヴァリエール公爵家の馬車がトリスティン魔法学園に到

着した。

「トリスティン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーーーりーー。」

魔法学園の本殿前に王室馬車が止まると、扉をくぐって現れたのは、まずはマザリーニ枢機卿（スウキキョウ）だった。
生徒や教師は一斉に緊張したが、マザリーニは意に介した事は無く、馬車の横に立つと、続いて降りて来る王女の手を取った。
生徒、教師、オールドオスマン達の間から歓声があがる。
王女はニッコリと薔薇の様な微笑みを浮かべると、優雅に手を振った。

「マザリーニ枢機卿殿、本日はムリなお話で本当に申し訳ありませんでした。
私達では処理出来ない事態が発生しまして。」

「詳しい話は後程。して、相手側からの要望とかは？」

「まだ分かりません。とりあえずルイズ嬢の謝罪で、一応の怒りは解けていますが、
国に対する謝罪が出来ません。まさか異国まで召喚するとは・・。」

「その異国はどの程度の規模で？」

「相手の話によりますと、人口が一億を超え、巨大な塔が山とありました。
そして空飛ぶ怪鳥は音の二倍の速さで飛来します。
我が国のメイジでは瞬殺されると思います。」

「音の二倍とは？」

「そのままの意味です。一時間に音の二倍の速さで飛行出来るのです。
しかも多くの人を乗せてです。」

「信じられん。だが、学院の外に駐屯してた怪鳥を見る限り、ウソとも思えぬ。」

「詳しくは彼等から聞いて下さい。私達では理解し切れません。」

マザリーニはこれ以上はオスマンからは聞く事はムリと判断し、
姫、ヴァリエール夫妻、護衛メイジを引き連れ会談の行われる会議室に向かう。

ああ、胃が痛む・・。

姫と枢機卿（後書き）

次回はサイトとの会談となります。

会議（前書き）

アホ姫はあまり喋れません。
殆どがマザリーニとサイトです。

会議

学院会議室は重厚な雰囲気に包囲されてた。
魔法衛視隊、そして異国の武器を装備した日本帝國の護衛兵士に囲まれてたからだ。

「マ、マザリーニ。恐いですわ。」

「姫、護衛の衛視隊も控えています。ご安心を。」

恐がるなと言ってもムリな話だ。
私でも正直、この雰囲気は恐ろしい。
得体の知れない銃を構えた兵士が十数人。
そして彼が王の息子であろう。
立派な軍服に多くの勲章が胸に付いてる。
翼のマークは？何かの勲章だろう。
目も鋭い。
ウチの姫とトレードして欲しい位の凄みがある。
王の資格がアリと思った。

「では、そろそろ始めますか・・。」

オスマン校長の挨拶で、双方の国の代表が挨拶を交わす事になった。

「始めまして。オレは日本帝國の代表としてこの国に来ました、サイト・ヒラガと言います。」

「サイト・ヒラガ様。始めまして。私はトリスティン王国の王女、アンリエッタ・ド・トリスティンと申します。宜しくお願いします

♪」

「さて、今回の会議の趣旨ですが、オレと俺達の国、日本帝國が異界の地球と言う
惑星からこの世界に転移されてしまいました。
この学院の生徒、ルイズ嬢の召喚とか言う魔法に寄りましてね。
おかげで我が国のインフラはガタガタです。
私個人も危うく、小娘の使い魔にされる所でしたよ。
本当にいい迷惑です。」

マザリーニは頭を抱えてた。
話は聞いてたが、相手の口調からすると怒り心頭だ。
当たり前だ。
自分の国も何もかも異界に連れて来られて怒らない人間は居ない。

「コホン。サイト・ヒラガ様。始めまして。
私はこの国の枢機卿を務めておりますマザリーニと申します。
この度の事件に寄り、貴殿達の国と個人に多大なご迷惑をおかけした事。
トリスティン王国として深くお詫び申し上げます。
そして、どうすれば貴方の国に謝罪出来るか。
宜しければご意見をお願い出来ませんか？」

「フム・・。マザリーニ枢機卿で宜しいでしょうか？
始めまして。
そうですね。一応、オレは平賀大統領の代理として全権を任されております。
まず聞きたいのは、この国は他国との貿易をしてるかと言う事ですね。
私達の世界では巨大なエネルギーを使い、膨大な商品を産出、輸出

し国を運営してました。
今回の騒ぎで取引先の国もエネルギーの元となる原油も入手出来なくなり、
国の運営にも支障が出ております。
我々も無碍な事は申しません。
今回の事故は無かった事にも出来ますが、国家としては黙る事は不可能です。
我が国の国民は一億二千万の人民が生活しております。
その国民を飢えさせる事は出来ません。
また仕事も然りです。
そのためにも、この国との貿易を始め、国の利益を出せる様にしないといけません。
そしてもう一つ。
この国は平民の無礼討ちをしていますね？
この様な野蛮な事をされる貴族との取引はゴメン蒙りますね。」

不味い。
恐らく学院でどこかのアホメイジが平民を虐殺したのを目撃されていたのだろう。
何とか穏やかに会談を進める予定だったのだが、コレは不味い。

「サイト・ヒラガ様。私達は野蛮な国では・・」

「平民を平気で虐殺するメイジとか言う貴族が野蛮で無いとでも？
俺達の国なら、無差別殺人罪として極刑に値する罪に問われるぞ。」

グッ・・。最悪だ。
どう答えたら良いモノか？？と考えてると・・。

「この無礼な平民めが。我が国の偉大なメイジ達をバカにするか！

！」

言うが早いか、杖を揮い魔法を放とうとしたのだ。

すると・・・。

ズドドドドド！！！

轟音と共に護衛兵士が銃を使い、護衛騎士を殺害したのだ。

しかも連発で・・だ。

どうすれば銃を連発で撃てるのだ??

「な、ナニをなさる。」

「失礼、貴方達の護衛兵士から危険な魔法を使われると判断しました。

自衛のための正当防衛ですよ。

決して無礼討ちとかではありません♪」

護衛の騎士達に決して手出しをするなと口を酸っぱくして話してたのに。

このバカモノ共が・・。

「失礼しました。確かに彼は貴方達に魔法を放とうとしていました。

アレを使われてたら貴方達もタダでは済まなかったと思います。」

「フム。では正当防衛と認めて頂けるのですね?」

「ハイ。その通りで御座います。」

「自分はこの国の貴族が無闇に平民を殺害するのを目撃しています。
今後も危険と感じたら反撃しますよ。
我々は魔法は使えません。
ですが、この武器に寄る反撃は可能です。
モチロン、無碍な攻撃は絶対にしませんが、黙って殺される事は出来ません。
キチンと証拠は残しますので、万一の際は国として証言してくださいね。」

グッ、文句の付けようが無い。
コチラが先に手を出そうとしたのは全員が目撃してる。
今後の事でも言質を取られるのは確実。
ここは飲むしか無いか？

「分かりました。確かに異国の貴殿達に手出ししようとしたのは事実です。
この度の事件はお互いの不幸な出来事だったとして処理します。
また、今後、同じ様な事件が起きた場合は目撃情報を詳細に残して頂ければ、
不幸な事件として国が処理致します。」

ヨッシャ。マザリーニの言質を取ったどぉぉぉ。
コレで万一の事件の時は、犯罪者にならずに済む。
何とか平民が安心出来る国にしてあげたいとは思うしね？
すぐにはムリだが、何時かは貴族連中から杖を取り上げて欲しいわい。
そのためにもマザリーニとの友好は作り上げないとね。

マザリーニは魔法衛視隊員に射殺された騎士の躯を処理する様に指示し、

部屋の清掃と換気を行った。
アンリエッタ王女も気分を悪くされ、しばらく静養をされるとの事。
仕方ないと相手側も了承を頂けた。
会談は翌日に延期され、代わりに相手側から我が国の兵器の威力を展示しますとの事。
オーク鬼が出没して困ってる森を演習目標にお願いする事にしたのだ。

「それでは、学院西方から馬車で一時間程ある距離にある森にオーク鬼が多数出没しています。
この森なら平民も人民も住んでおりません。
焼き払って頂けると助かる区域です。」

「オイ。航空写真を持って来い。」

しばらくすると、精密な絵を持ち出して来たのだ。
何だ？この精密な絵は？
コレは・・。魔法学院周辺の地図か？

「昨日、撮影しておいたこの区域の精密地図です。
この西方の森が目標ですね？」

「ハイ。その通り・・ですが。
素晴らしく精密な地図ですね。
どの様にして製作されたのですか？
我が国の技術では絶対に作れない地図ですが。」

「こんなのは簡単ですよ。
私達の航空機から撮影した写真を引き伸ばしただけです。」

何と！！
いとも簡単に作れるとは。
我々とは違う民族の技術とはこれ程までに隔絶してたのか。
私達はソラツバメとか言う怪鳥に招待され、空から演習を接見する事になったのだ。

会議（後書き）

次回は演習です。
武器スペックも詳しく紹介致します。

演習（前書き）

演習と海燕&空燕のスペックを紹介します。

演習

日本帝國海軍兵器のスペックです。
登場した兵器のみ掲載します。
（追伸）ココに出る兵器類はすべて作者の妄想の権化です。
もし実用化されたらパイロットは喜ぶと思いますが。
＞対Ｇコックピットなんて、世界のパイロットが絶対に欲しがると思います。
機体には限界が無くても人間には限界があるのです。
Ｇスーツを着ても７Ｇ辺りが人間の限界ですからね。

０３式艦上戦闘機「海燕」（カイエン）
パイロット　一名
全長　１５ｍ．全幅　１２ｍ．
翼は油圧折り畳み式。
最高速度　マッハ２，０（音速巡航可能）
垂直離着陸も可能なため、荒地や狭い艦艇への着艦も可能。
対Ｇ操縦席のため、どんなムチャな機動をしてもパイロットが気絶する心配は皆無。
基本武装、２０ｍｍバルカン砲、一門。
ウエポンラックに２ｔの爆弾、ミサイルなどを装備可能。
航続距離、１ｔの爆装と増加タンク装備で４０００ｋｍの航続可能。
なを、空中給油も可能なため、事実上支援のある限り無限に飛ぶ事も可能ではある。

０３式支援攻撃機　「空燕」（ソラツバメ）
全幅　２０ｍ，　全長　２５ｍ。
翼は油圧で折り畳み式。
最高速度　マッハ２，０（音速巡航可能）
航続距離、１０ｔの爆弾搭載で５０００ｋｍ。
無加重なら１００００ｋｍは可能。
こちらも垂直離着陸可能のため、荒地や大きな艦艇なら離着陸可能。
（基本は陸上運用です。）
基本武装、前後に３０ｍｍガトリング砲装備。
ウエポンラックは機体下部に装備。
１０ｔまでの爆弾を格納可能。
空中給油の場合は武装は外し、ウエポンラックにタンクを装備。
機内は広いため、２０人までなら乗客の搭乗可能。
戦地での支援攻撃、並びに連絡機として重宝されている。

＜＜＜

まさか私達の護衛のメイジが簡単に殺されてしまうとは・・。
彼にも非があるのは認めますが、それでも訓練された衛視隊のメイジが。

恐かったですわ。本当に。

サイト様は基本的に紳士らしい方ですが、敵には容赦の無い軍人さんですね。
ルイズもとんでも無い人や国をこの世界に呼んでくれたモンです。
プンプン。。

でも、このソラツバメと言う怪鳥、
音は煩いのですが、素晴らしい速度で高い空を飛べるのですね。
これだけ多くの人を乗せていますのに。

「殿下、もうすぐ攻撃が始まります。
見辛いと思いますので客室にディスプレイを準備しました。
窓から見える光景と合わせてご覧ください。」

サイト様の話に拠ると、もうすぐオーク鬼の生息する森を攻撃するらしいです。
この高さから見えるモノなのかしら?
そう思ってましたが・・。

両翼を飛んでた怪鳥が素晴らしい動きで、森に突入。

羽から何やら楕円形の物体を放つと・・。
ぎゅどぉぉぉぉぉんと言う轟音と共に・・。
森が・・。
一瞬で灰になってたのです。
何ですの？コレ・・・・。

「殿下、攻撃完了です。
すべてのオーク鬼は灰になりました・・。が。
ご理解出来ていない様ですね？」

そりゃそうだ。
光ったと思ったら、灰になってました・・だもんな。
仕方ない。
少しグロイが精密動画で見せてあげるか。

「では、今の攻撃の前後の模様を動画にてお見せします。
少しグロいですが、ご容赦お願いします。」

前方に設置されてたディスプレイとか言う絵の出る枠に・・。
サイト様の説明で使用爆弾、Ｎ２小型爆弾と言われた

そして、憎きオーク鬼が森で暴れてるのが見受けられた。
数十体は居ただろうか？
他にも子供のオーク鬼。
犠牲となってる動物が写ってた。

そのオーク鬼達が・・。

一瞬で熔けてしまってたのだ。

アレが我が城でもおかしくは無い。

ダメだ。

絶対に彼等には適わない。

例え全盛期の烈風殿でも負けるだろう。
音よりも速く飛来し、恐ろしい爆弾を叩きつけられるのだから。
何とか彼等と友好を保たないと、
この国は・・・・・

消える。

「生態反応は残っておりません。
周辺のオーク鬼も壊滅したと思います。」

「・・・ありがとうございます。

コレで少しは国民の安全も確保出来ると思います。」

「喜んで頂けて何よりです。
では、学院に帰還します。」

全ての航空機の安全を確認すると、海燕は空燕の周囲をガッチリと編隊で囲み、
学院に向けて帰還を始めた。

学院上空に入ると低空でフライパス。
そして解散、着陸。
（海軍航空隊では常識の着陸機動です。）

学院の生徒が何事かと窓から顔を出してたが・・。

護衛の兵士が周囲を固め、我が護衛を一番最後に降ろし、
演習は完了した。
メイジ達の杖は全員、怪鳥に乗る前に取り上げられてたが、
それも降りて怪鳥から離れた場で返して貰ってた。

はぁ・・。
もう言葉が出ない。
我が国のメイジでは彼等に敵対したら終わりだ。
カリン殿なら少しは贖えるだろうが、それでも数分も持たないだろう。
いや、宣戦布告と同時に我が国は終わる。
確実に。
戦備を整える暇も無いだろう。
弱った。

絶対に敵対出来ない国を呼んでしまうとは・・。

「以上で演習は終わりです。
トリスティン王国の安全に少しは寄与出来たと我々は自負していますが。」

「大変素晴らしい演習でしたわ。
我が国を困らせてたオーク鬼がアアも簡単に滅びるとは？
本当にありがとうございました。」

アンリエッタは笑顔で答えたつもりだったが、内心はガタガタと震えてた。

何なのですの？アレって。
私達の国にある兵器やメイジでは絶対に適いませんわ。アレには。
オーク鬼が一瞬で消えるなんて冗談でも出来ません。
それが。
本当に目の前で起きたのですから。
正直、恐ろしくて溜まりません。
絶対に彼等を怒らせてはダメです。
何とか友好を持たないと・・。

サイトも内心、ニヤニヤと笑ってた。

グフフフ。

ヤツ等め。足がガタガタと震えてるな？

それが目的だったけど、ツボにハマッたみたいだ。

軍隊の目的は戦う事ではなく、恫喝が最大の目的。

幼年学校の教官が常に言ってた言葉だが、コレを見ると実感出来るな。

戦わずして勝つ。

軍隊最大の醍醐味よ。

やはり国防こそが国の要だ。

こうしてハルケギニアに来て最初の演習は終了した。

明日は再度、会議の日となろう。

演習（後書き）

軍の最大の目的は恫喝と私は考えております。
日本の自衛隊が行ってる富士の総合火力演習も実は日本の防衛に素晴らしい効力を
発揮しています。
アレを見て海外の国がケンカを売るとケガするぞ！との脅しになるのです。
次回は会議再開とこの国の連中の嘆きです。

その夜・・。（前書き）

演習の終わった夜の一幕です。

その夜・・。

・・何ですの？

あの破壊力は・・。

失礼しました。

私はルイズの母、
カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールですわ。

若い頃は烈風のカリンと呼ばれてたメイジです。

オホホホ。お恥ずかしい。

それにしても、ルイズが召喚したと言う国の怪鳥の破壊力には驚かされました。

まさかオーク鬼の巣窟だった森が一瞬ですべて灰になるとは。

私のカッタートルネードでも不可能です。

ハイ。

あの怪鳥に勝てるか？と聞かれれば、単機なら可能かも？と答えます。
が、数機単位になりますと、確実に殺されてしまいます。
カリンが十人居たとしてもです。
私達はフライを使いながら戦う事は不可能ですからね。

それにあの速度では。
伝説の怪鳥でも不可能な速度で飛びますから、追いつくのも不可能でしょう。
彼等は基本的に敵対しない限りは不干渉と言う事らしいですね。
ですが、敵対したら容赦ナシです。
護衛メイジが魔法を放とうとした瞬間、
躊躇もせずに見事にメイジを惨殺してしまいました。
本当に見事でしたわ。
騎士とはアアでは無いと。
コホン。
ですが、本当に困った事態です。
まさか我が娘、ルイズがこの事態の発端とは。
何とか円く治めたいですね。
後で夫とルイズを連れて、マザリーニ殿に相談に行かないと・・。

「ど、どうしよう・・。
あんな恐ろしい怪鳥を操る国の貴族だったなんて・・。
オマケに実家の両親や王宮の方まで来るなんて。
私がどう謝罪してもダメじゃ無いの。
どうしよう・・。」

コンコン・・。

「ルイズ?居ますか?母です。
開けてください。」

か、か、か、お母様だ。
ダメだ、もう観念しよう。
言い逃れは不可能。

すべてをありのまま話すしか無いわ。

「お母様、今、開けます。御待ちください。」

私はドアを開けるしか無かった。

だって・・。

私はアンロックも出来ないゼロなのですもの・・。

「ルイズ、大変な事になりましたね。」

「お母様、申し訳ありませんでした。
まさか異国の貴族を召喚したばかりか、国まで召喚するとは。。」

「私も話を聞いて驚きました。
まさか国まで召喚するなんてね。
普通ではありえません。
ですが、起きてしまった事は仕方ないです。
まずは、あの国と、どう今後付き合うか・・ですよ。」

「・・・お母様・・・。」

「起きた事はどうしようもありません。
事実は事実なのです。
ですが、今後は注意してください。
貴方の魔法は今後封印です。」

「ハイ。申し訳ございません。」

「学院の方も話の顛末が付きましたら退学して貰います。」

「・・・・。」

「実家に帰り、実家で家事や洋裁、女性としての嗜みを覚えてください。」

「・・・ワカリマシタ。オカアサマ・・。」

「下手すると、我がヴァリエール家も危ないのですよ。分かりましたね？ルイズ。」

「ハイ・・。」

もう終わりだ。

私の苦しくも楽しい学院生活は・・。

今からはヴァリエール家に帰り、ひっそりとお嫁の貰い手が出来るまで、

実家の片隅で私は暮らすのだ。

私は永遠にゼロのルイズで終わるんだ・・。

ルイズとカリーヌが会話してる頃・・。

「ワッハハハ。
さすが我等が翼だ。
オーク鬼の大群を森ごと焼き払ったんだって？
豪快だなぁぁ。
さすがだ。」

オレは何時の間にか我等が翼と呼ばれてた。
誰かが演習の内容を詳細に言いふらしてくれたらしい。

「サイト様、あの怪鳥の翼にある丸い赤印は？」

「アレが我が国の誇り、日の丸だよ。」

「・・・。本当に同じなのですね。」

シエスタが何を言ったか、オレは即座に理解した。
彼女の祖父、武雄の零戦と同じだと言いたいのだろう。

「オオ、アレがお前の国の旗印か？シンプルだか、素晴らしいデザインだ。」

「その通りです。
千年以上もの間、あの御旗の元で我々の祖先は国を守り続けて参りました。
一度は敗れてしまいましたが、それでも廃墟から立ち上がった我が国の誇りです。」

「そうか・・。お前達の国も廃墟になった事があったのか・・。」

「ハイ。それこそ国土の半分が廃墟になり、国民も多くが犠牲になりました。
ですが、敗戦後十数年で我が国は再起しました。」

「いい話だ。なあ、皆!!」

「そうですぞ、そうですぞ。」

「俺達がこの国に召喚されたのも縁でしょう。
今すぐとは言えませんが、この国の人民が笑える暮らしの出来る国に誘導したいと
俺達は考えています。今朝みたいな事の無い国にね。」

「・・ヤツは本当に明るくイイヤツだった。
俺達はヤツの事を忘れない。」

「「「俺達はヤツの事を忘れない。」」」

「サイト。いい話をしてくれてありがとうな。
そしてヤツを葬ってくれて本当にありがとう。
ヤツも喜んでいると思うぞ。勇者に葬られたとな。」

マルトーさん達との楽しい食事を終え、オレはシエスタを連れて
貴賓室に帰って行った。

「サイト様、先程の戦いの話ですが・・。」

「ああ、アレこそ君のお爺さん達が戦った話だよ。
日本は当時アメリカと言う大帝国と戦ってた。
お爺さんの乗ってた零戦、零式艦上戦闘機５２型、
これが龍の羽衣の正式な名前なんだ。
通称ゼロ戦で世界に知られた航空機だよ。」

「レイセン・・ですか?確か御爺様もそう仰ってました。」

「ウン。その零戦に乗った若い俺達の先輩。
君のお爺さんと同世代の若者が、適わぬ事を知りながらも、
爆弾を抱え、巨大な軍艦に突撃して逝ったんだ。」

「本当に・・。御爺様の話と同じですね。
良く酔うと、亡くなった戦友が枕元に立つと泣いていましたわ。」

「そうだろうね。
俺達も軍隊としての教育を受けたから理解出来るけど、戦友は肉親よりも、
大切な仲間だ。魂が続く限り忘れる事の出来ない、大切な魂友だ。」

「御爺様の話と同じ事を。まるで御爺様みたいですわ。サイト様。」

「それが日本の軍人なんだよ。シエスタ。」

「何時かは連れて行ってくださいね。サイト様。」

「そんなに長い事は無いよ。待ってな。」

シエスタを部屋から帰すと、オレは明日の事を考えてた。
今日は中々の出来だったと思う。
戦争をするのは簡単だが、それでは平民が犠牲になってしまう。
戦わずして、メイジの権力を地に落とし、平民と貴族の違いを無くす。
そのためにも、巨大な軍事力の威嚇は必須だ。
戦うためでは無くね。
明日はマザリーニと何とか仲良くしないと・・・。

オレはフと思う事があり、部屋を出てある人に会う事にした。

その夜・・。（後書き）

戦友は本当に血肉分けた肉親よりも深い愛で心が繋がります。
コレは日本だけではありません。
世界中の軍隊でも同じと思います。
マルトーのオヤジは大好きなので、チョコチョコと出しますね。

その夜・・。2（前書き）

長い夜でスイマセン。

その夜・・。2

マザリーニです。
今回の事件に関連があるのかは分かりませんが、大事件が起きておりました。
何と・・。
ブリミル教の総本山、ロマリアが国ごと消えたそうです。
ロマリアの合った地域は海になってたとか・・。
ガリアからの鷹便の知らせで分かりました。
この世界はいったいどうなってしまうのでしょうか？
すると、そこへ・・。

「マザリーニ殿、夜分遅く失礼致します。
ヴァリーエルです。お話がありまして参りました。」

「おお、ヴァリエールか？入りたまえ。」

「失礼致します。枢機卿。
ルイズ、カリーヌも同席させますが宜しいでしょうか？」

「ウム。構いません。」

私はヴァリエール家の人々を部屋に入れ、アンロック、そしてサイレントをかけた。
大事な話となるので、特に念入りに・・。

「枢機卿殿、今回は我が娘、ルイズの召喚魔法で大変な騒ぎとなり、本当に申し訳御座いませんでした。ヴァリエール家を代表し、謝罪致します。」

「ウム。確かにヴァリエール家からの謝罪としてトリスティン王国は受け取りました。
さて・・。
今回の騒ぎはどう解決したら良いものかと、私も悩んでおりましたが・・。」

「もしや、まだ何かが?」

「その通りです。関連したのかは不明ですが、ロマリアが消えたそうです。
ロマリアのあった区画は海になってたとか・・。」

「何と!!ロマリアが消えてたのですか?」

「詳細は分かりませんが、消えて国のあった区画が海になってるのは現実です。」

私は頭を抱えてしまいたかった。
他国を召喚したばかりでは無く、ブリミル教の総本山、ロマリアまで消えてしまうとは。
学院を退学するだけでは済まなくなる気がしたが、今はどうしようも無い。

「枢機卿、確実な事は言えませんが、もしかしてニホンがこの世界に飛ばされた事に
関連し、ロマリアと入れ替わってしまったのでは?」

「私も、そんな気が致します。」

「ではロマリアは今・・。」、

「恐らくチキュウと言う異界に存在してると思います。」

「・・・。」

「して、ロマリアの話は機密ですので、絶対に他の貴族には漏らしてはなりません。」

「モチロンです。」

「今はこの国の未来を考える時です。明日、サイト・ヒラガ殿との会談が再開されます。
彼はルイズ嬢と同年輩ながら優秀な士官としての教育を受け、軍人としての経験も豊富。
私はそう判断しました。」

「カリーヌです。私もかつては烈風のカリンとして軍人を勤めましたから理解しております。
彼の目は軍人として厳しい生活を経験しております。確実に。」

「決して若造だからと侮ったり、誹謗してはならない方として、対峙するべきです。」

「その通りです。いい加減な妥協的話は通用しません。」

私達はそれから夜遅くまで、明日の会議に向け討論を続けた。
明日は一日が戦いの日となろう・・。

その頃・・・。

な、何なの？
あの怪鳥は？
まさかあんな怪鳥や恐ろしい銃を扱う連中が来るなんてね。
参ったわ。こりゃ。
しばらく土くれのフーケは封印だわね。
出来たらあの銃を頂戴したいけど。
下手すると私も蜂の巣。
危ない橋は渡れないわよ。くわばらくわばら・・。

それにしても、この国も終わりかね？
戦争になったら、真っ先に食われてしまうわよ。これじゃ。

考え事をしてると、ガサ・・と草を踏みしめる音か・・。

「誰？？」

「夜分遅く失礼します。ミス・ロングビルさんでしょうか？」

「そうだけど。貴方は誰？？」

「始めまして。サイト・ヒラガと言います。」

「あ、貴方が・・。私にどう言う用事かしら?」

「単刀直入に申します。貴女をスカウトに参りました。」

「へ??スカウト。」

「そうです。私達の国で色んな研究に協力して欲しいのです。」

「そりゃ私はこの国の人間では無いから別にいいけど。
でも、高いわよ。私は。」

「ええ、モチロンですよ。貴女と貴女のご家族も一緒で構いません。」

「へ??だ、誰の事かい?私は・・。」

「アルビオンのウエスト・・」

「ワ〜〜〜!!言わなくてもイイ。言うな!!」

「私達の国の諜報機関はこの世界では異質の力量を誇ると思います。
既に重要人物の調査はほぼ終わりました。
その中でもロングビルさん。
貴女こそ我が国の研究に必要と思い、スカウトに来たのです。」

・・・コイツ。本当に侮れない。
ウエストウッドに住む私の妹の事や孤児の事まで把握してるのは確実。
もしかしたら、フーケの事まで?
いや、私はここ最近は窃盗をしていない。

バレるハズが無いのだ。

「魅力的な話ですけど、どう言う研究なのかしら？」

「それについては、機密です。研究に参加して頂ける段階にならないと、
打ち明ける事は出来ません。ですが、貴女の不利益にならない事だけは確約致します。」

「そう・・。でも即答はムリよ。
私にも考える時間が欲しいわ。」

「モチロンです。じっくりと考慮してください。
あ、そうそう。フーケとか言う怪盗は今後出現しないと言うウワサを聞いてますが。」

ギクッ。
やはり知られてたか。フーケの事も。
まぁいい。ヤツの手に乗って見るか。

「そうですか？それは良い話ですね。
では雇用条件とか、宜しければ聞かせて欲しいのですけど。」

「モチロンです。まず、貴女の御家族は全員、我が国で安全に保護します。
衣食住の心配は要りません。給与はこの国と通貨単位が違いますので、どの程度にするか、
即答が出来ませんが、基本給として、月に五十万円。
そうですね。この国の１エキュー金貨の五十倍と思って下さい。
それだけの支払いを毎月確約します。

また子供達の教育もします。妹さんの身体の一部も手術で普通の人と同じにします。
いかがでしょう？」

グッ・・。
凄い。
完璧に私の秘密は知られてる。
でもテファの耳を手術？とか言う技術で普通の人と同じに出来る。
それに子供達の事も心配要らなくなる。
給与も文句の言い様が無い。
断ったら・・。
下手するとフーケの件でお縄だろう・・。
まあいいだろう。
この国でフーケしてるよりは、確実に妹達の生活は保障出来る。
私如きを騙してもメリットは彼等には無い。
今日の怪鳥の攻撃を聞く限り、凄い国だと言う事はおぼろげだが分かる。
受けておく・か・・。

「そうですね。そこまで評価して頂けるなら・・。
雇用に応じますわ。
で、何時から雇用して頂けるのかしら？」

「出来ましたら明日からでも。」

「・・・分かりました。このロングビル。。
もう知ってるわよね？
マチルダ・サウスゴーダ。
サイト・ヒラガ様の雇用に応じます。」

「ありがとうございます。
では、この手付金を渡しますので、アルビオンの妹さん達を指定の場に
呼び寄せておいてください。到着後、私達の国に転居して頂きます。」

彼はそう言うと私に見た事も無い綺麗な宝石を数個手渡してくれた。

「まだこの国の通貨を準備出来ていませんのでね。
宝石を換金して頂き、妹さん達の支度金にして欲しいのです。」

「こんな宝石なんて、この国はおろか、この大陸でも見られないと思います。
いいのですか？
頂いても・・。」

「モチロンです。もう、その宝石は貴女のモノです。
そして私達のエージェントになる貴女にこそ相応しい宝石ですよ。
マチルダさん。」

「分かりました。このマチルダ。
雇用主、サイト様のご指示に従い活動する事をお約束します。」

もうココまでしてくれたら、断るのはムリよね。
それに、この宝石。
本当に素敵・・。
フーケしてた頃でも見た事も無い輝きのダイヤだわ。
一度に売却せず、大切にしておかないと。
それにテファにも上げたいわ。

オレはマチルダさんに詳しい連絡方法を指示し別れた。
彼女とテファにはこの世界の犠牲になって欲しく無い。
土くれのフーケはテファの不幸にも繋がってた。
今ならワルドにも知られていないだろう。
それに、彼女とテファである研究の成果も確認出来るのだ。
アレが完成したら。
我々が魔法の被害を受ける事も無くなる。
普及出来たら、この世界の庶民も安全になる。
大体魔法を幼稚なガキに使わせるこの世界は狂ってるんだ。
アレはキチンと免許制度にするべきだ。
もう遅いけどね。
いずれは魔法は滅ぼす。
一部の技術として残すのみ以外は。

明日に備え、そろそろ寝ないと・・。

オレは部屋に帰り、寝る事にした。

その夜・・。2（後書き）

マチルダをスカウトしました。
さて、彼女を使う研究とは??

会議前の朝（前書き）

すいません。
中々会議に入れません。

会議前の朝

翌朝・・。

コンコン・・。
ノックの音でオレは目覚めた。
多分シエスタだろう・・。

「おはようございます。サイト様、マチルダです♪」

ゲッ、マチルダさんが起こしに来たヨ？

「チョッ、ちょっと待ってて下さい。今、寝起きですので準備しますから。」

「ごゆっくり・・。御待ちしています。」

オレは軍服に着替えると、威厳を整え鏡で自分の制服に皺は無いか。そして目やには残っていないか。チェックした。＞海軍士官は必ず鏡でチェックします。
兵士もです。特に制服着用の場合は皺が残ってたら外出止めにも繋がります。

「待たせたね。マチルダさん。でもどうしたんだ?こんな朝早く。」

「昨日、私を雇用されたのは貴方でしょ?昨夜、オスマン校長に辞職届けを出し、

受理して貰いました。私の雇用は完全にニホンテイコクのサイト・ヒラガ様に移転しました。
そのお知らせです。」

「早かったね?まぁ良い。
キミの雇用は我々の望みだったから。」

「ありがとうございます。で、今後の事なのですが。」

「うん、では君は早速、アルビオンの家族を迎えに行って欲しい。
そしてトリスティンの首都、トリスティーナだったかな?
あそこで指示があるまで宿を取り待機してて欲しい。
準備が出来次第、君たちを我が国に移送するから。」

「分かりました。では今から・・。」

「ウン。頼みます。」

マチルダはすぐに荷物を纏め、学園を出てアルビオンに向かった。
次に会う時は日本に向かう時だろう。

「サイト様、今のは??」

「ああ、シエスタか。おはよう。うん。ロングビルさんだよ。」

「何故、彼女が?」

「その話は部屋で・・ね。」

オレは部屋にシエスタを引き入れるとマチルダを雇用した話をした。

すると・・。

「ズルイです。でしたら私も雇用してください。私もすぐに辞めます。」

「うーーん。シエスタ。では、こうしないか？
君も雇用する。
だが、今は学院に居て欲しい。
理由だが、オレの世話をして欲しいからだ。
色々と学院の平民とも交流しておきたいしね。」

「分かりました。ではお世話になります。
私はサイト様の専属のメイドとして今後は雇用をお願いします。」

「ウン。それでいいよ。任せろ。」

シエスタを納得させると、オレはマルトーの居る厨房へと向かった。
もうオレの第二の故郷だ。
あの厨房は。

「おお、我等が翼か！おはよう。」

「マルトーさん、おはようございます。
また美味しい朝食を頂きに来ました。
それと、コレ・・なんですが。良かったら使って下さい。」

オレはマルトーに日本から持ち込んだ調味料やマヨネーズ、乾パンを手渡した。

「こりゃまた凄いのを・・。いいのか？」

「モチロンです。自由に使って下さい。ただし、・・。」

「おお、モチロン俺達の食事のみに使うよ。
貴族のバカガキに使いたくないもんな。」

「「「そうだ、そうだ。」」」

「硬いパンは乾パンと言います。忙しい時に小腹が空いた時にでも食べてください。」

「いいのをありがとうよ。忙しい時に食わせてもらうな。」

マルトー達とワイワイ食事をし、シエスタの雇用の件も頼んでおいた。
メイドの管理はマルトーが一括してたので、スムーズに話は進んだ。

「サイト、シエスタの事、宜しく頼むぞ。」

「モチロンです。彼女にはコレで貴族の手は絶対に伸びませんから。」

「それを聞いてオレも安心出来るよ。もう仲間が死ぬのは絶対に嫌だからな。」

マルトーもシエスタだけでも確実に安全に生きられると言うのに安心したのだろう。
俺達の庇護下の人間に手を出すと言う事は、この国の終わりも意味するから。
マルトーと別れ、オレはシエスタを連れ、自室に帰った。

会議の案件を再検討しておくためだ。

「シエスタ。君は今後、日本帝國のサイト・ヒラガの雇用下に入る。いいね？」

「ハイ♪モチロンですわ♪」

「会議の場でもオレの傍を離れないで欲しい。
今後、君は日本帝國の一員として扱う。」

「ありがとうございます♪」

「万一、トリスティンのバカが君を迫害しようとしたら、オレの元に逃げて来なさい。
もしくは護衛の兵士の元でも良い。彼等が君を保護するから。」

「分かりました。サイト様が近くに居ない場合は護衛の兵士様に助けを求めるのですね。」

「ウン。確実に君だけは守るから。」

「嬉しいです。何時も私達は、貴族様に難癖を付けられ頃される危険に脅えて
生きて参りました。それが・・。」

「もう心配しなくても良いよ。
それと、帰国したら佐々木さんの家でノンビリすると良い。
彼等も君が来るのを楽しみに待ってるからね。」

「分かりました。楽しみですね～♪」

シエスタに色んな注意をし、ついでに日本帝國の臣民を現すバッジをあげた。
このバッジは日本人のみが持てるバッジである。
国内ではあまり意味が無いが、海外に出る場合は必ず着用義務が付いてる。
パスポート同様の効力を発揮する大切なバッジだ。

「それは必ず、今後着用してて欲しい。君が日本の雇用下にある証明書にもなるからね。」

「分かりました。必ず着用しています。」

「ウン。大事にしてくれ。」

「ありがとうございます。」

さて、そろそろか・・。

「シエスタ。そろそろ会議が始まる。悪いが書類カバンを持ってくれ。」

「畏まりました。サイト様。」

オレはシエスタを従え、トリスティンの連中が待つ会議場へと向かう事にした。

途中で護衛兵士とも合流。

シエスタの件を伝え、彼女の護衛も頼んだ。

さて、いよいよヤツ等との決着を付けるか・・。

会議前の朝（後書き）

ようやく会議再開です。

会議2（前書き）

ようやく会議です。

会議2

僕の名はジャン・ジャック・ワルド。
魔法衛視グリフォン隊の隊長を務めてる・・。が。
正直、異国の騎士に勝てる自信が無くなってる。
あの騎士の持つ銃には、僕の魔法でも一撃でとどめを刺されるだろう。
まさか連発で。
しかも秒単位で打てる銃などには、魔法でも適わない。
唯一、不意打ちなら勝てるとは思うが。
正面から戦ったら、負けるだろう。
それにしてもどうしてこんな騒ぎが起きたのだ?
機密との事で我々の耳には情報が入らないが、ニホンとか言う異国の騎士が
トリスティンに来たらしい。
それにしても・・。
あの巨大な怪鳥は、どうやって飛ぶのだ?
僕の理解の範疇を超えてる。
何とかアレに乗せて貰いたいと何時か僕は考えてた。
既に聖地の事もどこかに消えてたが。

「え~、それでは昨日に引き続き、トリスティン王国とニホンテイコクの会議を行います。」

「では挨拶は既に終わってるので、会議から入ります・・が。
何故、メイドがこの場に居るのですか?

直ちに退席しなさい。」

「トリスティン王国の皆様、このメイド、シエスタは既に我が国がスカウトしました。
トリスティンの庇護下の平民では無く、我が日本帝國臣民と同じ扱いです。
今回は知らなかった事なので、ヨシとしますが、今後、彼女に無礼な言動を
吐いた場合は宣戦布告と見なしますよ。
宜しいですか？」

「オスマン、それは本当か？」

な、何と・・。彼の平民メイドが何時の間にかニホンに雇用されてたとは・・。

「平民の管理は平民が執り行っておりましたので、私共では何とも・・。」

「あー、スマンがこのメイド、シエスタは我が国が雇用したのは事実だ。
討論は置いておいて欲しい。今は時間が勿体無い。」

「わ、分かりました。では・・。」

今回の会議に於いては、トリスティンの護衛のメイジは剣のみ所持。
杖は外の護衛メイジに全員預けさせてある。
昨日、一人のバカのおかげで我が国の信用は地に落ちてしまったから。

会議はアンリエッタとサイトの協議から始まった。
彼はニホンテイコクの王の代理権を持ち、この会議に臨んでるし、
アンリエッタは曲りなりも、この国の王女。
余程の無様をしない限りは口を挟むまい。
一言一句も聞き逃さない様に細心の注意を払い、会議を羊皮紙に記録してる・が。
ニホンは紙には何も記録していない・・。
何故だ?

「サイト殿。少しお聞きしても宜しいでしょうか?」

「ウム。構わないが。」

「何故、ニホン側は紙に会議の模様を記録されないのですか?」

「それはだな。我々は既に紙を必要としない記録方法を確立出来てるからだ。」

「すべて・・記録出来ているのですか?」

「モチロン♪」

何と、紙も用いずにコレだけの会議の記録が出来てるとは。
我々とはやはり隔絶した技術が存在してるのだと思った。

会議はお互いの国の落とし所を探しながら続けられ、トリスティン側からは、
ニホンテイコクに対し、昨日、焼き払った森の割譲。
あの森の跡地をニホンテイコクの怪鳥の駐屯地に使いたいとの事。

トリスティン人は誰も住んでいないので、構わないが。
そしてタングルテールの海岸・・。
あの昔の惨劇の跡地を軍港として割譲して欲しい。
ニホン側からは、万一、トリスティンが他国からの攻撃を受けた場合は、
反撃して頂けるとの事。

魅力的な話だ。
あの威力を見なかったら躊躇うだろうが、既にあの威力を見た我々は、
味方になってくれると言うのは、本当にありがたい。
ただし、敵対したメイジは即座に反撃を許可されてしまった。
例え、相手を殺してしまっても罪には問われなくなってしまったのだ。
山賊やオーク鬼が出没した場合は、トリスティン軍とは別行動を条件として、
討伐にも参加して貰える。
その場合はニホン側に武器の使用代金をトリスティンが持つ。
また未発見のセキユとか言う油が欲しいので、それを採掘させて欲しい。
採掘出来た場合は、実費を差し引いた代金をトリスティンに支払う。
採掘出来るまで、各地の山や森を試掘させて欲しい。

非常に多くの条件も飲まされたが、トリスティンにしても、悪くは無い話も多々あった。

「以上で、ニホンテイコクの誤解はすべて水に流して頂けるのですね。」

「ウム。今、ニホンの我が王にも了解を得た。
タングルテールには今から我が海軍の艦艇や兵士が多数上陸するから、
確実に各地の貴族には通達してて欲しい。」

「了解しました。
では、これで・・。」

「ウム。すべての誤解を水に流し、トリスティン王国と我が、日本帝國との
平和条約を通達した。」

「ありがとうございました。
本当にご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。」

「フム。もしかしてルイズ嬢の母上か？」

「ハイ。
カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールと申します。
サイト・ヒラガ様、
本当に娘の召喚魔法にて国や貴方様にご迷惑をおかけしました。
娘は実家に帰らせ、二度と魔法を使わない様に致します。」

「そうか・・。
いや、確かに危険な魔法は封印するに限る。
オレは召喚魔法自体を封印すべきと今回思った。
どうかな？マザリーニ枢機卿殿？」

グッ、確かに・・。

しかし今の状況では頷くしか無い・・。

「サイト・ヒラガ様。確かにその通りです。
分かりました。
今後、二度と召喚の儀式は執り行わない事をトリスティン魔法学院に国として通達します。
良いな？
オールド・オスマン！！」

「分かりました。
我が学院の進級条件である召喚の儀式は二度と執り行いません。
出来なかった生徒の進級取りやめも無くします。」

「そう言う話だそうだぞ？
カリーヌさん。
ルイズ嬢の進級はコレでＯＫだそうだ♪」

「どう言う事でしょうか？サイト・ヒラガ殿。」

「話を聞いてると、彼女を退学させ郷里に帰らせると思った。
別に田舎に帰らせなくても良いとオレは思うがな？」

「貴方を召喚する事になったルイズを貴方は？」

「別に何とも思っていないぞ。
今はな。
そりゃ使い魔とかにされてたら憎んでたろうが、オレの国もこの世界にある。
憎む必要も無い。
国としての責任も充分に取ってもらった。

個人には何も恨みも無いぞ。」

「そう・・ですか・・。
ルイズ。
貴女はどうしたいのですか?」

「わ、私は・・。
この学院に残りたいです。
もう我侭は言いません。
魔法も使いません。
ですが、この学院だけには残りたいのです。」

「そうですか。
貴方!!ルイズを残して良いのですか?」

「わ、ワシは・・。
ルイズが残りたいと言うなら・・。」

「ではルイズ。
サイト様にキチンと謝罪し、感謝の意を伝えなさい。
それが出来たら、学院で勉強を続けても良いですよ。」

「サイト・ヒラガ様。
私、ルイズが今回の騒ぎを起こした事を海よりも深く反省しています。
どうかお許しください。」

ルイズはそう言うと、深く土下座し謝罪した。

「ルイズさん。もういいですよ。

貴女個人には罪はありません。
ですが、今後は注意してください。
それだけです。」

「あ、ありがどうございまじだ・・。」

ルイズは鼻声で泣きながら謝罪を続けた。
ヴァリエール家の人も良かったわね・・と、話してたが。

へ？なんでルイズを学院に残したかって？
ヤツが居ないと絡む相手が居なくて面白く無いジャン。
ギーシュはバカだし、モンモンはギーシュベタ惚れのままだろ？
しばらくは以前の記憶を元にこの学院に居座り、楽しんでやるのよ。

オレは・・。

会議２（後書き）

日本に実入りが少ないと感じる方も居ますでしょうが、試掘権を得るのが最大の目的でしたからね。
風石とか原油とかゴッソリと貰います。
後にはガリアからもね。
ルイズを残したのはサイトがオモチャにして遊ぶためです。

午後のお茶タイム（前書き）

会議後のお茶のひと時です。

午後のお茶タイム

会議が終わり、ようやくオレはすべての制約から解放された。
だが、しばらく学院に駐屯も続ける事にした。
何せ、西方の森の跡地の整地に時間かかるモンね。

「オールド・オスマン殿。
では、もうしばらくは学院の駐屯を許可して頂けますね。」

「モチロンです。サイト・ヒラガ殿。
設営が完了出来るまで、ご遠慮無く学院の敷地や施設をご利用ください。」

「あー、悪いが学院の生徒が無礼打ちとかして来たら・・。」

「仕方ないですね。
彼等には諦めてもらいます。」

「いや、さすがに生徒までは抹殺はしないが、多少のケガは許せよ。
手足は残すから。」

「・・了解しました。
生徒達にもサイト様の騎士並びに部下の方に手出しはしない様に
通達を入れておきます。」

「ま、向こうが手出ししたらオレは即座に反撃するけどね。
出来る限り加減はして置くヨ♪」

「了解です・・。」

オスマンと別れ、オレはシエスタを連れて学院内をブラブラと歩いてた。
シエスタがお茶でも準備して来ますと言うので、学院のテラスでシエスタを
待ってると・・。
遠くからシエスタの悲鳴が聞こえて来る。
マズイ。
何か起きたな？

「お止めください。私は学院のメイドではありません。」

「ウソを言うな。
そのメイド服は学院のメイド服だろうが。
余のメイドとなれ。」

「私はニホンテイコクのサイト・ヒラガ様の専属メイドです。」

オレは全力疾走で機銃の装填を済ませ、シエスタの声が聞こえる方に走り続けた。
もちろん護衛兵士にも連絡済み。
間に合うか・・。

「お止め下さい。サイト様～～～～！！」

「どこの貴族か知りませんが、我が国のメイドに手出しは無用ですぞ。」

「無礼な。余はトリスティン王国の貴族、ジュール・ド・モットであるぞ。」

「誰かは知りませんが、本日、結ばれた我が日本帝國とトリスティン王国の平和条約を知らないのですか？」

「そんなモノは知らぬ。」

コイツ、バカだ。
確か、二世代前の才人の時にシエスタを拉致してくれたモットだよな。
シエスタを性具にでもして遊ぶ算段したのだろう。
だが・・。
ヤツも終わりだ。フフフフ。

「トリスティン王国のマザリーニに通達。
貴国のジュール・ド・モットと言う人物が我が帝國のメイド、シエスタを拉致しようと
企てた罪により、モット氏を処分する。」

ヨシッ、コレで証拠は残るな。
オレはデジタル録音機のスイッチを入れっ放しにすると、０２式機銃を構える。
そして、ヤツの○ンポに照準を合わせ、連射・・。

ズドドドド。。。
プチっ・・。

ヤツは大切な息子さんを永劫に無くしてしまってた。

「ぐわぁぁぁっ、な、ナニをする。ワシにナニをするっ。」

「聞いて無かった様なので、もう一度言いますが、我が国とトリスティンは
平和条約を結びました。ですが、理不尽な事をされるメイジに対しては、
攻撃許可を得てるのです。貴殿は私の忠告を無視し、我が国のメイドを
拉致しようとしました。詳細は後程マザリーニ枢機卿に報告しておきます。
無くしたモノを悲しんで、今後は生きてください。」

オレはシエスタの手を握ると、ヤツの苦悶の声を無視し、先程のテラスへと向かった。

「い、痛い、痛いぞぉぉ。誰か秘薬を持て。ヤツを殺せぇぇ。」

モットが騒いでるが誰も近寄らないみたいだな。
いいザマよ。フン。

「シエスタ、スマン。
危ない所だったな。」

「いいえ、私も油断していました。
ですが、サイト様は私を本当に助けてくれました。
ありがとうございます。」

「雇用人の安全を守るのは当然の事だよ。シエスタ。」

オレ達はテラスでお茶を飲み、歓談を楽しんでた。
それを密かに影から見つめてる二つの影があったが・・。
チビッコ青髪とガン黒赤髪のコンビか。

また絡まれるのかね？
ま、危険は無いだろうからいいけど。
適当にからかうか♪

午後のお茶タイム（後書き）

モットさん、二度と楽しい性活は出来なくなりました。
チーーン♪

微熱な女（前書き）

キュルケが登場します。

微熱な女

私達は影からあの騎士を見てた。

「ねえ、タバサ。
貴女ならあの騎士に勝てる？」

「・・・ムリ。近寄る前に射殺されてしまう。
あの銃は脅威。」

「あのメイド、学院のメイドでは無いのね。」

「・・・ニホンテイコクに雇用されたと聞いてる。
でも羨ましいかも・・。」

「そうね。だって助けてくれる騎士様が居るメイドなんて絶対に居ないわよ。
ああ、私も誰か助けてくれる騎士様が居ないかしら？」

「・・・自分の身は自分で守る。」

「そうね。でもあの銃には魔法でも適わないと思うわ。
それにアノ怪鳥。」

「・・・アレは凄い。私の使い魔でも追いつくのは不可能。」

ああ、私の微熱の火がまた点いてしまったわ。
どうしてくれるの？

異国の騎士、サイト・ヒラガ様♪
彼に何とかお近づきになれる方法は無いモノかしら？

タバサとキュルケがヒソヒソと話してる頃、オレ達は厨房へと向かってた。
晩御飯を貰うためだ。

「おお、我等が翼か！約束通りシエスタを守ってくれたんだってな。オレ達は感激したぞ。」

「「「オレ達は感激したぞ。」」」

「自分達の家族を守るのは当然の事ですよ。出来れば、他の平民も守ってあげたいのですが。」

「ムリをしなくてもいいって。オレ達の身は自分で何とか守る。せめてメイドだけでも・・。」

「そう・・ですね。この国のマザリーニ氏との面識も持ちました。何とか平民の無礼打ちを無くせる様に働きかけておきます。」

「ありがとうよ。サイト。所で、そろそろ晩御飯の時間だろ？」

「エエ。ですので頂きに参りました。」

「待ってろよ。今から飛び切りのメシを作るから。」

「期待しています♪」

マルトーは約束通り、凄いご飯を作ってくれた。
多分、貴族のガキのメシよりも凄いかも・・。

「こんなご飯を出して大丈夫なんですか?」

「ナニ、心配するなって。
貴族のガキの材料を少し多めにチョロまかしただけだ。」

マルトーの好意を無碍にも出来ないので、俺は遠慮なく食べさせて貰った。

「しかしいい食べっぷりだな。サイト。」

「軍人は身体が資本ですからね。
戦場ではヘビとかヤモリでも生で食べる時もあります。
平時はとにかく食べて体力を付けておかないと戦場では一発で参ります。」

「オイ、お前等、聞いたか?
勇者は戦場では爬虫類でも食べて命を繋ぐのだぞ。」

「「「勇者は戦場では何でも食べる。」」」

「いや、あくまでも戦場での話ですよ。平時はキチンとした食事を取ってます。」

自分の後ろでシエスタが目を白黒させながら話を聞いてた。

「さ、サイト様。もし戦地での食事に事欠く時は、私が準備致します。
私はタルブの田舎で育ちましたので、自然のある所なら、何でも作れます。」

「・・そうか。シエスタ。その時は頼りにするよ。」

「ハイ。頼ってください。」

「シエスタ、良い国に雇われたな。」

「ハイ。マルトーさん。とても良い雇用主様です。」

食事を終えるとオレはシエスタを宿舎に送り、独りで部屋へとブラブラ歩いてた。
モチロン、武装は常に所持してる。

女子寮と思われる辺りを歩いてた時に、影から何か異形の動物が現れたのだ。
アレは・・キュルケのサラマンダーか。
やはりあのイベントはあるのね。
まあ害は無いからいいけど。

サラマンダーはオレの服の裾を咥えると、女子寮に引きずって行こうとしてた。

「オイ、爬虫類。服が皺になるから止めろ。
お前の後を付いて行くから放せ！！」

サラマンダーは言葉を理解したのか、裾を放してくれた。
そして付いて来いと言わんばかりに首を振り、オレも黙ってヤツの後を付いて歩いた。
またキュルケのベビードールを見せられるのかね？

サラマンダーはオレを誘導し、キュルケの部屋らしきドアの前で止まった。
そしてドアを首で開け、入れと首を振る。
オレも仕方なく部屋に入ると・・。

「扉を閉めて♪」

とキュルケの声がした。

「ようこそ、こちらへいらっしゃい♪」

「真っ暗だぞ。」

キュルケが指を鳴らす音がした。

すると、部屋の中に立てられた蝋燭が一つずつ灯って行く。

キュルケは相変わらず、派手なレースのベビードールを着てた。

「そんな所に立って無いで、コチラにいらっしゃい♪」

「スマンがオレは君の名前も何も知らない。
その爬虫類に服を咥えられ、引きずられたので仕方なく来ただけだ。
異国の女性よ。」

「あたしの名前は、
キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーです。
始めまして。異国の騎士、サイト・ヒラガ様♪」

「キュルケさんで良いか?始めまして。
だが・・。どう言う了見でオレをこの部屋に引き入れたのだ?
今回はオレが黙って付いて来たから良かったが、下手するとその爬虫類を射殺してたぞ。
お前が管理してる爬虫類だろうが。
あまり無体な事をさせるな。」

「わ、私はそんなつもりでは・・。」

「お前も学院から通達は来てるだろう?
我が国と、このトリスティンは平和条約は結んだ。
だが、反撃の許可は国からも貰ってる。
今日も独り、バカを処理したがな。
お前の爬虫類も処理されたいのか!!」

「ご、ごめんなさい。お怒りを納めてください。」

「怒ってはおらんが、お前も少しは考えて行動しろ。
オレはこの国の常識は知らぬ。だが、責任ある行動はしてるぞ。
オレは日本帝國の威信を背中に背負っている。
お前はこの国の威信を背負っていないのか？」

「私はこの国ではなく、隣のゲルマニアから留学しています。」

「そうか・・。だが気をつけろ。
オレ達からはこの国の人間には手出しはしない。
だが、攻撃されたら反撃する牙を剥くぞ。
例え女性でもだ。」

「ごめんなさい。私は貴方とお友達になりたくて・・。」

「それならキチンと普通の挨拶をすれば良いのだ。
オレも石頭では無い。」

「じゃ・・。」

「ウン。オレと友達になってくれるか？キュルケ。」

「ええ♪喜んで。サイト様♪」

「だが、女子寮に連れ込むのは、もう止めてくれよ。
オレが一方的に悪者にされる可能性も高いからな。」

「ごめんなさい。今度からは、普通に外でお話をさせて貰います。」

「ウン。頼むよ。オッ・・。いいのがある。

コレでも食べな。」

オレはポケットに入ってた「キットカ○ト」を取り出すと箱ごと彼女に上げた。

「コレは？」

「オレの国のお菓子、チョコレートと言う菓子だ。
銀紙を剥がして食べるといいぞ。」

キュルケは箱から一個取り出すと、紙を剥いて食べ始めた。

「・・・・甘い♪凄い美味しいですわ♪」

「そうだろう。ただ食べすぎは美容に良く無いからな。
一日に一個程度にしておけ。また持ってたら上げるから。」

「ありがとうございます。とても美味ですわ♪」

「・・そうか・・。じゃ、そろそろオレも帰らせて貰うぞ。」

「・あ、出口までお見送りさせてください。
万一、他の女子生徒に出会うと大変ですから。」

「頼む・・。」

オレはキュルケに出口まで見送って貰い、無事に誰にも出会わず女子寮から出る事が出来た。
やはり心臓に優しく無いイベントだわ。コレは。
キュルケとは、何とか昔みたいな友好を持ちたいと考えてたので、

渡りに船のイベントだった。

次は・・。

あの青髪のチビッコか・・。

どう絡むのかね？

微熱な女（後書き）

乱暴な生徒は排除しますが、キュルケとかタバサとかは交流させます。

彼女達は嫌いなキャラではありませんからね。

青い髪の女の子（前書き）

タバサとの交流開始です。

青い髪の女の子

青い髪に♪・・・。

ヤバ・・。（意味不明）

オレはキュルケと別れ、自分の寄宿してる貴賓室に帰ろうとしてた。

すると・・。

居るのよね。

青い髪のメガネチビッコが。

「・・・どうして躊躇せずに相手を撃てるの？」

「誰かは知らないが、いきなり名前も名乗らず人に意見を聞くのが、この国の礼儀か？
オレの名前を知ってるなら、キチンと自分も名乗れ。」

「・・・タバサ、ガリアからの留学生。ヨロシク。」

「タバサか？正式な名前もあるのだろうが。まあ良い。
オレは日本帝國のサイト・ヒラガ。所属は帝国海軍だ。」

「あの怪鳥を操るの？」

「当然。
そうしなければ陸から入り込んだこの学院まで歩けば何日かかると

思うのか？」

「私も乗ってみたい・・。」

「得体の知れない人間は乗せられないな。
お前は自分の正体を偽ってる。
そうだろ？」

「・・・確かに。
でも、私の正体は明かせない。」

「それならオレも君を信用出来ないな。
自分の事も言えない人間には。」

「何時か必ず話す。
私は・・。」

「何時か話すなら、その時にね。
じゃ♪」

「・・・待って、話すから。」

「どうして話す気になったのだ？
秘密にしたい訳があるのだろ？」

「貴方の国は高度な技術が色々あると聞いた。
もしかしたら医療も高度な技術があるの？」

「そりゃーね。
多分、この世界では考えられない技術だと自負してるぜ。」

「・・・なら、お願いがある。
対価は何としても払うから、ある人の治療をお願いしたい。」

「オレは医者では無いから即答は出来ないが、たかが学生のキミに支払える程、
オレの国の医療は安くは無いぞ。国民ならまだしも。」

「・・・貴方の国の国民はそんなに医療が受けられるの？」

「国民でキチンと税金を支払ってるならね。
外国の人間まで面倒は見ていないよ。残念ながら。」

「あのメイドはどうして？あのメイドも異国の人間のハズ。
何故、雇用してるの？」

「質問ばかりだな。ま、いいか。
今日は気分も良いし。
彼女はキチンと自分の出目も明かし、自分との信用も充分に得たから雇用したのだ。
キミみたいに偽名しか言わず、本音も言わない人間とは信用が違うんだよ。
信頼もね。
分かるか？
偽名のタバサちゃん♪」

「・・・ちゃん付けは止めて欲しい・・。」

「そうか？
でも、お前の外観はチャン付けが一番しっくりとするんだが。」

「・・何かイラっとする。
だから止めて欲しい。」

「分かった。止めよう。タバサ。コレで良いか?」

タバサは黙ってコクリと頷く。
本当にコイツは・・。変らないな。

「・・・誰にも言わないなら、私も本名を言う。
お願い。何とか治療を頼めない?」

「別に君の名前を知りたいとも思わないのだがな。
それに、俺達にまったくメリットが無く、デメリットばかりに思えるのだが。」

「・・・どうしたら治療をお願い出来る?」

「そうだな・・。
君が俺達にどう言う対価を支払う事が出来ると言うのが大事だ。
俺達は無償で他国の人間に施しをする程、余裕は無いのだよ。」

「お金なら、何とか・・。」

「金なら要らぬ。
大体、この国の通貨が俺達の国の通貨と吊りあうと思うか?
答えは非だ!
俺達が欲しい対価は情報だな。特にこの国とか他国の。」

そう言うとタバサの目が光った。

「・・・それなら、何とか出来るかも・・。
どう言う情報を調べたいか言って貰えば、調べる術を私は持ってる。」

「・・そうか・・。
ヨシッ、まずは君の本名、そして君が治癒して欲しい人の
名前と症状を教えて欲しい。
オレは医者では無いから、治癒可能か即答が出来ない。
本国に問い合わせて見ないとな。」

「・・・分かった。名前は・・
シャルロット・エレーヌ・オルレアン、ガリアの排嫡された家の娘。
治癒して欲しいのは、私の母。
ガリアの王から謎の薬を飲まされ発狂してしまった。」

「精神を薬で狂わされたのか・・。そりゃまた難しい話だ。
人の心は病気以上に難しいからな。分かった、一度、本国に問い合
わせてやる。」

「・・・本当？」

「ウソを吐いてどうする。
ただし、治癒可能かどうかは医師が判断する。
出来なくても恨むなよ。」

「それでも希望が出るだけでも嬉しい・・。」

ウワっ、初めて見たぞ。
タバサの笑顔。

前世を含めても一回も見た事が無いレア物だわ。

「それで、治癒可能となった場合はオレの本国に移送する。出来るか？」

「出来る。必ず移送させる。」

「ウム。じゃ、その場合はお前は対価としてこの国や周辺の国のスパイをして貰う。
かなり危険だが出来るな？」

「ヤル。お母様が救えるなら、どんな苦労でも我慢して来たから。」

「分かった。
何とか治癒出来る様にオレも働きかけてやる。
ただし、絶対にお前の本国や他人には話は漏らすな。
出来るな？」

タバサはコクリと頷き、約束は守ると話した。

「ヨシ、じゃタバサはオレの友達だ。握手をしよう。」

オレはそう言うとタバサに右手を差し出し、握手を求めた。

「・・・ありがとう。サイト・ヒラガ。」

「サイトでいいよ。オレもお前の事はタバサと呼び捨てにする。
本名はお前が笑って暮らせる日まで、誰にも言わないから。」

タバサは驚いた顔をした後、ツーと一筋の涙を零した。

今まで誰にも頼らず、張り詰めてた心が氷解したのだろう。

「泣けばいいよ。辛かったのだろ？」

タバサはフルフルと首を振り、一言。

「嬉しかった。」

「そうか・・。今日は二人も友達が出来たな。一人はキュルケと言う。
そしてタバサだ。」

「キュルケは私も友達。」

「そうか。じゃお前にもコレを上げないとな。」

オレは持ってたキッ○カットをタバサに差し出した。

「コレは？」

「俺達の国で作ってる菓子、チョコレートと言う。
箱から取り出し紙を丁寧に破いて食べて見な？」

タバサは黙って箱を開け、一個取り出し食べ始めた。

「・・・凄い。こんな甘味のある菓子は初めて。」

「どこの国の女の子も甘い菓子には目は無いな。
友達になった記念だ。やるよ。」

「・・・アリガトウ。それじゃ、お母様の治癒の事、お願いする。」

タバサは俺にペコリと頭を下げると、女子寮に向かって帰って行く。

ハア・・。

やはり無視は出来ないもんな。

以前はチートで何とかして来たけど、今回は国が居るのが最大のメリットよ。

やはりバックがしっかりしてると、精神も落ち着く。

ガンダみたいな力は無いが、自力で戦えるのは大きい。

さて、彼女のオカンの治癒か。

エルフの毒を飲まされてたのだよね？

治せるといいけど・・。

オレは欠伸をすると、貴賓室に帰る事にした。

明日は久しぶりにアルヴィーズの食堂に顔を出すか！

青い髪の女の子（後書き）

タバサフラグＧＥＴＴ・・かは分かりません。

閑話（前書き）

ある国の悲哀です。

閑話

ここは日本が浮いてた日本海並びに太平洋海域。
そこには、異界から転移されたロマリアが浮いてた。

「こ、ココはどこだぁぁ。」

「ガリアは?アルビオンはいずこ??」

ロマリアの聖職者達は発狂寸前だ。
朝、起きたら見た事も無い風景が浮いてたのだから。
それに魔法も発動出来なくなってたのだ。

ヴィットーリオ教皇も真っ青だ。

「ま、まさかココはチキュウとか言う異界では無かろうか?」

「ヴィットーリオ様、大変な事になりました。
ここはハルケギニアでは無い、異界と思われます。」

「お前達もそう思うか?わたくしもそう思う。
以前、ハルケギニアから覗いてたチキュウとか言う世界の気候に似てる様だ。」

ヴィットーリオ達は、何とか騒ぎを収めようと必死に働いてたが、

近辺諸国は突然出現した国が大した軍事力も近代産業も無い未開の国と知るや・・。

「アイゴーー。あの国は我々のモノニダ。」

「台湾も尖閣もフィリピンも日本も消えたアル。あの島は我が中国のモノアルよ。」

「ロシアにこそ相応しい島だ。憎き日本帝國の代わりに占領してやるぅぅ。」

と、牙を剥き出しにロマリアに襲い掛かったからもう大変♪
ロマリアはアッと言う間に特定三国から占領されてしまい、人民は奴隷扱いとなってしまったのだ。

「何故だ!!!何故、わたくし達が奴隷にされないといけないのだ？」

「無駄口叩く暇があるなら、さっさと働くニダ。
イルポンの代わりにお前達が居るのだニダ。」

ロマリアは哀れ、前世紀同様の奴隷の居る島として三国が共同管理する事になったのだ。

チ～～～ン♪

追記です。

太平洋海域から消えた国々。

日本帝國列島、台湾、フィリピン、東南アジア諸島。

閑話（後書き）

ロマリアが出現した地域が最悪ですねぇぇ。
カワイソカワイソなのです。

ネ申様（前書き）

ネ申様が久しぶりに降臨です。

ネ申様

タバサと別れたオレは自室に帰ると、本国のオヤジに電話した。

「もしもし、オヤジか？」

「おお、才人か？良く頑張ってくれたな。
既にタングルテールには第一便が到着。
簡易港の設置にかかってるらしいぞ。」

「うん、それとこの世界のロマリアと言う国がどうも日本と入れ替わりに
なったらしい。あのネ申様の予言してた通りにな。」

「そうか・・。すると日本以外にも来るかもな。」

「そうだと有難い。近代諸国が友好国ばかりなら、
俺達の世界の纏まりも早く進むと思う。」

「以前のお前は凄い苦労したのだろう？」

「ああ、やはり国家がバックに無かったからね。
個人の力量なんて、国家の前にはゴミ以下だったよ。最後には壊れた。」

「そうならない様に、日本を使え。オレは国内と近隣諸国を纏める。
ハルケギニアは才人。お前に任せる。全権をな。」

「ありがとう。オヤジ。既にトリスティンは掌握出来つつある。

おっ、そうだ。
精神医のトップを探して欲しいんだけど。」

「どうしたんだ?」

「この世界のキーマンの一人に、タバサと言うガリアの元姫が居るんだ。
彼女の母がエルフの薬で発狂させられてる。
何とか治癒出来ないか、調べて欲しい。
治癒可能なら日本に移送する。」

「分かった、照会して見る。少し待て。」

オレはしばらくオヤジと今後の相談をして、電話を切った。
そろそろ寝ようとしてたら・・。

(頑張ってるようじゃの♪サイトきゅん♪)

ネ申様が御降臨ですよ。ハイ。

「久しぶりですね。ネ申様。」

(異界での暮らしはどうかね?)

「割と快適ですよ♪
昔と違い国も近くに居ますから。」

(ロマリアは日本のあった海域に出現したが。

もう終わりじゃの・・。）

「やはりアノ国に？」

（ウム。早速、美味しく頂かれてしまってた。）

「熊も参加ですか？」

（その通りじゃ。
三国で共同管理。
ロマリアの人民はすべて奴隷として使われてる。
一部の頑強な男はシベリア送りじゃ。）

「ウワッ、早速やってくれてますね。アノ国は。
所で俺達以外の国はどうなりました？」

（もうすぐ日本周辺の海域に出現するぞ。
ニューギニアとオーストラリアを除く島々が。）

「台湾やフィリピンですか？」

（ウム。ついでに東南アジア諸島もね。
もちろんパラオもじゃよ。
海域ごとゴッソリ持って来たから時間がかかったわい。）

「つー事は、海底資源は残ってますね。」

（グフフフ。
さすが三代目じゃの。回転が速いぞ。
嬉しい誤算じゃがの。）

「そりゃそうですよ。
伊達に三回も召喚されていません。
利益になる事なら、何でも使います。」

（所で欲しいモノとか無いかね？）

「ウンニャ、別に。
前回みたいなチート能力は使い潰されるだけで意味が無いと実感しました。
下手に長生きもしたく無いです。
今回は普通の人間として畳の上で静かに逝きたいと考えてます。
壊れずにね。」

（安心せい。
サイトは既に寿命も確定しとる。
何時かは教えぬがの。）

ネ申様との会合をしばらく続け、この異界の神、ブリミルの事も聞いた。
ネ申様が背後から、ヤツの動きを抑えててくれてるらしい。
助かる。
さすがに神には俺達も贖うのは不可能。
お願いしますぅぅっ、と頼んで、その日のネ申様との会合を終えた。
オヤジには早速転移した国や海域の話をしておいた。

狂気乱舞してたがな。

翌日・・・。

コンコン・・。

「サイト様、おはようございます。
シエスタです。」

「・・・・・オッ、朝か・・。
シエスタ、今、準備する。しばし待て。」

「ハイ。御待ちします♪」

オレは軍服に着替えると、少し汗臭くなった自分に気づいた。
不味い。
ここ数日、忙しくて風呂にも入っていなかったのだ。
う～～ん・・・。
ヨッシ、駐屯部隊のフロを借りよう。
軍服の代えも置いてあるからな。
どうせなら、この学院にも簡易フロを設置して貰うか。

ついでだ、セーラー服も渡しておくか。

「シエスタ、おはよう。」

「サイト様、おはようございます。」

「すまんが今から駐屯部隊の所に出かける。」

「御用ですか？」

「イヤ・・。フロに入りたいのだよ。

ここ数日、忙しくてフロも入る暇が無かったのでね。」

「そうですか。では、私は？」

「今日は学院の食堂で食べようと思う。悪いがオスマンとマルトーに連絡して準備しておいて欲しい。
オレはフロに入ったら、食堂に向かうから。」

「分かりました。では、早速準備に向かいます。
準備出来ましたらアルウィーズ食堂の前にて御待ちします。」

「ウン、頼むよ。
そうだ、学院のメイドと同じ服では誤解を招く。
この服に着替えててくれ。」

オレはシエスタにセーラー服を渡し、着替えておく様に指示した。

シエスタと別れ、学院近くに駐屯してる戦闘機部隊のテントに行く。

「敬礼！！」

オレが軍服から身分証明書を掲示すると、衛兵が捧げ筒にて敬礼をしてくれた。

部隊のテントに設置してあるフロに入り、ノンビリと寛ぎ、すべてを着替えると、
部下に貴賓室横にフロを設置してくれと頼み、学院に向かった。
もうシエスタは、待ってると思う。
学院を移動するアシ・・。
自転車を一台、貸してもらった。

やはり楽だわ。歩くよりは遥かに速いし、ステップもあるから二人乗りも可能。
後でシエスタも乗せてやろう♪

オレは六段変速のチャリを漕ぎ、学院へと帰って行った。

ネ申様（後書き）

もうすぐ日本の近くが太平洋沿岸海域同様となります。
ついでに気候も四季が蘇ります。
豪州とニューギニアを召喚しないのは、アジア民族で親日国家を形成したいからです。

校内の移動にはチャリが一番ですね。

アルヴィーズ食堂にて。（前書き）

何時もの二股クンが登場しますっ。

アルヴィーズ食堂にて。

快適な六段変速～♪

いや、学院内を移動するならチャリよね♪
さすがに校内を車で移動するのは憚れるし。
オッ、シエスタも食堂の外に居るな♪

「サイト様、御待ちしていました。・・
ソレは何ですか？」

「自転車って言う乗り物だ。足で漕ぐ移動手段の一つだよ。」

「綺麗ですね。青くてピカピカしてます。」

「後で乗せてあげるよ。後ろに立つステップもあるから。」

「楽しみですぅぅ。」

「セーラー服も似合うよ。」

「ありがとうございます♪」

自転車を食堂前に置き、鍵を一応かけて止めて置いた。
さすがに異界では貴重品だしね。
シエスタの先導で、食堂に入り、椅子に座る。
既に食事の準備は終わってた。
生徒達は

「偉大なるブリミルと女王陛下よ。
今朝もささやかな糧を我に与えもうた事を感謝します。」

昔と同じ祈りを捧げてた。
ケッ、誰がブリミルに感謝するもんか。
ヤツは敵だ。
ネ申様に頼んで、何とかヤツも虐殺したいと考えてる。
俺は一言だけ。

「いただきます♪」、だ。

シエスタは既に理解してたので、何も言わずに背後に立ち、
ニコニコとオレの食事風景を見てた。
食事も終わり、お茶を飲んでた時。

向こうで騒ぎが起きてたのだ。
シエスタは・・。ココに居る。
では・・。

「サ、サイト様、アレは私の同僚のメイドです。
どうしよう。
彼女も殺されてしまう・・。」

「シエスタ、そんな悲しい顔をするな。
何とかして見るから、待て。」

オレはシエスタを従え、騒ぎの起きてる方向へと歩いて行った。

「君が軽率に香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディ

の名誉が傷ついた。
どうしてくれるんだね？」

やはり・・ギーシュイペントか。
対応してるメイドは真っ青になってガタガタと震えてる。
当たり前だ。
彼女達には反撃の手段も逃れる術も無いのだから。
オレはギーシュの前に立ち、一言。

「ちょっと、あんたバカ？」

うーん、やはりこのセリフは某有名アニメの彼女が一番ピッタリだ。
男では似合わぬ・・・。

「な、何だね？君は？
言うに事欠いて、ボクをバカだと？」

「いや、実際にバカと思うからバカと言っただけなんだがな。」

「ボ、ボクはバカでは無い！！！！！」

「バカだろうが。
平民の立場の弱いメイドに難癖を付けて二股がバレたのを
言い逃れにしようとしてる。
男として最低だぞ。ソレって。
男ならどんな女性でも守れ！！」

「「「そうだ、そうだ。ギーシュばかりいい思いするな。」」」

外野からもヤイのヤイのとヤジが飛ぶ。

何か懐かしいな。コレって。

「き、キミは誰だ？」

「知らないのか？オレは日本帝國の軍人、サイト・ヒラガだ。
そこのメイドはオレの雇用してるシエスタの友人だそうだ。
彼女の友人ならオレの友人でもある。
友を守るのは当然だろうが！！」

「キ、いや貴方がニホンテイコクのサイト・ヒラガ殿か。
昨日、学院から通達があり、色々と話は聞いてます。」

「ああ、その通り。
既にこの国との平和条約も結んだ。
だが、しばらくは学院に駐留する事になってる。
して、君は何て名前？
一応、トラブルに突っ込んだから名前は聞いておかないとね。
後でマザリーニ殿に報告しないといけないのだよ。」

「・・ボクの名前はギーシュ・ド・グラモン。
グラモン元帥の四男だ！！」

「そうか。
お前も軍人の家系か。
なら、どうして平民を苛める。
力があるなら、平民も守るのが軍人だろうが。」

「へ、平民は犬や猫・・グヘェェェッ！！」

「お前っ・・・。

今、平民を犬猫同様と言おうとしたな!!
平民も貴族も同じ空気を吸い、同じ様な生活をしてる。
俺達と何の違いがある?たかが身分が違うだけだろう?」

オレは怒りでギーシュの顔面をブン殴っていた。
歯が数本折れて、面白い顔になってたが。

「な、何で殴るんだ。ボクは・・。ぐへっぇぇぇ。」

ついでにもう一撃、食わせた。

「言い訳するな。小僧がっ。殴られて当たり前だろうが。
女性に難癖付け、平民を犬猫以下と言う腐った考えのお前だ。
ちょうど良い。
お前も標的にでもしてやろうか?」

オレはそう言うと、機関銃を懐から取り出し、ギーシュを威嚇した。

ギーシュはアセってた。
あの銃はヤバイ。
昨日、モット伯爵があの銃の銃火に斃れたのは目撃してる。
もし自分が対峙したとしても、ゴーレムが整形される前に・・。
自分は躯となろう。
ダメだ。
敵対は出来ない。
しかしこのままでは自分のメイジとしての威信が地に落ちる。
何とか出来ないか?
魔法や銃との決闘で無かったら。
少しは勝算もあろう・・。

「異国の騎士。
サイト・ヒラガ殿。
ボクも確かに軽率でした。
ですが、このまま引いたらボクのメイジとしての名誉が地に落ちてしまいます。
銃や魔法では無く、人間個人の決闘をお願いできませんか？」

「ほう・・。つまり？」

「拳での戦いです。」

「フム。面白い。良かろう。
ただし負けたらお前が侮辱したメイドや二股した女性に土下座して謝罪するのだ。
オレが負けたらお前に謝罪してやろう。
良いな？」

「結構です。
誰か。決闘の見届け人になってくれ。
そして互いの杖と銃を預かって欲しい。」

「それなら私が預かります。」

シエスタだった。
確かに杖ならともかく、機銃は他国の人間には触れさせたく無い。
シエスタなら信頼出来る。

「ヨシッ。シエスタ。
そのメイドの彼女と共に俺達の決闘の見届け人になってくれ。
互いの武器は彼女に預ける。

良いな？
ギーシュ・ド・グラモン。」

「御意です。サイト・ヒラガ殿。」

決闘場所は毎度御馴染みのヴェストリの広場だ。

今回は拳と拳か。

ギーシュって拳のケンカ、強かったか？？

アルヴィーズ食堂にて。（後書き）

次回はケンカだぁぁぁ。

セーラー服と・・・。（前書き）

ギーシュとの決闘です。
合間にオジン趣味を入れます。
石は投げないでください。

セーラー服と・・・。

ケンカだ、ケンカだぁぁぁ。
男なら拳の対決には血沸き肉踊るよな？

「諸君、決闘だ！！」

「「「ウオォォォォォォォォッ！！」」」

「ギーシュ・ド・グラモン殿　対　サイト・ヒラガ殿の決闘を今から行います。
まずは、両者の武器、杖を私達に預けてください。」

シエスタの宣言で俺達はシエスタに機銃と杖（バラ）を渡した。
オレはついでに軍服の上着も脱ぎ、友人のメイドに持って貰う。
その際、シエスタに一言。

「シエスタ。
貴族のバカが魔法を放とうとするかも知れない。
その時は、機銃を打て。
標的はヤツ等の手前の地面か空に向けてだ。
打ち方は引き金の横にあるスイッチを手前にズラシ、引き金を引くだけだ。
出来るな？」

シエスタは黙って頷く。

「人には向けるな。
威嚇だけでヤツ等はチビる。
確実に。」

「分かりました。お任せください。
サイト様。」

シエスタは理解出来たみたいで、援護をしっかりと確約してくれた。

ちなみに今のシエスタの姿は・・。

セーラー服に紺色のスカートだ。

海軍の水兵服の上着と紺色のスカートを合わせて支給したのだ。
学院とのメイドの差別をつけるために。
もちろん水兵帽も被ってる。
ペンナントには

「大日本帝國海軍」

と刺繍も入ってるのだ♪

隣の友人のメイドがシエスタの姿にビックリし、羨ましそうに見てる。

さて、頃合か・・。

「ギーシュ・ド・グラモン。覚悟は良いか?」

「サイト・ヒラガ殿。宜しくお願いします。」

決闘前にお互いに挨拶と握手を交し、いよいよ対決だぁぁぁぁっ。

数分後・・・。

「・・・・・・。」

「ウワ〜〜〜〜!!
何故ボクの拳は当たらないのだ??」

「・・・弱っ。
ナニ?コレ・・。」

ケンカもした事が無かったのだろう。
ギーシュはやたらと両手を握り締めグルグルと振り回して殴りかかって来るだけ。
ホラ、小学生同士のケンカで見かけるアレですよ。
ハア・・。コレじゃケンカでは無くイジメだ。

オレはギーシュの拳を受け止めると軽く足払いをした。
当然、ギーシュはコテンと転がる。

「なぁ、ギーシュ。
お前、ケンカもした事が無いだろう？」

「ボ、ボクはメイジだ。
何時も、魔法で決闘してたから当然だろう？」

「オレも魔法は知らぬが。
さすがにコレでは実力差があり過ぎだ。
メイジのイジメの趣味は無い。もう止めよう？」

「イ、イヤだぁぁ。
このままではボクは・ボクのメイジとしての権威が。」

「そんなにメイジとしての権威が大切か？」

「当然だろう。
僕たちはメイジとして生まれ、メイジとして育ったんだ。
杖と魔法こそが僕達のすべてだ。」

「オレも武器は大切だが、一番大事なのは己の力だと思うがな？

いくら武器が強力でも、戦場では体力が無いと生き残るのは不可能。
お前、軍人の家系だろうが？
少しは己の肉体を鍛えろ。
その程度の兵士なら、三等兵でも簡単にあしらうぞ。」

ギーシュに説教してると、不意に外野から不穏な声が聞こえて来た。
オレはシエスタに目配せをするとシエスタは黙ってコクンと頷く。

「黙れ、黙れぇぇっ。
異国の平民が何で我々メイジをバカにする？」

そう言うが早いか、魔法の詠唱を始め、魔法を放とうとして来た。

そこへ・・。

ズドドドドドドドドドドドドド！！！

シエスタが機銃を持ち、バカ貴族の面前に全力機銃掃射をカマしてくれた。

ヤツ等の手前の地面は弾の嵐でスゲー埃だらけ・・。

シエスタ、一撃で弾を空にしたな?

シエスタは機銃を打ち終わると、放心した様な顔で一言・・。

「快感(カ・イ・カ・ン)♪」

うわ～～～～♪
懐かしいセリフだ。
昔の映画のセリフと同じだぞ。
知らない良い子は「セーラー服と○○銃」で検索してね♪

バカ貴族のヤツ等は全員、ションベ○をチビり、ズボンがビショ濡れ。
ついでに腰が抜けたのか地面にヘタリ込み、泣き喚いてた。
「イヤだぁぁ。オレは死にたくないぃぃ。」
オレはシエスタから機銃を受け取ると、弾装を交換。
数発空に向けて威嚇射撃。
「オイ、貴様。今、丸腰の俺達に向けて魔法を放とうとしたな？
しかも決闘中の俺達にだ。
今からモットと同じにしてやろうか？
この汚いヤツめが！！！」
オレはそう言うとヤツ等に照準を向けた。
「ヤ、止めてください。お願いしますっっ。。。」
ヤツ等は自分の尿まみれの地面で土下座を始めたのだ。

オレは照準を向けたまま、ヤツ等に近づき、杖を取り上げへし折った。

「貴様達。
今、オレに魔法を放とうとした罪状に拠り、杖を取り上げ処分した。
今から数週間は学院内で貴様等は魔法を禁止する。
オスマンにも宣告しておくぞ。」

コレでヨシ。
ヤツ等は無残に折られた自分の杖を見て、泣き伏せて居た。
名前は・・・いいか。
別に聞かなくてもオスマンが知ってるだろ?

「ギーシュ、興が削がれた。
邪魔も入ったし、引き分けにしないか?」

「へ??
どう見てもボクの負けなのですが。」

「お前はヤツ等と違い、実力差が隔絶してるにも関わらず、己の拳でオレに挑んで来た。
魔法も使わずにね。
その男にオレは敬意を表する。
ギーシュ、貴様は男だ。オレと引き分けた男として自慢しても良いぞ。」

「ほ、本当ですか?サイト・ヒラガ殿。」

「ウソは言わぬ。オレは。
それと、お互い呼び捨てにしないか?

オレもギーシュと呼び捨てにする。
お前もオレをサイトと呼べ。
友達になろう。」

「・・・サイト・と呼んで良いのですか?」

「モチロンだ。ギーシュ。」

「ありがとう。サイト。こんな汚いボクを友としてくれるなんて・・。」

「そう思うなら彼女達に謝罪しろよ。
ついでに二股した彼女達にも。」

「モチロンです。ああ、ボクは何と言う過ちを犯してたのだ。
そこのメイド君、本当にすまなかった。
この通り、心より君に謝罪する。」

そう言うと件のメイドに向かい、ギーシュは見事な土下座をしてくれた。

「貴族様、とんでもございません。
私は命が助かるなら・・。」

「いや、僕達がいかに平民を蔑ろにしてたか彼との戦いで痛感したよ。
許してくれとは言わぬ。ただ謝罪だけはさせて欲しい。」

やはりギーシュも昔のギーシュと同じだ。
キチンと矯正したらイイヤツになる。

鍛えてあげるか？

「ギーシュ、将来はお前も軍人の道を歩むつもりだろう？
どうだ。
オレが鍛えてやるから、オレに支持するつもりは無いか？」

「いいのですか？他国のボクを鍛えても。」

「友達だろ？俺達は？」

「ありがとう。我が友、サイトよ。では是非鍛えてください。
ボクも貴方みたいな立派な軍人になりたい。」

「そうか・・。頑張るなら充分に鍛えてやる。
オレは実戦も経験して来て、今の位に就いた。
一応、親もこの国で言う王の位にあるが、親のコネはまったく使っていないぞ。
自分の力だけで駆け上がった。
ギーシュ。親など頼らなくても男なら成り上がれる。
頑張れ。」

「分かりました。サイト。お願いします。ボクを鍛えてください。」

「ウン。ヨロシクな。ギーシュ。」

後ろではシエスタがニコニコと黙って俺達の会話を聞いてた。
件のメイドは目を白黒させてたが。

こうしてギーシュとの決闘フラグも完了。
バカ生徒は国からの叱責も入り退学処分。

ギーシュはお咎めナシとなった。

セーラー服と・・・。（後書き）

ギーシュは友としました。
やはり捨て難いキャラです。彼は。

ジャン・ジャック・ワルド（前書き）

ワルドとの熱い口論です。

ギーシュとオレが決闘を終わった頃の事・・。

「なぁ、ツルベール君、魔法って何だろうな?」

「コルベールです。メスマン校長。
しかしメイジの地位は落ちますね。確実に。」

「ワシはオスマンじゃ。ツルッパゲール君。
今後はメイジの教え方も考え直さないといけないな。
あの生徒達の無様な様はワシ等の未来の姿じゃよ。」

「人間性も鍛えないとダメですね。ボケ校長。」

「そうじゃのぉぉ。」

「「ハァァァ・・・。」」

オスマンとコルベールがボケ会話してる頃、俺はシエスタと共に学院外の
軍駐屯地に自転車で向かってた。
色々と準備があるためだ。

ちなみにシエスタは学院の生徒や平民から、

「連発銃メイド」

と、言われる様になってしまった。

平民からは崇められ、
貴族の生徒からは彼女だけには手を出すな！が合言葉となったのだ。

良い事だ。

この手のウワサが広まれば、下手に平民に手を出すバカも減るだろう。

「サイト様、この自転車って気持ちイイですね♪」

「そうだろう？俺達の国の若者の必須アイテムの一つだ。
良く学生の恋人同士が、こんな感じでデートしてるぞ。」

「コ・コ・恋人ぉぉぉぉぉっ。」

「テンパるな。シエスタ。」

「い、いいえ。失礼しました。サイト様。」

シエスタとバカな会話をしながら、自転車を漕ぎ続けると、軍の駐屯地に着いた。

オレは衛兵に身分証明書を掲示。
シエスタも胸のバッジを衛兵に見せる。
コレで彼女もこの駐屯地には単独でも入れるのだ。
オレは女性兵士に彼女の着衣と下着類を支給する様に指示。
シエスタは女性兵士に連れられ、いずこかへと消えた。

「副官、何か連絡は入っていないか？」

「ハッ、平賀少将、トリスティーナと言う地よりマチルダ氏から連絡が入りました。
孤児や妹を連れて来たとの事です。」

「オッ、さすがマチルダさんだな。仕事が早い。
ヨシッ、彼女達を迎えに行くか。
機動車を準備しててくれ。」
二台もあれば大丈夫だろう。
護衛は数人程度連れて行く。」

「了解しました。では早速準備して来ます。」

副官が席を外し、しばらくした頃。
衛兵がオレに面会人が来たと知らせに来た。
誰だ？
この駐屯地に面会とは・・。

仮設営門まで出ると、そこには、この世界では面識の無いハズのワルドが。。

「君か？オレに面会に来たと言うのは？」

「ハッ、サイト・ヒラガ様。始めまして。
私はトリスティン王国、魔法衛視グリフォン隊の隊長を務めています、
ジャン・ジャック・ワルドと申します。
是非とも一度、サイト・ヒラガ様にお話とお願いがありまして、面会に上がりました。」

「ウム、了解した。
オイ、衛兵。
営門近くの貴賓面会室に彼を招くぞ。
準備してくれ。」

「ハッ、平賀少将。
了解しました。」

衛兵は見事な敬礼をし、早速準備に行った。

「見事に訓練された精強な軍隊ですね。」

「当然だよ。
海外に進駐する軍隊は最精鋭の軍隊を派遣するのが国としての義務。
この部隊は、我が国でも最精鋭の部隊だ。」

「そうですか・・。
羨ましい限りですね。」

「ウム。立ち話も何だ。
準備も整ったみたいだから貴賓室でお茶でも飲みながら話そう。」

オレはワルドを引き連れ貴賓室にて彼に紅茶を勧めた。

＞さすがに異界の彼にはコーヒーは合わないと思ったのだ。

「さて、ワルドさん。
どう言う用件でオレに面会に来られたのですか？
オレは異国の貴方とは面識はまったく無いハズだが。」

ギロリとオレはワルドを睨んで、真意を聞く事にした。
前世では散々な目に逢ったしね。ヤツのおかげで。
ちなみに貴賓室に入る前、彼の武装はすべて外の衛兵に預けさせた。
さすがに彼程の軍人には油断は出来ない。
不意打ちされたらヤバい。

「まずは挨拶をと思いましたので。
そうですね。
私と貴方様との面識は一切ありません。
私がこの部隊を訪問した訳は・・。
この部隊に居る怪鳥を見せて欲しいからです。
正直に言います。
私はあの怪鳥に見惚れてしまいました。
アレに近づきたい。出来たら乗せて欲しい。
その思いで失礼とは思いましたが、貴方しか面会を思い浮かばなかったので。
今回の訪問となりました。」

そう言うとワルドは頭を下げた。

ハハハハハ・・・。

まさか空燕に惚れてこの基地に来たとは・・。
ワルドってこんなキャラだったか？

「ワルドさん、頭を上げてください。
そうですね。
アレは我が軍でも最高機密です。
簡単に他国の人間に見せたり乗せたりする事は硬く禁じられています。
それと・・。
貴方は、トリスティン軍に所属しながら、他国と通じてますね。」

オレはそう言うとワルドの目を睨んだ。
ワルドは一瞬、しまった!!と言う顔になったが、すぐに冷静になったのか、
こうオレに話し出した。

「そこまでご存知でしたか・・。
確かに私はトリスティンを見限りかけていました。
メイジは勝手に平民を虐殺。
王家は王の崩御後、女王は引き篭もり、王女は子供。
独りマザリーニ枢機卿が孤軍奮闘されていますが、彼も異国の人間。
信頼するには当たりません。
そんな状況で、私は「レコンキスタ」と言う革命組織に加担しようと考え、
密かに機会を伺っておりました。
そこへ・・。
貴方達の軍が出現。
我が国は変りつつあります。
そして貴方の軍の怪鳥。
恐るべき怪鳥と聞き、貴方に面会し、何とか近づきになりたいと考えた次第です。」

何と！！
ワルドは自分からレコンキスタの事も本音もすべて暴露したぞ！！
昔のワルドと違い過ぎる。
どうしてこうなったんだ？

「ほう・・。
そこまで御自分の機密を打ち明けられるとは。
私も驚きました。」

「いえ。
私も以前はエルフの生息する聖地と呼ばれる土地に行く事ばかり考えてました。
その聖地に向かうには、レコンキスタに介入するのが近道と思ってたのです。
ですが、あの怪鳥を見て、もう聖地の事などどこかへ消えてしまいました。
私は昔から空が好きです。
空を鳥よりも高く飛ぶのが夢でした。
速く飛ぶ事もです。
その夢はドラゴンでも適いません。
ですが、貴国の怪鳥では雲の遥か彼方高く飛び、音よりも速く飛べると聞きました。
そんな事が現実に適うならば、革命とかレコンキスタなどに構う余地は要りません。
私が信用出来ないと言うなら、すべての地位を投げ出しても構いません。
今すぐとは申しません。
何時か、私に怪鳥を見せてください。
そして出来るなら乗せてください。」

ココまで熱いヤツだったか？
彼は・・。
本当の本音なら、何とか叶えてやっても良いと思うが、今は様子見だな・・。

「分かりました。ワルドさん。
ただ、貴方の気持ちは男として理解出来ます。
オレも今の部隊に入る前は貴方の言う怪鳥に憧れ、地獄の訓練を潜り抜け、
今の地位に就けたのです。
気持ちは理解出来ました。
ただ、今の貴方を招待は出来ません。
理由は信用と信頼が無いからです。
貴方は異国に通じ、この国を滅ぼそうとしてました。
それを無視し、貴方を一方的に信用する事は出来ません。
ですが・・。
私と交際を続け、私の信用を得る事が出来たら。
対価として何時か、ご招待出来ると思います。
まずは貴方と私の個人的交際から始めましょう。」

「お、おぉぉぉぉ。すると・・。」

「ハイ。友人として、貴方との交際をお願いします。
そしてレコンキスタの情報を私達にリークしてくれる事。
コレを約束してくれるなら。
対価として、貴方を怪鳥に必ず招待します。
ただし、他人には機密で。特にこの国にはね。」

ワルドは顔を綻ばせ、オレの手をガッシリと両手で握り、
必ずレコンキスタの重大機密を握り協力すると約束してくれた。

オレは当分学院に居るから、情報を掴んだらいつでも面会に来てくれと頼み、
ワルドを営門まで見送った。
ワルドと別れ、オレは自分の執務室に帰り、溜息をついてしまってた。

「ワルドがか・・。ヤツってあんな人間だったんだな。」

すると、そこへ・・。

コンコン・・。

「平賀少将、機動車と護衛兵士の準備が完了しました。
シエスタ殿も御待ちです。」

「分かった、今すぐ出るので彼女も外で待たせてくれ。」

さて、マチルダとティファニアに会いに行くか・・。

ジャン・ジャック・ワルド（後書き）

ワルドを引き込めそうです。
軍用機から眺める下界は本当に格別です。
旅客機やセスナから眺めるのとは段違いです。

枢機卿（前書き）

マチルダと会う前の枢機卿との会談です。

オレは機動車の停車してる駐車場へと、ノンビリと歩いてた。
すると・・。

「サイト様、ありがとうございます♪」

突然、シエスタがオレに飛びついて抱き付いたのだ。
どうしたのだ??

「シエスタ。どうしたのだ?
突然抱きつかれて驚いたぞ。」

「す、すいません。
ご迷惑だったですよね?」

「いや、迷惑では無いが・・。
驚いただけだ。」

「そうですか・・。
あっ、服と下着の支給を申請して頂き、本当にありがとうございました。
こんな高級な下着や服は見た事がありません。
本当に頂いても宜しいのですか?」

「いや、オレも、どう言う下着かは知らないから・・。
ワ〜〜!!!!、シエスタ。
スカートを上げて見せなくても良い。
止めろぉぉぉぉっ。」

無垢な女の子は恐い。
躊躇せずに自分の下着を見せようとするからな。
見ろ。
周りの兵士がニヤけてるぞ。
ヤツ等め。
部隊に帰還したらシゴイてやる・・。
興奮するシエスタを落ち着かせ、
俺達はマチルダの待つトリスタニアに向かう事にした。
二台の機動車は、俺達が一号車。
護衛兵士が二号車に分乗。
チビッコや荷物もあるだろうから、護衛もこき使わないとね。
ガタゴトの田舎道を走る事、一時間弱。
俺達はトリスティーナに着いた。
時間も早いので、マザリーニとアンリエッタに色んな事件の事も報告する事にした。
しかし臭い。
前世に来てたから分かってはいたが・・。
臭い。
大○の難○川のドブ川よりも臭いかも知れない。
狭い通りを何とか抜けた機動車は、一路トリスティン城に入って行く。
「日本帝國のサイト・ヒラガだ。

マザリーニ枢機卿、並びにアンリエッタ王女に面会を願う。」

城門の衛兵に告げると、話は聞いてたのかスンナリと城に車両を通してくれた。

「護衛兵士を一名、そしてメイドを一名帯同させる。宜しいか？」

「ハッ、王女殿下からも許可が出ています。案内しますので、後を付いて来て下さい。」

「サイト様、私如きが城に入っても宜しいのですか？」

「シエスタ。お前はオレの第一メイドだ。今は秘書も兼ねてると思え。当分はオレの行く所には常に付いて来い。」

シエスタはソレを聞くと顔が綻び、嬉しそうにハイ！と頷いてくれた。

「サイト・ヒラガ様。遠い所をわざわざ城まで出向いて頂きありがとうございました。」

「アンリエッタ王女様、マザリーニ枢機卿殿、本日は突然の面会にも関わらず、お目通りさせて頂きありがとうございます。本日はここ最近起きた事件の詳細を報告するためでございます。」

俺はそう言うと、準備してた書類とデジタル録音をすべて提出。

彼等は詳細な報告に驚きつつも、納得してくれた。
そして・・。

「ふぅ・・。本当に我が国の貴族は腐ってたのですね・・。
話を聞いてて恥ずかしくなりましたわ。」

「誠に、その通りです。殿下。
このマザリーニの力が及ばないばかりに。」

「まあ、今は仕方ないと思うべきでしょう。
学院の生徒も大半が悪い貴族の風習に染まり、平民を虫けら以下に考えています。
自分の雇用したメイドも危うく彼等の毒牙にかかる所でしたが、何とか助ける事が出来ました。
ちなみに死人は未だに出してませんよ♪」

「い、いや。
それはキチンと学院からも鷹便で連絡ありましたので承知しています。
死人が出ても不思議では無い事件ばかりでしたから。
それを死人ゼロですから、コチラからは何も言えません。」

「所で、初めてトリスタニアに来ましたが、首都とは思えぬ臭い匂いですね。
コレでは他国からも舐められてしまいますよ。」

「お恥ずかしい限りです。私共の管理が及ばないばかりに。」

「いかがでしょう?市内に公衆トイレを設置されては?
あの匂いは田舎でも嗅げない強烈な糞尿の匂いと思いました。

我が国から汲み取り式のトイレを百体程、無償で提供します。
それを要所に設置。
溜まった糞尿は農家に引き取らせると宜しいかと。」

「それは素晴らしい提案ですが。宜しいのですか？」

「この国の発展は同盟国の我が日本帝國の望みです。
トイレの管理に平民を雇用すれば、トイレは常に綺麗に保たれ、
平民が仕事が無く、山賊に落ちるのも避けられます。」

「何と・・。そこまで考えて頂けるのですか。
分かりました。
ありがたく提供を受け、管理の雇用組合を王命で勧めさせて頂きます。」

「トイレの設置に伴い、市内に糞尿をばら撒く事を禁ずる政令も制定するべきです。
罰則を設けないと、無視する市民も出るでしょう。」

「その通りです。ありがとうございます。サイト様。」

しばらくマザリーニと歓談し、彼と二人で少し内密な話をする事にした。

「枢機卿、姫に退席して貰い、貴方と二人になったのは少し不味い話があるからです。」

「何でしょう？不味い話とは。」

「この国には危害が及んでいませんが、アルビオンと言う国で・・。

」

「レコンキスタ・・ですね。」

「その通りです。」

「私もレコンキスタに付いては情報を集めております。
彼等がどう言う目的でアルビオンで騒いでるのか。
色々と推測の域を出ていませんが。」

「私もその話について、我が帝國のスパイを放ち情報を収集してる最中です。
情報が纏まりましたら、マザリーニ殿に報告します。
そこで・・。」

俺はマザリーニに送受信専用の携帯を手渡したのだ。
基本的に明るい場所にさえあれば、ソーラーで自動充電してくれる簡易な携帯だ。
未開の連中でも扱い易くするため、スイッチは一つ。

「この円いボタンを押せば私からの声が聞こえるアイテムです。
普段は居室の明るい場所に保管して頂ければ何時までも使えます。
私から連絡が来た場合は静かな音が鳴ります。」

「こんなマジックアイテムを私に・・。分かりました。
サイト殿からの連絡はコレで受ければ宜しいのですね。」

「ハイ。私に連絡したい場合もボタンを一回だけ押してください。
そう、そのボタンです。」

するとオレの手元の携帯がピピピと電子音が鳴る。

「聞こえますか？マザリーニ枢機卿。」

「おお、素晴らしい。
目の前の貴方とは違う声がマジックアイテムから聞こえる。
素晴らしい。」

「コレで今後は色んな事項を即座に報告します。
宜しいですね。マザリーニ枢機卿。」

「ハイ。サイト・ヒラガ殿。今後も宜しくお願いします。」

俺達は会談を終えると、姫やシエスタを交え、持ち寄ったチョコやケーキを出して、
楽しくお茶会を開いた。
アンリエッタもさすがに日本の菓子にはビックリして、大喜びで食べてた。
シエスタには日頃、部屋や基地で食べさせてたが。
会談が終わり、俺達は城を辞し、マチルダの待つ旅館へと車を向ける事になった。

枢機卿（後書き）

無垢な女の子は恐いものを知りません。
マザリーニはサイトの携帯友となります。

デルフリンガー（前書き）

伝説の剣との再会です。

デルフリンガー

城を辞した我々は市の郊外に機動車を停めて、市内に歩いて行く事にした。

さすがに狭い通りに車を停めるのは憚れるからな。

護衛兵を三人程残し、残りは俺達と一緒に市内へと歩いて行く。

懐かしいな。

あの武器屋でデルフリンガーを買ったんだっけ？

今のオレはガンダールヴでは無いから、デルフにも分からないだろう。

だがつい懐かしくなり、オレは武器屋の店にフラフラと立ち寄ってしまってた。

「サイト様、何か入用なモノでも？」

「いや、珍しいモノでもあるかと思ってね。
オレも軍人だろ？武器は色々と興味あるのだよ。」

護衛兵士も異界の刀や剣には興味があるのか、色々と見てた。
すると・・。

「旦那、軍人の旦那。ウチはまっとうな商売をしてまっさあ。
お上に目を付けられる様な事はコレっぽっちも御座いませんや。」

「客だ。
何か珍しい剣とか無いのか？」

「へ？？客でしたか。そりゃまたアリガタイ事で。」

「適当に見せて貰うぞ。」

「へい。ありがとうございます。」

オレはブラブラと歩きながら、適当に剣を取り、黙って見てた。
やはり・・デルフは居ないか・・。
すると・・。

「ヤイ。テメー。このデルフ様に触るんじゃネー。」

・・・居た。
かつての戦友。
七万の敵に突入した時に、オレを救おうと全力で助けてくれた戦友。
デルフリンガー。
ガンダールヴでは無い、今でもデルフだけは忘れる事は出来なかった。

「誰だ？今の声は？」

「ウルセー。テメーは目クラか？俺様が見えないってーのか？」

「どこに居る？」

「そんな目クラにゃ用はネー。帰って母ちゃんのオッパイでも飲み

やがれってんだ。」

「やい、デル公。お客様に失礼な事を言うんじゃネー。」

「お客様？
テメーの所に来る客は剣の良し悪しも分からないボンクラばかりじゃネーか。
そんな客ならアメでも売りやがれ。
剣を使うにゃ千年早いってんだ。」

「どこに居るんだ？ソイツは。」

「この錆剣ですよ。旦那。
ヤイ。デル公。いい加減にしねーと、テメーを溶かしてしまうぞ。」

「面白れー。もうこの世にゃ飽き飽きしてんだ。オレっちは。
溶かしてくれるんなら上等だ！！」

「お前がデルフリンガーか？」

「おおよ。オレ様がテルフリンガー様。
人呼んで伝説の剣とはオレ様の事・・・・。
オイ。おめー相棒か？まさか・・。」

「デルフ、オレが分かるのか？」

「忘れるもんかい。何千年生きようと、お前の事は忘れるもんかい。
サイトよ。」

コイツは・・。あのデルフだ。

オレと一緒に戦ってくれたデルフリンガーそのものだ。
どうしてコイツがココに居るんだ？

「オヤジ、オレはコイツが欲しい。
いくらだ？」

「へ？？旦那、そんな錆剣の駄剣でヨロシイのですか？
そいつでしたら１００エキュー金貨程頂ければ結構ですよ。」

「オイ・・。」

オレは護衛に準備させてたこの国の金貨を出し、１００エキューを支払う。

「毎度♪
コイツが煩い時は鞘に収めて下さい。そうしたら黙りますから。」

オレはデルフを受け取ると、店を出る事にした。
そしてシエスタ達に少し用を足すと言い、離れた場所でデルフと話をする事にした。

「デルフ。会いたかったぞ。」

「オレ様もよ。相棒。もう何千年経ったと思ってるんだ？」

オレはショックを受けてた。
前のオレから数千年は経過してる？
オレはブリミルが言ってた言葉を思い出してた。

（（サイト、お前の魂はワシが縛っているのだ。未来永劫。

ハルケギニアが危機に訪れる度に現れるイーデルヴァイの役目としてな。）））

やはり、今の時代がハルケギニアの危機の時代なのか。
オレは未だにブリミルに縛られてるのか？

「デルフ。オレは生まれ変わって、また召喚された三度目のサイトなんだ。
前のオレからそんなに時間が経ってるのか？」

「相棒が消えてから、オレ様も流浪の剣生だったよ。
もう何年経ったか考えるのもバカバカしい程だった。
相棒、お前は今、ガンダールヴでは無いのだろう？
どうしてだ？」

「オレは前の人生の最後に心が壊れてしまってな。
最後にブリミルがこう言いやがったんだ。」

オレはブリミルの言葉を一言一句確実にデルフに教えた。
すると・・。

「って事はだ。また、あんな危機があるって事か？この世界で。」

「多分な。今度はオレもタダでは召喚されなかった。
ルイズとの契約は始めっから無視したし、剣では無く銃や航空機で戦って来た。」

「そうかい。今の相棒は以前のガンダと同じ位の力量がある。
オレ様しか分からないだろうがな。」

「ありがとうよ。デルフ。
オレは生まれ変わってもお前と戦ってた日々だけは忘れた事は無かったぜ。」

「オレ様もよ。
相棒と別れてから、何百人もの連中の手にオレ様は渡ったが、相棒以外の連中には
心だけは開かなかったぜ。相棒。」

「ガンダじゃ無いけど、また一緒に居てくれるか?デルフ。」

「アタボーよ。オレ様の相棒はサイトだけだ。」

こうして、オレは再びデルフリンガーを背負う事にした。
シエスタは、銃もあるのにどうして?と言うし、
護衛兵士は「閣下、似合いますヨ!」と、柄にも無いお世辞を言いやがる。

覚えてろ・・。

デルフリンガー（後書き）

ガンダではありませんが、やはりデルフは出したかったのです。

ティファニア（前書き）

テファとの出会いです。

ティファニア

デルフを背負った俺は護衛とシエスタを引き連れ、
マチルダの待つ旅館へと歩いてた。
すると・・。

わーーーい♪と元気良く走り回るチビッコが大量に居た。
多分、アレがティファニアが面倒を見てる子供達だろう。

一人の子供がズッテンとコケて大泣きしてしまった。
オレは子供に駆け寄り、抱き上げてやると子供はすぐに泣き止んだが。

すると・・。

「サイト様、御待ちしていました。」

マチルダが背後からヌッと現れたのだ。

心臓に良く無いですよ！！

マチルダさん。

子供達を引き連れ、ティファニアの待つ旅館の居室へと俺達は向かった。

部屋に入ると一人の少女が異様に大きな帽子を被り、

一人窓から外を眺めてる。

マチルダが

「テファ、

彼が私達の雇用主のサイト・ヒラガ様だよ。」

と、彼女に告げると、

テファニアはコチラを振り向いたのだ。

だ、だ、バ、バ、・・・・。

いかん、脳がオーバーヒートした。

相変わらず凶悪な双山だ。

まさに・・・。

ヴァストレヴォリューションだっ。

前世で見た事があるオレでさえ、一瞬脳が停止したのだ。

見ろ。
護衛兵士のヤツ等の顔。
ドコかへブッ飛んでしまってるぞ。
仕方ない。

「シエスタ、ヤツ等の脛を蹴飛ばせ。」

小声でシエスタに告げると、
シエスタはヤツ等の脛をゲシゲシと蹴飛ばしてくれた。
ヤツ等も何とか正気を取り戻し。お互いに挨拶を交わす事になった。

「始めまして。
俺はサイト・ヒラガと言います。」

「は、ハジュ・・・」

（（（咬んだな・・・））））

「痛たた・・。ごめんなさい。
始めまして。
私はティファニア・ウエストウッドと言います。
お世話になります。サイト・ヒラガ様。」

「メイドさんは学院で顔を見た事あるけど、一応挨拶しとくね。
マチルダ・サウスゴーダ。
これが私の本名だよ。
ヨロシクね♪」

「サイト様の第一メイドを勤めさせて頂いております、シエスタと言います。
ヨロシクお願いします。
ティファニア・ウエストウッド様。
マチルダ・サウスゴーダ様。」

「あのぉぉ。私には様なんて付けないでください。
テファと呼び捨てで結構です。」

「私もだよ。マチルダで良いよ。シエスタ。」

「お二人共・・ありがとうございます。
では、テファさん、マチルダさんとお呼びしますね♪
ヨロシクお願いします♪」

「テファ。君の事はすべてオレは知ってる。
安心して我が国で治癒を受けると良い。」

「あ、ありがとうございます。サイト・ヒラガ様・・。」

「いや、オレもサイトで良いよ。友達になろう。テファ。」

「ありがとうございます。サイト・・さん。
私、同世代の方とお話するの、本当に初めてなんです。
う、嬉しいです・・。」

そう言うと彼女は泣き出してしまった。
今まで本当に誰も友達になってくれる同世代と、
会話すらした事が無かったのだろう。

「テファ。そしてマチルダ。あまりノンビリもしていられない。そろそろ出るとしようか・・。」

「御意です。サイト様。オイ、チビッコ。今から異国に行くぞ。」

「「「「わ～～～～～い♪」」」」

俺達は彼女達の荷物を全員で手分けして持つと、機動車の方まで歩いて来た。
チビッコは機動車を見ると目を丸くしてた。

「ナンダ。こりゃ。馬が居ないヨ！」

「本当だ。どうやって動くの??コレ。」

「あー、悪いが早く乗ってくれ。
オイ、護衛兵士。チビッコを安全に車に誘導し、席に付かせてくれ。
マチルダとテファ、そしてシエスタは一号車だ。」

三人共、オレの指示に従い、黙って乗ってくれた。
さて、基地までしばらくノンビリとするか・・。
運転は護衛に任せ、テファやマチルダと交遊しておかないと。
隣のシエスタの目が何か恐いが、オレ、
何かしたっけ??

ティファニア（後書き）

さて、次回はテファとシエスタのバトル開始です。

双山とメイド（前書き）

シエスタとティファニアの小バトルです。

双山とメイド

テファとマチルダを隣に乗せ、俺達は学院近くの駐屯部隊まで、約一時間弱のトライブとなった。

「サイト様、本当に馬が居なくても動く馬車なんですね。コレって。」

「車と言うんだ。コレは。自力で動ける動力を内臓してるのだよ。テファ。」

「凄いですぅぅ。こんなの生まれて初めて見ました。」

「部隊に着いたらもっとビックリするぞ。」

「何か恐いですぅぅ。」

「サイト様♪本日はどう言う予定にするのですか?」

「ああ、シエスタ。今日は部隊で泊まるよ。彼女達と懇談もしたいしね。」

「でしたら、私もお願いします。」

「モチロンだ。シエスタ。」

「あのぉぉぉ。シエスタさんってサイト様の・・。」

「メイドですっっっ。（怒）」

「サイト様、私も耳の事が終わりましたら、メイドに雇って頂けませんか？」

「へ？？テファ。メイドをやりたいの？」

「ハイ。シエスタさんの着てるメイド服。凄いカワイイですし♪」

「う～～ん・・。マチルダ。どうしよう・・。」

「私はテファが働きたいなら働かせてあげたいですわ。
ただ、お世話になるだけでは、この子も心苦しいでしょ？」

「ハイ。お姉さん、その通りです。」

「サイト様、私はどうなるのですか？クビですか？
やはり男の方って胸の大きい女性ばかり見るのですか？（泣）」

「シ、シエスタ。クビとか在り得ないよ。
君は大切な第一メイドだ。もし彼女がメイドになるなら、君の後輩だよ。」

「シエスタ先輩。ヨロシクお願いします♪」

「せ、先輩～～～？？？？」

当初は険悪だったシエスタだったが、テファの先輩発言で、テンぱってしまい、
しまいには、テファに色々と先輩顔を始める始末。
マチルダはそんな彼女達を微笑ましく見てた。

「サイト様、ティファニアの事も宜しくお願いしますね。」

「ああ、心配するな。ただ、今の彼女ではトリスティンでは迫害されてしまう。
まずは我が国で耳を整形。
そんなに時間はかからないから、そうしたらこの国で色々と活動も出来るだろ?」

「そうですね。あの娘も生まれてから、外で遊ぶ事も出来ず、友達も居ない。
そんな寂しい子供時代を過ごして来ました。
終いには・・・。」

「言わなくてもいいよ。色々とあったのは知ってる。」

「ありがとうございます。所でニホンには私も行くのですよね?」

「当然だよ。マチルダには大切な仕事が待ってる。
ある技術を完成させるためには君の力が必要なんだ。」

「そこまで私を・・・。
分かりました。
どんな仕事でも、このマチルダ・サウスゴーダは頑張ります。
私の力が入用なら、いくらでも使ってください。」

「ありがとう、マチルダ。
孤児は日本でキチンと養育するから心配するな。
向こうに孤児院は多数あるし、養子を求める親も多数居る。
きっと幸せにして見せるよ。彼等も。」

「お願いします。
彼等も親を戦火や山賊の被害で喪い、流浪の人生を送った哀れな子供達です。
幸せになれるなら、どんな世界でも頑張れると思います。」

「あ～～～!!お姉さんばかりサイト様と喋ってズルイ!!」

「私もサイト様とお喋りします。」

マチルダと会話してたら、彼女達も何時の間にか乱入。
ギャーギャーと姦しい機動車のドライブとなってしまった・・。

双山とメイド（後書き）

・・・。

色々と突っ込みはあるでしょうが、ハーレムルート開始です。

学院にて。（前書き）

何気ない日常の話です。

学院にて。

翌朝・・。
テファとマチルダ、そして孤児を見送った俺達は、
自転車で学院へと帰って行った。

「シエスタ。
悪いが今日もアルヴィーズで食事を頼む。」

「ハイ。分かりました。サイト様。」

シエスタは水兵服がお気に入りとなったらしく、
基地で数着の着替えを用意して貰ってた。

テファも欲しいと騒いだので日本に出かける際に数着渡したが、
あの胸だもんで。
３Ｌサイズの水兵服を腕の裾を加工して用意しなければならなかった。
ついでに下着も・・と思ったけど。

無い。

日本で特注で用意して貰う予定だ。
マチルダクラスならあるのだが、テファクラスのブラは無いのだ。
さすがに。

シエスタを厨房前で降ろし自分の居室に行くと、
既に簡易フロが設置されてあった。

さすがに仕事が早いな・・。
水はリサイクル形式で、使った水を浄化して使うシステムだ。
コレでココでもノンビリと入れる。
やはり日本人はフロだ。
不具合が無いか確認し、自室に戻り今日の予定を考える。
一度、この学院の授業でも見学するか・・。
後でオスマンに頼んでおこう。

「サイト様、用意は出来ています。」

食堂にノンビリと歩いて行くと既にシエスタが待ってた。
学院の生徒はシエスタを見かけると、何故か迂回して歩いてる。
恐いのかな??
テーブルに着席すると隣にタバサ、反対側にキュルケ。
正面にはギーシュが座ってた。

「ダーリン♪昨日も素晴らしい活躍でしたわ♪」

「・・・実力出す暇も無かったと思う・・・。」

「フッ、ボクとサイトは親友だ。
そんな過去の事は些細な事さ。」

ギーシュの顔は凄い事になってた。

目の周りは双方がパンダみたいに真っ黒。
顔はデコボコ。
歯も数本は折れて前歯も欠けた状態。
気取るとバカにしか見えないぞ。ギーシュ。

「お前、大丈夫か？凄い顔だぞ。」

「二人のレディに謝罪したなら当然だよ。
コレで彼女達の怒りが収まったなら安いモンさ・・。」

コイツは本当に男だ。
勇者だ。
尊敬出来るぞ。

タバサは無口だが、食うのは相変わらず凄い。
オレも軍で相当の量を食べる方だが、彼女には適わない。
どうやったら、あのチビッコの身体に入るのだ？
ブラックホールでも繋がってるのか・・。

キュルケは食べるのは大人しいのだが、喋るのが凄い。
やはり姉さん肌の彼女だ。
前世と恐らく同じだろう。

ルイズは・・・。
離れた隅っこで青い顔をして食べてる。
誰も彼女の傍には近寄らないみたいだ。

魔法も封印され、今は自習ばかりしてると聞く。
哀れだが、自業自得だ。
ヤツは虚無だから、覚醒したら戦争の道具にしかならない。
封印して置くべきだよ。やはり。

「キュルケ。
今日はお前達の授業を見学させて貰おうと考えてるんだけど、
どう言う授業があるんだ？」

「魔法も使えないのに魔法の授業見て分かるの？」

「軍に居るとあらゆる事を想定して行動しないといけないんだ。
この世界では魔法があらゆる場所で使われてる。
知らないでは済まされないのだよ。
想定外と言う事は軍隊では許されないんだ。」

「ま、ダーリンって本当に優秀な軍人なのね♪
そうね。
確かにこの世界では魔法ばかりが使われてるわ。
だけどダーリンみたいな凄い兵器を使われたら、私達の魔法なんて
一撃で終わりよ。」

「そうは言うけどさ、魔法だって恐いぞ。
武器が手元に無くても火や風や水を使えるんだ。
油断は出来ないよ。」

キュルケ達と話してると、不意に誰かが話に割り込んで来た。

「中々、中身の濃い話をしていますね。ミスタ・サイト。」

「えっと・・。どなたでした？」

「一度お会いしただけですので、覚えが薄いのでしょう。
この学院の火の魔法教師をしています、ジャン・コルベールと申します。
その切は本当にご迷惑をおかけしました。」

「ああ、あの時の・・。
あの時は、オレもカンカンだったからな。
今はもう何とも思っていない。安心しろ。」

「して、今日は授業を検分されたいのですか？」

「ウム。やはり異界の魔法にも通じておかないとな。
知らないでは済まされないのだよ。俺達も。」

「分かりました。私からオスマン校長に許可を取っておきます。
ご自身の自由の利く時間に、ご自由に見学されて結構です。」

「おお、そうか。世話になる。・・・。
そう言えばコルベール氏は、俺達の車とか怪鳥を真剣に見てたな。
興味でもあるのか？」

「・・さすがですね。ご存知でしたか・・。
いえ、私は自作で色んな機械を作成してるのですよ。
オモチャですがね。
あの車とか怪鳥がどう言う構造をしてるのか、不思議で溜まらないのです。」

「フム・・。確かに。

この世界は我々の世界だと、数百年前の時代に相当する位遅れてる世界だ。」

「何と・・。そんなにも遅れていますか?」

「考えても見ろ。
道は舗装されておらず、首都はゴミ箱みたいなザマ。
公衆トイレも無く、糞尿が撒き散らされている。
こんな首都なんて、俺達の国ではありえない。
子供が学業を習えるのは貴族のみ。平民は文字を覚える事も出来ない。」

「確かに・・。その通りです。」

「我が日本では、例え生活困窮者の家族でも児童は必ず学業に通う義務がある。」

「何と!!困窮者でも学業を学べるのですか?」

「それが国の責任でもあるのだ。識字率はアチラの世界でも世界一だったぞ。」

「羨ましい国ですね。本当に。」

「一度は見たから分かるだろう?」

「ハイ。チラリと見ただけでしたが、ありえない光景でした・・。」

「ミスタ・コルベール。貴方はダーリンの国を見た事があるのですか?」

「ハイ。あの怪鳥に乗って連れて行って貰いました。
凄まじい国です。山みたいな建物が数え切れない程立ち並び、多くの人が居ました。」

「コルベール。それ以上は機密だ。
今後、オレの許可無く喋ったら投獄させるぞ。」

「・・・失礼しました。
では、今後注意します。」

「今回は目を瞑る。次は無いと思え。」

「ハイ・・。」

「ダーリンって甘い時は甘いけど、厳しい時は恐いのね。」

「甘いだけでは軍人はやって行けないの。キュルケ。」

「甘いと言えば・・。あのチョコとか言う菓子はもう無いの?」

「あるけどさ・・。欲しいの?」

タバサはコクリと頷く。
本当に無口ね?
この子・・。

ちなみにデルフは居室に置いて来た。
さすがに今はヤツに喋らせたく無い。
オレはバッグからチョコを数箱取り出し、テーブルに出してあげた。

タバサは早速手を伸ばし、パクつきだしたが。

「オイオイ。他の連中の分が無くなるぞ。少しは遠慮しろ。」

「ムリ。美味しいから手が止まらない。」

見るとロール髪の女の子も来てた。

アレは・・。モンモンか？

「あの・・ミスタ・サイト・ヒラガ様、
私はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシと申します。始めまして。
昨日はギーシュ様を指導して頂きありがとうございました。」

「・・ああ、君が・・。そうか。始めまして・・だね。
オレがサイト・ヒラガだ。宜しく♪」

オレは彼女に挨拶すると、握手を求めた。
モンモンは顔を赤らめ、オレと握手してくれた。
そして、やはりチョコに目が行ってたので、食べる様に勧めると・・。

「お、美味しい・・。こんな甘いのは初めてです。
ああ、どうして我が国にはこんな美味しいモノが無いの??」

と、泣きながら食べてるのですよ。

・・・チョコや菓子程度なら、何とかしても良いな・・。

オレはオヤジに今宵、相談する・・予定だった。

あんな事件が起きなかったら。

学院にて。（後書き）

変らぬ日常にも影が差します・・。

ルイズ（前書き）

ルイズが久しぶりに暴れてくれます。

ルイズ

私はルイズ。

ゼロのルイズ。

私は召喚の儀式で他国の貴族はおろか、国まで召喚してしまい、
あげくには機密だがロマリアを異界に飛ばしてしまったらしい。
国を上げての大騒ぎとなり、私は退学させられて家に封印される所
だった。
だが異界の貴族、サイト・ヒラガ殿の取り成しで、退学だけは避け
られた。
おかげで家に帰らなくても良くなり、こうして学院に残ってる。
しかし・・。
どうして学院に残ってるのだろう・・。
私は魔法を使う事はおろか、杖を持つ事も出来なくなった。

本当のゼロのルイズだ。

教室に出かけても罵声を浴びるばかりなので、
図書室に通い、色んな本の書き写しをして毎日を過ごすだけ。

友達なんて・・・。

一人も居ない。

居ても喋りたく無いけど。

ああ、何時までこうしてればいいの？
神様なんて居るの？
居るんだったら、私を何とかしてよ。
このままでは私は狂ってしまう・・。

（悩んでいる様じゃの。ルイズよ。）

「アンタ誰？」

（・・・お前、本当に無礼なヤツじゃの・・。
まあ良い。ワシはハルケギニアの始祖、ブリミルじゃ。）

「ブリミルって、あのブリミル教のブリミル様？」

（その通りじゃよ。）

「ほ、本当に？？ごめんなさい。ブリミル様。」

（過ぎた事は良い。所でお前は魔法を使えなくて悩んでいるな。
しかも召喚の儀も拒否され、色々と騒ぎも起きたじゃろう。）

「その通りです。他国の貴族や国まで召喚してしまいました。
どうしてこんな事が起きるのですか？
他のメイジは動物とか昆虫なのに。」

（ルイズ。心して聞くが良い。）

「分かりました。私はもう何も失うモノは無いゼロです。」

（お前の魔法の系統は虚無。まさにゼロなのだ。）

「虚無って・・・失われた系統の虚無ですか？」

（その通り。
虚無のメイジは覚醒するまでは、コモンすら発動出来ず、
使い魔を召喚出来て初めて目覚める系統じゃ。
虚無は召喚出来るのはエルフか人間のみだ。
お前の召喚の儀式は一応は成功している。
後は契約の儀式だけだ。
どうして契約しないのだ？ルイズ。）

「だって・・アイツは他国の・・。」

（他国とか考えずに契約してしまえば良いでは無いか。
ルーンが刻まれればヤツはお前の使い魔となろう。）

「そんな事をしたらアノ国と戦争になりませんか？」

（心配するな。既に平和条約も結ばれておる。他国の貴族の一人や二人、
見逃してくれるわい。）

「そ、そうですか・・。でしたら・・。」

（ヤツの面前に出る前に詠唱を済ませ、契約の口づけのみすればヨシじゃ。）

「そうしたら彼は私の・・。」

（使い魔だ。お前も虚無に目覚めるだろう。）

「分かりました。では、今から・・。」

（ウム。頑張れ。ルイズ。）

「ハイ。ありがとうございます。ブリミル様。」

ルイズはブリミルが消えるのを確認すると、才人の元へ向かう事にした。

彼は今、アルヴィーズ食堂に居る。

コレを逃せば契約の儀式に持ち込めるチャンスは無い。

ルイズは小声で詠唱を唱える。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力をを司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔と成せ。」

そのまま才人の元へと駆け寄り、契約の口づけを執り行ってしまった。

（フフフ、コレでまたサイトはこの国の傀儡となろう。

サイトよ。
ワシの呪縛から逃げられると思うな。
ルイズが斃れても次の虚無が現れるじゃろう。）

才人はシエスタやモンモン、ギーシュなどとバカな話をしてた。
そこへ突然、ネ申様が脳内で叫ぶのだ。

（サイト、今すぐその場を離れろ。ルイ・・・・）

（ネ申様、どうしました？ネ申様。）

ルイ・・・で彼の声は途絶えてしまった。
何か重大な事件が待ち構えているのか？
とにかくこの場を立たないと不味いらしい。
オレは彼等に断り無く立とうとした。

その時。

端っこに居たハズのルイズがオレの目の前に立ってたのだ。
あの詠唱は・・。

ヤバイ。

契約の儀式の詠唱だ。

キスをされたら、またガンダになってしまう。

逃げないと・・。
だが、一歩遅かった。

オレの口はルイズに塞がれ、
ルーンの伝承が伝わってしまってたからだ。
オレは一瞬の反応でルイズを突き飛ばし、
離れようとしたが、ルーンの焼き付かれる痛みに、
意識を飛ばしてしまい、倒れてしまってた。
シエスタやキュルケの騒ぐ声をバックに。

ヤ・ラ・レ・タ・・・。

ルイズ（後書き）

次回は・・です。
ルイズは今後の扱いが最悪となります。
ルイズファンの皆様。ゴメンナサイ。

サイト（前書き）

サイトが倒れ、周囲が大変な事になっています。

サイト

シエスタです。
私の顔は今、憎悪に乱れてると思います。
もう何日経過したのでしょう。
私は、サイト様の目覚めを彼のベッドの脇で待ち続けています。

突然の事でした。
私達は食堂でキュルケ様などの貴族様と楽しく談笑してました。
その幸せが一瞬にして終わるとは・・。
罪人、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールが
サイト様に禁止されてた契約の儀式を行ってしまい、彼は意識不明の重態となったのです。
私は即座に護衛兵士を携帯で呼び、罪人、ルイズを捕縛。
色々と不味いらしいので、猿轡を口にかませ、拘禁服とか言う袋に押し入れ、
彼女をいずこかへと連れ出してしまいました。
王宮のマザリーニ枢機卿殿にも連絡。
サイト様は基地の診療所に収容。
目覚めを待つばかりとなってるのです。
どうしてこうなったの。
私があの女を倒してたら、サイト様は倒れずに済んだのに。
憎い。
私達を救ってくださるサイト様をこんな目に合わせたルイズが。
だが彼女も一応は貴族様。
今は王宮の奥の牢獄に封印されてるらしいです。
絶対に二度と出さないで欲しい。
あの女を・・。

「姫、困った事になりましたね。」

「ええ、枢機卿。どうしたら良いのかしら・・。」

「サイト様のお父上も大層なお怒りだそうです。
我が国の明日は無いかも知れません。
あの国は我が国はおろか、
ハルケギニア大陸すら吹き飛ばせる軍事力があるそうですから。」

「困りました。ルイズは一応、王宮の牢獄に投獄。
ヴァリエール公爵も公式に彼女を勘当され、今ではタダのルイズ。
ですが、彼女の処分は彼の目覚めを待たないといけません。
ああ、ルイズ。どうしてこんな事件を起こしたの？
私達も彼女をもう少し厳しく取り扱うべきでしたわ。」

「そうですね。
ですが、今となってはすべてが遅いのです。
起きてしまった事はどうしようもありません。
まずはサイト様のお目覚めを待ちましょう。
その上で国からの謝罪。
ルイズの処置を彼に委ねるべきです。」

本当に大変な事になりました。
まさか彼女がこんな事態を引き起こすとは。

学院に残りたいと言う希望を叶えてくださったのは、他でも無い。
サイト様だったのに。
その彼に禁制となった契約の儀を執り行い、彼に傷害を与えたのです。
私達が彼女を処理したとしても、彼等の怒りは収まらないでしょう。
今、ルイズは王宮の奥底の水牢に閉じ込め、彼の目覚めの日まで。
生かさず、殺さずで投獄しておくしかありません。

「シエスタ。サイト様は？」

彼女は首を力なく振る。
彼女も数日は寝ていないだろう。
あれ以来、ずっと彼の傍を離れず、手を握り締めてるのだ。
あの明るく強いサイト様がこんな姿になるなんて。
本当にナニを考えて、あのルイズはこんな事をしたのだ？
私も彼の事件を聞き、すぐに日本を立ち、
トリスティン海軍基地に帰って来たのだ。
テファの手術は経過も良く、もうすぐ抜糸らしい。
包帯ごしに見える彼女の耳形は私達と同じだ。
こんな幸せを運んで下さったサイト様にこんな不幸が訪れるとは。
私で出来る事なら、何でもしてあげたい。
だが、今は・・・。
何も出来ない。
命に別状は無いらしいが、身体では無く、
頭の病状らしいので下手に起こすと危険だとか。
自然な目覚めの出来る日まで、彼の傍に居る事にしよう。
シエスタもそろそろ危ない。
代わってあげないと。

「シエスタ?貴女の顔、凄い事になってるわよ。
サイト様が目覚めた時にそんな顔を見せる気?
私が見てるから、貴女はお風呂にでも入り少し寝なさい。」

「マチルダさん・・。」

「心配しなくても目覚めたらすぐに貴女も起こすから。
安心して少しは休みなさい。」

「分かりました。こんな汚い目ヤニ顔なんて、
サイト様には見せられませんもんね。
少しだけ寝て来ます。
サイト様が目覚めたら・・。」

「ハイハイ。ちゃんと起こしますって。
おやすみ、シエスタ。」

「おやすみなさい。マチルダ・・・・さ・・ん・・。」

ふう、寝たか・・。
気を張り詰めてて、疲労も限界だったでしょう。
それにしても、どうしてこんな事に?
私も使い魔を召喚した事あるけど、すぐにピンピンしてたわよ。
もう老衰で亡くなったけどね。モグラの使い魔。
それにしても、大変な事になったわ。
彼に万一の事が起きたら、あのお父様は怒りでハルケギニアを滅ぼ
すかも知れない。
温和な方だけに、怒ると最悪の事態もありえる。
何とか無事に目覚めて欲しい。

テファももうすぐコチラに来るのに。
サイト様にお仕え出来ると楽しみにしてたのに。
起きてくださいよ。

サイト様・・。

サイト（後書き）

ルーンの秘密は次回の目覚めで。

サイト2（前書き）

サイトとネ申様の会話です。

サイト2

俺は・・・才人・・だよな?
今・・どうなってるんだ??
あの時、アルウィーズの食堂で、ギーシュ達と歓談してて・・。
そうだ。
ルイズがいきなり契約のキスを・・したんだ・・・・。
そうしたら・・・。
頭と身体と左手に・・・激痛が起こり・・。
意識を手放したんだ。
ん??左手は分かるが、身体・・。
まさか・・・。

(サイトきゅん、大変な事になったのぉ。ワシも助けようとしたのじゃが。)

ネ申様、オレは今、どうなってるんです?

(ルイズ・・。アレは今、トリスティン城の地下深くの水牢に収監されてるが、
ヤツの行った契約の儀で、サイトにルーンが刻まれてしまった。
神の左手、ガンダールヴ。そして・・。
記すことさえはばかれる……。リーヴスラシルだ。)

ゲッ、ダブルのルーンですか?
道理で痛みに耐えられず気絶したハズだ。
リーヴスラシルって、確か・・・。

(そうじゃ。秘宝にも記されておらぬ幻のルーン。

それがリーヴスラシル。
恐らく、今まで知られてるルーンとは訳が違うのじゃろ。）

どうして、こんな事に・・。

（ブリミルじゃよ。ヤツがルイズの面前に現れ、ルイズを誘惑したのじゃ。
ワシはそれに気づき、サイトに注意をしようとしたのじゃが。
すべてを言う前に、、ヤツに妨害されての。）

なるほど・・。それでネ申様の声が途切れたんですね。

（ウム。済まなかった。ワシの力が足りないばかりに。）

ま、いいですよ。命には別状無いのでしょ？

（ウム。
ワシもお前の身体を点検したがルーンが刻まれ、
その痛みに脳が負荷に耐えられず気絶した以外は問題ナシじゃ。）

所でリーヴスラシルって、以前のオレでブリミルから伝授された・・。

（そう、世界扉（ワールド・ドア）、忘却などが使えるハズじゃ。
その他にもあるみたいじゃがの・・。）

はぁ・・。あんまり嬉しく無い機能ばかりっスね。
世界扉（ワールド・ドア）も、日本が転移した今は使い道が無いっスよ。

（ガンダはどうする？それなら消すのも可能じゃが。）

ガンダはいいっスよ。アレはオレの人生一番のルーンでしたから。
デルフも喜ぶでしょ。

（お前も気楽じゃのぉ。目覚めたら大変な事になるじゃろうに。）

大変な事って？？

（それはお前が目覚めたら分かる事よ。グフフフ。）

な、何か恐いっスね。でもリーヴスラシルか・・。コレは消せませんよね。

（ムリ。お前の魂にまで刻まれてる。消すとお前の魂まで消滅してしまう。）

ったく、ブリミルのヤツめが。厄介な事をしてくれたモンですよ。

（第二のルーンの事は誰にも言わず、秘匿しておくのが一番じゃろ？）

そうですね。こうなると下手にルイズも処理出来ませんな。

（お前の寿命が尽きる日までは、牢に入れておくしか無いと思うぞ。消すと次の虚無が目覚めてしまうから。）

次が・・ですか。ちなみに目覚めていない虚無は？

（ティファニアとガリアのジョゼットとイザベラよ。）

ティファニアは分かるけど、イザベラって・・。あのツンツン姫??
それにジョゼットって??

（その通り。彼女も王家の血筋の一人。
ジョゼットはお前は知らないタバサの双子の妹よ。
今はガリアの沖にある修道院に居る。
二人とも、本当はジョセフが亡くなった時に目覚める予備なのだが。
）

ロマリアのヴィットーリオはまだ生きているのですか？

（もうダメじゃろう。ロクにメシも食えず、飢え死に寸前よ。）

ヤツを生かしておく事は出来ませんか？

（・・不可能では無い。しかしどうして？）

ヴィットーリオが消えると次の虚無が目覚めてしまうでしょ？
それって予想も付かない事が起きるって事ですから。
でしたら予想のつく人間に虚無で居てもらった方が安心出来ます。

（・・・ヨシ。分かった。
ルイズとヴィットーリオはワシが神界にて生かさず殺さずで生かしておく。
あの神界ならブリミルも手が出せないからの。）

オッ、そうしてもらえると助かります。ヤツには牢なんて意味無いですからね。

（その通り。んじゃそろそろ起きる頃合じゃろ？

ルイズの事はワシが連れて行く。お前が目覚めた後にの！
ヤツは眠らせておく。
そうしないと、お前とルーンが繋がってしまう。
覚醒出来ない様に神界で封印しておく。）

お願いします。マザリーニとアンリエッタにはオレから言っておきますから。

（ン。了解じゃ。では、そろそろ起きるのじゃよ。バイバイキ～～ン♪）

ネ申様、あんがとねぇぇぇ。

はぁっ・・。
リーヴスラシルか・・。
ったく厄介なルーンが刻まれてしまった。
ルイズを消しておくべきだったな・・。

・・・そろそろ起きるか・・・。

サイト2（後書き）

ようやく目覚めます。

目覚め（前書き）

ようやくネボスケが起きます。

目覚め

サイト様が倒れて一週間になります。
彼はこの基地の病室でテンテキとか言う針と薬で命を永らえてるそうです。
テファも抜糸が終わると同時に基地に帰り、今は私と一緒に居ます。
サイト様、早く目覚めてください。
何時まで寝てるのですか？
サイト様・・・。

「・・・・・・。ココは？？」

「「サイト様ぁぁぁぁぁぁっ。」」

「・・・・・、やぁ、シエスタ、テファ。おはよう♪」

「おはようじゃありませんよ。何で起きてくれなかったのですか？」

「そうですよ。御主人様。私も耳の手術が終わりこの耳を見て貰いたくて、
慌てて帰って来たのですよ。」

「・・・スマン。ルイズに不意打ちされ、意識が飛んでしまったからな。
・・、そうだ。シエスタ。オレの携帯を出せ。
急がないといけない事がある。」

「ハ、ハイ。只今お持ちします。」

シエスタから携帯を受け取ると、オレはマザリーニに電話を入れた。

「マザリーニ枢機卿ですか？サイトです。」

「おお、サイト様。お目覚めですか。ご無事で本当に何よりです。
この度は我が国の民により、
大変な事を仕出かしてしまい、本当に申し訳ございませんでした。
いかな事でも受け入れますので、どうか我が国の国民には慈悲をお
願いします。」

「ああ、心配は要りませんよ。ただルイズの事なのですが。」

「罪人ルイズはヴァリエール家も勘当しました。
今はタダのルイズです。
彼女はいかに処理するかはサイト様にお任せしますので。」

「分かりました。彼女はある神が管理する事になります。
理由は極秘です。今、ヤツは城の水牢に居ますよね？」

「どうしてご存知なのですか？」

「倒れてる時に、ある神に聞きました。
もうすぐヤツは水牢から消えますが、
ご心配は要りません。ある場所に転移するだけです。
殺す事はしませんのでご安心を。」

「そ、そうですか。良かった・・。早まった事をせずに。」

「・・と、言いますと？」

「サイト様の父上の怒りが激しく、彼女を死罪にするべきとのお言葉も頂いてたのです。
もう少しで処刑する所でした。」

「間に合いましたか・・。処刑されてたらオレも終わりだったかも知れません。」

「やはりルーンの事で？」

「ええ、その通りです。ただ、ルーンが刻まれた事は極秘にしてください。
特に他の貴族には。」

「モチロンです。国としての極秘にします。
ルイズ嬢は城の奥底に封印したと言う事に処置しておきます。」

「お願いします。ヤツはコチラで管理しますので。」

オレはマザリーニと色々と会話した後、電話を切った。
何とか間に合ったか・・。

（サイトきゅん。ルイズは転移しといたぞ♪）

おぉ、ネ申様。ありがとうございます。

（まあ良い。そろそろお前のお姫様が痺れを切らす頃じゃ。早く構ってあげるが良い♪）

わ、分かりました。ではまた・・。

（バイバイキ～～～ン♪）

ふぅ・・。コレでヨシ。さって・・。

「サイト様、お話は終わりましたか？」

「ああ、シエスタ。悪かったね。時間が惜しかったのだよ。スマン。
それにありがとう。心配かけたね。」

「本当ですよ。心配しました。
でも、ごめんなさい。私があの時にルイズを倒せなくて・・・。」

「ああ、もう大丈夫だから。泣くな。それに顔が酷い事になってる
ぞ。
少し顔を洗って来な。」

「わ、私・・。すいません。少し席を外します。」

「ノンビリして来いよ。」

「すぐに帰りますから・・。」

「ご主人様、大変でしたね。本当に心配しましたよ。」

「ああ、ティファニア。それにマチルダさんも・・。
心配かけました。ようやく帰れました。」

「サイト様、本当に大変でしたね。もうお加減は？」

「ウン。ぐっすり寝たせいか、スッキリしてる位です。

何か変った事は？」

「ございません。
子供達はニホンの養護施設に引き取られ、楽しく生きております。
この国の施設とは比較にならない施設です。
養子の話も舞い降りてるとか。本当にありがとうございました。」

「そうですか。良かった・・。
テファ。耳も綺麗になったね。
カワイイよ。」

「ありがとうございます♪♪ご主人様のおかげです。
コレでこの国でも普通に歩けます。
もう大きい帽子で耳を隠さなくても大丈夫です。」

「そうか。良かったね。」

「ハイ♪♪」

ヴィットーリオとルイズはネ申様が管理してくれる事になった。
コレでハルケギニアに居る虚無は現在はガリアのジョセフのみ。
ヤツの動向が分からないが、今は静観するしか無いだろう。
後はエルフか・・。
テファは虚無にはさせない。
何としても普通の女性として幸せに生きて欲しい。
虚無なんて、滅ぼすべき系統だ。
世界の迷惑よ。
大陸隆起については、風石を掘り起こすしか無いな。
そろそろ動くか・・・。

目覚め（後書き）

・
・
・。

学院にて。2（前書き）

学院での日常が帰りました。

学院にて。2

ルイズ騒動から目覚めて数日経つ。

オヤジは相当怒ってたらしく一時は弾道ミサイルをトリスティンのヴァリエール家に照準を向けてたそうだ。
後にマザリーニ経由でヴァリエールに伝えたら、
あの強面の夫婦が泣き喚いて失神したとか。

トリスティン王国からは謝罪として、学院横の基地敷地とタングルテール、
ラ・フォンティーヌ領＞カトレアの領地だったが、国に返納。
並びに国内各地の基地敷地を日本に無償提供し、
掘り出す原油や風石も無償で渡す事にしたらしい。

ただ、いくら何でもコレではアチラが不憫。

掘り出した原油や風石については、当初の通りにした。
このビンボ国家から、あまり毟ると可愛そうだもんな。

ヴァリエール家はルイズの罪状で、公爵の位を返上。
普通の貴族と同じになり、土地も半分以上を国に返納。
エレオノールも魔法研究所を辞職。
カトレアは病気の治癒が出来なくなり、死去したとの事。
哀れだがコレも運命。

諦めて貰うしか無い。

トリスティンには日本から食料品の輸出を開始した。
対価は日本がトリスティンから掘り出す原油や風石。
コチラの金を貰っても通貨として意味が無いのだ。
おかげで市中の平民の食卓も豊かになったとか。

「サイト様、このシュークリームってお菓子、本当に美味しいですわ。
甘さも程ほどですし、ゆっくりと頂けるのが最高です♪」

「あんまり食べ過ぎるなよ。太るぞ。」

「キーーーッ!!女性に禁句は言ってはいけません。」

「スイマセン。ゴメンナサイ。」

学院の外にも基地の連中が作った売店を設置。
学院の生徒や平民にも安い値段でお菓子や日用品の販売を始めた。
お金の無い平民や学生は近所の原野で取れる薬草や野菜での交換も可能とした。
お金が無いから食べられないでは可愛そうだからね。
金が無いなら働けば良いのだ。ウン。

この処置は平民には大好評だ。
彼等に取って、原野は我が庭だ。

どこにどんな野菜や薬草があると心得てるから。

貴族のボンボンはどうしようも無い。
仕方なしにナケナシの小遣いで購入してるとか。
今では平民の子の方が良い食生活を送ってる。

貴族と言えばギーシュ。
しばらくはオレが忙しかった事もあり中々鍛える暇が無かったが、
ルイズ騒ぎも落ち着いたのでそろそろ鍛える事にした。

「ギーシュ。お前は基礎体力が無い。
まずは基礎体力を身に付けるのだ。」

「サイト。それは・・。」

「今からオレがヨシと言うまで全力疾走だ。
いいか、へこたれても全力だぞ。
手抜きと見たら・・。」

ギラッと機関銃をギーシュに見せると・・。

「わ、分かりました。命がけで走ります。」

「ヨシ、じゃースタート♪」

学院の広場、大体半径が五百メートルはあるだろう。

そこをギーシュは全力で走り出した。
ただ、元々の体力が無いので、数週も走るとダレて来るのだが。

「ギーシュ、誰がノロノロと歩けと言った？」

そう怒鳴り、ギーシュの足元に数発の威嚇射撃。

悲鳴を上げてヤツはまた走り出す。

その繰り返しで、二十周は回っただろうか？

とうとう威嚇射撃をしてもピクリとも動かなくなってしまった。

待機してたモンモンに治癒して貰い、何とか立てる様になると・・・。

「ギーシュ、この程度でヘタれる様では軍人として最低だぞ。

明日も自分で必ず二十周は周回しろ。

終わったら腕立て伏せを必ず五十回。

キチンと腕で身体を制御するのだぞ。

モンモン。

お前は監視してて、ヤツが手抜きしてたら報告しろ。

オレが居ないからと手抜きしてたら・・・。」

「さ、サイト様、手抜きはしません。

ギーシュ・ド・グラモンは常に全力です。」

グフフフ。真っ青だな。ギーシュ。

頑張れ。夜には柿の種を刺し入れてやるからな。

（疲労した時は辛いのが一番です。）

ちなみにモンモンも無償では無い。

ギーシュを監視し、治癒する事の対価にチョコを一日二つ支給するのだ。

ビンボな彼女には金よりも嬉しいそうだ。

（初めて食べた時に泣いて食べてたもんな？）

数ヵ月後、ギーシュは学院イチのマッチョになるのだが・・。

学院にて。2（後書き）

カトレアは可愛そうですが、ルイズの犠牲になりました。
次回からアルビオン戦になります。

アルビオン（前書き）

いよいよレコンキスタが活動を開始します。

アルビオン

学院でワイワイと楽しくして数日経った頃。
ワルドがオレを尋ねて来たのだ。
ちなみにワルドはルイズとの婚約は幼少の頃に解消してたので、今回の騒ぎでは何も関わりが無かったとか・・。

「サイト様、お待たせしました。
例の連中の重大機密を掴んで参りました。」

「おお、本当か?」

「ハイ。連中は近日中にアルビオンで騒動を開始します。
レコンキスタの首謀者はオリヴァー・クロムウエル。
虚無を名乗る僧侶です。」

「オリヴァー・クロムウエルか・・。」

「ハイ。そしてヤツの虚無と言うのは実は真っ赤なウソです。」

「どう言う事だ?」

「以前の私なら騙されたでしょうが、既に冷めてた私なら簡単に看破出来る話ですよ。
ヤツはあるマジックアイテムで死者や他人を操ってたのです。」

「死人や他者を操るマジックアイテムか。そりゃ種を知らない人間

には凄い恐いな。」

「ハイ。
そのマジックアイテムとは、ラグドリアン湖の水の精霊の秘宝です。
アンドバリの指輪と言うそうです。」

「水の精霊の秘宝で、そんなに簡単に操れるのか？」

「普通のマジックアイテムとはケタが違います。」

ワルドからヤツ等の作戦開始時期を聞き、その時はオレのコパイロットにしてやると言うと。

「本当ですか？サイト様。
戦う怪鳥の後ろに乗せて頂けるのですか？」

「ああ、他の連中の怪鳥はダメだが、オレの怪鳥なら乗せてやる。
かなり激しい機動をするから、
当日までオレの基地に駐在し、コンディションを整えておけ。」

「分かりました。ああ、あの怪鳥で空を飛べる日が来るとは・・。」

「他国の連中やレコンには今後、絶対に接触するな。
お前はオレの基地に今後は駐在しろ。
しばらくは拘禁だ。」

「御意です。
作戦の邪魔にならない様に致します。」

ワルドを拘禁するのは、ヤツ等と接触されて操られる危険を避ける

ためだ。
ヤツが操られたらヤバイ。
何せ風のスクウエアだ。
あの偏在は恐ろしい。
だからヤツは確実に拘禁しておくべきだ。
すべての情報が分かった今、ヤツを野放しにしておくのも危険だ。
基地に入れる際、ヤツの杖やレイピアはモチロン取り上げてた。
ヤツはそんな事は構わないとヘラヘラしてたが。
余程、嬉しいのだろう。
何せ、基地の中にはヤツの大好きな怪鳥、「空燕」と「海燕」が居るのだ。
退屈はしないだろう！！

オレは基地の執務室でマザリーニに機密を告げた。

「枢機卿、遂にレコンキスタが活動を開始します。
先導隊を送り込み監視、動くと同時に連中を叩きます。」

「おお、遂に掴まれましたか。分かりました。
国内は私が抑えておきます。存分に戦ってください。
そして出来ましたら・・。」

「アルビオン王家も救います。確実に。」

「お願いします。この事は・・。」

「姫には絶対に言わないでください。
彼女は子供です。どこかで漏らす可能性も高いのです。」

「その通りです。私の胸の内に留めておきます。

サイト様、宜しくお願いします。」

オレはマザリーニに色々と注意事項をお願いし、国内の貴族を抑えて貰う様にした。

さて、今度こそガンダに頼らないアルビオンの戦いだ。

ルイズ。

涅槃でノンビリと見てろよ。

アルビオン（後書き）

ワルドをルイズの代わりに連れてサイトは戦います。

破壊神の使い魔　雷電（前書き）

思いっきり趣味に走りました。

破壊神の使い魔　雷電

レコンキスタの行動は早かった。
ワルドが教えてくれた時期よりも、数日早まったのだ。
既にＡＭＦは「空燕」に装備。
コレが無いと、無駄に戦死者を出してしまうであろうから、早急に開発したのだ。

「マチルダ。
お前のおかげで、この装置も間に合った。
本当にありがとう。」

「いいえ、サイト様。
もう魔法は時代遅れになりますよ。
魔法は道具の一つとして扱う時代になるべきです。
この世界でも。」

「開発が終わった今後、マチルダはオレの秘書となって欲しい。
お前の書記能力は有能だからな。
頼む。
オレの背後を固めてくれ。」

「サイト様、頭を上げてください。
私からお願いしたかったのですよ。本当は。」

「フン。そうか？」

「お前の故郷も戦火の中で廃墟にしてしまうが・・。」

「仕方ないですよ。
あんな連中を野放しにする位なら、キチンと引導を渡してください。
その代金と思えば安いモノです。」

オレは今後の指標をマチルダと相談し、トリスティン王国に提出する書類は、
今後すべてマチルダに頼む事になった。

シエスタとテファはオレの専属メイドとして、身の回りの事を色々と厄介になってる。

そしてワルドだ・・。

「サイト様、このヘルメットと言う兜は素晴らしいですよ。
硬度は高いのに兜とは比較にならない軽さ。
そして機能も満載。
怪鳥、いえ、空燕を操るには最適ですね♪」

ワルドは航空部隊の装備や航空機に熱中してた。
もう魔法衛視隊も退職したいと喚いてる。
さすがにパイロットはムリだから、衛兵にでも雇ってやるか・・。

アルビオン攻略に当たっては、有力な部隊が今日、
我がトリスティン海軍航空隊に着隊した。

四菱航空機製作、Ａ１０－雷電だ。

「サイト様、これは何と言うか・・。
海燕とは違う恐さがありますね。
まさに戦士と言う感じがします。」

「ワルド。
この航空機はな。オレの世界の最強の戦士が最後に俺達に残してくれた、
最強のバトルマシン、破壊神の使い魔だ。

見た目はゴツイ、速度も海燕の半分も出ないロートルだ。
だがな。
見て見ろ。
このゴツイ翼とガトリングガン。
そしてタフな機体を。
戦場でも多数の被弾を喰らったとしても生き残れるタフなヤツだ。
コイツに狙われたら地上の兵士はゴミみたいに潰されてしまうぞ。
それは俺達の世界でも同じだ。
なあ、皆！！」

「「「そうですぞ。司令！！」」」＞サイトは既に司令となりました。

「サイト様、凄い英雄が居たのですね。貴方の世界には。」

「いや、我々の世界でも別格の人だよ。
彼の国の王が彼みたいな人物の登場を願って凄い勲章を作ったのだが。
彼以外には授与出来なかったと言う幻の勲章もある位だよ。」

「す、素晴らしい。男なら憧れる人です。
もし差し支えなければ、その偉大な英雄の名前を。」

「「「我等がＡ１０の父、
悪魔のサイレン（ジュリコのラッパ）の使い手ハンス・ウルリッヒ・ルーデル閣下だ！！」」」

おお、全員息がピッタリだな。
そう、Ａ１０雷電はルーデル閣下が居なかったら誕生していなかったかも知れない、
永劫の名機よ。

独逸空軍所属（ルフトヴァッフェ）　ハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐

スツーカ大佐
ソ連人民最大の敵
スターリンから懸賞金を賭けられた独逸の英雄
ヒトラーの親友
スツーカの悪魔
義足になっても戦った男
休暇が大嫌いなバトルジャンキー
アンサイクロペディアに嘘を言わせなかった男
と、色々と伝説があり過ぎる凄い男。

それがルーデル閣下だ。

「素晴らしい。そんな神みたいな英雄が居たなんて・・。」

ワルドは恍惚とした顔でＡ１０雷電を眺めてた。

ちなみに雷電部隊の詠唱事項が隊長室には掲げてある。

内容は以下だ。

Ａ１０雷電部隊必須詠唱事項

Ａ１０神は誰だ？＞Ａ１０の父、悪魔のサイレンの使い手ハンス・ウルリッヒ・ルーデル。
Ａ１０神に仕える司祭（パイロット）は、どんなに敵から撃たれても神を信じて耐えなければならない。
Ａ１０神に仕える司祭（パイロット）は、神に歯向かった者に復讐者（アヴェンジャー）として、粉砕しなければならない。
Ａ１０神に仕える司祭（パイロット）は、決して「海軍のエリート」と高慢になってはいけない。
Ａ１０神に仕える司祭（パイロット）は、歩兵や戦車兵、水兵に愛され、そして頼られる者とならねばならない。
Ａ１０神に仕える司祭（パイロット）は、友軍の困難には万難を排して、時速７００Ｋｍ以下で急行しなければならない。
Ａ１０神に仕える司祭（パイロット）は、朝起きて牛乳飲んで出撃してステーキ食べて牛乳を飲んで出撃。
昼・ハンバーガーを食べて牛乳飲んで出撃。
夜・ホットドッグ食べて牛乳飲んで出撃しなければならない。

Ａ１０神に仕える司祭（パイロット）は、一日一回は下記のＡ１０訓を唱えなければならない。

何のために生まれた！？
――Ａ－１０に乗るためだ！！
何のためにＡ－１０に乗るんだ！？
――ゴミを吹っ飛ばすためだ！！
Ａ－１０は何故飛ぶんだ！？
――アヴェンジャーを運ぶためだ！！
お前が敵にすべき事は何だ！？
――機首と同軸アヴェンジャー！！！
アヴェンジャーは何故３０？なんだ！？
――海燕のオカマ野郎が２０？だからだ！！
アヴェンジャーとは何だ！？
――撃つまで撃たれ、撃った後は撃たれない！！
Ａ－１０とは何だ！？
――アパッチより強く！　海燕より強く！　空燕より強く！　どれよりも安い！！
Ａ－１０乗りが食うものは！？
――ステーキと牛乳とウィスキー！！
ロブスターとワインを食うのは誰だ！？
――前線早漏海燕！！　ミサイル終わればおケツをまくるッ！！
お前の親父は誰だ！？
――チャンコ○殺しの雷電！！音速機とは気合いが違うッ！！

我等海軍攻撃機！　機銃上等！　ミサイル上等！　被弾が怖くて空が飛べるか！！（×３回）

我等が海燕部隊も彼等の詠唱を見たり聞いたりすると、
さすがに頭が痛くなる・・が。
戦場で一番、弾を喰らって帰るのは彼等だ。
あの程度の気合は必須だろう。

頑張れ。
雷電部隊。

ワルドは詠唱を聞き、痺れてしまった様だ。

追記、

ハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐の最終確認戦果

・出撃回数２５３０回（落とされた回数３０回）
・破壊した戦車５１９両
・破壊した装甲車・トラック８００台以上

・破壊した火砲１５０門以上（１００ｍｍ口径以上限定）
・破壊した装甲列車４両
・沈めた軍艦３隻（戦艦、嚮導駆逐艦、駆逐艦）
・沈めた上陸用舟艇７０隻以上
・落とした航空機９機（戦闘機２機、爆撃機５機、その他２機）

これは公認された戦果のみの数字です。
彼はヒトラーからも散々、飛ぶなと言われ、終戦末期には飛行停止命令も下り、
公式には戦闘に参加出来なくなってました。
ですが、彼は飛び続け、異様に戦果の多い部隊として査問も入った程です。
恐らくこれ以上の戦果を稼いでたのは確実。
冗談みたいな本当に居たチート人物です。ルーデル閣下は。

破壊神の使い魔　雷電（後書き）

Ａ１０必須詠唱事項はアンサイクロペディアから引用、改定しました。
分かる限りのルーデル閣下の戦果です。
Ａ１０雷電はアメリカ空軍のサンダーボルトを日本風に改名しました。
モノはまったくサンダーボルトです。
詳しくはｗｉｋｉでＡ１０と検索して下さい。ご存知で無い方は♪

出撃（前書き）

いよいよ出撃です。
勇壮な出撃シーンは旧日本海軍の出撃シーンをイメージしました。

出撃

僕の名前はウエールズ・デューダー。
アルビオン王国の王子だ。
ここ最近、色々と我が国で騒ぎを起こしてたレコンキスタが遂に・・・。
我が国に宣戦布告をしたのだ。
マヌケな話だが、
何時の間にか我が軍の兵士や貴族の大半はレコンキスタに寝返ってたのだ。
今は、城を防衛出来るだけの兵士とメイジしか残っていない。
このままでは、明日にも我々は滅びてしまうであろう。
父上と相談し、今宵は壮行会を執り行い、明日は我々総員で敵陣に討ち入り。
全員名誉の戦死を遂げるつもりであった。
そこへ・・・。

「殿下。トリスティン王国より伝令が参りました。」

「ウム、読め。」

「ハッ。
我がトリスティン王国の同盟国、ニホンテイコクより明日、強力な援軍を寄越す。
絶対に早まらず、城だけを防備せよ。
トリスティン王国、アンリエッタ。」

「おぉぉ、噂のニホンテイコクの怪鳥軍団が我々を支援してくれるのか。

ヨシ。伝令には丁寧に伝えよ。
確かに伝令は受け取った。
明日の援軍を待ち、城の防衛に徹する。
ウエールズ・デューダー。
トリスティン王国、アンリエッタ王女殿へ。」

「ハッ、了解しました。
確かに一言一句間違えず、伝令には伝えておきます。」

「ウム。頼む。」

「ウエールズ。噂の怪鳥軍団が我々を支援してくれるのか。」

「ハイ。どう言う軍団かは自分も分かりませんが、伝えによりますと、
音よりも速く飛び、雲の遥か彼方を高く飛び、
そして恐ろしい破壊力の武装を持つ怪鳥らしいです。」

「そんな強力な怪鳥軍団が我が国を支援してくれるのか。
それなら、何とか少しは持ち直せるかも知れぬな。」

「父上、弱気になってはいけません。援軍。
それもハルケギニアでも最強との噂もある援軍ですぞ。
従兄弟のアンリエッタが頼んでくれたのでしょう。
彼等を信じて、我々はこの城を死守するべきです。」

「ウム。そうじゃの。ウエールズ・・。」

明日は長い一日となろう。
我々は部下に城の守備と警備を万全にし、兵士には出来る限り体力

を温存する様に厳命した。

翌日、早朝・・。

「平賀才人少将だ。
いよいよアルビオンに侵攻してるレコンキスタに鉄槌を咥える時が来た。
アルビオン王国には城の防衛に徹する様に厳命してある。
アルビオン王国軍の最前線には白い矢印をマーキングしてある。
そこまでは絶対に攻撃するな。
その先は・・。全員敵だ。
容赦する必要は無い。
まず、俺達空燕がＡＭＦで敵の魔法を封印する。
コレで敵の魔法はすべて封印される。
次に海燕軍団は最大速力で侵入。いいか・・。
最大速力だぞ。
敵の中枢にナパームを放て。
遠慮は要らぬ。
そして仕上げが雷電部隊だ。
お前等は掃射戦をしてくれ。
武装を使い切った連中は母機にガスを給油して貰い、帰還。
武装を充填した後に再出撃だ。

いいか、命令が停止されるまでが戦いだぞ。」

「「「了解しました。」」」

「決して敵を侮るな。
敵は白旗を上げても敵対する可能性が高い。
捕虜とするのは、敵が武器をすべて地に放り、地に倒れ付した時が降伏だ。
（つまり敵が斃れた時です。サイト君、そりゃ無いっスと敵が泣きます。）
それ以外の捕虜は取らぬ。すべて抹殺しろ。
いいな。尖閣と竹島の戦いを思い出せ。
散って逝った戦友の二の舞は絶対にするな。」

「「「了解！！」」」

「ヨシッ、では０７４５（マルナナヨンゴ）に時刻整合を行う。

十秒前。

時間。

０７４５時刻整合終わり。」

（軍隊は全員時計の時間を整合するのが必須です。）

「先軍は海燕部隊。まずは敵の度肝を抜け。
我々は上空からＡＭＦを放射し続ける。
雷電は最後に出撃。

では、解散、かかれっ！！」

オレが号令をかけると全員が各自の愛機に駆け寄り搭乗。
全機エンジン起動開始。
基地は轟々と言う騒音に包まれた。
やがて列線から滑走路へと編隊を組んだ状態でタキシング。
パイロットは手を振る基地員に敬礼をしたり親指を立てたりして挨拶してる。
やがて・・・。

基地司令が号令をかける。

「手空き総員、帽振れ～～～～！！」

基地の整備員等の隊員が出撃機に向かい敬礼と帽子を千切れよと振る。
もちろん旭日旗と日章旗もだ。

「サイト様～～～、頑張ってください。」

「ご主人様、御武運を祈ります。」

「サイト様、生きて帰るんですよ。」

管制塔から出撃ヨシの合図の信号弾が打ち上げられた。
同時に全土に轟けとばかりに響く、軍楽隊の奏でる軍艦マーチ。
海軍はコレだよな♪

「全軍、全力出撃。」

俺の命令で全機出撃開始した。

待ってろ。ウエールズ。

今度は助けてやる。

出撃（後書き）

出撃光景が続きます。

出撃２（前書き）

出撃光景の続きです。

出撃2

（キュルケの部屋です。）

う～～ん・・。
何よ。
せっかくの虚無の日なのに。
朝から煩いわね・・。
ナニ？この爆音・・。
でも最近、学院の男子には少しも微熱が沸かないの♪
だって・・ダーリンみたいな男らしい男性が居ないのですもの♪
でも凄い音ね・・。
まさか・・。
私は慌ててカーテンを開け、窓を開け放つと・・。

ナニ？？コレ・・。
窓の外にはダーリン達の乗る怪鳥が群れを成して飛んでるの。
あんな凄い数の怪鳥が居たの？
ダーリンの基地には・・。

（タバサです。）

・・・煩い・・・・。
虚無の日なのに・・・。
朝は少し静かにして欲しい・・。

でも普通では無い煩ささ・・。
私は窓を開けて見る・・・。
凄い、あんな数の怪鳥が居るの？
・・・・私も固まってしまってた・・・・。

「サイト様、素晴らしい光景ですね。
まさに血沸き肉踊るとはこの事です。
ああ、僕は貴方と知り合えて本当に幸せでした。
こんな凄い作戦に参加出来ただけで、私の人生は上がりですよ。」

「ワルド、まだまだだぞ。
今日は一日飛ぶからな。覚悟しておけ。
一応、この空燕はトイレもある。
キチンと戦場に入る前に済ませておけよ。
チビッたら空から落すぞ。」

「相棒、スゲー光景だな。
相棒も出世したもんだ。
カカカカカ。」

「デルフ。お前の出番もあるかも知れぬ。その時は頼むぞ。」

「アタボーよ。
オレッちは相棒の剣よ♪」

「サイト様、万一の時は僕も護衛になります。
壁にでも使ってください。」

「ワルド、デルフ。お前等がオレの最後の砦だ。
その時は頼むぞ。」

「御意です。」

「任せろって。相棒♪」

眼下には海燕、遥か後方には雷電。
そして空燕の編隊が群れを成してガッチリと大編隊を組んで
一路アルビオンに向けて飛行してるのだ。
男なら痺れて当たり前。
ワルドやデルフが興奮するのも当然だろう。
俺達はトリスティン上空をガッチリと編隊を組み、大空を飛んで往く。

「マザリーニ枢機卿。
サイト様達の怪鳥軍団があんなに沢山・・。」

「殿下、殿下には事後報告となりましたが、彼等はアルビオンを救うために
万難を辞して立ち上がってくれたのです。
彼等がアルビオンを侵略するレコンキスタを壊滅させてくれるでしょう。」

「まあ、本当ですの？
ああ、力になれぬこの私をお許しください。
サイト・ヒラガ様。
そして武運長久を・・。」

トリスタニアでは大騒ぎだった。
今までウワサでしか聞いた事の無いニホンの怪鳥が群れを成して
アルビオンの方向に消えて行くのだから当然だ。

「スゲー。あんな怪鳥見た事無いぞ。」

「アレがウワサに聞いたニホンテイコクの怪鳥軍団か。」

「多分、アルビオンの危機を救いに行くのだろう。
ありがたい事だ。」

「俺達の国って何かしたか？」

「・・・役に立たない貴族が威張ってるだけだよな。」

「チゲーねー♪」

平民は大笑いしてるが、貴族連中は突然の怪鳥軍団の出撃に大いにアセってた。
アルビオンの危機にも駆けつけられぬ腑抜け貴族と街で大笑いされてるのを聞くと余計に・・。

「フヌヌヌヌ。どうして我々には情報が入らなかったのだ。」

「我々の諜報機関はどうなってるのだ。」

「彼の軍団基地に入るのは我々では不可能なのです。
そして近づく事も難しいのですぞ。」

「チ・ク・シ・ョ・～～～～～！！！」

貴族連中は不甲斐ない自分達に血の涙を出し、口惜しがってたがもう遅い。

国内の平民はすべて、貴族よりもニホンテイコクを信頼。

そしてニホンテイコクと対等な交渉の出来る王家を信頼。
貴族の地位は少しづつ地に落ちて行くのである。

出撃2（後書き）

貴族の凋落を画きたいために、どうしても書きたくなりました。
お待たせしましたが、次回から戦闘開始です。

戦闘開始（前書き）

いよいよ戦闘開始です。

戦闘開始

轟々と轟く轟音と共に、我等が航空集団は一路アルビオンを目指してる。

「銀翼連ねて南の前線♪」

オレはつい「ラバウル海軍航空隊」を口ずさんでいた。

やはりこの光景を見てると歌いたくなる・・。

やがて、高度を一万メートルに上げると眼下に白の国、アルビオンが見えて来た。

「まずは迂回して、王都ロンディウム後方からハヴィランド城を通過。

海燕はＡＭＦの稼動が確認出来るまで待機。

確認が出来たら全速力(マッハ)で戦場に突撃。

ナパームをプッ放せ。

ナパーム投下後は周辺を音速で飛べ。

威嚇を続け敵の戦意を削ぐんだ。

雷電部隊はナパーム投下後自由に殲滅作戦を行え。

いいか？」

「「「了解！！」」」

「ヤロウ共、今日は滅法天気がいい。
具合のいいところからおっぱなせ。
敵はウジャウジャ居るから目ん玉をひん剥いて降りて来い。
今日は昼寝する暇はネーぞ。
武装を使い切ったヤツ等は基地に帰還、補充してメシ食って糞したらすぐに出撃だ。
今日は野中一家雷電部隊の花の一日よ。
覚悟はいいか？」

「「「合点承知。」」」

ウン。さすがに野中雷電一家の訓示は聞いてて気持ちいい。
神雷部隊の野中五郎隊長の曾孫、野中三郎大尉だけある。
彼等には口出しする必要も無いな。
自由に任せよう。

「凄まじい気合ですね。彼等は。」

「その位の気概が無いと雷電には乗れないよ。
彼等は竹島海戦では、凄まじい戦いを経験した。
ボロボロになって、それでも這う様な状態でも基地に帰って来た彼等よ。」

「そうですか・・。」

「ワルド、そろそろ戦場に到着するぞ。ションベンは済ませたか？」

「御意です。
ご遠慮無く戦闘に徹してください。サイト様。」

「チビルなよ。」

いきなり轟音が轟いたと思うと、
彼等は翼を振りながらレコンキスタの本陣へと突入が始まった。
僕は永劫にあの戦いを忘れる事は無いだろう。
ウエールズ・デューダーの生涯が続く限り、
我が友、サイト・ヒラガの雄姿を忘れる事は無い。

「いよいよ突入だ。
空燕部隊、各自指定空域に留まり、ＡＭＦ（アンチマギフィールド）装置を発動。
戦闘終了までは何としても留まれ。
護衛の海燕は受け持ち空域からは絶対に離れるな。
空燕を撃墜されたら生かして帰さないぞ。」

「了解です。」

「野中雷電部隊は、突入開始の命令が下るまでロンディウム上空で待機。
突撃命令が下ったら、野中隊長の自由攻撃命令に従え。」

「合点承知。」

「空燕隊、ＡＭＦ発動！！」

余の名はオリヴァー・クロムウエル。
レコンキスタの総帥を務める僧侶だ。
既にアルビオン王家の落城は確実と思えるまでに、余の軍団は勝ち進んでた。
あの忌まわしい怪鳥が飛来するまでは。

戦闘開始（後書き）

熱闘が始まります。
文中の野中五郎隊長は実在した人物です。海軍士官で一番好きな人なので、
架空人物の三郎として書きました。

また文中の野中隊長の言動は実際に野中五郎が戦闘前の訓示で喋ってた事を変更して書きました。
野中四郎と言う方も実在しました。２２６事件の首謀者の一人として刑を受け獄に消えましたが、彼は五郎氏の実の兄です。
野中三郎は架空ですので。
もし実在したらお許し下さい。
投下爆弾は当初、Ｎ２の予定でしたが、アレではアルビオン大陸自体がヤバくなります。
ですのでナパームに変更しました。
アレなら人間には甚大な被害でも大陸は無事ですから。

激戦（前書き）

激戦です。

激戦

私はレコンキスタ攻撃指揮官のホーキンスだ。
今日はアルビオン王の居城、
ハヴィランドを攻め落とせる日・・になるハズだった。
あの忌々しい怪鳥軍団が飛来するまでは。
我々の魔法がすべて使えなくなったのは、あの怪鳥が飛来してからだ。
あの瞬間までは、我々の勝利は約束されてた。
幼児でも、我々の勝ちは信じただろう。
それが・・。
いきなり兵士がバタバタと倒れたと思うと動かなくなり、
指揮下にあったメイジが突然、指揮を離れ城に向かって走り出す。
飛竜騎士は飛竜が暴れ出し振り落とされてしまう。
あげくにはすべての魔法が一切使えなくなり、我々は大混乱となった。
もう何がどうなったのか私でも理解が出来なくなり、

クロムウエル殿に伝令を頼もう、

そう、考えた瞬間。

私の意識はすべて無くなり、無となったのだ・・。

「コチラ平賀総司令。
ＡＭＦ装置の発動完了。

敵の兵士は混乱に陥ってる。
城に逃げ込むメイジには手を出すな。
ヤツ等は城の兵士に任せろ。
死体兵士は躯に帰った。
海燕隊、全軍音速で突撃。
ナパーム爆弾を敵の中枢に投下せよ。

「「「了解！！」」」

言うが早いか、ヤツ等はバンクをし各自決められた戦場に突入。
マッハの速度で低空に侵入。
ソニックブームで周囲の兵士がゴミみたいに吹き飛ぶ。

ナパームを投下。
可愛そうだが、敵には情け容赦は出来ぬ。

各地で白い閃光と爆風が広がってる。
下の連中はどんな光景を見てるのだろう？
やがて爆風が収まると、生き残ってるヤツ等がフラフラと立ち上がるのが見受けられた。
態勢を整えられたら不味い。
次の雷電部隊の出番だ。

「ナパーム攻撃の効果甚大なり。
ただちに雷電部隊は残敵を掃射せよ。
武装を使い切った連中は基地に帰還。
武装搭載、燃料を補充し体調を整えて再出撃だ。」

「オイ。
オメー等。いよいよ出陣だ。

ゴタゴタは言わねー。
どんな小さな目標でも見逃すな。
竹島の苦戦を思い出せ。
分かったな？」

「「「合点承知。」」」

「かかれ～～～～！！」

ココでヤツ等の戦意をさらに鼓舞しないと。
オレは準備してたある動画をセット。
ＡＭＦを停止し、他の機に指揮を移管。
音量を最大限にし、雷電部隊全軍に届けとばかりにある動画を投影始めた。

（ニコ動で「生還飛行」と検索してね。それです。）

「オイ、コレって・・。」

「ああ、まさに俺達の歌だぞ。」

「総指揮官は俺達の気持ちを理解してるな。」

「コレで下手なドンパチは出来めー。
ヤロウ共、敵を一人も逃がすな！！！」

「「「オォォォォォォォ！！！」」」

その頃、ハヴィランドで一人の男がその投影動画を見てパニックに

なってた。

「ガ、ガーデルマン。ガーデルマンは居るか？」

「ルーデル。どうした？」

「あの映画を見ろ。アレは・・。」

「おぉぉぉ。まさに我がドイツ帝国で報道してたニュース映画では無いか？」

「それも我々だぞ。アレは。
見ろ、あのカノーネンンフォーゲルを。
オレの仕留めた敵戦車だ。アレは。」

そう、併行世界のハンス・ウルリッヒ・ルーデルが後部機銃手のガーデルマンと共に、
アルビオンに不時着してたのだ。
彼は大破したカノーネンンフォーゲルから助け出され、今日まで意識不明だったのだ。
ガーデルマンのケガは軽かったのだが。
その彼がサイトの投影した動画で意識を取り戻し、そして・・。

「見ろ。あの地上攻撃機を。オレはアレに乗りたい。
ガーデルマン。今すぐ出撃だ！！」

「待て。ルーデル。どうやって出撃するのだ？」

「もちろんカノーネンンフォーゲルでだ。」

「アレを見て、その言葉が言えるか？」
彼の愛機は無残にもバラバラであったのだ。
「・・・・。口惜しい。敵は目の前に山と居るのに。
戦えぬ、この身が口惜しい。」
後にサイトと合流したルーデルは野中隊長と共にＡ１０雷電部隊を
率いる事になるのだが。

「うわぁぁぁっ。助けてくれ。やっと爆風から逃れられたと思ったら。
悪魔が来たぁぁぁっ。」
各地で平民兵士やメイジの悲鳴が響く。
その悲鳴を・・。

Ａ１０雷電は超低空を這う様に飛び、敵を認めると情け容赦ないガトリング掃射を行う。
四方八方から敵を攻撃。
それでも生き残りが居ると、さらに別のＡ１０が加わる。
武器を使い果たした雷電はただちに基地に帰還。
武装搭載、食事とンコを済ませ、ただちに出撃。
今日を逃せば当分は戦闘も無いのだ。
地上では多くのレコンキスタのメイジや平民兵士が躯となってたが。
周囲では海燕が全速で周回飛行を続け、逃げようとする敵兵を威嚇。
燃料が尽きかけると基地に帰還、再出撃。

やがて夕暮れ。

「どこにも敵の姿は見えない。
すべてが静かに、まるで死んだように見える。」

すべてのパイロットの共通した意見だろう。
眼下には草木一本。そして生き物の息吹も感じられない死の土地となってたのだ。

「敵の殲滅完了。
陸軍のヘリボーン部隊、直ちに降下しオリヴァークロムウエルの躯を探せ。
重大な魔法の指輪を所持してるぞ。」

そう命令を下すと奈良滋野空挺団のヘリボーン部隊が着陸。展開。
クロムウエルの躯の捜索にかかった。

待つ事十分・・。

「平賀総指揮官。クロムウエルと思しき僧侶の遺骸を発見。怪しい指輪を嵌めていましたので、外して保管しました。」

「クロムウエルの遺骸の写真を詳細に撮影せよ。残りは残敵の生き残りは居ないか、捜索。居ない場合は撤収にかかれ。指輪を外した部隊はハヴィランド城に向かえ。オレもハヴィランドに向かう。護衛の海燕を数機残し、残りは撤収せよ。作戦は無事完了した。我々の完全勝利だ。皆、ご苦労だった。」

「「「「「「了解。」」」」」」

「今日は酒保はすべて解放だ。残ってる酒はすべて飲んでいいぞ。皆。双月までブッ飛ぶ位飲め。」

「「「「「「「「「ヒャッホーーー♪」」」」」」」」」

雷電も海燕の空燕もすべて一機も失う事無く、無事に作戦を終えた。まさに「完全勝利」だった。

オレはウエールズ達、アルビオン王家の面々と面会するため、ハヴィランドに向かった。

激戦（後書き）

ウエールズとルーデルに会います。

「どこにも敵の姿は見えない。すべてが静かに、まるで死んだように見える。」

は、ルーデル閣下がロ助を殲滅した時に呟いた名セリフです。

出会い（前書き）

ウエールズ、ルーデルとの出会いです。

出会い

凄まじい戦闘だった。

我々が戦っていた戦闘とは次元が違う戦闘だ。

アレがニホンテイコクの怪鳥軍団の実力か・・。

敵に同情したくなる位凄まじい戦闘が終わると・・・。
敵の生き残りは皆無だと聞いた。
アレでは無理も無い。
生きてる方が奇跡だろう。
やがて彼等は怪鳥を駆っていずこかへと消えて行った。
だが、その中の数羽が我々の居城に着陸して来たのだ。
彼等が指揮官だろうか？

「アルビオン王国の王、
ジェームズ一世殿とウエールズ王子に面会を願いたい。」

「これは・・。
今回の戦闘、誠に見事でした。
王も御待ちです。さっ、こちらへ。
異国の勇者様。」

オレは名前も聞かれずに城の衛兵に案内された。
もちろん、ワルドも護衛の兵士も同行だ。

「異国の勇者様。
本日の戦闘、本当に見事でした。
我がアルビオン王家は本来なら滅び行く王家。
それが貴方達の助けで救われました。
誠にありがとうございました。
私はアルビオン王、ジェームズ一世でございます。」

「異国の勇者様。僕はウエールズ・デューダーです。
本日の戦闘、本当に見事でした。」

「ジェームズ一世殿、ウエールズ・デューダー殿。
ご挨拶が遅れ、誠に申し訳ございません。
日本帝國海軍航空隊トリスティン基地司令、サイト・ヒラガ少将です。
宜しくお願いします。」

彼等に戦闘の経過を話し、ギアスを解かれ城に逃げ帰れたメイジの事。
殲滅した戦死者の処理。
戦場の復興などについて詳しく話合った。
レコンキスタが壊滅した事で、革命派に付いてた平民も王党派に戻り、
やがて復興にも手を貸すだろうとの事。

その後、彼等や城の兵士、メイジとの戦勝祝賀会が始まった。

城の兵士は我々の戦いを見てて、あれぞ殲滅と感動してたみたいだ。
我々にして見たら、目撃した敵は一人も生かしておかぬ・・。
その気持ちだけだったのだが。

まあ良い。
闘いは終わった。今は、戦勝の酒に酔おう。
そうして彼等と楽しんでたら・・。

そこに・・・。
居たのだ。
雷電部隊が神と崇める彼が・・。

（ファンタジー世界のせいか、ドイツ語も日本語も翻訳ナシで話が出来ます。）

「君は本日の戦闘指揮官かね?」

「ハイ。そうですが・・。サイト・ヒラガと言います。」

「おお、もしや同盟国、ヤーパンの海軍か?」

「そう・・ですが。（ヤーパンってドイツの呼び方だよな?）」

「俺はルフトヴァッフェ所属、ハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐だ。
隣に居るのは機銃手のガーデルマン。」

「うぉっ、ほ、本当ですか?独逸空軍のルーデル大佐ですか?」

「ウム。その通りだ。俺は赤軍を攻撃中に被弾、大破した我がカノーネンフォーゲルを
操り、何とか不時着したのだが機は大破。失神して本日まで意識不明だったのだ。」

「また、かなりなムチャな戦闘をされてたのでしょう。ルーデル大佐。」

「・・・否定は出来ぬ。
この世界が我々が戦ってた世界とは違う事も理解出来た。
魔法を使ってるからな・・。
おかげで母国に帰る術も無く、ガーデルマンと相談してたのだ。
貴殿の航空隊で使ってたあの地上攻撃機は俺の理想の攻撃機だ。
ロ助のシュトルモビクよりも頑丈な機体、そして我がカノーネンフォーゲルよりも
強力な破壊力のガン。
すべてが私の理想だ。
出来れば乗せて欲しいのだ。
ムリか？」

「ルーデル大佐。
我が日本帝國海軍のアドバイサーとして任官して頂けるなら喜んでお願いします。
隊員も貴方を信望してる連中が多数居ります。
是非、我が基地に来てください。」

何とルーデル大佐が居たのだ。
多分、併行世界の主だろうが、彼本人には間違いない。
雷電部隊の連中は大喜びするだろう。
オレは本日の戦闘の疲れも忘れ、ウエールズやワルドと肩を組み、
飲み明かしてた。
ルーデルもモチロン参加。
さすが、連合軍に対しても物怖じしないと言う伝説の神だ。

出会い（後書き）

ようやく戦闘も終わりました。
ルーデルは雷電部隊のアドバイサーとして任官します。

帰国（前書き）

いよいよ撤収です。

帰国

翌日・・。
俺達はルーデル大佐とガーデルマン大尉を連れて帰国する事にした。

「サイト様、本当に今回はありがとうございました。
戦後処理は我々が完璧にしておきます。
また、ご希望の基地設置ですが、我が居城の横に充分な広さを確保。
整地しておきますので、ご安心ください。
彼の怪鳥の残骸はキチンと保存しておきます。」

そう・・。
雷電部隊をアルビオンに駐留させる事が確定したのだ。
鈍足の雷電だが耐久性はバツグン。
高度二千メートルを周回してるアルビオンに駐留出来ると言う事は、
出撃する際、どこにでも即座に駆けつける事が可能となるのだ。
基地にはルーデル大佐の愛機を復元、展示する事も確定した。
ヤツ等は大喜びだろうな・・。

「ウエールズ殿。本国からも設営隊員や資材が多数送られてくる。
付近の住民と揉めぬ様にしてくれ。
それと・・レコンキスタの罪状は全ハルケギニアにクロムウエルの
写真を模写して
通達しろ。ヤツは虚無では無かった。
タダのドロボウ僧侶だったとな。」

「お任せください。
ココまで証拠が揃ってたら確実にブリミル教の地位も落ちるでしょ
う。

まさかブリミル教の僧侶がラグドリアン湖の秘宝を盗んで虚無を偽ってたのですから。」

「頼む。
では、ルーデル大佐、ガーデルマン、ワルド。そろそろ帰るぞ。」

「司令、凱旋ですな♪」

「ウン。今宵は俺達も基地で騒ごう♪」

「何時でもアルビオンにお越しください。サイト様。」

「ウエールズ殿。俺達は友達だろ?サイトと呼び捨てにしてくれ。」

「分かった。我が友、サイト。
僕もウエールズと呼び捨てにしてくれ。
また会おう。」

「ウン。ウエールズ。元気でな。」

ガッチリと握手を交し、俺達は各自の機に搭乗。
ルーデルとガーデルマンはジェット推進に驚いてたが。
やがて垂直離陸。
速度が乗った所で編隊を組み、ハヴィランド上空で編隊アクロバットを披露。
城の兵士や王、ウエールズは大喜びしたみたいだ。
翼を振り俺達はトリスティンに向かった。

「サイト様、無事に終わりましたね。」

「ウム。ワルド、お前のおかげだ。
どうだ？さすがにパイロットはムリかも知れないが、
俺の護衛として俺に仕えないか？」

「本当ですか？さすがにパイロットになるのはムリと自分でも思いましたが、
もうこの基地からは離れたく無いと言うのが本音でした。
お願いします。僕を・・。」

「俺からも頼む。ワルド。俺に付いて来い。」

「御意です。我が主、サイト・ヒラガ様。」

「オイ、相棒。
俺様も忘れるなよ。」

「デルフを忘れるもんか。お前は俺の大事な左手だ。」

「おおよ。相棒。俺様はお前の左手だ。
今度は墓まで連れて行けよ。
もう他人の手には渡りたくネエ。」

「俺が死ぬ時は、墓に一緒に入ろうぜ。」

「ワハハハ。相棒と地獄巡りも楽しいかもな。」

「ヒラガ司令。我等にも愛機を与えてくれますよね？」

「モチロンです。
Ａ１０雷電はルーデル大佐が戦後、意見を入れて作った名機です。

単座ですから、複座に改造し、大佐にお任せします。
もちろんナビはガーデルマン大尉ですよ♪」

「ありがたい。感謝する。」

デルフ、ワルド、ルーデル大佐達とバカ騒ぎしながら、俺達はトリスティンへと帰って行く。

トリスティンに待つ彼女達を思い浮かべながら・・。

帰国（後書き）

次回は凱旋です。

凱旋（前書き）

無事に帰りました。

凱旋

シエスタです。

昨日はサイト様はお帰りになりませんでした。
他の方に聞くと、今宵はアルビオン泊まりだとか。
戦後処理もあるみたいですので、仕方ないですわよね・・。
でも御無事で安心しました。
万一の事がありましたら、どうしようと思いましたわ。
もう彼以外に仕える気持ちはございません。エエ。
テファも同じです。
それにしても昨日は凄い騒ぎでした。
完璧な勝利だったとかで、一人の戦死者も出なかったそうです。
嬉しい事ですわ。

「ワルド、ルーデル大佐、ガーデルマン。
もうすぐトリスティン海軍基地だ。
何時もは禁止してるが、今日は派手にやるぞ。」

「へ??何をされるのですか?」

「ヒラガ司令、アレをやる気ですね♪」

「さすがルーデル大佐。そうです。
ビクトリーターンです。

列機、聞いてるな？」

「ハイ♪総司令。
ガッチリと編隊を組んで基地の連中の度肝を抜きましょう♪」

「ワルド、ベルトはガッチリ締めておけよ。
ついでに吐くな？」

「僕も風のメイジ。いかな機動にも耐えて見せます。」

戦時中なら禁止してたが、もう戦後だ。
一回位は派手にビクトリーターンをして見たいのが男だろ？

「カカカ、相棒、怒られない様にしろよ。」

「オレを怒るヤツが・・・居たな。気をつけるよ・・。」

「シエスタ。
連絡が入ってサイト様達がもうすぐ帰られます。
私達も滑走路で彼等を出迎えましょう。」

「本当ですか？マチルダさん。
テファ。

もう掃除はいいわ。サイト様をお迎えしましょう。」

そこへ・・。

「姫、アンリエッタ姫ではありませんか。」

「ああ、貴女達、サイト様は？」

「もうすぐ到着です。滑走路に出迎えに行く所ですわ。」

「本当？
マザリーニ。間に合いましたわ。
早速、私達も英雄を迎えに行きます。
花束の用意は出来てるわね？」

「モチロンです。妃殿下。」

まさか・・アンリエッタ王女まで・・サイト様を？？？
テファだけならまだしも・・・。
私は一抹の不安を抱えつつも、サイト様の帰りを御待ちしてました。
そこへ・・。

ドゴォォォォ～～～と言う轟音と共にサイト様の乗られた航空機が
滑走路間近を通過。
酷いでは無いですか。
私達のスカートが捲くれたではありませんか。
後で締めましょう。プンプン。

「オイ、ワルド。
滑走路に王女が居たぞ。何で居るんだ？」

「恐らく英雄の帰還を出迎えるためでしょう。
それにしてもサイト様、後で怒られます。
彼女達のお召し物がメチャクチャでした。」

「ア・ハ・ハ・ハ・・・。
覚悟しておこう・・。
いいか。ブレークする前に基地上空で三回のビクトリーターンだ。
基地に落ちるなよ。
笑いものにするからな。」

「そんなヘマは護衛隊には一人も居ません。」

「ヨシ、では連続三回だ。」

やがて俺達は基地上空で見事なループ（宙返り）を三回連続。
再度基地をフライパスして解散、着陸。

「ふー。無事帰れたな。
ワルド・・。大丈夫か？」

「・・・すいません。先に降ります・・。」

ワルドめ。さすがに胃に来たな。トイレに駆け込んでいるぞ。

機から降りると、アンリエッタ王女、
マザリーニ、シエスタ、マチルダ、テファが出迎えてくれた。

「サイト様、凱旋おめでとうございます。
そしてアルビオンを救って頂きありがとうございました。」

「サイト様、本当に心の底から感謝しております。
ありがとうございました。」

アンリエッタから花束を受け取ると・・。

「サイト様、本当にありがとうございました。
私にはこんな事しか・・出来ませんが・・。」

と、言うが早いか・・・。
唇を奪われたのだ。
何時、彼女にフラグを立てた??
ウエールズはどうするの??
アンリエッタさん・・。

シエスタやテファが一瞬固まった後、俺に襲い掛かり、
二人からも唇を奪われてしまってた。
ワルドや基地の連中も大笑いして見てる。
早く助けてぇぇぇ。。

「カカカカ。相棒。良かったね♪」

雷電部隊の連中は神の降臨に驚愕の嵐だった。

「本モノのルーデル閣下だ。」

「我等が神だ。」

「本当に会えるとは・・。さすがファンタジーの世界。」

「今夜も飲むどぉぉぉぉ。」

「アルビオンにはカノーネンフォーゲルの残骸もあるそうだぞ。」

「俺達の基地もアルビオンに移住だ。」

もう阿鼻叫喚とはこの事だ。
他国の軍人にも関わらず、戦前の御真影なみの扱いでルーデルの写真を掲げ、
朝夕に拍手を打つ彼等だ。
興奮するのも仕方ない。

「「「「閣下、宜しくお願いします。」」」」

「閣下、赤退治の話を今宵は聞かせて下さい。
酒ならタンマリと掠めました。」

「フム・・良い。
楽しみにしておけ。君たちも赤が嫌いかね？」

「「「「モチロンです。北方領土奪還作戦では赤軍の戦車をすべて潰しました。
閣下の著書も全部読みました。」」」」

「そうか。俺も赤は嫌いだ。
ヤツ等は我々の地上軍を撃破してくれた憎き敵。
今も変わらないのだね。
ま、そんなことはどうでもいい。
身体を洗わせてもらいたい。それから何か食べ物が欲しい。」

「「「「おお、神の名セリフ、キタ――――（＊。∀）（∀。＊）――――!!!!!!!!」」」」

「ああ、君が隊長かね？私がルーデルだ。
宜しく頼む・・・・・。
ム・・お前、ゴロウでは？？」

「五郎と言いますと？」

「ゴロウ・ノナカだろ？」

「野中五郎は私の曽祖父です。神雷攻撃隊として沖縄で戦死しました。」

「ゴロウは散ったのか・・。
独逸に武官として来てオレとは無二の親友となってたのに。」

「そうでしたか。私も曽祖父の事は文献や親族から聞いた程度です。
豪遊な男だったとか・・。」

「ウン。素晴らしく楽しい男だった。彼も淡々と任務をこなす素晴らしい軍人だった。
オレも日本人には偏見があったが、彼程の男は独逸にも居ない。
惜しい男を亡くしたもんだ。」

「そう言って頂けると曽祖父も喜ぶでしょう。」

ルーデルと野中五郎が親交があったとは知らなかった。
だが併行世界の事だ。ありえない話でも無かろう。
世界は広い。

こうして俺達のアルビオン進行作戦は無事終わった。

凱旋（後書き）

基地上空でビクトリーターンをして亡くなったパイロットはかなり居ます。
特に若いパイロット程ムチャしますので。
野中五郎とルーデルの親交は架空の話です。
アンリエッタフラグ、どうしましょう？
野中三郎は五郎に生き写しと言う設定です。
野中五郎は暴勇とか言うイメージが強い方ですが、お茶も嗜む和の人でもありました。

閑話2（前書き）

イケメン氏ネの皆様。お待たせしました。
ジュリオ君を生贄にします。

閑話2

イケメンとしてロマリア随一の美貌を誇ってたある使い魔の話です。

「腹減った・・・。」

僕の名はジュリオ。
ヴィットーリオ様の使い魔をしてた・・のだが。
異界にロマリアだけが飛ばされてしまい、ご主人様の魔法も発動出来なくなってしまわれた。
僕の使い魔の能力も当然ダメ。
終いには異界の蛮族が武器を持って押しかけてしまい、もう誰がどこに消えてしまわれたか。
僕も分からない。
僕は持ち前の若さで、ヤツ等から何とか逃げ延び、今はロマリアの火山近くの森で生き延びてる。
だが、、何も食べ物が無いのだ。
このままでは僕も明日は・・・。
そう思ってたある日の事だ。

「ロマリアの諸君。もう安心しろ。
君たちを侵略してた悪い蛮族は追い払った。
安心したまえ。」

「どこかの国が介入したのか？
確かあの旗は・・アメリカと言う国では無かったか？」

アメリカか。
ヴィットーリオ様の虚無が使えた頃、あの世界の覗き穴から見た事があるが。
ニホン以上の大国だったな・・。
あの国ならば、少なくともメシ位は食わせてくれるだろう。
今の現状から逃げるには強い味方に縋るしか無い。
僕は決意すると、山を降り保護を願い出た。

「ロマリアのヴィットーリオ様に仕えてたジュリオ・チェザーレと申します。」

「君がジュリオ君かね？私達はアメリカ合衆国から派遣されたアメリカ海軍のモノだ。
今回は君達の救助が遅れて申し訳無かった。
ヤツ等はすべてこの大陸から叩き出した。
誠に済まないが、この国は我がアメリカ合衆国、第５１番目の州となる。
君もアメリカ合衆国の国民として生きて貰う事になる。」

何と・・このロマリアもアメリカの州と言う国に組み込まれるのか。
だがそれでも良いだろう。
この異界では、自分達の力も経験も一厘の役にも立たないのだから。

「他のロマリア教皇関係者の方は？」

「スマン、一足遅かった。
すべてシベリアと言う極寒の国に送られたか、死亡されたみたいだ。

」

「・・そうですか。分かりました。
所で自分はどう生きたら宜しいのですか？異界からこの世界に放り出され、
悪夢の中で生きて参りましたので、正直どう生きるのか。
戸惑っております。」

「ムリも無い。
・・・フム。
君ってかなりのハンサムだね。
もし差し支え無かったら私達の国の施設で勤めてくれないか？」

「へ？？顔で勤まる仕事でも？」

「その通り。我々の世界では色んなストレスに悩まされる女性も多数居るのだよ。
彼女達の良き相談相手を探してたのだ。
ジュリオ君。君のその顔を生かして働いてくれないか？
もちろん報酬はキッチリと約束する。」

「・・そうですか。でも考える必要も無いです。
自分は死ぬ思いをして今まで生きて来ました。
ですので、それを思えば、もう地獄なんて無いのです。
頑張ります。」

「おお、そうか。では頼むぞ♪」

ジュリオは何も考えずに答えたが、彼の人生はさらに地獄逝きとなったのだ。

「ジュリオちゃん。今日もカワイイわね。
オバチャンとタップリと頑張りましょう♪」

（（イヤだぁぁぁ。何でオバハンと寝ないといけないんだぁぁぁっ）
）
（彼の心の声です。）

「マダム、今日も美しいですね。（オエッ）」

ジュリオはアメリカ陸海軍の士官女性の性の捌け口として雇われて
しまったのです。
彼の人生に幸あれ♪

閑話2（後書き）

ロマリアはアメリカに組み込まれます。
ジュリオの事ですので、逞しく生きるでしょ♪
次回から本編となります。

日本へ・・。（前書き）

平和なひと時です。

日本へ・・。

アルビオン進行作戦も無事に終了した。
アルビオンの王都周辺が焼け野原となってしまったが、戦場の常。
納得して貰うしか無い。
日本からはアルビオンに大量の資材と人員が送り込まれ、復興に頑張ってる。
雷電部隊も基地の設営が完了すると共にアルビオンに移設した。
ルーデル少将と野中少将（二人とも昇進しました。）が司令、副指令となり、
雷電部隊の訓練に励んでる。
アルビオンからも風石が出荷され、本国の風石発電、宇宙開発に一役買ってる。
時間はかかるだろうが、素晴らしい国となるだろう。
新生アルビオン王国は。

しかし・・・俺個人は・・・。
大変な事になってしまってる。

「サイト様、貴方もやはり高貴な方が好きなのですね?」

「サイト様、胸が好きならいくらでも私のを触ってください。」

「・・・二人とも・・。どうして・・・・。」

「「私達は貴方様のメイドでもありますが、貴方をお慕いしているのです。」」

「・・・・マチルダ・・・助けて・・・・。」

「ムリ♪　頑張ってください。サイト様。」

「・・・・・・・・。」

「カカカカカ。相棒。
人の恋路は見てて楽しいモンだねぇぇ。」

「チクショー。お前も何とかしてくれよ。」

「オレ様は無機物の剣だぜ。人様の恋路の邪魔は出来ません♪」

「相棒だろうが・・。」

「ワハハハハ。頑張れ、相棒。」

「「サイト様!!!!」」

アンリエッタがオレを押し倒した事件が起きて、
オレは二人のメイドからも慕われてしまってた。
セクハラした記憶も無いのに。
どうしてこうなった・・・。

「姫、どうしてあの様な事を。」

「アラ♪マザリーニもサイト様と色々と影で仲良くしてるのでしょ？私もサイト様と親しくしたいのですわ♪♪」

「それでも王族の貴女が他国の方を・・。」

「彼のお父様にも挨拶しませんとね♪♪」

「殿下！！！」

姫はどうもサイト殿を慕われてしまった様だ。
ウエールズ殿を慕ってるとばかり思ってたのに。
しかしあのアルビオンの戦いは凄まじい戦だったらしい。
伝え聞く所に拠ると、敵の生き残りはクロムウエルの詐欺虚無の支配を解かれ、
逃げ延びて投降出来たメイジ以外は壊滅だったらしい。
アルビオンの話では「アルビオンの悪魔」と彼等は呼ばれてるとか。
アルビオンの王都は焼け野原となってしまったが、今はニホンから多量の復興支援が始まり、
新しい街になれそうだとか。
我がトリスタニアも街が綺麗になりつつあるが、もう少し何とかしたいモンです。

「シエスタ、テファ、マチルダ、ワルド。
今回の作戦の支援。

本当にありがとう。おかげで無事に作戦も終わった。
しばらくは平穏と思うから、一度日本に帰る予定だが、
もし良かったら一緒に来ないか？」

「サイト様、私だけニホンには一度も渡来した事が無いのですよ。
是非、連れて行ってください。」

「僕もニホンテイコクは話と本でしか知りません。お願いします。」

「ああ、またあの美味しい食べ物と綺麗な服の街に行けますのね。」

「お姉様、貯めてたお小遣いを使い果たす時ですよ♪」

「・・・そうか・・。じゃ全員参加ね？」

「「「「モチロンです♪」」」」

そこへ・・。

「サイト様、是非、私も連れて行ってください。」

「殿下・・。」

「親愛なるニホンテイコクの王にも一度お会いしたいのですわ。
宜しいですわね？
サイト様♪」

「しかし護衛とかどうされるのです？」

「一人だけ連れて行きますわ♪
それにサイト様のお国ですの。不安は要りませんわ♪」

「サイト・ヒラガ様、始めまして。
アンリエッタ殿下の側近と護衛を勤めます、トリスティン銃士隊隊長、
アニエス・シュヴァリエ・ド・ミランと申します。
宜しくお願いします。」

「・・・・・分かりました。でもマザリーニ枢機卿は承知なのですか？」

「あら♪マザリーニ殿とサイト様はお友達でしょ？
でしたら私もお友達になりたいのですわ♪♪」

（うわっ、ヤバいよ。
完全に彼女のフラグが立ってる。どうしよう・・。）

隣のテファやシエスタは完璧に怒って、オレの脛をゲシゲシと影で蹴りまくってる。
頼みます。アンリエッタさん。
あまり彼女達を怒らせないで・・。

こうして俺達は日本にアンリエッタ・・も・・。
招待する事が確定してしまったのだ。
頭が痛い・・・。

日本へ・・。（後書き）

アンリエッタフラグはヤヴァいです。
サイトがどうするか・・。
流れに任せるか。
楽しみに見ててください。
アンリエッタの暴走も続きます。

日本へ・・・2（前書き）

いよいよ帰国です。

日本へ・・。2

そう言えばタバサのオカン。
オヤジから精神医の権威の先生とコンタクトが取れたと連絡があったのだ。
どうするべ。
ジョセフに隠れてタバサオカンを連れ出せるもんか？

（サイトきゅんよ。その時のためのリーヴスラシルだろ？）

ネ申様、あまり使いたくないのですよね。
前世のヤツの記憶もあるのですから。

（あるモノは使うべきよ。
マチルダも言ってたでしょ？魔法は道具の一つ。
道具と思えば良いでは無いの？）

まぁ・・・そうですけどね。
何かヤツの手の平で遊ばれてる様でイヤなんですわい。

（フム・・。
我侭なヤツよの。んじゃワシからサービスするわい。）

どうするんですか？

（タバサオカンをワシが転移してやる。
そうしたら問題ナシじゃろ？）

・・そうですね。
異常現象ですから仕方ない事ですね。

（んじゃタバサにはオヌシから説明しとけよ。ついでにオトンにもな。）

分かりやした。ネ申様。お手数かけます・・。

（んじゃ連絡が終わったら転移しとくぞ。バイバイキ～～ン。）

あんがとです。ネ申様・・。

さって・・タバサに話を通しておくか・・。

「タバサ、例の話なんだが、時間は取れるか？」

「・・・問題ない。私の部屋に来てくれる？」

「ん。じゃ邪魔するぞ。」

コクリとタバサが頷くのでタバサの部屋を訪ねる事にした。
しかし前世同様・・本だらけだね。

「タバサ、医師は見つかった。」

「本当？」

「ああ、ウソをお前に言ってどうすんの?そこでだ・・。」

タバサにある魔術でオカンを日本に転移する。
忽然と消えるから騒ぎになると思う。
お前が巻き込まれる可能性も高いので、しばらく日本に滞在しろと告げる。

「・・・問題ない。
お母様が治るなら、私はどこでも行く。」

「そうか・・。じゃオスマンにはしばらくしてから休学すると告げておくぞ。」

タバサはコクリと頷き、夜中、俺達の基地に移動し、
そのまま日本に旅立たせた。
オカンは安全に移転させたからと教えてあげたけどね。

それから数日・・。

「皆、
いよいよ日本に行くぞ。着替えは向こうで準備しておくから荷物は持たなくてヨシ。」

「「「「「「は〜〜〜い♪」」」」」」

「飛行中には絶対に魔法は使うな。
機械が壊れたら墜落するぞ。」

「御意です。皆様、杖をサイト様に差し出してください。」

ワルドは最近、本当に使える男になったな。
機械にも詳しくなり、その内にパイロットになれるかも知れない。
雷電なら割合操縦も簡単だから、乗せてやりたいな・・。

では、そろそろ乗るか・・。

「待ってぇぇ。
私も連れて行ってぇぇぇ。」

誰??

「ダーリン、私もニホンに遊びに行きたいわ。お願い。
大人しくするから連れて行って♪」

「・・・分かった。
その前に杖は預けろ。日本では魔法は禁止するからな。」

「あら?そんな事でいいの?モチロンよ♪」

キュルケは杖を素直に預けてくれたのだ。

ちなみにアンリエッタはアニエスと共に操縦席のすぐ後ろの別室に入ってもらってた。
ナンボ何でも王族と一緒に乗せられないのだ。

さて、そろそろ離陸するか・・。

俺達を乗せた空燕は一路日本まで飛び立ったのだ・・。

胃が痛くなる旅だろうな・・。

日本へ・・。2（後書き）

タバサオカンはネ申様にお願いしましました。
文字通りのネ申隠しです。
次回は日本です。

おいでやす♪（前書き）

日本に着きました。

おいでやす♪

トリスティン海軍基地を離陸し、俺達は巡航速度六百キロにて高度一万メートルを飛行してる。

「サイト様、本当に素晴らしい乗り味ですね。このヒコーキと言う乗り物は。」

「姫、今が戦闘で無いからですよ。戦闘中はこの航空機の中は地獄です。」

「・・・そうですわね。確かに凄い凄惨な戦闘だったと聞きます。ご苦労様でした。」

「サイト殿、凄まじい戦闘があったのですね。」

「アニエスさん。あまり人には話したくないのですよ。いかに戦いとは言え、私達も彼等の生命を奪いました。その事実は変わりません。情け無用で彼等を虐殺する命令を出したのはオレですしね。」

「・・やはり、命令を出すと辛いですか?」

「そりゃーね。自分が全責任を背負う事になります。彼等の命も戦闘員の命も責任を背負うのですから。最高指揮官よりは最前線で戦う兵士が気楽です。」

「サイト様、素晴らしい話を聞かせて頂きました。私も王女として、民の命を守れる様に頑張ります。ですので、色々とご指導をお願い

します。」

「マザリーニさんも居ますよ？アンリエッタ殿下。」

「・・・・・・・・・・。」

ヲイヲイ、このアマ、思いっ切りスルーしやがったぞ。マザリーニを。

ま、いいか・・・。

巡航で飛ぶ事、約二時間。

俺達は無事羽田海軍航空隊に到着。

まずは他の連中から降りて貰わないと・・。

「オイ、皆、今から送迎バスと言う馬車が来るから全員それに乗れ。まずはホテルと言う宿に案内する。」

「「「「ハーーイ。」」」」

「勝手に出歩くな。オレの用事が終わったらホテルに向かう。それまでは案内人の指示に従ってくれ。」

「「「「ハーーーーイ。」」」」

オレは案内の兵士に彼等の接待を頼み、

アニエスとアンリエッタをリムジンカーに案内した。

「殿下、今からオレのオヤジ。

この国の最高指導者のハヤト・ヒラガ大統領に面会して貰います。

アニエスさん。護衛は完璧にしますので、武器は我々に預けてください。
この国では他国の方が武器を所持してるだけで捕縛されてしまいます。」

「分かった。では帰国の日までサイト殿に確かに預ける。」

そう言うとアニエスはすべての武器をオレに預けてくれた。

「殿下、ではあの車に乗ってください。オレも同席しますので。」

「マッ♪サイト様もご一緒ですね♪」

「・・・その通りです。車は国でも最高級の車です。
飲み物も自由に飲めますしテレビもあります。
退屈はしないと思いますよ。」

「まぁ、車で飲み物も飲めるのですか？」

「ハイ。冷たい飲み物も温かい飲み物でもです。」

「楽しみだわ♪ネ？アニエス。」

「エエ。殿下。」

オレは運転手にオヤジの元へと向かう様に指示。
アンリエッタを接待しながら胃の痛くなるドライブが始まった。

おいでやす♪（後書き）

次回は国内編です。

おいでやす♪2（前書き）

父親との会合です。

おいでやす♪2

オレはアニエスとアンリエッタをホストしながら大統領官邸までのドライブを・・・
苦しんでた。
何か、やっぱりこの方、王族にしてはキャピキャピ過ぎ。
下手な事も言えず、アニエスと二人で苦笑いしてた・・。

「まぁ、サイト様、このクルマって絵の動く箱があるのですね。まるで生きてるみたいですわ♪」

「それはテレビと言います。
今宵宿泊されるホテルにも必ずありますので、ゆっくりと見てください。」

「サイト様。
ヘビみたいに長い乗り物が凄い速度で動いてますわ♪」

「アレは新幹線と言います。大体時速３００キロメイルで走ります。」

等々と彼女は珍し気に質問を繰り返すのだ。
着いたらオヤジに接待してもらおう・・。
胃が痛い・・。
少しだけマザリーニの気持ちが分かった様な気がする。
正直、アニエスさんが居てくれて助かった。

リムジンはやがてオヤジの待つ大統領官邸（旧総理官邸）に着いた。

「ここにサイト様のお父様が居られるのですね♪」

「ま、一応・・。お袋も住んでますよ。」

「まあ、お母様も?アニエス。化粧直しをして来ます。」

「ハイ。アンリエッタ殿下。」

「チョッ、殿下。もうオヤジが待ってますから。
それに充分綺麗ですよ。」＞しまった、地雷かも・・・。

「まあ、本当♪アニエス。嬉しい事を言われましたわ♪♪」

「ええ、殿下は大変美しい方です。」

(なんかアニエスさんって棘は無いけど淡々とした感じだな。昔もこうだったか?)

バカな事を考えながらオヤジ達の待つ執務室へと歩いてた。

「大統領、御子息様とアンリエッタ王女様がお付きです。」

ドアの向こうから入れと返事があり、俺達はオヤジの執務室に入った。

「始めまして。トリスティン王国のアンリエッタ王女様。
私が才人の父であり、この国の大統領を勤めてるハヤト・ヒラガです。」

「始めまして。ハヤト・ヒラガ様。

私がトリスティン王国のアンリエッタ・ド・トリスティンです。
この度は突然の訪問にも関わらず、お時間を頂きありがとうございました。」

それからしばらくアンリエッタを交え、オヤジと歓談してたが時間もあまり無い。
オレはオヤジに報告を切り出した。

「オヤジ、アルビオン攻略作戦の被害集計と敵の戦死者数だ。
報告しておくぜ。」

「ああ、サイト。ご苦労だったな。
おかげで大分楽になったよ。」

「王女様、そして護衛の方。
彼等は話がありますので、コチラで私とお茶とお菓子でもいかがかしら？
アラ、まだ挨拶してなかったわね♪
私はアヤコ・ヒラガです。サイトの母、ハヤトの妻ですわ。」

「お、お母様ですか？分かりました。アニエス。
邪魔してはいけないわ。アチラに移動しましょ♪」

「ええ、王女様。ハヤト様、サイト様、失礼致します。」

「ああ、悪いね。もう少しゆっくり話したかったのだが。
綾子、彼女達の接待を頼むぞ。」

「任せて♪」

綾子はアンリエッタ達を連れて別室に移動して行った。

「オヤジ、それでフィリピンとか現れたか？」

「ウン。ネ申様の言われた通り、アルビオン戦が終わった頃。
忽然と昔の東シナ海と思しき海域に台湾、フィリピン、東南アジア諸島。
パラオなどが現れた。
大陸は皆無だがな。」

「もうあのゴキブリ連中とは付き合いたくないぞ。
尖閣や竹島でコリゴリだ。」

「オレもだ。散々日本に世話になりながらも、靖国には参拝するなとか、
日本海をトンヘとか？
ホンモノのキ印でもまだマシだったぞ。
愛国無罪なんて冗談じゃ無かった。
あの国に残った日本企業はどうなったんだろうな。」

「多分、食い潰されたんじゃネ？日本を捨てるからアアなるのよ。」

「自業自得だな。」

「ウン。」

その後、オヤジとトリスティンとアルビオンに輸出する品物の調整を行い、
今後の戦略を考えた。
オレはハルケギニアを優先し、現有戦力と補充で当分は賄う。

日本は出現した台湾等の島国との交渉。
恐らく日本に吸収されると思う。
台湾を除くと、ロクに産業も無い国だし・・。
でも現代商品を購買してくれるのはありがたい。
ハルケギニアでは食品以外は危険で売れないのだ。

俺達は会議を終えると、アンリエッタを迎賓館に送り、
オレはシエスタ達の待つホテルに向かった。

おいでやす♪2（後書き）

母親の名前は綾子としました。もちろん適当キャラです。

おいでやす♪3（前書き）

国内観光編です。

おいでやす♪3

アンリエッタを迎賓館に送り届け、俺はワルド達の待つホテルへと駆け付けた。

「すまん、遅くなった。」

「いいえ。このホテルもかなり楽しい場所でしたわ♪」

「部屋は王宮でもココまでは綺麗で無いし、レイゾウコと言う箱には冷たい飲み物が沢山ありますし、テレビとか言う絵の出る箱はあるし。」

「そ、そうか・・。そりゃ良かった・・。
所でお前達はこの国の通貨を渡していなかったな。
今から渡すから、各自、それを自由に使ってヨシ。
それから買い物はオレが引率するけど、勝手に離れるな。
万一、迷子になった時のためにコレを渡しておく。」

「これってなんですか？サイト様。」

「携帯電話と言う遠方に居る人間でも会話出来るアイテムだ。
真ん中にあるボタンを押すとオレの持つ携帯に通じ、会話が出来る。
試しに押して見ろ。ウン。それだ。」

キュルケが恐る恐る押すとオレの電話が着信を教える。

「ダーリン？
まぁ、本当にダーリンの声が聞こえるわ♪」

「会話を終える時は、同じボタンを押せば終わりだ。
万一迷子の時はそれで連絡しろ。
いいな。」

「「「「「「は～～～い♪」」」」」」

その夜、シエスタの従兄弟に当たる佐々木一家も
シエスタを訪れ、従兄弟同士での歓談もあった。
忘れてたが佐々木翁の零戦も何とかしたいな。
戦時中の匂いを残したホンモノの零戦だし・・。

翌日・・。
ホテルを出た俺達はバスで都内を観光。
皇居や帝都タワー（東京タワーを改名）見学。
高い所に登るのは初めてのハルケギニア組は大はしゃぎだった。
途中でアンリエッタ組も合流。
何でもオレが居ないと面白く無いとか・・。
仕方ないのでアンリエッタにはティアラを外して一緒に行動してもらう。
服屋では、トリスティンでは買うのも不可能な縫製に皆は驚いてた。
女性陣は下着も多量に購入してたみたいだ。
下着はトリスティンに輸入予定だが、コチラ程カラフルでは無いからな。

帝都駅に向かう前、靖国神社を参拝した。
新たに祭られたシエスタの爺さんの名前を見せるためだ。

「サイト様、私の御爺様もここに？」

「うん。亡くなった場所も特定出来たから、新たに奉納しなおしてもらったんだ。
爺さんの零戦も、ここに奉納する。」

「本当ですか？」

「ああ、爺様も喜ぶと思うぞ。爺様の戦友もすべてここに集まってるからね。」

「ありがとうございます。サイト様。」

シエスタに爺様の名前を見せてあげ、戦死場所が南方洋上からトリスティン王国となってた。
爺様のお骨も分納して、無名戦士の墓と佐々木家に分納する事も決定。
彼も喜ぶだろう。
それに零戦もここに展示出来る。
復元では無い、戦時中の状態のホンモノだしね。

それから俺達は東京駅に出かけ新幹線に移動。
明日は京都を見学させるつもりだ。

「サイト様、この乗り合い馬車って凄い速さですわね。」

「ウン。俺達の世界でも最大の速さで地上を移動出来る新幹線と言う乗り物だ。」

「サイト様、まるで地上を走る怪鳥みたいですね。」

「そうだね。何しろ時速３００キロメイルで走るバケモノ列車だから。」

「一時間に３００キロメイル走れるのですか？」

「その通り・・。」

彼等に色々と説明してたら何時の間か京都・・。
駅からホテルに移動し、その日の予定は終わった。
明日は観光をし、その後伊丹基地からトリスティンに帰国する予定だ。

おいでやす♪3（後書き）

次回は帰国です。

またお越しやす♪（前書き）

帰国です。

またお越しやす♪

翌日・・・。
オレはハルケギニアの面々を京都観光に連れて歩いてた。

「サイト様、木で出来たお寺ばかりなのですね？
キョートと言う街は。」

「ウン。俺達の国では一番古さを残した街だ。
戦争でも焼けなかった唯一の街だし。」

「何年位の昔の街でしょうか？」

「大体千年程度かな？」

「トリスティンの街は殆ど六千年前と変わらないと聞きました。」

「そんだけ文明が発達しなかっただけの話。日本は刀を使ったチャンバラ時代から
百年も経たずに今の世界に発展したぞ。」

「刀を使ってた時代から、僅か百年でとは・・。」

「明治維新と言う革命があったからな。一気に近代化もしたぞ。」

「その様な革命が・・。」

何かアンリエッタも青くなったぞ。何故だ？？

シエスタやワルドは既に日本文化に慣れてたせいか、さらに日本に傾化したが。
まあ、ハルケギニアも徐々に変わるだろ？
東宝映画町とか荒らし山とか、色々と楽しく過ごし伊丹基地に移動。
いよいよ帰国だ。
基地に行くとオヤジ達も来てた。

「皆様、始めまして。サイトの父、隼人です。隣が妻でサイトの母、綾子です。
お構いも出来ず申し訳ありませんでした。些少ですが、お土産を包みましたので、
トリスティンにお持ち帰りください。
姫、これはマザリーニ枢機卿殿に充てた親書です。
どうか、彼にお渡しください。」

「才人、たまには帰って来るのよ？」

「・・ウン。今はムリだけどね。連絡とかで来る時は寄るから。」

オヤジ達と歓談し、シエスタとテファが何かお袋に頼みごととかしてたみたいだが。
女の事には口出し出来ません・・・。

全員を空燕に乗せ、俺達は一路、ハルケギニアへと飛び立った。

次に帰るのは何時かね・・。

追伸、タバサはオカンと共に病院に居ます。

またお越しやす♪（後書き）

どうと言う事の無い、のんびりした旅行でしたが、話の関係上、捨てれませんので、
出来る限り短く書きました。

冥府のルイズ（前書き）

冥府でのルイズです。

冥府のルイズ

・・・・・・・・・・。

私は・・・・・・。

ルイズ・・。

今、私はどうなってるのだろう・・・。

確か・・・・使い魔を召喚・・・・して・・・・。

契約の・・・キスをしたら・・・・誰かに・・・・・拘束されてしまった。

そして、私は冷たい水の張った牢獄に繋がれ、処刑されると・・聞いた。

私は、もうどうしようもなくなり・・。

心を閉ざしたんだ。

どうせ助からない命。

恐い思いをしたくは・・・ない。

ちい姉様、

お母様、

お父様、

エレ姉様・・・。

ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ・・・・・・。

（フム・・。まだ壊れてはいない様じゃの。
簡単に壊れられたらこの冥府でも命が持たなくなるからの・・。
仕方ない、ヤツの姉の魂でも呼ぶか・・。）

（ルイズ・・私の可愛いルイズ・・・。）

誰??私を呼ぶのは・・。

（ルイズ。私を忘れたの?）

誰・・。まさか・・ちい姉様・・。

（ようやく思い出してくれたの?私の可愛いルイズ・・。）

ちい姉様、ココはどこですか?私は・・・。

（ルイズ。
思い出して。
貴女は国で禁止されてしまった契約の魔法を他国の貴族に行ってしまったの。
貴女はその罪で投獄されてしまい、お父様は公爵の位を国に返納。
領地の大半も国に返してしまったの・・。）

わ、私のせいで・・・。

（過ぎた事は仕方ないわ。
貴女はブリミルに操られたのですから。）

どうしてちい姉様がそれを・・。

（ルイズ。
私がどうして投獄されたハズの貴女と話が出来るか・・。
分かる？）

分かりません・・。
理解したくありません・・。

（ルイズ・・。私は・・・。）

言わないでぇぇ。お姉様ぁぁぁ。

（仕方ないのよ。
これも私の運命。少し早まっただけの事。）

お姉様・・。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

（いいのよ。
私の可愛いルイズ。

貴女は生きてるけど、私は冥府の住人。
でも神様が私に少しだけお願いを聞いてくれたの。）

どう言うお願いですか？

（私の可愛いルイズが壊れない様に支えさせてくださいと頼んだの。
ここは寂しい世界。音も時間も生きてる人間も動物も居ない世界。
冥府ですもの。）

私はどうなるのですか？

（貴女はこの世界で生き続けるの。
貴女は国に帰っても生きる場所はもう無いから。
お父様は公式に貴女を勘当しました。
そして貴女はトリスティン王国最大の犯罪者。
国に帰れば、貴女は処刑されてしまう。
神様が貴女を生かすには、この異界に連れて来るしか無かったと言うの。）

そう・・・なのですか・・。
本当にゴメンなさい。お父様、お母様、エレ姉様。
ちい姉様は・・・。

（もう気づいたわよね？ルイズ。
私は既にこの世の人間ではありません。魂だけの存在。
だからこの冥府で貴女と居られるの。）

私の・・・せいで・・。
私のせいで、お姉様は治癒が続けられなくなったのですね。
お父様が改易なされて、公爵を返納したから。

（いいのよ。
今は全然苦しくないのですもの。
この世界では私は自由・・。
ルイズ。
貴女をハルケギニアに帰す術は無いけど・・。
私が貴女を支えてあげる。
私が貴女の心を癒してあげる。）

お姉様・・。こんな私を・・。

（さぁ、ルイズ。疲れたでしょ？
私と眠りましょう・・。）

ハイ。ちい姉様・・・。

（おやすみ、私の可愛いルイズ・・。）

オ・ヤ・ス・ミ・ナ・サ・イ・・・・・。

（フム。
これで良いじゃろう。

壊れたらサイトきゅんが大変な事になるからの。
カトレアには悪いが、この冥府でのルイズを管理して貰えるか？）

（ネ申様。
霊魂とは言え、私は彼女の姉。
支えるのは当然です。）

（フム。
ではカトレア。
ルイズが壊れぬ様にルイズを支えてくれ。
頼むぞい。）

（お任せください。ネ申様・・・。）

ルイズはこうしてカトレアに支えられ、冥府で健やかに眠り続ける事になったのだ。
次の目覚めの日まで・・・。

冥府のルイズ（後書き）

ネ申様がカトレアにルイズの子守を頼みました。

アンリエッタ（前書き）

アンリエッタの呟きです。

アンリエッタ

私はアンリエッタ・ド・トリスティン。
トリスティン王国の王女・・ですわ。

私の幼馴染にルイズと言う娘が居ました。
幼い私の良き遊び相手でした。
一緒にクックベリーパイの奪い合いをしたり、城の中で隠れんぼしたり。
あまり遊んだ記憶の無い私の、本当に楽しい思い出の住人です。
その彼女が、他国の貴族様。
それもアルビオンを救って下さった偉大な勇者、サイト様に禁止されてた、
契約の儀式を行ってしまい、一時は彼が意識不明となる騒ぎとなりました。
彼のお父様は大変な怒りで、私達の国は消えてしまうかと思いました。
本当に恐ろしかったのです。
いいえ。私が消える事ではありません。
この国の民が消えるのが怖かった。

間もなくサイト様が意識を取り戻され、
お父様の怒りも収まり、私達の国は助かりました。
もし彼があのまま逝ってたら・・・。
私達の国・・。

いいえ。ハルケギニアは消えてたかも知れません。

先日、ご無理をお願いしてニホンテイコクを見て参りました。

何もかもがハルケギニアとは隔絶した別の世界です。

例え、千年かかってもニホンには絶対になれない。

私は確信しました。

食べ物も精密に作られ、子供でも字が読める。

学校は貧しい家庭でも必ず通える。

とてもではありませんが、私達の国では出来ない事ばかりです。

そして、あのヘビみたいに長く速いシンカンセンと言う乗り合い馬車。

一時間に３００キロメイルも進めるなんて、見た私達以外には信じられないと思います。

空を飛ぶヒコーキならともかく。

地面を走る乗り合い馬車で、あの速度。

私は、何時しかトリスティンとしてではなく、ニホン人になりたい。

そう思う様になりました。

そして私達とは関わりも無いのに、私達の国と平民を助けて下さるサイト様を・・。

何時しかお慕いしてしまいました。

アルビオンの戦いが終わってトリスティンに帰られたサイト様を見た時。

私、王女なのに・・。

はしたなくも彼の唇を奪ってしまいました。

私の気持ちがサイト様に気づいて頂ければ・・。

ああ、今宵もアンリエッタは眠れません。

サイト様、お慕いしております・・。

アンリエッタ（後書き）

次回は・・ジョセフさんです。

ジョセフ（前書き）

短い話です。

ジョセフ

余はジョセフ一世。
世の人間は余の事を無能王と呼ぶ。
別に気にはせぬがの。フン。
先日まで余のオモチャにしてたレコンキスタがアルビオンの闘いで
壊滅したと聞いた。

ミューズに聞いても、生存者が皆無で詳しい情報が入らぬとか・・。
面白い。

余の退屈を紛らわせる強いメイジや国とは一戦を交えないと・・。
間者の話に拠ると、トリスティン沖に出現したニホンテイコクとか
言う国の
軍がレコンキスタを殲滅したと聞いた。
フム・・。
余も知らぬ闘い方があるとはの・・。
一度、連中と戦って見るべきか・・。

「ジョセフ様、彼等との戦いは今は控えるべきと私は思います。」

「ミューズよ。何故だ?何故、そう思う・・。」

「敵の手が分かりません。どうやってレコンキスタを殲滅したのか。
まったく情報が入らないのです。」

「生き残りは?」

「完全に殲滅されました。一人も生き残りは居ないとの事です。」

「フム・・。これは凄いのぉ。ミューズよ。
普通、戦をすれば、勝っても負けても捕虜や逃亡兵士は居るものだ。
それが、一人も居ないとは・・。」

「ハイ。ジョセフ様。その通りです。クロムウエルも戦死したらしく、
連絡はまったくありません。」

「すると、アンドバリの指輪は・・。」

「間違いなく回収されたと思います。」

余はミューズを下がらせ、どう戦ったら良いものか。
しばし熟慮して見た。
思いついた事は・・。
敵の大将に一度、目通りして見る事だ。
敵はトリスティンに駐留してると聞く。
そう言えばシャルルの娘の行方が消えたと聞く。
シャルルの妻も神隠しにあったとか・・。
フム・・。
アレの捜索の名義でトリスティンに一度、挨拶にでも出向くか・・。
どんなヤツが余の手先を潰してくれたのか・・。

フフフ。会うのが楽しみよ。

後にジョセフはトリスティン王女を通じ、サイトに面会。
その後・・・。

ジョセフ（後書き）

ジョセフはどう動くか・・。
しばらく御待ちください。

サイト（前書き）

サイトの半生と日本帝國の誕生についてです。

サイト

今から話す事は、オレが転生してからの人生だ。

前世では使い魔としての能力と魔法を駆使しハルケギニアの平定は出来た。

だが、オレの心は荒れてた。

魔法・・、地球・・、親・・、トモダチ、、、。
どうしてココにオレは居るのだ・・。
もう平定は終わった。
オレは帰りたい。
日本で子供として生きたい。

悩んだ、苦しんだ。オレは・・。
どうして縁の無い、この異界で他国の人間を・・。

何時かオレは狂い始め・・そして・・壊れた。

壊れたオレは再びブリミルに拠って封印。
眠る事数千年。

生まれ変わった才人としての人生を再び歩む事になったのだ。

幸いにも以前の人生での経験も度胸も受け継いでた。
ネ申様と巡り会い、ブリミルの示した魔法史上主義とは違う俺達の世界の武器に拠るハルケギニアとの〇〇。
それをオヤジ、ネ申様、オレで計画を立てた。

オヤジはネ申様の庇護の元、日本政府を倒し大統領制度を導入。
（革命に近い行動だったが。）
簡単では無かったが、国民もいい加減に他国ばかり庇護するアホ政府にはキレてたのだ。
そして憲法を改正し、新日本帝國憲法を作成。
特に長年の懸念だった国防の条項が徹底的に改められたのだ。
自衛隊と言う組織は一旦解散。防衛省も国防省と改名。

（アメリカとは話を付けてあり、軍の編成も同意してもらってた。）

初代国防省長官には現役航空幕僚長の田父神氏が就任。
日本帝國陸海軍として組織再編成。

航空自衛隊はヘリ部隊を除き海軍に吸収。
理由は日本が海に囲まれた島国だからだ。
海の上を飛べない戦闘機では、敵国を攻める事が出来ぬ。
余計な組織は国力の低下に繋がる。
基本的には国防が主な目的であり、侵攻作戦は防衛目的のみの軍だ。

防空組織は海軍が担当。
パイロットは達人クラスのみを空母に配備。
初心者及び、訓練未熟者は基地航空隊で徹底的に訓練。
ついでに防空組織も彼等に任せた。
陸軍は国内の災害即応、ヘリ部隊の管理、公には出来ないが、ヤク〇やチーマー、珍走団の連中を軍に叩き込み、最前線の要として使ってる。
もちろんヤの連中の中に居る在は入れない。
コギブリの中の蛆虫は除外するのは当然。

戦闘機はすべて艦載機中心となる。
着艦フックを自分の手先みたいに使えてこそ、海軍の戦闘機乗りだ。
航空自衛隊のパイロットはこぞって海軍に転入。
徹底的に艦載機乗りと仕込まれた頃、ようやく空母〇〇が就役。後に四隻の空母が就役し、
半世紀以上の時を越え、日本に機動艦隊が編成された。
そうなると黙っていないのが、某国・・・・。

オレは帝國陸海軍幼年学校が設置されると同時に入校。
並み居る連中を尻目に以前の経験と努力で十歳になる頃には大人との模擬格闘で
大人の下士官を叩き潰せるまでに体力もテクニックも付けれた。
もちろん普通の小学校とかに通う暇は無い。
時間が無かったのだ。
十七の春にはハルケギニアに連れて行かれるのだから。

勉強に関しては過去の記憶をすべて継承してたので助かった。
飛び級を認められ、十三歳にて少尉任官。
パイロットの道へと入れて貰えた。
もちろん当初は練習機オンリー。
だが自分は既に過去の世界で幾多の実戦を零戦にてこなしてた。
やがて野中三郎と出会う。

オヤジはＡ１０生産のライセンス権をアメリカから取り入れ、
四菱航空機にてライセンス生産開始。
雷電が誕生したのだ。
また新鋭戦闘機もすべて国産にて生産を始めた。
ステルス戦闘機は当座、棚上げにし艦載機の開発を急がせた。
ドンガラでは空母にならないからだ。

川咲航空機にて海燕を発注。
ステルス機能は次世代戦闘機に任せ、対Gコックピットと垂直離着陸機能を優先。
新鋭戦闘機海燕として導入。

他にも高速支援攻撃機として空燕を不治航空機にて開発。
この三機種を海軍航空隊の要とした。
戦前の陸海軍の反省から、戦闘機の開発は海軍中心とし、陸軍は島嶼防衛と
国土防衛に徹してもらってる。

オレも艦載機パイロットとしての訓練に入っていたが前世の経験もあり、
たちまちトップクラスのパイロットに駆け上がった。
戦前の海軍とは違い、実力中心での昇進も設定したので、
実力のある戦士はただちに昇進出来るのだ。

戦力が固まったある日・・。遂に・・。

サイト（後書き）

独白は続きます。

サイト2（前書き）

サイトや日本が辿る道を淡々と書きます。

サイト2

戦闘機搭乗員として、オレが海燕を乗り始めていたある時。

突然、宣戦布告もナシに隣の半島連合国が攻めて来たのだ。

監視してた海上巡視艇がそう連絡した後、消息を絶った事からもかなりの大群と推測された。

「アイゴー、イルポンに鉄槌を下すのだニダ。」

「独島も対馬も我々のモノだニダ。」

「イルボンめが。ウリ共の恨みを思い知るニダ。」

「イルポンに謝罪と賠償を要求するニダ。」

等々・・・。

モチロン黙って見てる訳が無い。

「全軍傾注。

敵の半島勢力は無断で国境海峡を越境。

既に巡視艇が犠牲になってる。

間もなく対馬に到達すると思われる。

いいか、ヤツ等を日本海に叩き込め。

生かして帰すな。ついでだ。竹島も取り返せ。」

「「「「オォォォォォ！！！」」」」

「海軍戦闘機隊、全軍ただちに緊急発進。敵軍の侵攻を少しでも止めろ。
特に輸送船は最優先で撃沈。ああ、情けは要らないからな。
ヤツ等は敵だ。」

「了解しました。全軍ただちに緊急発進。」

築城、新田原、等の海軍航空隊から出せる限りの戦闘機部隊が発進。
モチロン敵も援護戦闘機は出してた・・。が。

ちゅどぉぉぉん、ちゅどぉぉぉん。

「アイゴー、何故、ウリのＦ１５キムチが落ちるニダ。」

「イルポンの連中に一撃だけでも食わせたかったニダ・・。」

何と、対馬に達する前に自爆してたのだ。
噂では整備員が手抜きして燃料にキムチを入れたとか、ボルトを締め忘れたとか。
在り得る話ではあるが・・。
支援も居ない連中の掃射は楽であった。
だが腐ってても軍隊。
島民にも被害が出てしまい、対馬の陸軍は支援が投入されるまで苦戦してた。

「もう少しだ。あと少しでイルポンから対馬を取り戻せるニダ。」

「アイゴーーー。我が空軍は何をしてるのかニダ。」

ようやく戦況が好転したのは、艦隊とヘリボーン部隊が投入されてからだった。
オレも艦載機パイロットとしてこの対馬作戦にて初陣を飾ったのだ。
だが対馬の島民にはかなりの被害が出てしまい、我々は復讐に燃えて敵を倒しまくった。

「アイゴー、もう止めて欲しいニダ。降伏するニダ。」

「イルポンめが。何故、善良なウリを攻撃するのかニダ？」

だが、ヤツ等は油断出来ない人モドキと言う事を知らない兵士も居た。

「ぐふっ、何故・・。何故、白旗を上げてて銃撃するの・・か・・。」

「グフフフ。イルポンを討ち取ったニダ。これでウリは母国の英雄ニダ。」

復讐に燃える友軍にすべて射殺されてしまうのに。
コイツ等、バカ？？
その後、ヤツ等の捕虜は一切認めぬと言う事になった。
モチロン公式な書類には残さない。
すべて口頭命令だ。

海燕、雷電、空燕も獅子奮迅の活躍をして、詳細なデータも取れた。
軍用機は闘いの中でこそ真のデータが取れるのだ。

その後・・。

対馬を襲った半島勢力を駆逐し、勢いに乗り竹島のヤグラを破壊。
竹島に住み着いてた野性のサルも駆除した。

あくまでも「駆除」ですよ♪

そして次に南半島を無視して北の国に進撃。
将軍様が居座る北の首都を襲い、将軍一族を捕縛。
恫喝する事により、拉致されてた日本人を全員奪還する事が出来た。
○田めぐ○さんもモチロン確保。
夫と称するサルが騒いでたが無視。
核発射施設は弾頭をすべて取り外し、日本海に投棄。

南半島には鉄槌は与えなかったが国交断絶。
日本に居座る在日とニューカマーはすべて追放。

「三番ではダメですか?」とバカな事を言い、国民に顰蹙を買ってた、
「漣某」とか言うスベタも叩き出した。

国籍を取得してる連中も母国の旗を踏めるかどうかで判断。
踏めないヤツは国籍剥奪。

日本に居座る害人には必須の条項とした。
もう日本国では無いのだ。
日本帝國となったのだ。
侵略こそしないが、我に敵対するヤツ等には容赦しない。

皇室の皆様にもすべてを報告した。
彼等も苦悩はされたが、このままでは日本が滅びる。

その想いを理解して頂き、受け止めて頂いた。

ヘタレミン〇の連中はモチロン日本から叩き出した。
日本に敵対する勢力は国民でも容赦しない。
この凛とした態度を取ってからは、
アメリカも他国も日本をコケにする事はなくなったそうだ。
当然一部の国民はオヤジを恨んだ。
だが、断固とした決意で国民に訴え、多くの国民の共感も得られた。
徐々に国民から軍に対し好感も上がり出し若者は軍を志す様になる。

だが、我々が半島と戦ってる隙を見逃さない国が居る事を我々は忘れてた。

それは・・。

サイト2（後書き）

戦闘シーンは出来る限り淡々とします。

サイト3（前書き）

サイトの独白です。

サイト3

日本は竹島と拉致国民を取り返し、将軍一族をブタ箱に放り込みホッとしてた時だ。

（偉大な将軍様一族を放置する事は出来なかったので・・。）

手薄だった尖閣をシ○に侵略されてしまったのだ。

「やったアル。
東洋鬼（トンヤンキ）がチ○ンセンに構ってる間に魚釣島を奪還出来たアル。」

「ついでだアル。石垣も沖縄も取り返すアル。」

何とまあ・・。
他人のモノは自分のモノ。人のモノは自分のモノ。
自分のモノは自分のモノ。
この人モドキ国家のジャイアニズム暴言にはさすがに我々もキレた。
核を放つなら放て。
その気概で我々は人モドキを駆逐開始した。
ご自慢の空母モドキも出撃したが・・。

「困ったアル。我々の空母はどこにあるか？」

「しまったアル。自爆ボタンを押してしまったアル。
押してはダメと言われると押したくなったのだアル。」

等々・・。
アホな結末となった。

（もちろん自爆して果ててしまいました。）

何をしに来たのですか・・。

それでも人と戦闘機の波は凄まじい。
とにかく数が多いのだ。

オマケに、国内の平和ボケしたプロ市民団体のボケが・・。

「日本は戦ってはいけません。
偉大な品の解放を授かるべきです・・。」

脳にお花畑のある連中の話は聞いて呆れる。

大統領命令でプロ市民団体の連中の国籍も剥奪。
ヤツ等の大好きな国にプレゼントしてあげた。
もちろん航空機では無く、板切れで出来たオンボロ漁船でだ。
裏切り者には日本は禄を食わせる必要はナシ。
騒ごうが、喚こうが関係ナシ。
日本を捨てるなら出て逝け!!の態度でオヤジは連中に対峙した。

日本を貶めるのが仕事のプロ市民は今後の日本には必要ナシ。

他にも軍国主義の復活とか散々騒ぐ連中も居たが、断固たる態度でガンガン追い出した。
おかげでかなり風通しのいい国になったのは事実。

ついでに日本を貶める最大の原因となってたテレビ局関連。
これ等の再編成も行った。

まずは局自体は残したが、一回免許を全局剥奪。
局のトップを大統領自ら詰問し敵性の考えをする連中は免許の更新はさせなかった。
アホ番組や苛めの温床の番組も取り潰し。
文句があるなら前線の兵士の生活を見て見ろとドキュメンタリーで兵士の闘いを見せたのだ。
ボカシもナシでね。
スプラッタなシーンも多々あったが、最前線の兵士は毎日戦ってるのだ。
国を守るために。

平和ボケした中年オバハンが惨いのを子供に見せるな！とか騒ぐが、現実に我々が戦ってる実態だ！と大統領自ら宣言すると、ババアも黙ったのだ。

子供達も前線の兵士の苦しみや品とかチョ○の暴虐には恐ろしくなったらしい。
今ではチ○ンタレはすべて母国に帰り、二度と日本には来なくなった。
国交を断絶した事で、世界から批判も出た。

そうして戦う事、数ヶ月。
○ナも大半の艦船を撃沈されたり、自爆・・したりして失い、海洋侵攻が不可能と悟ると・・。

「すまなかったアル。もう魚釣島を返せとか言わないアル。」

等々・・。

謝罪して来たのだ。

我が国は海洋国家。
侵攻するには多大な船舶が必要とようやく気づいたみたいだ。
賠償は請求しなかったが、国交は断絶した。

そして尖閣問題が片付いて約一年・・。
ロ○アに対し、北方領土返還宣言の声明を世界に発したのだ。

「我が国が長年叫び続けてるにも関わらず、○シアは未だに我が国に北方領土を返還していない。
これは立派な国際法違反だ。
どうして目の前にある我が国の領土に居座るのだ?」

等々、オヤジは世界に向けて宣言。

当然ロシ○は反発。
戦後最大規模の逆侵攻作戦が始まった。
核関連はアメリカから数機リースしてもらい、恫喝材料に使用。
ロ助もさすがに自分達に核が向いてるのを意識すると発射ボタンに手を触れる事はなかった。
結果は・・。
完全奪還とは行かなかったが、○シアの連中はほぼ駆逐出来た。
尊い犠牲者も出たが、彼等は靖国に祭る。
出撃前に我々は万一の時は靖国で再会しよう。
そう告げて握手を交し出撃したのだ。
国際法廷にもロシ○を引っ張り出し、何とか昔の領土は日本領となった。
そうして日本の気概を見せ、ロ○ア、シ○、半島との国交を断絶。
我が国は特亜三国&ロ助との国交を断絶したのはいい方向となった。
台湾も日本に擦り寄り、パ○オは独立国ではなく、
沖縄みたいに併合してくれと頼んで来たのだ。

もうすぐ転移する事が確定してたので、さすがに併合は約束しなかったが。

やがてオレが十七の春。
ルイズに拠り、我が国とオレはハルケギニアに転移。
日本と言う国土は地球から消滅した。

サイト3（後書き）

次回は閣下です。

ルーデル閣下の優雅な一日。（前書き）

現世に降臨された閣下の一日です。

ルーデル閣下の優雅な一日。

私の名前はハンス・ウルリッヒ・ルーデル。
以前はルフトバッフェに所属してたが、現在はニホンテイコク海軍に所属。
名誉顧問扱いで野中雷電部隊にアドバイサーとして着任。
毎日の様に訓練ばかりしてる。

「閣下、さすがです。
あの襲撃は考えてもいませんでした。」

「ルーデル。
もう少し自重しろ。見ろ。機体を地面で擦ってるでは無いか。」

「フム。
この辺りがこの機の低空襲撃の限界か。中々良く出来ている。
さすが異界の私がアドバイスしただけあるな・・。」

「閣下、素晴らしい腕です。
私達でも雷電をあそこまで低く飛ばすのはムリです。」

（閣下以外には不可能でしょ。人外には限界は無いのか・・。）

「だが物足りぬ。フム。やはり実戦か・・。
ああ、返す返すもあの作戦の前の日にお前と出会ってたらな。
雷電カノーネンフォーゲルよ。」

閣下は自分の機にカノーネンフォーゲルと名付けられていました。

「そろそろ昼か。
誰か、食事の準備をしてくれ。
ついでにミルクもだ。」

「「「ハッ、閣下。只今準備します。」」」

ルーデル閣下は激しい訓練されても、必ずお食事とミルクを欠かしません。
食事を終え、軽く運動をされると・・。

「ガーデルマン、午前中の訓練はイマイチだった。
もう一度飛ぶぞ。
君達も僚機として付いて来たまえ。」

「「「ハッ、閣下。」」」

部下の面々は閣下に続けと愛機に駆け寄り雷電を起動させています。

「全機、コンタクッ。編隊を組み離陸。
速度が乗り次第高度ゼロメートルを維持。
敵に悟られぬ様に飛行。いいか？」

「「「了解しました！」」」

「ウム。では離陸開始。」

雷電は群れを成して地上から飛び上がります。
しばらく飛行し、速度が安定した頃には計器上では高度ゼロメートル・・・。

「諸君、もう少し下げられぬか？」

「「「頑張ります・・・。」」」

部下は全員、涙目で閣下に返答していますが、もう限界でしょう。

「まだまだ鍛え方が足りぬな。のお？
ガーデルマン。」

「ルーデル。もうその辺にしておけ。彼等は頑張ってる。
お前が人外なだけだ。」

「そうか？オレは至って普通だと思うがのぉ？」

もう突っ込む気力も萎えたガーデルマンは黙って高度計を読み上げています。
（ナビと計器チェックがガーデルマンの新しい仕事です。）

そして・・・。

昼からの訓練途中で、ロンディウム近郊に大量のオーク鬼が出現したとの情報が入る。

「ガーデルマン、喜べ。敵が出現したぞ。僚機は上空で待機。
私が見本を見せてやろう。」

ルーデルは雷電を軽くバンクさせると、スーパー超低空を掠め、
オーク鬼捜索を始めた。

「チョッ、ルーデル。機体を木で擦ってる。落ちるぞ・・。」

「ガーデルマン、この程度で参るお前か?フム、
もう数センチは落せるな・・。」

(閣下は操縦桿に感じる気流の流れの反応で高度を察知出来るのです。)

「なぁ、お前。閣下と一緒に降りれるか?」

「ムリ。絶対に枝と接触して墜落する。」

僚機はルーデルの伝説以上にチートな操縦テクニックに上空から眺めてて顎が落ちてしまってた。

そして・・・。

「我、オーク鬼発見。只今より殲滅する。」

ルーデルが無電に叫ぶと同時に下の森では、オーク鬼が魔王襲来にパニックとなってた。
彼の襲撃は弾火薬の尽きるまで続き・・。

「ワーハハハ・・。赤共めが。
地球では良くもオレを撃墜してくれたな。
だが礼を言うぞ。この新カノーネンフォーゲルと出会えたからな。
喰らえ。我が渾身の一撃をっ!!」

「ルーデル、少しは自重しろ。それにヤツ等は赤では無い。ただのオーク鬼だ。」

「オレにとってはオーク鬼も赤も同じよ。ヤツ等を殲滅してやるのはオレだぁぁぁっ。」

そして・・・・。

「フム・・。生命の息吹も感じられぬ。ガーデルマン。敵はまだ居ると思うか？」

「ルーデル。生きてる訳が無いだろうがっ！！」

見ると、オーク鬼の残骸と思われる肉片が残ってるのみで、既に一匹のオーク鬼も居ないと思われた。

「やはり、閣下の伝説は凄く・・・。」

「うん。伝説は優しいと思ったよ。リアル閣下はまさに空飛ぶ・・。」

「「「魔王様だ。」」」

ルーデルは自重しない。

執務室でお茶を飲むヒマがあれば訓練。

訓練よりも実戦。

朝起きて、ミルク飲んで訓練飛行して、朝食食べてミルク飲んで飛

んで。
昼飯食べてミルク飲んで飛んで・・・。
部下も彼に鍛えられメキメキと腕を上げたが彼には追いつけない。
今では野中隊長はディスクワークに専念し、ルーデルが指揮を取る事が大半。
ルーデルは今日も明日も飛ぶ。
まさに封印される日まで飛ぶかも知れぬ。
まだ片足は残ってるしね。＞墜落前にアルビオンに来ました。
凄すぎるよ、ルーデルさん・・。

ルーデル閣下の優雅な一日。（後書き）

ルーデル閣下は自重しません。

ワルド（前書き）

ワルドの呟きです。

ワルド

僕の名はジャン・ジャック・ワルド・・だ。
何故・・が入ったかと言うと、親愛なる我が主、サイト・ヒラガ様が僕の
新しいニホンの名前を考えてくださるからだ。
ああ、あのモノノフみたいな名前が僕の名前となるのか。
あの漢字とか言う文字。
我がハルケギニアの文字とは比較にならぬ凄い量の文字。
聞く所に拠ると、あの漢字と言う文字をパーフェクトに覚えてる日本人は
皆無に近いと言う。
それもそうだろう。
文字のみで辞書が作れるなんて漢字だけだと僕は思う。
だが、あの漢字の文字には痺れた。
航空機と同じ衝撃位痺れたのだ。
僕は日本人となろう。
今はムリでも、何時かは絶対に日本人となるのだ。
ルーデル閣下からも有難い言葉を頂いた。

「自分を無価値と思う者こそ本当の無価値になるのだ。」と。

何事も努力だ。
今日もギーシュ君と共に、６４式小銃を抱え、陸戦訓練と駆け足に
頑張ってる。
若い彼に負けてたまるかぁぁぁ。

「ギーシュ、腕が落ちてるぞ。
銃は常に胸より上に抱え走れ。行くぞぉぉ。

連続歩調、数えっ、イッチ、そーれ、ニィ、そーれ、
サン、そーれ。シィ、そーれ。
いっちホイにぃホイさんホイしぃホイ、イチニィサンシィ・・。」

サイト様は我々と共に銃を抱え、指揮を取られ我々よりも早く駆けておられる。
僕も鍛えた方とは自負してたが、まだまだだったな・・。

明日も頑張ろう。
ナッ、ギーシュ君。

今日もワルドとギーシュは駆け足で基地の外柵を走る。銃を胸に抱えて。

後にアニエスも加わるのだが。

ワルド（後書き）

呟き編終わり。
次回から本編となります。
才人が叫んでる掛け声は実際に海自が訓練で良く使う駆け足の歩調合せの掛け声です。
ダレて来ると叫ばされてしまいます。

ジョセフ襲来（前書き）

ガリアの王、ジョセフがトリスティンに来ます。

ジョセフ襲来

無能王としてハルケギニアに知られてるジョセフが突然、トリスティン王国を訪問したいと連絡があったのは、日本から帰国してすぐであった。

「枢機卿、ガリア王、ジョセフ殿の訪問はどう言う訳でしょうか？」

「姫、恐らくサイト様の事を知らぺるためと思われます。」

「そうですよね。だって私達の国だけなら、ガリアには遥かに及ばぬ弱小国ですもの。」

「・・・・。姫、一度王妃とサイト様を交え、今後の国の在り方を考える時期です。私の考えですが、今のままでは我が国はいずこかの国に飲み込まれてしまいます。国の税収はハルケギニアでも最低レベル。メイジは我侭で無能。そして・・。言いたくはありませんが、王家は・・・・。」

「分かりました。マザリーニ。サイト様にお城での面会をお願いしてください。私はお母様に相談して見ます。」

私もこのままでは、ガリアかゲルマニアに飲み込まれてしまうと言うのを痛感しています。お父様がもう少し長生きされてたら、あるいはここまでの悪化は無かったと思います。お母様、王宮でさめざめと泣き暮らしてる時ではありませんわ。

お父様の愛されたトリスティテン王国の存亡の時なのですよ。

アンリエッタは王妃にサイトを交えた会議をするから、絶対に出ろと交渉した。

王妃は嫌がってたが、このままでは国が危ない。

王の愛した国が消えても良いのか？と脅し、ようやく王妃を引き出す事に成功したのだ。

自分の母ながら、ここまで自分だけを大切にする母にさすがのアンリエッタも頭に来てた。

「お母様、何時まで泣き暮らして過ごすつもりですか？

もうお父様は帰って来ないのです。お父様の愛したこの国自体が存亡の危機に陥ってるのは、

お母様も原因の一つですよ。何故、何時までも女王に就任されないのですか？

私では若過ぎて他国に舐められてしまいます。

王妃では無く、女王に就任してください。せめて私がもう少し年を召すまででも。」

「私の可愛いアンリエッタ。貴女も大きくなったのですね。

・・・。

ですが、私では政治が出来ません。

何時までもマザリーニ枢機卿の手を煩わせてしまうのは確実です。

ですが、貴女の言う事も理解出来ます。

アンリエッタ、少しだけ時間をください。

異国の騎士、サイト・ヒラガ様との会談までには結論を考えておきますから。」

アンリエッタは分かりましたと返事をし、王妃の部屋から出て行っ

た。
マザリーニに会談の結果を話すと、彼は大層喜んでた。
結論がどうなるにせよ、今後の王室の未来が変わる日が来たのだから。

サイトはマザリーニから連絡を受け、もちろん快諾した。
今の王女では貫目が足りぬ。
無能だろうが引き篭もりだろうが、年を取った親が生きてるなら親が立つべき。
自分も今回は親や母国が傍に居る。
コレだけで、同じ苦労も全然違うのだ。
初めてルイズに召喚された時は、相談出来る相手も無く、なし崩しに使い魔。
メシは犬猫以下の扱い。
その癖に命を賭けろ、等々・・。
未だに心の底でルイズを憎むのも当然だと自分でも思う。
二度目の時は、一応は日本との往復も可能だったが、帰る事は許されず。
最後は壊れてしまった。
魔法を頼らないのも、前回の最後が強烈なのと、ブリミルの遺産を使う気になれない。
この一点だけだ。

とにかくアンリエッタ、マザリーニ、そしてマリアンヌ王妃との会談は決定したのだ。
あの引き篭もりを何とかしないと、またアンリエッタが黒化しかねない・・。

ジョセフ襲来（後書き）

ジョセフは、どう言う行動を起こすか・・。

マリアンヌ（前書き）

引き篭もりを引きずり出しました。

マリアンヌ

トリスティン王国から訪国の許可が出たのはしばらくしてからだった。

「ミューズよ。トリスティンを訪問する事にしたぞ。」

「ジョセフ様、くれぐれもお気をつけてください。
彼等は私達の知らぬ武器を持っております。」

「案ずるな。余は公式に訪問するのだ。
余を抹殺したらトリスティンが他国から叩かれよう。心配は要らぬ。」

ああ、何故この方はこうも楽観的に居られるのでしょう。
死を恐れていないと言うのは理解していますが、私には彼だけなのです。
ジョセフ様。万一の事がありましたら、私は刺し違えてでも貴方の仇を取ります。

「サイト様、本日はお忙しい中、わざわざ城までお越し頂きありがとうございました。
また先日は楽しい旅でしたわ♪」

「サイト様、アンリエッタの母、マリアンヌです。お世話になりながら、ご挨拶もせず、
本当に申し訳ございませんでした。また故郷、アルビオンの危機を救って頂き・・。

本当にありがとうございました。」

「始めまして。マリアンヌ妃殿下・・で宜しいのですか？」

少し皮肉を交えて彼女に挨拶をした。
コレでこの女の底も見れるだろう・・。

「いいえ、今は妃殿下ですが、私がトリスティン王国の女王として就任します。
それまでは・・。今まで通り妃殿下でお願いします。サイト様。」

「・・・・お母様。」

「失礼しました。マリアンヌ妃殿下様。試す様な事をした事を深くお詫びします。」

「サイト様、謝る事はありません。この国がここまで騒乱を極めた原因は私なのですから。
王の逝去のショックで何もかもアンリエッタとマザリーニに投げ出してしまい、
この国をボロボロにしたのはこの私です。
まだ若いアンリエッタに王の真似事をさせてた私は親としても失格でした。」

「そこまでお分かりなら、もう自分から言う事はありません。
そこで、今後の事です。既に枢機卿殿には色々と相談していましたが・・。」

オレはマザリーニとは相談してた事を改めてマリアンヌとも相談した。

彼女が女王として就任してくれたら、アンリエッタよりはマシだろう。
やはり若い王では舐められてしまう。
軍隊なら実力と階級で黙らせる事も可能だが、国同士では違う。
国のトップはある程度の年齢は必須なのだ。
ようやくマリアンヌが長い引き篭もりから出てくれた事にマザリーニもアンリエッタも
安心した事だろう。

そして・・・。

「では、我が国の魔法衛視隊を一旦解散して・・。」

「ハイ。私達の国の余剰となった銃ですが、この国のマスケット銃の百倍は高性能の銃を
配備します。そのために、魔法衛視隊グリフォン隊長だったワルドを我が軍で鍛えております。
彼を指揮官として据えたら軋轢も無くなるでしょう。
そして銃士隊隊長のアニエスさんを王城内の最高護衛隊長として鍛えます。
その事で色々と文句を言う貴族もありましょう。そこでです・・・。」

オレは色々とマザリーニ、マリアンヌ、
アンリエッタと悪辣貴族追放の手段を相談してその日は終わった。

マリアンヌ（後書き）

若いアンリエッタよりは使えると思います。＜マリアンヌ

マリアンヌ就任（前書き）

引き篭もりが女王に就任します。

マリアンヌ就任

ガリア王、ジョセフのトリスティン王国、公式訪問が決定した。
ただし、我が国・・にであって、ニホンテイコクの基地は無関係。
あちらは割譲地区なので、トリスティンであってトリスティンとは違う国扱い。
ジョセフがゴネるとは思うが、他国民には基地は見せてはならない
と私(マリアンヌ)は
判断してた。

「マリアンヌ様、では・・。」

「アンリエッタ、マザリーニ、参りましょう。」

いよいよ私の女王就任の儀式、先王が逝去してから被る人の居なかった王冠をいよいよ私が・・。
貴方、アンリエッタが成長するまで見守ってください・・。

「「「マリアンヌ女王、ばんざーーい。」」」

国民の前に久しぶりに立ち、私は微笑みながら平民、メイジの国民に手を振る。
ジョセフが訪問する数日前の事だ。
華やかな花火が打ち上げられ、ニホンテイコクの空の騎士の皆様が「アクロバット」と
言う華麗な怪鳥の儀式を披露してくれました。

「スゲーー。鳥ってあんな飛び方出来るのか?」

「尻から煙出てるけど・・。」

見てるとトリスティン語で「マリアンヌ万歳」と空に文字が画かれてたのです。
何と言う華やかな演技。

「女王陛下、素晴らしい演技、演出ですね。」

「ええ、さすがサイト様の率いる部隊ですわ。」

「あの中にサイト様も・・。」

国民もメイジも華麗な空の演技に見とれ、そして私の女王就任を心から祝ってくれた・・
と、思う。一部の貴族を除いては・・。

「フヌヌヌヌ。何故マリアンヌ様が女王に就任されたのだ？
このままでは我々の行ってた事が無駄になるでは無いか。」

「リッシュモン殿、アセってはなりません。彼女も所詮は腰掛。
将来はアンリエッタ殿でしょう。今の王政はガタガタ。もう少し静かに時を待つのです。」

「フム・・。その通りだな。だが忌々しいニホンテイコクのヤツ等の事もある。
油断は出来ぬぞ。」

「所詮、彼らも他国の人間。我々の内政には関わらないと思います。彼等に手を出さなければ、我々に関わる事は無いでしょう。」

「ムウ・・。そうだな。とにかくヤツ等には手を出すな。アレは危険だ。手下にもニホンテイコクの基地には近寄るなと厳命しておけ。」

「ハッ。」

だが、サイトはリッシュモンの配下にもスパイと盗聴器を仕掛けてたのだ。

「フム・・。ヤツ等め。しばらくは静観を考えてるな。だがあまり時間はかけたくない。ジョセフが帰国した後で・・。」

後にマザリーニとの電話会議でリッシュモンの配下を調べ上げ証拠も徐々に固めて行った。

明日はガリア王、ジョセフの公式訪問・・。

マリアンヌ就任（後書き）

次回はジョセフの襲来です。

ジョセフ襲来2（前書き）

ジョセフがトリスティンに来ました。

ジョセフ襲来2

「のう、ミューズよ。
一応の歓迎はしてくれてるみたいだな？」

「当然でございましょう。
ジョセフ様。貴方はハルケギニアでは最強の国の王なのです。」

「しかし余はそう思わぬ。余を討ち倒せる武力があるのもこの国。」

ガタゴトと・・揺れぬ不思議な道を我々は馬車で移動してた。
普通なら相当にガタゴト言う田舎のハズなのだが。

「ミューズよ。お前はどう思う？」

「何がですか？」

「不思議に思わぬか・・。普通なら我が特製の馬車とは言え相当の音がする。
だが、この道を走る我が馬車は鉄が路面を摺る振動はするが、ガタゴトと言う音が皆無。」

「・・確かに。ガリアでもここまで整備された道はありません。
やはり・・。」

「ウム。ニホンとか言う国の介入の結果だろう。
普通なら道の整備など出来ても、ここまでの完璧な整備は不可能。」

「油断出来ませんね。」

「ウム・・。」

とうとうジョセフ一世がトリスティン王国を公式に訪問される日が来た。

「マザリーニ、国の貴族や平民には連絡は徹底しましたね？」

「ハイ。女王様。
街道の整備も完璧に済ませました。
ニホンテイコクの道路建築技術は素晴らしいです。
僅か二週間で国境から王都までの道を完璧に整備してくださいましたから。」

「後はジョセフ様をお迎えするだけですね。
そして、粗相があってはなりません。
それとサイト様には？」

「万一ジョセフ様からお声がかかった場合はサイト様のみ城にお越し頂く段取りです。」

「結構です。
マザリーニ枢機卿。ありがとうございます。」

「お母様、私は・・。」

「アンリエッタは控えていなさい。
サイト様がお越しになられたら、相手をお願いします。」

「分かりました。お母様・・いえ、女王様。」

マリアンヌ様は変わられた。
前王の崩御後、塞ぎ込まれてたあの頃とは比較にもならぬ。
アンリエッタ殿下の活も利いたのでしょう。
このまま良い国にと変わって頂けたら、マザリーニは何時召されても結構です。

ジョセフ殿がトリスタニアに来られたのは昼前の事。

「ガリア王国、ガリア王、ジョセフ一世殿のおなーりー。」

城の衛兵がジョセフの来城を告げると、私達は全員でジョセフの入城を城門で待ちました。
マザリーニがジョセフに挨拶は、次に私、マリアンヌ。

「遠い所をようこそ。我がトリスティン王国へ。
ガリア王、ジョセフ一世様。

私がこの度、トリスティン女王に就任したマリアンヌ女王です。」

「マリアンヌ女王殿、余がガリアの王、ジョセフ一世だ。
この度の就任、おめでとう・・。」

噂に違わぬ慇懃無礼男だが、国の格はアチラが上。
黙って耐えるしか無い。
私は最近まで国を放置してた彼以上の無能女王だし・・。

「所で聞く所に拠ると、トリスティンの沖合いにニホンとか言う国が出現したと聞く。
我が国との接触はまだだが、貴国とはどうなってる?」

来た・・。だがウソを言ってもすぐにバレルのは明白。
サイト殿に習った
「９９%の事実に１%の虚実を混じえよ。」
を実践する・・か。

「ハイ。確かに当国との付き合いは始まっております。
何でも東方のロバアルカイエからハルケギニアに飛ばされたとか。
習慣も国民も我々とはまったく違う国の方らしいです。」

「ほう・・。ロバアルカイエからか。それはまた遠い土地から・・。」

「ハイ。
お困りでしたので、当国から食料や燃料などの輸出を行っております。」

「貴国から輸出か。どうして我が国にも言わぬ。

困ってるなら我が国の余剰物資も融通したのに。」

「緊急事態でしたので、早急に手配する必要があり、私達だけで行いました。」

「フム・・。そうか。では、当国にはその国の方も駐留してるのか？」

「ハイ。モチロンでございます。」

食えぬ女だの。このマリアンヌとやらは。
若い王女が就任してたら食い散らかせたろうに。
やはり年を経た女狐は油断がならぬ。
何とかニホンとやらの情報を引き出さぬと・・。

マリアンヌとジョセフの狐と虎の口頭合戦は始まったばかり・・。

ジョセフ襲来2（後書き）

狐と虎はどちらが勝つでしょうか・・。

ジョセフとの会談（前書き）

ジョセフとの会談が始まります。

ジョセフとの会談

マリアンヌはジョセフに対し、警戒は解かずににこやかに会談を続けてた。

（ったく、アンリエッタと会わせなくて良かったわ。
彼女ではたちまち言い負かされていましたわ。
それにしても・・。どうしようかしら。
サイト様は別に呼び出しても構わないと仰ってましたし、あまりズルズルと長引いてもね。）

マリアンヌは思考を停めるとジョセフに話を切り出した。

「ジョセフ様、所でお聞きしたい事でもあるのですか？
こんな弱小なトリスティンにわざわざ訪問されるとは？」

「・・・。なら聞こう。
貴殿達の国に出現したニホンなる国には奇怪なる武器を操る軍団が居るだろう。
そう、アルビオンに侵攻したレコンキスタを壊滅させた軍団が。」

「・・・。それに関しては私も詳しくは知らないのですわ。
私は最近まで王宮に引き篭もってた引き篭もり王妃でしたので。」

「・・・・・。喰えぬ方よの。ではニホンとか言う国の人間との面会は可能か？」

「それならば・・。可能だと思いますわ。少し御待ちください。」

ジョセフに断り、席を立ち別室に控えてるマザリーニにサイトとの面会を頼むと・・。

「サイト様はもうすぐ王宮に来られます。」と・・。

「ジョセフ殿、ニホンからの使者が王宮に来られます。
他国の王にこの様なお願いは無礼かも知れぬが、彼には礼を尽して接して欲しい。
彼はニホンテイコクの王の息子。
決して怒らせて欲しくは無いのです。」

「・・分かった。このジョセフ、しかと約束しよう。
貴殿に取ったみたいな無礼な態度は決して取らぬとな。」

「お願いします。彼は心根は優しい方です。この国の平民の暮らしを案じて、
色々と知恵も貸して頂いております。
私達の国には無くてはならない恩人なのです。
そしてアルビオンでも・・です。」

「言葉から察すると、アルビオンの攻略戦を阻止したのは、やはり・・。」

「ハイ。彼です。サイト・ヒラガ様と言います。」

「ククク。そうか。どの様な男か余は楽しみじゃ。」

それから待つ事三十分程・・。
王宮に轟音が轟き、サイト様の乗られたヒコーキが王宮に到着しました。

「アレは？」

「私からは言えませんので、ジョセフ様が聞いてください。」

「分かった。本人に聞くとしようか。」

才人はジョセフとの会談でどの程度まで話すか悩んでた。

ヤツがレコンキスタのスポンサーなのは分かってる。

だが、この世界では敵に回したく無い男なのもヤツ。

まあ良い。

見た目は若造のオレだが、実年齢は四十を超えてるからな。

自分は。

才人は意を決すると空燕を降り、王宮へと歩き出した。

ジョセフとの会談（後書き）

次回はサイトとジョセフとの会談です。

ジョセフとの会談2（前書き）

ジョセフとサイトの会談です。

ジョセフとの会談2

「ニホンテイコク、サイト・ヒラガ様のおなーりー。」

城の衛兵の号令で城門が開かれオレはジョセフ達の待つ城へと入って行った。
しかし国が近くに居ると言う事はこうも心が安定するものか。
他国に居ても不安も慄きも全く無い。
前世みたいな心の壊れる兆候も完璧に無い。
この調子なら大丈夫。
ジョセフとも無事に渡り合って見せる。
衛兵の案内に従い、ジョセフとマリアンヌの待つ会議場へとオレは歩いてた。

「サイト・ヒラガ様、本日は急なお呼び出しをして申し訳ありませんでした。
こちらがガリアの王、ジョセフ一世様です。」

「マリアンヌ女王様、お招き頂き感謝致します。
ガリアの王、ジョセフ一世殿、私がニホンテイコクのサイト・ヒラガと申します。
宜しくお願いします。」

オレは極力無礼とは取られぬ様に注意し、ジョセフに挨拶をした。

「ニホンテイコクのサイト・ヒラガ殿、始めまして。
余がガリアの王、ジョセフ一世だ。

もし礼を失してる点が見受けられたら遠慮無く言ってくれ。
何分、これが余の素なのだ。」

ジョセフとの会談は当初はぎこちないモノだった。
しかし巷で言われてる程の無能とは思えぬ凄まじい知識には驚いた。
昔の日本政府ならトレードしてでも欲しい人材。
それがジョセフだと思う。
無能なのは、魔法が虚無だけなだけの話。
王に必要なのは魔法では無い。
オレは痛感してた・・。

「フム・・。
所でサイト殿よ。貴殿の乗って来たあの怪鳥はどうやって飛ぶのだ？
余も色んなマジックアイテムは見たが、あの様な形の怪鳥は初めて見る。」

「一応、我が国の機密なので詳しくは言えませんが、アレはある燃料を源として、
動力を動かし飛行するアイテムです。
誰でもは動かせぬ特殊技能が要ります。」

「そうか。やはりのぅ。」

「アレに乗るには技術を学ぶ必要があります。
また肉体的、身体的な規則もあります。誰でも乗れるアイテムではないのです。」

「サイト。
そう言うオヌシはその若さでその技能を身に付けられたのか？」

「ハイ。オレは幼児の時代から軍学校に入り、普通の子供とは違う幼児期を過ごしました。
まだ未成年ですが、オレは既に多くの戦闘も経験しています。
階級も既にトップクラスです。」

「フフフ。そうか。やはり魔法と同じく素質が要るのだな。」

「いいえ。魔法とは違います。
素質と言いましても万人に必ずある素質が際立っていれば良いのです。」

「万人に素質はあるのか？」

「必ずあります。
ですが高度な知識と感覚。
何よりも大切なのは決して諦めてはならない冷静な精神が必須です。」

「ほほう・・。
そう言う事は、アレに乗るには・・。」

「己の試練を乗り越えたモノのみが乗れる代物です。」

ジョセフは魔法とは違う航空機の技術に感心してた。
そして・・。

「お主は魔法は？」

「自分は魔法とは道具と心得ております。」

「フフフ。面白い考えだ。
余は若き頃より魔法が使えなくて無能と散々バカにされて生きて来た。
弟にシャルルと言う魔法の天才が居たから余計にの。」

「それは・・また・・。」

「じゃが先王がガリアの新しい王に指名したのはシャルルでは無く余であった。
お主はこれをどう思う?」

「オレは当事者では無いから確実な事は断言出来ませんが、
先王は弟様よりもジョセフ殿を王の資格アリと認めたのでしょう。」

「何故そう思う?」

「別に王が魔法を使えなくても問題は無いからです。
それよりも大切なのは国の運営が出来るかどうか・・です。」

「フム。確かにのぉ。
別に余が魔法を使えなくとも差し障りはまったく無かった。
国を受け継いで始めて分かった事だがな。
先王、余の父上もそれを見込んで余を指名したのであろう。」

「その通りです。
国のトップに一番大切なのは国を思う心です。
そして他国に舐められぬ断固とした決意と事あれば、絶対に引かぬ心です。」

「フフフ。面白い。サイトよ。お前の考えは余とまったく同じだ。
余も先王崩御後、弟のシャルルを庇護する貴族を悉く打ち倒して来た。
そして・・・。」

「ジョセフ殿、ここは他国。機密は口にするものではありません。」

「ジョセフ様、私は何も聞いておりません。どうぞご心配なく。」

「ククク。心得た。ありがたくその気持ちを受け取ろう。
して、サイトよ。一つだけ頼みを聞いてくれぬか？
もちろんタダとは申さぬ。お主の望む事を国に関しない事なら出来る限り聞こう。」

「オレに出来る事ですか？」

「ウム・・。あの怪鳥に乗せては貰えぬか？」

「あの怪鳥に・・ですか？」

「ウム。余は王として色んなモノを見たり聞いたりして来た。
だがあの様な奇怪な怪鳥は初めて見る。
詳しくは聞かぬし、機密には触れぬ。どうか余の願いを聞いてくれぬか。」

そう言うとジョセフは深々とオレに頭を下げたのだ。
他国の、しかもジョセフが・・だ。

「頭を上げてください。そうですね・・・。
では、まず杖を持ち込まないでください。護衛の方は一名のみです。

そして飛行中は当方の指示に従う事。
これを約束して頂ければ、トリスティン上空に限ってお乗せします。
」

「おぉぉ。本当か？サイト。いや、サイト殿。
分かった。護衛も杖は置けば良いのだな？」

「ハイ。万一の時は決してジョセフ殿に危害が及ばぬ事はお約束します。
ですが、不意に魔法を使われるとさすがに・・。」

「ウム・当然だ。護衛は余の付き人のシェフィールドとする。
良いか？」

「ハイ。分かりました。」

シェフィールド・・か。
まさかあのヤンデレ姉さんと、こうも早く再会するとは・・。
タバサを日本に行かせたのは返って良かったな。
アレが居たら色々と揉め事の種になってたと思う。

さて、ジョセフを乗せるか・・。

ジョセフとの会談２（後書き）

次回はジョセフＩＮトリスティン上空です。

翼よ、あれがトリスティンの灯だ。（オマケ付き♪）（前書き）

ジョセフとのフライトです。
エロフィールドが絡みます。

Ｉｆなオマケ話付きです。

翼よ、あれがトリスティンの灯だ。（オマケ付き♪）

オレはジョセフとシェフィールドを乗せるために空燕に案内してた。
タラップを降ろし、機内のＡＭＦを作動。
万一、シエフィールドやジョセフが暴れても大丈夫・・だと思う。

「ではジョセフ殿、当方の護衛の指示に客室では従ってください。
一番眺めの良い窓際に席を設けました。
シェフィールドさんも隣に架けてください。」

オレはジョセフとシェフィールドを機に案内すると、席に就かせ、
操縦席へと向かった。
コックピットに着くと、客室の監視カメラを操作し、どんな些細な
事も見逃さず、
またジョセフの映像も記録を始めた。

「ジョセフ殿、今から飛行開始します。かなりの轟音が出ますので
耳当てを付けてください。
その耳当てから声も聞こえますし、棒に話せば会話も出来ます。」

ジョセフは分かったと言う感じで護衛にコクリと首を傾げる。
やがて離陸。
翼を垂直にし、石川島播磨重工製造のタービンジェットが機動。
そして離陸。

「おお、凄い音だ。ミューズよ。素晴らしいのぉ。」

「ハイ。ジョセフ様。」

空燕は高度を取ると、翼を進行方向に傾け速度を上げてグングン上昇して行く。

「ミューズよ。お前はこんな高みに登った事があるか。」

「いいえ、ジョセフ様。普通では登れません。
こんな高みに来たら窒息し、凍死してしまいます。」

「そうよのぉ。見よ、あれがトリスティンの灯だ。」

既に高度１５０００メイル。
この程度で良かろうと、おれはラグドリアン湖方向へと進路を向けた。
雲の遥か上空では、空燕の機体は霞程度にしか見えない。
音速も出していないので、地上には音も届かないだろう。
見えるとしたら高空で起きる自然現象の飛行機雲だけだ。
何度見てもこの飛行機雲の軌跡には痺れる。
自分の飛行機の両翼から白く尾を引く天然の芸術だ。

やがてトリスタニア上空に帰還し、ジョセフに着陸する旨を伝えると・・。

「そうか・・。残念じゃが仕方ないのぉ。」

ジョセフは心底残念そうに呟き、窓の外の下界を眺めてた。
やがて機は城の庭に着陸。
ジョセフを伴い、オレも機を降りた。

「ジョセフ殿、いかがでしたか？」

「ウム。余は満足じゃ。」

どっかで聞いたセリフだが・・と突っ込みはさておき・・。

「今回は突然の飛行でしたので、燃料も余裕が無く少し飛んだだけでした。
また機会がありましたら、是非招待しますが。」

「ム、本当か？いや、その時は是非頼む。
余はこの怪鳥にはまた乗りたい。
出来る限りの礼はするので、また乗せてくれぬか？」

誰？？
この目がキラキラしたヲッさん・・。

「それは構いませんが、そんなに気に入りましたか？」

「余も色んな乗り物に乗ったが、これ程高く飛行したのは初めてだ。
そしてあの高みでも呼吸が出来る事に驚いた。」

「アレには人間の呼吸を助ける機械が装備されております。
ですから呼吸が出来、凍結もしないのです。」

「そうよの。
我が国の最新鋭の軍艦でかなり高い所まで登った事はあったが、
寒くて凍結し、息苦しくなりかけた事もあった。不思議とは思ったが。」

「高度が上がると人間は呼吸が困難になり、温度も真冬以上の気温に下がります。
よって凍結したり呼吸困難になったりするのです。」

ジョセフに説明してやると、彼はウンウンと納得した様に頷いてた。
そして王宮に入り、女王やオレを交え会談を再開。

「ジョセフ様、いかがでしたか？私はまだ乗せてもらった事は無いのですが。」

「マリアンヌ殿、一度は乗せてもらうべきだぞ。アレは。
余は本当に驚いた。あんな高みに上り寒さも息苦しさも感じぬとは・・。
素晴らしい体験であった。サイト殿、感謝する。」

ジョセフはそう言うとオレに再び頭を下げたのだ。
あのジョセフがだ。
そろそろ頃合だろうと思い、オレはマリアンヌにジョセフと二人だけで会談させて欲しいと頼み、
彼女達に退席してもらった。

「ジョセフ殿、今回のトリスティン訪問の真意をお聞きしても宜しいでしょうか？」

「フム・・。ようやく聞く気になったか・・。
だが、聞かずとも理解しとると見たが。」

「予想は出来ておりますが、推測ですので。」

「なら言おう。お主に会うのが真の目的だ。サイト・ヒラガ殿。」

やはり・・と思い、オレはジョセフと会談を進めた。

（オ・マ・ケ・♪）

セルド様の書き込みで思いついたＩｆな話です。

「ジョセフ殿よ。見よ。これがトリスティンの・・・・・。低空だぁぁぁぁっっ。」

「止めてくれぇぇぇ。ルーデルーーー・・・。」

「ジョセフ様、しっかりしてください。まだ落ちていません。多分。。」

「ワーハハハハハ。
王とは弱いモノだな。この程度でヘタれるとは。
ガーデルマンやヘンシェルを見よ。
ケロリとしてるでは無いか！」

（ヘンシェルも流されて来ました。その話はまた閣下の外伝にて。）

「お願いします。もうルーデルを・・。
いえ、閣下を侮蔑する様な発言は申しません。」

「まだまだぁぁぁぁっ。
私はモノ足りぬぞぉぉ。
・・・・。見つけた！！！
ヘンシェル、精密高度計を読み上げよ。
ガーデルマン、武装ハッチを開け。あそこにオーク鬼の大群を発見した。」

哀れ、オーク鬼は悪魔よりも恐ろしい閣下に発見されてしまったのです。
アルビオン大陸からはすっかりオーク鬼は駆逐されてしまい、
ハルケギニア大陸にオーク鬼は逃れてたのです。

ブギーブギーー！！
（悪魔が来た～～～！！伝説の怪鳥の悪魔だぞぉぉ。逃げろ～～～！！）

オーク鬼はアルビオンから伝え聞いた怪鳥の悪魔の出現に脅えてます。

「閣下～～～！オーク鬼を・・。」

「モチロン♪セ・ン・メ・ツだぞぉぉぉ♪」

ジョセフは閣下に見つかったオーク鬼の末路を思い、彼等の冥福を祈るのみでした。

そして数刻・・・。

「我、オーク鬼の大群を殲滅・・。
フー♪楽しかったぞ。
な？ジョセフ・・・。」

そこには・・。

ジョセフとシェフィールドが抱き合って泡を噴き失神してた姿があったのです。

「フム・・。つまらん。
ま、普通の人間などこんなモノか。
ガーデルマン、ヘンシェル。
機をトリスティンに向けるぞ。
やはりこの機では物足りぬ。
ライデンに乗り換え、アルビオンに帰る。
今日も特訓だ・・。」

その後ジョセフはルーデル閣下の写真を戦前の日本の御真影みたいに大切に王宮に掲げ、
閣下に貢物を欠かさない様になったとか・・。

（あくまでもＩｆの話です。閣下がもしジョセフを空燕に乗せたら・・の話です。）

翼よ、あれがトリスティンの灯だ。（オマケ付き♪）（後書き）

次回はジョセフとサイトだけの会談です。
単にジョセフを乗せただけでは面白く無いので、Ｉｆ話を加えました。
セルド様の書き込みで思いついたＩｆな話です。
実際のルーデル閣下はヒットラーも恫喝し、スターリンからも個人的に
懸賞金を賭けられる程、恐れられていました。
この程度なら温いと笑われてしまいそうです。。

無能王と才人（前書き）

ジョセフとの突っ込んだ会議です。

「サイト殿、貴殿の持つ怪鳥の技術には驚いた・・。
・・が。
アルビオンでの戦役にアレが使われたと余は解釈したが、間違っているか？」

「・・・。
ジョセフ殿、正解です。
正確にはあの他にも二種類の怪鳥、いや飛行機を用いましたが。」

「なるほど・・。ヒコーキと言うのか？あの怪鳥は。」

「ハイ。その通りです。
そしてジョセフ殿、貴殿がレコンキスタを操ってた事も判明しています。」

「・・・フム。さすがだ。
その通り、余がレコンキスタを操ってた黒幕だ。さて、サイト。
貴殿はどう余を処置するか？」

「別にどうもしませんよ。ジョセフ殿。」

「どう言う事か。余がハルケギニアを騒がせたレコンキスタの黒幕。
暴露したらガリアの地位は落ち、余の処刑が出来るぞ。何故そうせぬ。」

「既にレコンキスタは壊滅しました。
首領のクロムウエルも戦死、ブリミル教の地位はロマリアの消滅に

続き、
クロムウエルの事件で既にどん底。
これ以上の事件は必要ありません。」

「ではお前は余に何を求める。この犯罪者の余に。」

「おや・・。ジョセフ殿は王では無かったのですか？」

「いかにも、余はガリアの王、ジョセフ一世だ。」

「でしたらそれでいいでは無いですか。自分は異国の人間。
国のトップに意見出来る訳がありません。
いや、国の王は大変ですね。」

「クックックッ・・。
ワハハハハハハハ。
面白いぞ。サイトよ。
余の考えを斜めに逸らす人間はお前が始めてた。
どうだ。ガリアに来ぬか？」

「オレはニホンテイコクのサイト・ヒラガです。
二君に仕える事は出来ません。」

「それもそうよの。惜しいのぉ。
お前みたいな騎士が余に仕えてたら・・。
まあ、それは良い。ではレコンキスタの事は余も忘れよう。
して、サイト。お主の国はこのハルケギニアをどう思う？」

「オレなりの考えで宜しければ・・。」

「構わぬ。」

「では・・。

自分の国と比較すると三百年は遅れた世界です。

このハルケギニアは。

ブリミル教が蔓延してたせいでしょうか、

魔法至上主義で技術が六千年も停滞しています。

これは歴代の各国の王、そして消えたロマリアの怠慢です。」

「ウム。余も常々そう思ってた。

だがこの国の貴族や平民は長年魔法至上主義に慣れてしまい、普通と思い込んでおる。

これでは技術は育たぬ。そう思わぬか？サイトよ。」

やはり・・。

このヲッさんはキレる。

マリアンヌも少しはマシになったが、比較にもならぬ。

この世界では一番敵に回したく無い人間がジョセフだ。

「まったくその通りです。自分達もこの国に来て呆れてしまった事も多々。

王都であるにも関わらず、汚物が幹線道路を汚し、国民は字も読めぬのが大半。

軍もメイジ中心で、銃を平民兵士に持たせる事もしない。

正直に申しますと、我々の軍なら数日でハルケギニア全土を壊滅させるのも可能です。」

「・・・・。ウム。

確かに、余もそう思う。

お前等のヒコーキなら、その程度の事は容易いだろう。

今日は武装は見せて貰えなかったから分からぬが、さぞや強力な武装もあるのだろう?」

「その通りです。」

「なら聞こう。何故ハルケギニアを占領しない?その程度の事は軽く出来るであろう。」

「意味が無いからです。」

「意味が無いとは?」

「国とは何でしょう?ジョセフ殿。」

「国は地であろう。そして人・・。フム、分かったぞ。」

「さすがです。ジョセフ殿。」

「人が居ない国には意味が無い。」

「その通りです。土地に住む人間を排除した国はただの土です。国は人が居てこそ意味があるのです。我々は土を求めてるのではなく、国と人を求めてるのです。」

「お前の国は人と国を求めてるのだな?」

「その通りです。我々は国との取引で大きく育ちました。戦争も必要な時はありますが、それは相手がこちらに敵対してる場合のみ。我々の軍隊は平時は張子の虎です。

抜いてはならぬ刀です。
ですが錆びさせる訳には行きませんので、平時は訓練に次ぐ訓練を重ね鍛錬しております。
我々の偉大な将軍の言葉にこう言うのがございます。
「兵を百年養うはこの一戦のため。」です。」

「そうか・・。
確かに軍を持つと使いたがる輩も多々居るの。そしてその将軍の言葉は
余の心にも響いた。そうだな。
兵を百年養うのは万一の一戦に備えて・・。その通りだ。サイト殿。」

「そこまでお分かり頂ければ自分から言う事はありません。
無辜の民の命を尊び、国を大切にしてください。ジョセフ殿。」

「ウム。了解した。
余も退屈紛れに国をオモチャにしてた。その事は詫びよう。」

「自分達だけの話にしてすべてを藪の中に隠すべきです。
既にレコンキスタは壊滅。誰もジョセフ殿を知る人間は居ません。
自分以外は。」

「確かに・・。
のう、サイト殿。
貴殿の国を訪問する事は出来ないか?」

「へ??自分の国を・・ですか?」

「ウム。余も色んな国は見た。エルフの居るサハラも訪問した事も

ある。
だが、お主の国は、余の想像の埒外であろう？サイト殿。」

「・・・。確かにそうです。
ハルケギニアとは隔絶した世界なのは確かです。どうされます？」

「もし訪問出来るなら頼む。余は広い視野を持ちたいのだ。
そのためにも余の想像も出来ぬ世界を一度は見て見たいのだ。」

「分かりました。今すぐはムリですが、あちらとの調整が出来ましたらお迎えに上がりましょう。」

「おお、誠か。」

「ハイ。ただし・・。
今後は無駄な殺生、そして国民を苦しめる圧政はしない事。
訪問時には杖も武器も持たぬ事。
将来的にはニホンテイコクとの貿易もする事。
以上が条件と言いますか、お願いです、」

「分かった、約束しよう。サイト殿。
余も暴虐は今後二度と行わぬ。そして国民の信頼の持てる王となろう。」

「お願いします。それと・・。」

オレはタバサの件も切り出した。
彼女を保護し、既にシャルルの妻も治癒済み。
帰国させても弾圧はしない事を強く頼んだ。

「ウム。約束しよう。
本来ならシャルロットの捜索も今回は兼ねてたが、その必要も無くなったのぉ。」

「そうでしたか。ではタバサにも伝えておきます。
やはり母国で暮らすのが一番ですからね。」

「その通りだのぉ。シャルルにも悪い事をしてしまった・・。」

・・・。
オレは迷ったが一度だけ虚無の魔法を行使する事にした。
そう、記憶（リコード）だ。

「ジョセフ殿、一度だけ魔法を駆使して見ます。
害はありませんので、どうかお許しして頂けますか？」

「構わぬが。お主は魔法を使えるのか？」

「特定の魔法のみです。今から行う魔法は事実を思い出させるだけの魔法です。
害はありませんので、ご心配はしないでください。」

「良い。分かった。行使して見よ。サイト殿。」

オレは前世を思い出し、リコードと小さく唱え、ジョセフの土の指輪に魔法を放った。
指に光る土色の指輪からジョセフの心に記憶が流れこんできた。
そこには、シャルルがジョセフとの王権争いに敗れ、泣き喚くシー

ンが。
現実では、ジョセフに兄さん、おめでとうと言ってた弟が実は、嫉妬に狂い泣き喚いてた。
そしてお互いに歩み寄り、ジョセフはシャルルに謝り、シャルルは欲深い自分に嫌悪し、
お互いの心を癒してた。
やがてリコードの魔法は解けたが。。

「シャルル。俺達は世界で一番愚かな兄弟じゃな・・。」

そして自分が泣いてる事に初めて気づき。
「何だ、オレは泣いてるじゃないか。あれ程疎ましく思ってた神の力が出口を見つけるとは、
あっけなく、なんとも皮肉なものだ。」

「過ぎた事は帰りません。未来を良くし、過去の彼等に詫びましょう。」

「そうだな。サイト殿。」

サイトにそう告げ、ジョセフは何年ぶりになるか分からぬ涙を拭い、会議を終える事にした。

こうして困難だったジョセフの取り込みも何とか出来た。
彼の王政は過去とは別物の素晴らしい政治手段を取り出し、
後にはハルケギニア最高の国となったのだ。

無能王と才人（後書き）

ジョセフとの会議は終わりです。

貴族達の憂鬱（前書き）

G駆除が始まります。

貴族達の憂鬱

ジョセフが帰国してしばらく経った頃、マザリーニから電話が入った。

「サイト様、マザリーニです。ジツはまた相談が・・。」

「どう言う話ですか？枢機卿殿。」

「貴族が不穏な空気を出しております。そろそろ・・。」

「謀反の起きる時期ですね。彼等のメシの種を潰しましたから。」

「そうです。かなり利いたみたいで、彼等も焦りと怒りが激しいみたいです。」

「そろそろギーシュとアニエス、ワルドをお返しする時ですね。以前お話した通りに。」

「ハイ。新鋭銃士隊を編成。国軍の要とします。」

「彼等には徹底的に基本を叩き込みました。部下は当分は平民のみにします。」

「結構です。メイジ崩れでは逆らうでしょうから。」

「では、後程・・。」

マザリーニとの電話を終えるとオレはギーシュ達が訓練してる練兵

場に足を向けた。
アニエスも既にここの住人となって久しい。

「総員集合!!」

オレの号令で訓練に勤しんでたトリスティン軍の兵士、士官。
そしてワルド、ギーシュ、アニエスが並んだ。

「右へならえ!!直れ。番号!!」

イチ、ニィ・・・と番号を読み上げ全員の整列を確認。
ワルドが申告する。

「トリスティン派遣軍銃士隊指揮官、小次郎　宮元。以下五十名。
整列しました。」

（ワルドの日本名は宮元小次郎としました。さる剣豪の名前を合体。
ワルドは死ぬ程の大喜びでした。）

「諸君、いよいよ君達の実戦の日が来た。
魔法衛視隊を解散した事により、不満を持つ貴族がクーデターを企
てている。
君達に貸与した銃はこの国では最強の銃だ。
いや、日本を除けば世界最強の銃。それが・・。」

「「「「６４式小銃です。サイト・ヒラガ様。」」」」

「構造は熟知したな?今から実弾をお前達に渡す。
出来る限り薬莢は回収しろよ。それと・・。」

「「「「絶対に戦闘以外では人に銃口を向けてはならない。」」」」

「その通りだ。いいか。この銃はお前達の分身と思え。
保管には完璧に気をつけろ。敵に取られそうになったら・・。」

「銃に火を放ち爆発させます。」

「その通り。絶対に敵には渡すな。万一戦死した際には同僚が破壊しろ。
いいな。」

「「「「了解です。」」」」

M1ガーランドライフルでも良いとは思ったが、
既にM1は骨董品となってしまってたので、
余剰品となって久しい64式小銃を支給する事にした。
構造は難しい部類に入るが整備用の工具も内臓してる。
（銃床に内臓しています。）
訓練の合間に分解結合の訓練も徹底的に行い、
簡易整備なら分解して組み立てるまでに一分弱。
（簡易分解は引き金などの発射装置以外を分解します。）
精密分解でも五分あれば結合可能とした。

現役の軍の兵士には02式小型銃が基本。
銃弾は64式と同じく7．62mm銃弾を使用。
戦前の反省で、小銃も機銃も出来る限り統一した口径のモノを採用してるのだ。
戦前の軍隊の最大の反省点は陸海軍で別々の武器、武装を装備してた事だ。
海軍の零戦と陸軍の隼は同じエンジンなのに配管やその他が違い

、部品の融通も出来なかったとか、
機関銃の口径は同じでも、細かい点が違い補充出来ない。
あげくにはドイツからダイムラーベンツＤＢ６０１を購入する際に
陸海軍で別々に購入し、
「同じ国に二つも製造権利を売るつもりはないのに。」とヒットラーにも大笑いされた。
こんな愚作は二度と犯してはならぬ。
武器は統一したモノを作る。それも大量にだ。
航空隊を海軍のみとしたのもその反省からだ。
海洋国家には海軍航空隊のみあれば良い。陸しか飛べない航空隊は不要だ。

そして大量生産する事でコストも落せる。
調達も安くなる。
悪い点は無くなる・・が。
国内だけでは消費するのも厳しい。
やはり輸出もしないと。
その第一の輸出先がトリスティンとなるのだ。
アジア諸国の軍にも輸出開始を始めてる。
この世界での最初の輸出が武器なのは仕方ないだろう。
単独で軍用機も武器も製造出来る国は我が国しか無いのだ。
現在は。

話は脱線したが、宮元（ワルド）にオレは指示を続けてた。

「ワルド、、モトイ、宮元隊長。お前がトリスティン新鋭銃士隊の初代隊長だ。
基本は徹底的に叩き込んだ。新規のトリスティン軍を率いるのはお前だ。
頑張れ。」

「ハッ、サイト・ヒラガ中将。了解です。」

「ギーシュ、アニエス。お前等二人が各部隊の指揮官だ。いいか。敵には？」

「「徹底的な地獄を、そして躊躇はするな。」」

「その通り。いいか。敵対したヤツは一人も残すな。殲滅が基本だ。」

「「了解です。」」

「平民兵士諸君。君達も頼むぞ。キッチリと基礎は仕込んだ。そして胸に付けたバッジは絶対に無くすな。お前達の命でもある。」

「「「「了解です。」」」」

「宮元隊長達もだぞ。」

「「「了解です。」」」

「ヨシ。では即応体制を取り、連絡あるまでは城にて待機。各員、装甲機動車に搭乗。かかれっ！！」

そう言うが早いか、彼等は銃と銃弾、装備品を担ぎ機動車に搭乗。いよいよG退治だ。

オレは壇上から降りるとアニエスに近づき・・。

「アニエス、今回の騒ぎでお前の敵は消える。
絶対に闘いの最中では感情を乱すな。
闘いは常に冷静に戦え。お前が乱れると部下も乱れる。
いいな。」

「ハイ。サイト様。アニエスは既に敵など、脳裏から忘れてしまいました。
今は新鋭銃士隊の事で必死です。
頑張りますので見ててください。」

アニエスはそう言うと敬礼し、部下の待つ機動車に乗り込んで行った。

オレも指揮車に乗るか・・。

オレ達は機動車に乗るとトリスタニアに向かい、城で待機に入った。

貴族達の憂鬱（後書き）

G退治のためにようやくワルド達が活躍出来ます。

追伸、現実世界では８９式小銃が採用されてたのを知らずに書きました。

よってこの世界も０２式が最新鋭とします。

口径も変えません。

貴族達の憂鬱2（前書き）

腐れ貴族が暴れ始めます。

貴族達の憂鬱2

ここはヴァリエール元公爵の領地。
ここには多くの貴族が集まり、王家とニホンテイコクへの不満をブチ上げていた。

「諸君、いよいよ我々の真価を試す時が来た。
偉大なメイジである我々貴族を蔑ろにする今の弱腰王家を倒すのは我々だ。」

「「「「おぉおぉおぉ。」」」」

「諸君、私は元公爵、ラ・ヴァリエール。そして妻のカリーヌ。
君達には烈風のカリンと呼んだ方が良いかな?」

「「「「おぉぉぉ。生きた伝説のカリン様だ。」」」」

「ニホンテイコクを恐れるあまり、王家は我が娘達を犠牲にした。
我が娘、カトレアは病に斃れ、ルイズは獄門へと繋がれてる。
何故ここまでの仕打ちを受けなければならないのだ?
余は王国に不満を持ってる。
諸君も同じだろう。
余も当初は改易を受け入れたがやはり我慢がならぬ。
余が神輿となろう。

余を祭りあげ新生のトリスティン王国を作るのだ。」

「「「「「「おぉぉぉ。ヴァリエール様、バンザ～～イ。」」」」」」

「皆様、始めまして。カリーヌ。・・いえ、烈風のカリンですわ。
私も風のメイジ。今回の騒動では犠牲も出るのは覚悟の上です。
ですが、メイジの世界を取り戻すためにも、今回の騒乱は必須なのです。
皆様、私が支援します。
王家を倒し、私達のトリスティン王国を取り戻しましょう。」

「「「「「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ。烈風のカリン様、バンザ～～イ！！」」」」」」

スパイからの報告を聞き、オレは呆れてた。
首謀者がヴァリエール一家だとは。
カリーヌも率先して加わってた。
やはりカトレアの死で螺子が緩んだか・・。
まあ良い。

一番厄介なメイジも潰せるからな。
既に全軍にＡＭＦ装置を組み込んだバッジを渡してある。
あれがあれば魔法は発動しない。
ワルド・・。もとい、宮元の魔法実験でも確証が出来た。
さて、戦場は元公爵邸にするかな・・。

「枢機卿殿、スパイからの報告が参りました。」

「サイト様、どうなりましたか・・。」

「首謀者はヴァリエール元公爵。カリーヌとリッシュモンも加わってます。」

「改易させたのが不満だったのでしょうね。」

「まあこうなる運命だったのですよ。
何事にもすべてを丸く治めるなんて不可能です。
我が国でも、オヤジが政権を取った時は凄い騒ぎでした。
それこそ国がひっくり返りましたからね。
でも恐れてては前に進めません。
国を治める人間には断固とした決意が必要なのです。
犠牲を恐れ、相手に屈してはダメなのですよ。」

「ムムム。確かにそうですね。サイト様。
私も今まで甘い考えで内政を治めて参りました。

私も騒ぎの一因なのですね。」

「・・・。仕方なかったのですよ。枢機卿殿。
過ぎた事はどうしようもありません。今から・・変ればいいのです。
」

「分かりました。では女王陛下にも報告に行きますか・・。」

「ハイ・・。」

マリアンヌに状況を報告すると、彼女は一言だけ。

「そうですか。仕方ないですね。」で、あった。

ヴァリエールが裏切るのは確信してたのだろう。
カトレアが死に、ルイズは投獄。
そして領地の大半は召し上げられ公爵の位も返上。
誇り高き貴族ならば我慢がならぬのだろう。
不憫だが、国の礎となってもらうしか無いな。
ヴァリエール一家には。

スパイには常時ヴァリエール家を監視させ、
不穏な空気が出る前に出陣準備も整えた。
後はＧＯサインのみ。

なを今回の騒動に加担したのは、大手の貴族では
ヴァリエール家、リッシュモン家、ド・グランドプレ家が中心。
マリコルヌも今回の騒動に加担してる。
ギーシュには辛い闘いとなるだろう。

グラモン元帥は加担していない。
ギーシュが新鋭部隊の指揮官の一人となったからだ。
元帥は退役し、ギーシュの兄弟もいずれは銃士隊に入隊する事も確定してる。

モンモランシー一家も加担せず。
債務を国で清算し、食料を支援したので彼女の家族も医療関係の部隊で働く事になった。
医療関係のみは魔法の行使を許可してる。

こうして準備万端で腐れ貴族の面々を潰す時は、もうすぐ・・。

貴族達の憂鬱2（後書き）

次回はヴァリエール家、その他の貴族の最後です。

クーデター（前書き）

いよいよヴァリエール一族の最後です。

クーデター

サイトは僅か五十名の平民兵士達に演説をしてた。

「諸君、革命気取りのメイジ共がいよいよ蜂起した。
諸君は己の銃を信じ、同僚としっかりと支援を行い、一人一人排除すれば良い。
いいか。
ヤツ等は敵だ。排除するべき目標に過ぎぬ。
万一、過去の知合いでも感情を乱すな。
乱した者には死が待ってる。
死にたくないなら、心を無にして敵を倒せ。」

「「「「了解！！」」」」

「間もなく敵が蜂起をする時間だ。
絶対に敵に気取られるな。まずはヴァリエールを射殺。
特に奥方は烈風のカリンその人だ。
真っ先に射殺しろよ。では解散。
各自決められた配置にて命令が下るまで待機。」

「「「「了解！！」」」」

そう言うとギーシュ率いる分隊、アニエスが率いる分隊。
そしてワルド（宮元）の率いる分隊が解散し、各自決められた配置にて待機に入った。
今回の闘いには俺達は手は貸さない。

あくまでも指導と支援のみだ。
他国の革命には国が手を下すべきだからだ。
もちろん銃だけでは無い。
キャノン砲も貸与したし、手投げ弾も貸与した。
さすがに航空機はムリだが、メイジ相手ならこれでも充分だろう。
おまけにＡＭＦで魔法は完璧に無効化出来る。
今回のヤツラの任務は殲滅だ。
裁判の必要も無い位の証拠も揃ってるが、連中が生きてると色々と問題が起きる。
確実に殲滅して欲しい。
オレは特にワルドに頼んでた。

「ワルド、いや宮元。
お前には辛い作戦になると想う。
ヴァリエール公爵とは色々と縁があったと聞くからな。
だが、その気持ちは封印して戦って欲しい。
明日のトリスティンのために。」

「サイト様、顔を上げてください。
心配は要りませんよ。
僕も過去は過去と割り切っています。
国の改革には犠牲が必須なのは当然なのです。
それに彼等を放置してたら国が潰れるのは明白。
この貧乏なトリスティンを食い潰してる元凶ですからね。
彼等は・・。」

「そこまで分かってるなら何も言わぬ。
本作戦の指揮を宮元小次郎に委任し、オレは部下の奮戦を後方から見守る。
頼むぞ。宮元。」

「お任せください。サイト様。」

やがて敵の蜂起時間とな・・。
やはり昔のメイジ中心の作戦と見て良いだろう。
事前の偵察もナシにいきなり領から出て堂々と進軍を開始するのだから。
だがオレは黙って見てるだけだ。
ワルドに任せよう。

ヴァリエール領出口近くの森の辺りに部隊は身を潜めてた。
既にＡＭＦは作動済み。

「宮元分隊よりグラモン分隊、並びにアニエス分隊。
敵は間もなく射程距離に入る。
照準は要らぬが最初の一撃は先頭のヴァリエール一家に集注射撃を命ずる。
待て・・・。ヨシ。
一斉射撃開始。」

・・・その時・・・。
突然、頭上に轟音が鳴り響き、聞き慣れた雷電の爆音が・・。

「ワーハハハハハ。
遂に私が暴れられる日が来たか。
ヒラガ中将、支援に来たぞ。後方の連中は私に譲れ。」

何とルーデル閣下が単独で出撃。

貴族殲滅作戦に強制参加されたのです。

そして・・。

バリバリバリ、ズドドーーーンと言う轟音と共に先頭を行進してたヴァリエール元公爵が・・・。

「消えた。」のだ。

文字通り消滅してた。

もちろんカリーヌとエレオノールもだ。

彼等はアッと言う声も出す事も無く、この世から消滅してたのだ。

平民兵士は銃撃するのも一瞬忘れて、見とれてしまってた・・。

そして・・。

「各自、ライデンの攻撃に拠りヴァリエールは殲滅を確認。
各自自由戦闘に入れ。後方の平民兵士は無視しろ。
ライデンが始末するからな・・。
援護隊員同士とは絶対に離れずお互いを支援せよ。
各自自由戦闘開始!!」

平民兵士、そして指揮官のギーシュとアニエス、宮元は各自、敵の殲滅に入って行った。

戦闘は第一撃が大切と言うのは古今東西同じだ。

まずは度肝を抜く。そして編成が終わらない内に殲滅に入る。

宮元はオレの教えに従い、キッチリと裏切り者を殲滅してた・・。

（閣下の行動はさすがに想定外だったが、彼は誰も止められまい。）

蜂起してた貴族や平民兵士はライデンの一撃で大混乱となってたが、
それよりも・・。
メイジの魔法が発動しない事にパニくってる連中も多々。
バカなプライドを口走るアホも居た。

「何故だぁぁ。何故、オレの魔法が発動しないのだ?
あんな平民に撃たれ・・・・・る・・・なん・・・。」

最後まで言葉を残せずに斃れるメイジ。

「ワシを誰と心得てる。ワシはリッシュモンだぞぉぉ・・。」

アニエスは既にリッシュモンがタングルテールの悲劇の張本人と知らされてた。
だが彼女は日本軍の訓練に拠り、既に敵などどうでも良いと想ってたのだ。
ただ無言でリッシュモンを射殺。
次の目標に向かうだけだった。

ギーシュも彼の知るメイジを数人は射殺してた。

「ギーシュ、何故・・・ボクを撃つん・・・・・。」

かつて魔法学園で共に学んでたマリコルヌも射殺した。
彼も加担してたのか・・。
贅沢ばかりしてたから、耐えられなかったのだろう。
ボクも昔は薔薇とか身なりばかり気にしてたが。
今は国を守る事に必死だ。
悪く思うなよ。マリコルヌ。

彼はサイトの訓練に拠り、魔法は使う場に持ち込めれば強力な武器となるが、
それまでに撃たれれば終わりと知らされ、
今ではワルド、アニエスに次ぐ銃撃のプロとなりつつあった。
ターン、ターン。
長い銃身から軽く出る音の割には、敵兵は数メートルは噴き飛ぶ。
それが連射出来るのだ。
ギーシュは今や魔法よりも銃の破壊力に酔い痴れてた。

攻撃終了の知らせが来るまで、彼等は殲滅を続けてた。
後方では雷電に乗られた閣下が嬉々として平民兵士を殲滅・・。

そして数刻・・。

「各員戦闘終了。
分隊ごとに整列し、武器の点検、人員を把握せよ。」

宮元隊長の合図に拠り戦闘終了となったのだ。
被害は軽症が数人。
死者はゼロ・・。
あれだけの大軍を相手に闘い、五十人の平民兵士と指揮官のみで、
メイジの大群がだ。
驚いたが当然と言う感じもした。

「スゲーー。やはり６４式はサイコーだな。」

「本当だ。とにかく装填が早い。連発が出来る。
奴等が魔法を詠唱する前に簡単に息の根を止められたもんな。」

「それにしてもライデンは恐い・・。」

「アレに乗ってるパイロットは人間じゃ無いって話だぞ?」

「シッ、言うな。聞かれたら恐ろしい目に合うって伝説だぞ。」

閣下は満足されたのか、低空を飛行し部隊に敬礼をし、アルビオン海軍基地にと帰還された。
ガーデルマンの白髪がまた増えたと思うが・・・。

しかし闘いは勝った。

完璧な勝利となったのだ。

宮元隊長も満足げな顔だった。

「ヨシ、全軍機動車に乗り込むぞ。
その前に・・。」

「サイト・ヒラガ中将。ありがとうございました。
無事初陣を勝利出来ました。」

各隊員は見事な海軍式の敬礼をすると、オレも答礼をする。
こうしてクーデターを企てた大手のメイジはすべて殲滅。
特にヴァリエール家が消えたのは、今後の王家のためには良かった

だろう。
明日はマリアンヌと会談するか・・。

クーデター（後書き）

ヴァリエール家の最後です。
ＡＭＦの設定は、この世界では万能では無いが防御「だけ」は完璧と言う設定です。
色々と議論が出てますので、この世界のみの設定にします。
ご了承ください。

闘いの後始末（前書き）

クーデターの後始末です。

闘いの後始末

クーデターを殲滅した翌日。
オレと宮元（ワルド）は城に居た。

「マリアンヌ女王、早朝からの面会、本当に申し訳ありません。」
「いいえ、貴方達は裏切り者の始末をして来られた英雄なのです。気に病む事はありません。それよりも顛末はどうなりましたか？」

「ハイ。・・。宮元（ワルド）報告せよ。」

「ハッ。
ではコジロウ・ミヤモト指揮官が報告します。
マリアンヌ女王様。
昨日の夕刻、首謀者、ラ・ヴァリエール元公爵以下メイジ数百名がクーデターを企画してたのを察知。
我が銃士衛視隊五十名、そしてアルビオン海軍航空基地所属のライデン一機。
以上で敵を殲滅して参りました。」

「殲滅・・ですか？」

「ハイ。言葉通りの殲滅です。」

「被害は？」

「軽傷が数名出たのみで死者はゼロ。
完璧な勝利と断言して良いでしょう。」

「まあ、本当ですの？
あのカリーヌも？」

「第一撃で殲滅しました。ライデンに拠り・・。
彼女が一番危険な対象でしたので。」

「・・・そう・・ですわね。
私もカリーヌとは長い付き合いもありました。
彼女がこうなったのも運命なのでしょう。
今後の事を思えば、彼等の蜂起は我が国のためでしたね。
コジロウ・ミヤモト殿、サイト・ヒラガ殿。
本当にありがとうございました。おかげで平民も安心出来ると思います。
騒乱を防いで頂き感謝しております。」

マリアンヌはそう言うとオレと宮元に頭を下げた。

「コジロウ殿、いい名前を貰いましたね。」

「ハイ。僕の求めてた名前と思います。
サイト様が付けてくれました。
彼の国の有名なサムライの名前から由来してるそうです。」

「サムライとは？」

「我が国に古来居た騎士の呼称です。

刀を腰に挿し覚悟を常に秘めてた男達です。」

「覚悟とは？」

「ハイ。
覚悟を秘めたと言うのは、万一の事があれば責任を取る覚悟を持ってたのです。
常に白装束を肌につけ、身辺を綺麗にし、事あれば切腹する事も厭わぬ覚悟です。」

「切腹って・・。自分で自害されるのですか？」

「その通りです。
腹を切って詫びると言う諺もあるくらい、我が国の伝統となってました。
現代ではさすがに認められませんが、
それでもその覚悟を持つ者を武士（モノノフ）と言い尊敬されてます。」

「恐ろしい程のプライドの持ち主だったのですね。サムライと言う騎士は。」

「我が国自慢の騎士でした。」

宮元（ワルド）はサムライの話を聞くと心が高揚するのが止められない。
以前の自分はサムライ所か腐ったメイジになりかけてた。
もしサイト様と知り合わなかったら、レコンキスタに加わらなくとも、
今回の討ち取られたメイジの一人となってただろう。
アニエスやギーシュに撃たれてる自分が容易に想像出来る。
それが自分が指揮して、彼等を討ち取ったのだ。

悪い気分になるハズも無い。
これからも国に忠誠を誓い、日ノ本の国のサムライみたいになろう。
名前に恥じぬ男となるのだ。
何時しか宮元（ワルド）は拳を握り締め未来の自分を思い浮かべてた。

その後、サイト達はマリアンヌとマザリーニを交え、後始末の事を相談してた。

（現場は既に国軍により封鎖され、庶民や他国の人間は近寄れなくしてある。）

「では後始末はお願い出来るのですね？」

「ええ、お任せください。
一番大変な仕事をお願いしておいて、後始末まで任せては我が国の恥です。
キチンと綺麗にしておきます。
ご安心ください。」

「ヴァリエール、その他の領地は・・。」

「売却出来る土地や品物は売却し、ニホンテイコクに武器代金としてお支払いします。
その他は利益になるモノは売り払い、領地は国が没収します。
あ、もしご利用になりたい土地がありましたらご遠慮無く仰ってください。
ニホンテイコクに無償で割譲しますので。」

「基地の土地は充分です。あと、お願いなのですが・・。」

以前から気になってた王都の道の拡大と都市設計だ。
とにかく狭いし臭い。
このままでは首都として恥しいと思うのだ。
マリアンヌも気になってたらしく、それなら・・。

「では、お任せして頂けるのですか？
都市のリフォームを。」

「ハイ。この際です。
徹底的にお願いします。代金は・・。」

「あ、それでしたらヴァリエール領を頂けますか？
あそこなら色々と利用価値があります。
それで相殺させてください。」

「まあ、それで宜しいのですか？
でしたら是非お願いします。」

こうして旧ヴァリエール領はすべて日本に割譲されてしまった。
あそこはゲルマニアと国境が隣り合わせ。
ラグドリアン湖も近い。
水上機の発着にも良い土地だ。
今後の日本とトリスティンの良い架け橋にもなるだろう。

そしてゲルマニアとも・・。

闘いの後始末（後書き）

ヴァリエール一家の土地を頂く事にしました。

トリスタニア再生（前書き）

いよいよ街の再生に入ります。

トリスタニア再生

マリアンヌとの会見から数日。
トリスティンの城下町、
トリスタニアは町を上げての引越しにおおわらわだった。

「何だって俺達が引っ越さないといけないんだ？」

「何でも街を作り直すそうだよ。」

「確かに汚い街だもんな。
マリアンヌ様も呆れてしまったのだろう。」

「公衆トイレが出来てからは少しはマシになったけど、まだ臭いもんな。」

「違げーネー。ワハハハハ。」

引越しで大変なのに街の人間の声は明るい。
理由は明白。

メイジの魔法が免許制度と言うのになったからだ。

女王が許可した人間のみ魔法を行使出来る。
それ以外の人間は絶対に魔法を使ってはならないのだ。
無許可で杖を使った人間は処罰されてしまう。
そして平民への暴力は最高量刑で、死刑にもなってしまうのだ。

また過去に平民に暴虐したメイジは身分剥奪。
最低でも終身刑に処罰され、殺人などが判明した人間は死刑もあるのだ。
おかげで身に覚えのあるメイジはおおわらわで国から夜逃げを画策してるが、
国境に出来た警備隊に捕まり、強制送還されてた。
おかげでワルド達は多忙となってしまってた。

今までメイジの暴虐な魔法に脅えてたトリスティンの人々が明るくなるのは当然だろう。
その上に街を改革してくれるのだ。
文句を言うのは一人も居なかった。
それに伴い、トリスティン魔法学院も改革された。
貴族の子弟以外に優秀な平民の子供も学べる様になったのだ。
学院は当然魔法の勉強は無くなり普通の文字や数字、
歴史などの日本の学校制度に近い教育体系となった。
学院の教師も大半はクビになり、今では平民教師が増えた。

街から人が消えて数日。
城下町は立ち入り禁止となり、日本軍の機動車両が大量の建築機械を運び入れて来た。

「おーーい。遠慮は要らネーからガンガン壊して。」

土方のヲッさん・・モトイ、兵士が重機を扱い、城下町の街並みをすべて破壊して行くと、
たちまちのウチに、町は更地となってしまった。

まずは壊さないとね。
そして壊した廃材をすべて運び出してしまい測量開始。
城を起点に大通りから作成。
出来る限り暗がりが出来ない様に道を広めに作り戦車でもすれ違える広さの道を確保。

それにしても、元の街のムチャクチャな事。

数千年も変わらない街なんてこの世界だけだろう。

更地にしたら後は早かった。
まずは道を作成、舗装。
都市の基礎は道だ。
今までとは違う王城までの一直線の広い道を確保。
そして道路沿いに綺麗な店舗を主に作り、
住宅部はやや郊外に作る。道路沿いには側溝も作り、雨水汚水の流れも確保。
各店舗にはトイレも作り、道路で大小を垂れ流す事も無くなるだろう。
工期はおよそ三週間で終了。

街にはマザリーニとマリアンヌ、アンリエッタが護衛銃士隊を引き連れ、
新しく生まれ変わったトリスタニアの町並みを見てた。

「マリアンヌ女王様、新しいトリスタニアはいかがでしょうか？」

マリアンヌは開いた口が閉まらなかった。
道は広く一直線になり、遠方からでも城が見える様になってしまってた。

町の建物は今までとは違う。
平民の住む住宅も仮設住宅と言う建物になり各部屋にはフロとトイレ、窓が設置。
しかもトイレは水で流せれるのだ。
これが全部屋なのだから・・。
窓にはサッシと言う鉄の枠にガラスが入ってるのだ。

「何と言いますか・・。
この街に私達も住みたいと思いましたわ。サイト様。」

「時間が足りませんでしたので、仮設住宅としましたが、それでも今までの住宅よりは
遥かに耐久性もあります。
将来は団地と言う建物を作りますので、大量の移住にも対応出来ます。」

「これでも素晴らしいですわ。
これ以上の建物もあるとは・・。」

「人間は衣食住が満たされて始めて人間生活なのです。
まずは住宅を確保し、仕事に頑張り食と衣を満たせば良いのです。」

「そう・・ですわね。
今まで私達貴族は働かず、平民から暴利を得て暮らしていました。
それが今回の暴動の一因でもありました。
これからはメイジは基本的に居なくなります。
特権階級の貴族はすべて領地ナシの国家からの給与制度。
お金が欲しいなら懸命に働く様になるでしょう。」

「マリアンヌ女王、その通りです。

働かざるモノ、喰うべからずと言う諺が我が国にはあります。
贅沢したいなら懸命に働くべきです。
我々も国のために忠誠を誓い働いて今の国を作り上げたのです。」

「これからは私達の国もそうなりますわ。」

「頑張ってください。マリアンヌ女王。」

マリアンヌの横にはアンリエッタとマザリーニが頼もしそうにマリアンヌの顔を見てた。

トリスタニア再生（後書き）

トリスタニアの改造が終わりました。
突貫工事なので、主に道路と簡易住宅のみですが、それでも彼等には高級住宅だと思います。

新しい街　トリスタニア（前書き）

某番組風で。

新しい街　トリスタニア

懐かしい王都を離れて数週間。
トリスタニアの住民は今日、久しぶりの我が家へと帰って来ました。

「なあ・・。
何か凄い広い道になってるんだが。」

「ウン。
それに王城が違う城に見えるよな。」

住民はみんなでワイワイと話ながら懐かしい街へと近づいています。
すると・・

なんて事でしょう。

あの汚かった街がウソみたいに綺麗な街になってるのです。
店舗は別な世界の建物になってました。

「オイ。
あの看板はオレの店だぞ。」

「私達のお店も・・。」

もう大変な騒ぎです。
そこへ、王城からマリアンヌ女王が来たのです。

「トリスタニアの皆様。
新しいトリスタニアにようこそ。
基本的に以前に店舗を構えてた方は、同じ看板を設置しましたので、
ご自分の店が分かると思います。
そして住民の皆様。
ニホンテイコクのサイト・ヒラガ様が貴方達のための住居も新しく
作って下さいました。
すべての住居にはお風呂とトイレも設置してあります。すべてです。
ですので、今後は路上での大小の垂れ流しは絶対に禁止します。
綺麗にしてくれたサイト様への裏切りにもなりますので、取締りは
絶対にします。
皆様、新しいトリスタニアを大切にしてください。」

女王はそう説明し、注意を即すると住民の皆は・・。

「女王様、そしてニホンテイコクのサイト・ヒラガ様。
ありがとうございます。
町は皆で大切にします。
こんな綺麗な街や家にして貰えたのです。綺麗にするのは当然です
よ。
な？皆！！」

「「「そうだ、そうだ。大切にします。」」」

「皆様、では新しい家の鍵を渡します。
管理はキチンとしてくださいね。」

マリアンヌは各登録住民に自宅の鍵を渡す事にしました。
住民の皆は各自教えられた新しい我が家やお店へと飛び込んで行き

ました。

「わーー。素敵♪
今までみたいに外の蒸し風呂に入らなくてもいいのね。
それにトイレも凄い綺麗。
お水で流せるトイレなんて初めて。」

「こりゃスゲーー。
店が別物になってる。こんな店で売るモノがあるかな・・。」

などなど大騒ぎとなっています。

マリアンヌ女王はニコニコと住民の大騒ぎを眺めていました。
マザリーニ枢機卿も彼等を眺めながらポツリと・・。

「これからは我が国も良い国になりますね。女王様。」

「ええ、マザリーニ枢機卿。すべてサイト様の御慈悲ですわ。
本当にありがたい事です。」

アンリエッタも嬉しそうに彼等を眺めておりました。

「アンリエッタ、国民の笑顔が眩しいですわね。
私達は今まで彼等の顔を曇らせる事ばかりしていました。
ですが、新しい我が国はきっといい国になると思いますわ。」

「ええ、女王様。その通りですわ。
私もきっと立派な女王になれる様に頑張ります。
そのためにも色々と勉強をしませんと。」

「ええ、貴女も来月から新設のトリスティン高等学院に入ります。
あそこには今までとは違う新しい教育が始まっています。
多くの教師は日本からの派遣です。
彼等に色々と学び、新しい国の礎を作り上げてください。」

「ハイ。女王・・いえお母様。
アンリエッタも頑張って来ます。」

何とアンリエッタは新設の学院に入る事になったのだ。

さて・・・その学院とは・・・。

新しい街　トリスタニア（後書き）

次回は新しい学院の話です。

国立トリスティン高等学院（前書き）

新しくリニューアールした元トリスティン魔法学院・・跡です。

国立トリスティン高等学院

（解説はマリアンヌです。）

ここは元トリスティン魔法学院・・だった新しい国立トリスティン高等学院。
ここは国内の優秀な平民や貴族が学べる学び舎。
教わるのは数学、ハルケニア語、ニホン語、歴史、道徳、体育。そして・・
科学です。
魔法は自制出来る人間のみに許可される事になり、今は誰も魔法は使えません。
許可される魔法も水メイジのみです。
危険な風や火メイジは封印される事になりました。
土も非常時の災害の時のみです。

学院内では魔法を使える人間でも強制的に魔法が使えなくなる仕掛けがあるそうで。
学院の教師は国内から選ばれた教養も経験もある教師とニホンテイコクから
派遣された優秀な教師ばかりです。

以前の魔法学院時代の教師は資格ナシと判断され、すべての教師は辞職しています。
元校長のオールド・オスマンもマザリーニから色々と指摘され、
辞職して今はアルビオンの森で自炊生活してるとか。

新しい学院の校長には、とても・・・な人が抜擢されていました。

「ハーイ♪
可愛い私達の子猫ちゃん。
私がこのトリスティン高等学院の校長に就任したミ・マドモアゼルよん♪」

「校長先生、本名は？」

「ノンノン♪
私はミ・マドモアゼル♪
スカロンなんて名前では無いのよ♪」

「分かりましたぁぁ。スカロン校長先生。」

爆笑の渦の中で始まった新生トリスティン高等学院は校長、ミ・マドモアゼルこと、
スカロン校長です。
そして平民出身の教師やメイジ上がりの元貴族、ニホンテイコクから派遣された教師。
その他大勢の教師陣が五百人も居る平民を含む新生学院の生徒を指導する事になりました。
スカロンは「魅惑の妖精亭」と言う居酒屋の店長だったが、
その巨体に似合わないオネエ言葉に、優しい心遣い。
平民、メイジでも区別せずに扱える人物としてマザリーニ枢機卿の目に止まったのです。
普通の平民では、メイジを見るだけで脅えてしまうので使えないのですわ。

しかし魅惑の妖精亭でのメイジの叩き出し方が最高だったのを目撃した、
マザリーニから妖精亭も兼務して良いから、学院の校長に就任して欲しいと頼まれ、
スカロン校長の誕生となったのです。

なを、この学院には学院の元メイドのシエスタ、
ティファニア、そしてアンリエッタも居ました。

「シエスタさん、私もココで学べるのですね？」

「ええ、テファ。私達もサイト様のメイドを続けながら学生も出来るのです。」

「「楽しみですわね♪」」

なを魔法学院の生徒だが、過去に残虐な行為があった生徒は強制的に退学です。
そして罪を裁判で裁かれ、牢獄に投獄されてます。
親も同罪として、領地や爵位没収の上投獄させました。
おかげで善良な貴族以外は殆ど爵位を失ってしまい、善良な貴族も杖を国に指し出し、
庶民と共に農地で汗水を流して働く様になってたのです。
王宮でも女王（マリアンヌ）。
つまり、私が率先して、畑や農地を耕し自足の道を模索しているのです。
女王が働いてると聞くと、庶民も貴族も働かない人は居なくなるのが道理です。
学院の学費の払えない庶民の学生には、
週末や平日放課後の田畑などでの労働で対価を支払う方策も出来ま

した。
アンリエッタも女王（ワタシ）の方針で、自分で働き学費を納める事になってました。
彼女は不満だったのですが、多くのメイジも・・そして女王も働いてるのです。
文句は言わせませんわ。
当然の事ながら・・。

平民の学生には大好評でした。
お金が無いから学べないなんて悲しい事も今後はないのです。
まずは学び、知識を蓄える。
それがトリスティンの力の蓄積にも繋がるのです。

サイト様の日本帝國からは多くの教材や筆記道具、ノートなどの支援も頂きました。
おかげで生徒の負担も軽くなりみんな大喜びでした。
学院の教師にもキチンと教育を施してあります。
特に元メイジ。
彼等は今まで庶民＝犬猫同様と思ってました。
しかしこれからは庶民も貴重な国の力となるのです。
絶対に間違いを起こしてはいけなません。
彼等には魔法封印（ロボトミー）の治癒を施し、既に魔法の詠唱自体も忘れてました。
魔法を嫌悪すらしてたのです。
これで生徒の身も安全でしょう。
万一に備え、常に帝國陸軍の兵士が付近を警備し、生徒の安全を守ってます。
隠密に・・です・・が・・。

学院には魔法学院から、そのまま学院に残った元メイジの貴族もか

なり居ました。
彼等は学院の制度変更時に学院に残るか、辞めるか選択を迫られましたが、
魔法は使えなくても良いから残りたいと希望する生徒のみ、学院に残しました。
もっとも杖は没収しましたが。

「あーあ。
私の微熱も封印ね♪
でもタバサが帰国して本当に良かったわ♪」

「・・・魔法は道具。
別に使えなくても良いと思う・・・。」

「でも良かったわ。タバサも貴女のお母様も帰国して。」

「サイト様のおかげ。
彼の慈悲で私達は幸せになれた。
何とか恩を返したいけど、今の私では・・・。」

「そうね。
じゃ、私達で出来る恩返しと言えば？」

「この身体しか・・・。」

「じゃ頑張ってオンナを磨きましょ♪」

「・・・どうやって磨くかが分からない・・・。」

「私が付いてるわ。タ・バ・サ♪」

ギーシュ・ド・グラモンは王国銃士隊に入隊したため、学院には残れませんでした。
だがモンモランシーは残っていました。
やはりニホンの学問が導入されると言うのは、凄い魅力だったみたいですから。

「ああ、ギーシュ様は今も戦われてるのですね。
私は銃後を守れる様に頑張ってニホンテイコクの学問を修めますわ。
見ててください。ギーシュ様。」

その後、学院からは多くの知識を得た若者が国のために働き、後には日本でも働く者も輩出したのは後の時代の事です。

アンリエッタは今日も放課後には鍬を揮い、手に豆を作り田畑を耕していました。

「どうして王女の私がこんな苦労しなくてはならないの？
お母様・・・。」

彼女は嘆きつつも、鍬を使いドロに塗れ畑を作ってたのです。
後に彼女が王位を継ぐ時には「農土の女王、アンリエッタ」と呼ばれる様になるですわ。

国立トリスティン高等学院（後書き）

魔法学院のその後でした。
語りはマリアンヌに任せました。

魔法を使えないメイジ達（前書き）

魔法を使えなくなった人達の悲哀です。

魔法を使えないメイジ達

トリスティン近郊に住むある貴族が居ました。
彼は心優しいメイジでしたが、それでも長年使い慣れてた魔法を捨てる事が出来ませんでした。
彼は毎週の様にマリアンヌ女王に何とかして欲しいと抗議を続けていました。

「マリアンヌ様、〇〇〇〇でございます。
お願いですが・・・。」

「またですか？どうして貴方はそうも魔法に拘るのですか？
また他のメイジみたいに庶民でも害するつもりなら・・・。」

マリアンヌがゴゴゴゴゴ・・と異音を感じさせるオーラを出すと、
相手もビビリ・・。

「と・とんでもございません。
ただ私は何故、魔法を使ってはいけないのか？と
疑問に思いまして。」

「その件については、しばらく保留します。
今は多くのメイジの裁判で忙しいのですよ。
魔法を使い、多くの庶民を殺したり傷害を負わせた件だけで・・。」

相手は分が悪いと判断。

その日も・・・退散する事にした。

「チクショー。どうして魔法を使ってはダメなのだ？
私はただメイジの誇りを捨てたく無いだけなのに。」

○○○○はブツブツと呟きながら街を歩いて領地に帰って行きました。
（個人の馬車の所有は王家の許可が無い限り所有が禁じられたのです。馬は可。）

貴族の○○○○氏は、ブツブツと呟きながら領地まで歩いて帰ります。
この領地もヴァリエールの蜂起騒ぎの後ですべての貴族の領地が半分以上、
国に返納されたのです。
返納された土地は農民に貸与され、安い税率で国が管理しています。
それは○○○○氏の心も病んでしまう原因の一つだったでしょう。

「この国はどうなってしまうのだ・・。
平民には良い国になるかも知れぬが、貴族は住みづらくなる一方では無いか。」

彼は領地へと帰りながらある森に差し掛かっていました。
すると・・。

「ヤイ、そこの貴族。オレ様達に有り金を全て差し出せ！！」

山賊、それもメイジ崩れの元貴族の成れの果てです。
十人程のメイジ崩れが山賊となる事は最近のトリスティンの兆候です。

彼等も魔法に魅入られた人達か・・。

ですが、それは別な話。

彼は全く武装していません。
まさか襲われるとは夢想もしてなかったので、護衛もいません。
彼はパニックとなってしまいました。
助けてくれと頼むしかありません。
だがヤツラは目撃者はすべて殺害してた残虐なメイジ崩れ。
それも風魔法の使い手だったのです。

「ユキピスタデルウインデ。」

彼がそう言うと、メイジ崩れの姿が分散、分身したのです。
そう一番恐ろしい偏在魔法です。

もう終わりだ。
彼は観念し、殺すなら殺せ。
そう思い、目を閉じて最後の時を待ちました。
すると、そこへ・・・。

ターン、ターン、ターン・・。

軽く響く音がしたかと思うと、
偏在魔法を使ってたメイジ崩れが血反吐を吐き吹き飛んでいたのです。

「ど、どうなってるんだ?何故ヤツは・・。」

そこへ・・。

「コチラ二番分隊。メイジ崩れの山賊部隊、十数名を射殺しました。敵は元魔法学院教師、ギトー、その他と思われます。」

緑色のまだら模様の服装をした兵士が彼を救ったのです。

「き、君達は？」

「私達はトリスティン王国、衛視銃士隊二番隊です。隊長はギーシュ・ド・グラモン殿です。」

彼はそう言うと、ピシッと私に見事な敬礼をしてくれたのです。

隊長がギーシュ・・。

近所のグラモン家のギーシュ君か・・。

彼も魔法を使えなくなって、さぞやガックリしてるのだろう。

私はそう思い込んでた。

だが、ギーシュ君が現れ、それを否定する発言をしたのには心底ビックリした。

「おお、ギーシュ君かね？君の近郊に住んでた〇〇〇〇だよ。今日は君の部隊のおかげで助かった。危うくメイジ崩れの山賊の餌食になる所だったよ。」

「ご無事で何よりでした。間に合って良かったですね。遅れましたが、私はトリスティン衛視銃士隊二番隊隊長、ギーシュ・ド・グラモンです。」

彼はそう言うと見事な敬礼をしてくれた。

昔のギーシュ君はどちらかと言うと、ナンパなボウヤだったが、今の彼は・・。

まさに軍人だ。
綺麗に鍛え上げられた肉体に見慣れぬ銃を肩に掛けてる。
羨ましい・・・。そう思ったが、僅かに残ってるメイジとしての誇りがそれを言わせず、
彼にこんな質問をしてしまった。

「ギーシュ君、君はどうして杖を捨ててでも戦えるのかね？
メイジとしての誇りは捨ててしまったのか？」・・と。

「○○○○さん、僕は誇りは捨ててませんよ。
ただ闘いの活力を魔法では無く銃に変えただけです。
詳しくは軍規なので言えませんけど、この銃は魔法よりも素晴らしいのです。
魔法でも出来ない力を我々に与えてくれてます。
そしてその力で我々は国を守っているのです。」

彼はそう告げると、私に背を向け王都に向けて隊を整えると帰還して行った。
見事な整列ぶりに私は感心してしまってた。
彼は・・・銃で国を守ってる。
そして最強と言われた風の魔法使いが・・・一撃で平民兵士に躯とされたのだ。
マリアンヌ様の言われる通り、魔法はもう古いのだろう。
私は明日からの自分の行く末を考え、領地にと帰って行った。
後に私も銃士隊に志願。
ギーシュ君の部下となってた。

魔法を使えないメイジ達（後書き）

○○○○と言うのは貴族を特定しないための処置です。
後に複数の元貴族も志願しますので。

ジョセフ・・。（前書き）

いよいよジョセフを日本に招待します。
ついでにマリアンヌとアンリエッタも。

ジョセフ・・。

以前から頼まれてたジョセフの日本招待だが、遂に連れて行く事が決まった。
オヤジの一言も利いたのだ。

「サイト。
ガリアの王、ジョセフ一世を日本にどうして連れて来ないのか？」

「判断が出来ないのです。彼は・・・。」

「前世は前世だろうが。
今は我が国は味方が一国でも欲しいのだ。
オレが相手するから心配はするな。
連れて来い。才人。」

国のトップがそう決めたなら有無も言えない。
オレはガリアに連絡し、十日後に日本に連れて行く。
護衛は少な目にしてくれ。
そして武器は持たせるな。と頼んでおいた。
ついでだ。
マリアンヌも招待するか・・。

遂にサイト殿の国に行ける日が決まったのだ。

「ミューズよ。
遂にサイト殿の国、ニホンテイコクへと行ける日が決定したぞ。
彼の国の王に対する貢物を準備せよ。
重さの制限があるらしいから、軽めで価値のあるモノが良いだろう。
急げ、日は少ないぞ。」

ジョセフ様は変わられた。
あのニホンテイコクの怪鳥に乗られてから・・。
でもこう言うジョセフ様もイイかも♪と思う私が居た。
ジョセフ様は子供みたいにキラキラした目で怪鳥の事ばかり話される。
私にもあの目を少しでも向けてくれたらいいのに。
私も変わるべきたろうか・・。

私達は二人でニホンテイコク行きの荷物や贈り物の準備に数日を掛けた。
どんな国なのだろう・・。

そして数日後・・。

ジョセフを迎えに行く前に、マリアンヌ、アンリエッタ、シエスタとテファニアを
乗せておいた。

「サイト様、私も連れて行って頂けるのですね。
ニホンテイコクの噂は聞いてましたが、とても楽しみですわ。」

「本当はマザリーニ枢機卿も連れて行きたかったのですが、国のトップが留守になるのは・・。」

「そうですわね。また機会がありましたら彼も是非・・。」

ジョセフも待たせて居る事だし、そろそろガリアに向かうとするか。
ガリアの兵士には攻撃するなと宣告しておいてくれたみたいだが。
マリアンヌ達を乗せ、離陸した空燕は万一の攻撃を避けるために高度を一万五千にする。
この高さなら竜にも襲われる事は無いだろう・・。
順調に飛行を続け、やがてガリア上空に達し、ジョセフの待つ首都、リュステスへと到着。
警戒を続けながらヴェルサルティル宮殿へと着陸態勢に入る。
ジョセフから通達があったのか、リュステスの市民は大騒ぎはしてたが、
攻撃とか受ける事も無く市民注目の中、宮殿の広場へと空燕を着陸。

「フー・・、何とか無事に降りれたな。
護衛兵士、機を守る様に警戒は解くな。
オレはジョセフ殿を迎えに行く。」

機から降りると既にジョセフがミョズ姉さんと一緒に機の外に待ち

構えてた・・。

「おお、サイト殿。ようやく待ち焦がれてた日が来たな。
余は嬉しいぞ。
さっ、早速乗せてくれ。」

ジョセフは何やらデカイ荷物を二つ程機に搭載させ、嬉々として機に乗り込んで来た。
同乗するのはミョズ姉さんのみ。
もちろん杖は持ち込んでいない。

「ジョセフ様、いよいよ未知の国に行かれるのですね。」

「ウム、ミューズよ。今までの世界とは別の国と思え。
我々とは違う世界だ。
今までの常識は捨てて見るが良い。
余も今までとは違う世界にドギドキしてるのだ。」

ミョズ姉さんは相変わらずクールだが、ジョセフはドキがムネムネしてるみたいだ。

「ハルケギニアの皆様、今からニホンテイコクへ向かいます。
高度を一万五千メイル、速度は音の二倍で飛びますので飛行中もしっかりとベルトを
締めてください。飛行時間は約一時間弱です。
音の壁を越える際に衝撃波が起きますので、お手元の耳当てを装着してください。
では・・・離陸します。」

客室のアナウンスを終えると空燕を起動、空へと飛び立った。

地上ではガリアの民が大騒ぎしてるだろうが・・・。

ジョセフ・・。（後書き）

ジョセフ達を日本に招きます。

ジョセフＩＮ　ジャパン♪（前書き）

いよいよジョセフが日本に立ちます。

ジョセフＩＮ　ジャパン♪

ジョセフとシェフィールドを乗せたオレは空燕を上昇させ、ある程度の高度に達した頃、
翼を飛行状態に戻し、徐々に高度を取り始めた。
やがて高度一万五千メートルに達する頃、速度は音速の二倍になる。
マッハを越える時に地上にも衝撃波が届いたかも知れぬが、
高度も高いので音以外の被害は無いと思う。

「のう、ミューズよ・・。」

「ジョセフ様、凄い速度でハルケギニアが・・。」

「遠ざかって行くのぉ。それに地上が丸く見えるとは・・。」

「私達の船では不可能な事ですわ。」

「それにしても音の壁を越える時の波動は凄かった。
アレが音の壁と言うモノなのだな。」

「もう言う言葉を思いつきません。
彼の国には絶対に敵対してはならないと言う事は理解出来ましたが。」

「ウム。余もそう思う。
味方になれば心強いが敵対したら・・。
恐ろしいとしか言い様が無い。滅ぼされたトリスティンの貴族が不憫に思うぞ。」

「彼等は無知だったのです。
彼等はニホンテイコクの力を知らなかったのでしょう。」

「愚かな事だな。知らぬと言う事は。」

「私達ももう少しで、その愚か者になる所でした。」

「ウム。余もだ。
少しでも時の流れが狂ってたら余も愚か者の仲間入りしてたのは確実。
運が良かったとしか言えぬのぉ。」

ジョセフは雲の彼方に消えて行くハルケギニア大陸を眺めながらしみじみと自分達の運に恵まれてた事を感謝してた。

音の壁を越えた以外は派手な機動はしていなかったので、割と平穏な旅となってたが、
やがてそれも終わりに近づき・・・。

「客室の皆様、間もなくニホンテイコクのハネダキチに到着します。乗員の指示があるまでは席を立たず、ベルトも締めたままでお願いします。」

サイトのアナウンスがあり、乗客は全員心得たとばかりにコクンと頷く。
やがて羽田海軍航空隊に到着。
機を列線に誘導してもらい駐機場に停止。
エンジンを止める。
やはり他国の王族を乗せると気遣いが違うな・・。
機内を見るとジョセフとシェフィールド、マリアンヌが呆けてる。

高速移動に疲れたのだろうか？

「ジョセフ殿、マリアンヌ様、そしてシェフィールドさん。
お疲れ様でした。無事ニホンテイコクに到着しましたよ。」

「・・・・。
そうか・・。いや凄い速さで着いたので少し呆けてた。
済まぬ。これからどうすれば良いか？」

「とりあえずこの国のトップ、自分の父親と面会をお願いします。
それから宿に移動し、明日から国の見学を行います。」

「フム・・。それは楽しみだな。
では案内をお願いする。サイト殿。」

マリアンヌとアンリエッタも同意してもらい、機から降り、彼等の荷物を
迎えのリムジンカーに載せ、オヤジの待つ官邸まで移動する事にした。

官邸に着くとオヤジが玄関で俺達を待ち構えてた。

「ようこそ日本帝國へ。
ガリア王、ジョセフ一世殿。
トリスティン王国女王、マリアンヌ殿。
私が日本帝國の大統領、ハヤト・ヒラガです。
サイトの父でもあります。」

そう言うとオヤジはマリアンヌとジョセフに握手を求めた。

ジョセフも愛想笑いを浮かべ握手をし、マリアンヌも握手を交わした。
帰国して驚いたのだが、オヤジめ。
明日、相模湾で海軍演習を行うってよ・・。
オレも当然参加だな。

「サイト殿、海軍演習とは?」

「軍艦で行う演習です。実弾発射と廃艦を使った撃沈訓練も行うそうです。」

「む・・。本当か。それは是非拝見させて欲しい。」

「貴方達の来日に合わせて企画された訓練です。
当然見て貰います。明日は一日潰れますので、明後日からですね。
日本の見学は。」

「日伸びになるのは仕方ないか・・。
だが海軍の訓練とやらも楽しみだ。明日も頼むぞ。」

「明日はオレも参加しますので、オヤジの指示に従ってください。」

「サイト殿も訓練に参加されるのですか?」

「ハイ。やはりこう言う訓練には参加しておかないと軍人として示しが着きません。
明日はオレも飛びますので、軍艦から存分に見ててください。
素晴らしいショーになりますから。」

その夜はオヤジがジョセフ達を歓待し、オレは基地へと移動。

明日の訓練のブリーフィーリングを行ってた。
さすがに実戦さながらの訓練の前の日位は落ち着いて寝たいしね。

翌日、ジョセフ達は驚愕の一日となると思う。

ジョセフＩＮ　ジャパン♪（後書き）

富士の総合火力演習と並んで世界的にも評価の高いのが海自の演習です。
特に艦隊機動訓練は世界屈指です。
この世界での海軍は次回紹介します。

帝國海軍（前書き）

いよいよ海軍の総力を発揮する時です。
演習ですが・・。

帝國海軍

ジョセフは朝から興奮してた。
今日はいよいよ彼等の実力の一部を目で確認出来るのだ。
興奮しない訳が無かろう。
サイトは昨夜から訓練の準備のため、官邸から離れ基地へと舞い戻ってた。
サイトの父、ハヤトの案内で我々は海軍ヨコスカ基地へと出かけ、そこで巨大な艦艇に乗艦したのだ。

「これは・・・。凄い。
まさに浮かぶ城、いや戦う兵器なら要塞ですな。
ハヤト殿。」

ジョセフはオベッカでは無く本心からそう思って彼に聞いた。

「これは我が国の最新鋭艦、戦艦大和です。
先代の大和が撃沈されて数十年。
ようやくこの名前を受け継ぐ艦を建造出来たのですよ。
機関はハルケギニアから購入してる風石発電で三十五ノットの速度を誇ります。
搭載してる石の力が尽きるまで動きますので、原子力以上の能力を持ちます。
主砲は先代以上の５０サンチ主砲を三連装。これを三基搭載。
非常時には高角砲にもなります。
また艦隊の壁ともなりえる様に異常な耐久力も持たせバリアも装備。
我が国の新しい浮かぶ要塞です。」

何とも・・。凄まじい話だ。

そして風石での機関とは・・。

「我が国から輸出してる風石が役立ってるのですね？」

「その通りです。おかげでクリーンなエネルギーを得る事が出来ました。
感謝しています。マリアンヌ様。」

「いいえ。
私達もニホンテイコクには本当にお世話になってますから。
お互いに持ちつ持たれつでこれからもヨロシクお願いします。」

「コチラこそ・・。」

口惜しい。
もう少しサイトと早く知り合えてたら余もサイトの父と交流を深めれただろうに。
過ぎた事は仕方ないが、わが国からも風石程度なら輸出に応じて貰えるだろう。

「そちらの国ではただ浮かばせるためだけに風石を利用してると聞いていますが、
我が国では風石で膨大な電力を発電。
それを動力に用いております。
詳しくは後程・・。そろそろ艦が動きますので、ブリッジへと案内します。
艦長、案内を頼みます。」

そう言うとこの艦の最高指揮官と言う艦長、有賀正宗と言う提督が彼等を見晴らしの良い

ブリッジへと案内してくれた。
そして彼等の言うにはこの艦は実に十万トンを越えると言う馬鹿げた大きさだとか。
それが三十五ノットもの高速で海原を疾走するのだ。
凄まじいとしか言い様が無い。

やがて艦隊が動き出すと「軍艦マーチ」と言う勇壮な音楽が流れ出し、
周囲の平民が歓喜の声で艦隊に手を振り旗を振り回してた。
この様な艦隊なら我々でも歓喜の声を上げるだろう。
ニホンテイコクの臣民が羨ましいと思う。

だがそれも序の口だった。
大海に出ると、平べったい船や様々な武装を搭載した艦。
それらが整然として隊列を組み疾走を始めたのだ。
小型の船でもこの体系を保つのは難しいだろうに。
それを巨艦が行うのだ。
驚かない方がおかしい。
やがて平べったい船からヒコーキが多数離陸を始めてた。
あれは彼等のヒコーキの発着場か？

「あれは空母と言います。
先代の赤城が撃沈され、ようやく再建出来た我が連合艦隊の要です。
空母、赤城、加賀、蒼龍、飛龍です。
いずれも十万トンの巨艦です。」

あの平べったい船が十万トンとは・・。
凄い巨体だ。そんな艦が何隻も居るとは・・。
それに搭載してるヒコーキだけでも我が国を簡単に滅ぼせるだろう。

もう我々は敵対する意思の欠片も残っていなかったが、終いには呆れてしまってた。
ここまでの戦力が必要なのか？と・・。

「呆れてしまいましたか？ここまでの戦力が必要なのかと・・。」

「イヤ・・。ウム。確かにそう思ってしまってた。済まぬ。ハヤト殿。」

「呆れるのが普通でしょう。
ですが我々の国では戦うためではなく、平和維持のためにもこの戦力は必要だったのです。
御止力として必要だったのですよ。」

「サイト殿に聞いたハリコの虎とやらか？」

「その通りです。軍隊は平時はそれで良いのです。張子の虎で。
ですが、他国からは脅威と見られます。あの国に攻めたら怪我をするぞ！とね。」

「そう・・ですな。
確かにコレは恐いです。
我々の世界ではゴーレムと言う巨大な人形を魔法で作り上げる魔法がありますが、
アレでもここまでの恐怖は持てません。
数の力でも不可能です。
もしこれらが敵対したら・・。
ゾッとします。」

「それこそが軍隊の最大の仕事なのですよ。

戦わずして勝つ。これ以上の戦力はありません。
犠牲は敵味方ゼロです。」

「そう・・ですな。ハヤト殿。
我々は正面からガチで戦う事のみを考えてた。戦わずして勝利出来るなら、
この程度の兵器も素晴らしい役目を果たせるだろう。
いや、これを見ただけでもニホンテイコクに来た甲斐があったと言うモノよ。」

「ジョセフ殿、まだまだですよ。今からが本番です。」

そう言うと海の中から巨大な魚が出て来たのだ。
何だ??アレは・・。

「アレは潜水艦と言う軍艦です。
普通は海の中に常時潜り、海上の船を見張ったり攻撃するための船です。」

何と・・。
水に潜れる船など聞いた事も無い。
アレでは気づいた時には攻撃されてしまうでは無いか・・。
余はどうしたら、ニホンテイコクに勝てるか考えていたが。

どう頑張っても惨敗は確実。

敵対した瞬間に終わりだ。

もう考えるのは止めて彼等の祭典を楽しもう。

余はそう思って思考を停止させた。
しかし・・・。
凄まじい祭典であった。

ハルケギニア全土でもココまでの武器展示博覧会は不可能だろう。
ヤマトと同型のムサシと言う軍艦が同時に射撃を開始した時は耳当てをしてても、
心臓が止まりそうになった。
そして彼方に見えた水柱の凄まじい言。
後で聞くと、高さが五百メイルにも達する水柱だったとか。
そしてヒコーキ部隊の威嚇攻撃飛行。
ミサイルとか言う武器で標的を粉々にしてた。
最後が廃棄艦艇を使った撃沈訓練。
最初はヒコーキのミサイルで施設を破壊。
最後がムサシとヤマトの同時砲撃で。。。
粉々となって消えてた。
轟沈とか言うらしいが、余は消滅と表現したい。
余はガリアがニホンテイコクの属国となっても良いと思ってしまってた。

この様な国とは比較するのもアホらしい。

勝てないなら取り込んで貰うべきだ。
幸いにも彼等は敵対しない国には寛容みたいだからな。
いきなり取り込んで貰うのも考え物だが、とにかく勝てる要素が全く無い国とは、
出来る限り友好を保つのが国の長としての役目だろう。
隣のマリアンヌも完璧に呆けてるわい。

演習を終えた艦隊はヨコスカ基地に向けて帰還を始めてた。

（フフフ。
ジョセフもマリアンヌも呆けてるな。
計算通りだ。
コレで彼等も敵対する考えは皆無となろう。
後は友好をいかに保つか・・だ。
ガリアとの貿易も考慮しないとな。）

隼人は脳裏で彼等との交渉方法を考えてたのだ。

帝國海軍（後書き）

ジョセフがどう変わるかが今後の話の重大な要です。
演習を見せたのは良い兆候になると思います。
この艦艇や海軍はあくまでも架空世界の話です。
現実とは違います。

その夜・・・・（前書き）

ジョセフを接待（ハカイ）します♪

その夜・・・・

ヨコスカ基地を離れた我々は官邸に向かい、ハヤト殿と別れホテルへと向かってた。
ホテルに着くと女性陣はサイト殿の母君が接待する事になり余はサイト殿二人で飲みに行く言になったのだ。
さすがに一国の王が街中で飲むのは不可能なので、サイト殿が歓待してくれるとか。

「ジョセフ殿、今からロッポンギと言う飲み屋街に行きますが、ジョセフと呼び捨てにしても構いませんか？
堅い飲み屋では無いので、堅苦しい会話は避けたいのですよ。」

「サイト殿、いや・・サイト。構わぬぞ。余・・いやオレも呼び捨てにしよう。」

「ＯＫです。ジョセフ。女性は苦手ではありませんよね？」

「万国の男性が女性を嫌いな男が居るモノか。」

「でしたらお任せください♪楽しい場所に連れて行きますから♪」

サイト殿はそう言うとタクシーとか言う馬車に余を乗せ、ロッポンギと言う街に向かった。
何でも大人の男の楽園だと言うが・・。

「あ～～ら、サイトちゃん。お・ひ・さ・し・ぶ・り♪」

何と、凄い髪型の姫君が多数居る店だ。
余のシェフィールド程では無いが。

「ジョセフ、ココはキャバクラと言う大人の楽園だ。
疲れた男達が心を癒す場所だぞ。
ま、飲め。そして騒げ。
ただしお触りはＮＧだからな。」

彼はそう言うと隣に座った女性とギャハギャハと下品に笑いながら飲み始めた。
確か、彼は未成年だったのでは??
ま、堅い言は言うまい。
余も罪人だったのだ。ハルケギニアでも最大の・・。

しかし、空気を読まぬサイトに思考を邪魔されてしまった・・。

「あーーもう、ジョセフ。
いい加減にしかめっツラは止め!!
さっ、アイちゃん、ジョセやんに飲ませてやって。
や・さ・し・く・ね♪」

「もう♪サイトちゃんったら。
分かってるわよ♪
ね？青い髭が素敵な異国のオジ様♪今日は楽しく飲みましょう。
私はアイです♪乾杯しましょ♪
カンパ～～～イ♪」

余は異国の淑女と飲む事になった。

最初は余も堅苦しかったと思う。
が・・・。
ココは何て・・・・楽しいんだぁぁぁ♪

「ぐへへへへ。アイちゃんとやら。
余も色んな酒は飲んだが今宵の酒は格別じゃのぉ。
所でそのチチは入れ物でも入れてるのか？」

「もう♪ジョセやんったら。す・け・べ♪
天然モノよ♪」

「うりうり、ココがホンモノか余にも見せておくれ。
ぐふふふふふ♪」

「ジョセちゃん、ココはでは・ダ・メ・よ♪」

「そうか。ではお持ち帰りしても良いのかな？」

「もう、ジョセちゃんったら♪」

な、何かジョセフが壊れたんだな・・。
いきなりキャバクラに来てブッ飛んでしまったんだろうか？
だが楽しそうだからいいんだな。

「相棒、バカは一人でも増えればＯＫジャン♪
オレっちも飲めたらいいんだがね。仕方ネーから酒の匂いで我慢しとくぜ。」

「デルフ、そうだな。お前も飲めたら面白いんだけど。

アイちゃん、デルフの前に酒を置いてやって。
コイツは無機物の刀だけどオレのツレだから。」

「アラ?デルフちゃんって言うの?
刀なのに喋るなんて面白いわね。私はアイよ♪
お酒の匂いでいいのかしら?」

「アイちゃん、オレッちの名前はデルフリンガー様。
相棒の戦友だぜ。ヨロシクな♪」

それからはもうメチャクチャ。
ボーイが延長しますか?と問われれば当然♪と答え、閉店までの大騒ぎ。
そして盛り髪の姫君達と一緒に二次会、惨事会と朝まで飲み続けたのだ。
翌朝、ヘペレケでホテルに帰ると、シェフィールド、シエスタ、テファニア、アンリエッタが
オニみたいな顔をして待ち構えてたんだな・・。
ジョセフはシェフィールドに死ぬ程殴られてた。
オレはテファ、シエスタ、アンリエッタにボコ殴り。
優しくして欲しいんだけど・・・と、思いつつ、眠気と痛みで気絶してしもた。
楽しかったから。ま・いいか♪

ＳＩＤＥ　女性陣より・・・。

（シエスタ）「サイト様ったら、私達を放置して朝までどこで遊んでいたのかしら？」

（テファ）「くんくん、これは！！！他のメスの匂いがします。まさか！！」

（シェフィールド）「私のジョセフ様が他のメスと・・・。」

（アンリエッタ）「男の方は仕方ない事と母が申してましたわ・・・。」

な、何かバキバキと折れる音がするのですが・・。

オレとジョセフは彼女達の気の済むまでボコられてしまいました。

まる。

その夜・・・・（後書き）

ジョセフとサイトの大騒ぎの夜でした。
キャバは男のネズミーランドです。

そして・・。（前書き）

いよいよ帰国です。
日本編はシエスタ達と前回していますので端折ります。

そして・・。

ジョセフとオレがボコられた後、目覚めるとそれぞれの淑女に囲まれていた。
さすがに彼女達もヤリ杉と思ったのだろう。

「サイト様、先程は本当にすいませんでした。
怒りに我を忘れてしまい、貴方様に何と言う事を・・」

「シエスタ、いいよ。
オレが二人で遊んでたから寂しかったんだよね。
アンリエッタもテファも・・。
今日は皆で色々と買い物をしたりして遊ぼう。」

「「「ハイ。」」」

「ジョセフ様、使い魔にあるまじき行為をした事を深くお詫び申し上げます。」

「いゃ、ミューズよ。構わぬ。
この国では余もただの人間。お前の普通の女らしい一面も見れて面白かったぞ。」

「ジョセフ・・・様。」

「今日は皆で買い物とかするらしい。
余達も楽しもうぞ。」

「ハイ、ジョセフ様。」

俺達は目覚めて食事を取るとジョセフを誘い、街中での買い物へと誘った。
もちろん彼女達も同伴だ。
今度置き去りにしたら命が危険だもんな・・。
オレは召喚の舞台の一つとなったアキバの道を歩き、彼女達に色々と説明をしてた。

「サイト様、何故メイドが沢山居るのですか？」

「この国ではメイドは一般的では無いの。
シエスタみたいな本職が珍しいと思うよ。多分。」

「ジョセフ様、何やら怪しいマジックアイテムがありましたわ。」

「ミューズよ。余はこの国では無一文なのだ。ムリは言うな。」

シェフィールドは何やらチッと舌打してたが・・。

「ジョセフ殿、そんな顔しないでください。買い物はオレが責任を持ちますので、
どうぞ欲しいモノを手に取ってください。日本での思いでに。」

そう言うが早いか、ジョセフもシェフィールドも色々と手に取りオレに金を払えと
言いやがった。総額百万だと・・・。
シェフィールドは怪しげな水晶とか派手なボデコンとか・・。＞後

でジョセフに見せるのだろ。
ジョセフは表紙を紙で見えなくした怪しげな本や酒、
使い方を知ってるのか？と疑いたくなる電化製品を買ってた。
もちろん他の女性陣も色々と買ってましたよ。エエ・・。
国賓としての予算を貰ってますので大丈夫でしたが、それにしても・・。
少しは遠慮しやがれ！！と言いたくなりました。
買い物を終え、ホテルに帰りその日はジョセフもオレも大人しくホテルの部屋に居た。
今朝の悪夢があったので、二日続けてのお出かけは危険が危ないと痛感したのだ。

翌日、前回は京都に出かけたので今回はヒロシマにした。
世界でも唯一、被爆した国は日本だけだ。
世界遺産にも登録された原爆ドーム。
そして呉の海軍基地を見学させた。
新幹線に乗せたらジョセフやシェフィールドが異常に興奮したり、
富士山に見とれたりと中々楽しめたな。
そして新広島駅に着くと、まずは原爆ドーム。
日本に来る国賓にはまず、皇居とココの二つは絶対に見せるべきと思うんだ。

「サイト殿。
あの建物からは何やら恐ろしい程の霊気を感じたのだが・・。」

「一発の爆弾で十万の人間が亡くなったのです。
その爆心地があのドーム周辺。霊気があって当然ですよ。」

「十万が犠牲とは・・。」

「恐ろしい破壊力の爆弾を落とされ我々は敗戦したのです。
その反省が新しい軍備なのですよ。攻められないための軍備としてね。」

「過剰な程の兵器も平和維持に必須か。
平和とは金がかかるモノなのだな。」

「その通りです。平和もタダでは得られないのですよ。」

「そうだな。
確かに平和もタダでは買えぬ。
軍備無き国は他国に容易く侵略されてしまう。」

「その通りです。
昔の我が国は平和と水と空気はタダとか言うアホも居ました。
ですが、そんな幻想はわずかな闘いで吹き飛びますよ。
平和を維持するには、攻めたら怪我をするぞ！と言う威嚇の対象も必須です。」

「そのための軍備が先日見た、あの軍艦か？」

「アレでも一部です。時間があればまだ御見せしたかったのですが。
他にも陸軍部隊やその他があります。」

「アレで一部か・・。
余も危険な国にもう少しでケンカを売る所だったな。」

「そう言って頂ければ、今回の我が国に招待した甲斐がありましたよ。

出来ればガリアとも友好を保ちたいですからね。」

「言われなくても友好を頼むぞ。我が友サイトよ。」

ジョセフはそう言うとオレに握手を求め、もう一度原爆ドームを見てた。
史料館を見て女性陣が失神しそうになったり、子供の惨い犠牲者を見たりして、
すすり泣いていた。

そして呉の海軍基地も訪問。

巨大なバースを見て、陸に上がった巨大な潜水艦の博物館を見て、街中にある海兵団を見学。多くの水兵候補生が今日も汗水を流し訓練してた。

Fバースから江田島の海軍士官学校へ渡り、士官学校を見学。
整然と整列した士官候補生にシェフィールドやマリアンヌは萌えてた・・・。
士官学校の参考史料館では我が国の英雄の写真や資料に見取れてくれてた。
山本提督の写真と有名な一文を見てジョセフは感銘を受けてたみたいだ。

（日本語も何故か読めるのです。コレもファンタジー効果か？）

江田島から護衛艦で岩国海軍基地に移動し帰国の道に付いたのだ。
土産は別便で送り、人間のみをオレが連れて行く事になった。
彼等も名残惜しそうではあったが、ハルケギニアでの仕事も待ってる。

オレは日本を飛び立つと一路、ハルケギニアに向け空燕を飛行させた。
今回は音速ナシでだ。

そして・・。（後書き）

ジョセフ達との旅も終わります。
次回から新章です。

新たなる災厄の兆し（前書き）

いよいよ最終場面が近づきます。

新たなる災厄の兆し

ジョセフ達との楽しい？旅も終わり彼等を連れてハルケギニアに帰って来た。

「名残惜しいのぉ。ミューズよ・・。」

「そうですわね。ジョセフ様。」

「でも楽しい旅でしたわ。一部悪夢もありましたけど・・。」

「そうですわね。
でも彼方達、少しは自重しなさい！！
どうして殿方を攻める事が出来るのですか？
サイト様が居たから今の我が国があるのです。
アンリエッタ。
城に帰ったら・・・・・・。
・お・仕・置・き・ＤＥＴＨ♪」

「お・母様・・・。お許しを・・・・。」

「ダ・メ・♪」

「テファ。
私達も国に帰ったらサイト様に謝罪するのよ。体を張ってでも。」

「もちろんですわ♪シエスタさん。」

客室では何やら楽しい会話が飛び交ってたがオレは操縦に専念。
ジョセフも満足しただろう。
やがてガリア上空に到達。
プチトロワにジョセフとシェフィールド、そして土産!!を降ろすと俺達は
トリスティンに向かう事にした。

「サイト、世話になったのぉ。また機会があれば頼む。」

「ジョセフ、オレも楽しかったぞ。
そうだ・・。コレを渡しておく。
ケータイ電話と言う機械だ。」

オレはマザリーニに渡したのと同じ携帯をジョセフに渡した。
これで頻繁に連絡も取れるだろう。

ジョセフに携帯の使い方を教えるとジョセフは子供みたいに大喜びしてた。
彼も根は悪い人間では無い。
過去でも少しの思い違いから愛する弟、シャルルを暗殺してしまったが、
本音では弟と共に国を作りたかったと思うのだ。
今後はガリアも変わるだろう。
ジョセフと別れ、ガリアを飛び立った我々はトリスティンに向け飛行。
城に女王を降ろすと、トリスティン海軍基地に向かいそこですべての旅装を解いた。

「フー、疲れた。これで旅も終わりだな。

次はもっと気楽な旅にしたいもんだ。」

シエスタ達を学院の寮に送り届け、オレは基地の執務室で寛いでた。
ワルドは城とこの基地を出入りし、訓練に城の防備にと頑張ってる。
アニエスとギーシュは城にて銃士隊の拡張に頑張ってる。
ガリアが親日国になってくれるから、かなり楽になった。
過去の世界で最悪の敵だったガリアが戦わずして仲間になったのは心強い。
色々と考え事をしてると・・・。

「よっ♪サイトきゅん♪」

ネ申様が登場です。

「お久しぶりです。ネ申様。」

「頑張ってる様じゃね。ガリアも味方に出来たみたいだし。」

「そう・・ですね。でもこれからどうしましょう。」

「まだまだ安心すんのは早いんじゃネ?」

「と、言いますと?」

「エルフは居るし、国内の腐れメイジも多数健在。ブリミル教の残党も居る。
安心は出来ないぞ。ゲリラに近い連中は特に厄介だからな。」

「そうですね。アメリカもベトナムのゲリラに負けましたから。」

「手を緩めると痛い目に遭うからのぉ。」

「そうですね。気をつけます。所で今日はどう言う用件で？
世間話をしに来たのでは無いのでしょ？」

「ウム・・。ジツはだな・・。
あの世の封印世界にヴァリエール一家が引っ越して来たのじゃよ。」

「ああ、先日殲滅したせいですか？」

「そうじゃ。で、だ・・。
ヤツ等め、ブリミルと連絡を取り合おうと画策しておるのよ。」

「何でまた・・。」

「アレじゃよ。カトレア。
ヤツが色々と内情を調べてしまったのじゃ。困ったもんよのぉ・・。
」

そう言うネ申様は全然困った顔をしてないのだが・・。

「どうなるんですかね？」

「多分、ルイズを中心に生きてるメイジに取り付き、意識を乗っ取るつもりじゃろう。」

「さすがヴァリエール。死んでもハンパではありませんね。」

「ブリミルもカトレア経由で色々と画策しておるしのぉ。」

「さすがにネ申界の事までは手が出せませんよ・・。」

「そっちは何とかするわい。
とにかく今は腐れGの連中の始末を一日でも早く済ませる事じゃ。
ヤツ等が生きてたらヴァリエールの霊魂が取り付くからのぉ。」

「了解っス。一秒でも早く連中を処理します。」

厄介な事になって来た・・。
まさかヴァリエール一族が霊魂となって復讐しに来るとは・・。
やはりファンタジー世界は常識が通用しないよ。
トホホホホ・・。（T＿T）

新たなる災厄の兆し（後書き）

ヴァリエール一族が涅槃で復活です。
さすがにしつこい家族。
どう動くかは次回で。

涅槃の家族（前書き）

ルイズはまだ寝ています。

涅槃の家族

ココは・・・。

私は・・・・・・・・・。

どこなの???

「お父様、お母様、お姉様・・・。」

その声は・・・・・・。

「カトレアです。お忘れになりましたか?」

カトレア・・・。

私達の可愛い娘。
生涯を籠の鳥として終わった哀れな娘。
何故カトレアの声が・・・・・。
「お父様、言い難い事ですが、ここは現世ではありません。」
どう言う事だ?余は確か王族討伐のため、
我が領地を出奔した所だったハズだが・・。
「詳しい事は私も分かりませんが、
お父様達は既に私同様、肉体の無い魂だけの存在です。」
我々は負けた・・の・か・・。
「その通りだと思います。お母様も居ますので。」
そうか・・。苦しみも無い楽な世界なんだな。あの世と・・は・・。
「そうですわね。
確かに苦しみはありません。
私もこの世界に来て初めて健康と言うモノの有難さを知りました。」
そうか・・。
良かったと・・言えるか?カトレア・・。
「お父様、私の知る限りの話を聞いてください。
まずルイズですが。」

ルイズがどうしたのだ。あの哀れな私達の娘は・・。

「ルイズもこの世界に居ます。
ただ私達とは違う世界で簡単には近寄れない世界です。」

何だと・・・。ルイズはトリスティン城の地下深くの牢獄に・・。

「それは誤った情報です。
ルイズは異界に封印されているのです。私も一回だけルイズと会いました。
今は穏やかに眠り続けています。」

ルイズ・・は・・生きているのか・・・。

「生きております。人の形も肉体も保っております。
ただ封印された世界で眠り続けてるだけです。」

そう・・か・・。
良かった・・・。

私はルイズを国の圧力に負けて勘当したのを悔やんでた。
我が娘を犠牲にしてまで家を守ろうとした愚かな親だった。
そして・・・王家を倒し、ルイズを取り戻そうとしてたのだが・・。
こんな異界に居たとは・・。

「お父様、お母様、そしてエレオノールお姉様。
ルイズは生きてはいますが、私達では手の出せない空間に封印されています。」

む・・・。誠か・・。
出来ればルイズに会って詫びたいと思ってたのだが。
あの子には辛い思いをさせてしまった。
何とか会う道は無いモノか・・・。

「今は難しいと思います。
彼女は生きてる人・・。
私達は既に魂のみの存在です。」

・・・・そう・・だな・・。
私達は生きていない存在だ。

ようやく自覚出来る様になって来た・・。

「お父様、お母様、せっかく黄泉の国とは言え、家族が巡り会えたのです。
絶対に道はあると思います。
どうかしっかりと気を持ってください。
夢と思えば魂は浄化されて消滅されてしまいます。
私ももう少しで浄化される所でしたが、お父様達の気配で魂の構成が再起出来ました。
どうか正気を保っててください。」

ウ・・ム・・。そうだな。カトレア。
カリーヌ、カリーヌは居るか？

貴方、ココは異界なのですね・・。
貴方とカトレアの会話を聞いててようやく眠りから目覚めました。

カリーヌ、カトレア、そしてエレオノール。

ルイズは生きてるのだ。
我々で何とかルイズを救う方法を模索するぞ。
死んで終わってたまるか・・。

「お父様、やはりお父様は亡くなっても我が家の大黒柱ですね。」

任せろ。カトレア。
すまんがこの異界の情報を分かるだけでも教えてくれ・・。

それから数日、いや数年か・・。
異界では時間の概念が皆無なので、彼等には関係無いが、ヴァリエール一族再興の
会議が続けられたと言う。
その光景を別世界から眺めて微笑む始祖が居たとか・・。

涅槃の家族（後書き）

ヴァリエール一族が再起します。

現世（前書き）

今回はサイト側です。

現世

オレは翌朝、城のマザリーニ枢機卿と会談を申し込んだ。
時間の余裕は無い。
一秒も惜しいのが現況だからだ・・。

「マザリーニ枢機卿殿、早朝から面会をお願いして申し訳ありません。」

「サイト様、お顔を上げてください。何やら緊急の話だとか・・。我が国にも関わりのあるお話でしょう。」

「その通りです。
ある事情でオレは神界との付き合いもあります。」

「神界とは？」

「そのままの意味です。
あの世とも言いますが、その異界にルイズを封印しているのです。」

「そう・・だったのですか・・。」

「ハイ。
で、その神界に先日殲滅したヴァリエール一族の魂が集結したそうです。
彼等は今でも諦めておりません。
現界の世界の生きてる貴族の意識を乗っ取り、復讐を企てているそうです。」

「そうだったのですか・・。それはまた・・。」

「本当にどうしようも無い話ですが、あの世から来られると我々の武器も
役に立ちません。ですが、生きてる人間なら何とか出来ます。」

「その通りですね。で、どう言う話になるのでしょう。」

「まず生き残ってる貴族全員を集めて欲しいのです。
彼等の不満とか愚痴を聞いて欲しいのです。」

「かなりの不満があるとは思いますが。」

「もちろん犯罪者は断固処理するべきですが、
穏やかな貴族もかなりの不満も募ってるでしょう。」

「そう・・ですね。確かに・・。」

「彼等に貴族としてでの生活まで保障する必要はありませんが、
生き甲斐を与える事は可能です。」

「生き甲斐とは？」

「仕事ですよ。まず彼等に向いた仕事を模索して見ます。
そして仕事に見合った収入を約束し、欲しいモノが買える様にしてあげるのです。」

「それで不満が消えるでしょうか？」

「簡単ではありませんが、人間の欲望は「寝る」「食べる」「性欲」

そして「購買欲」があります。
普段は三大欲望の影に隠れて出て来ませんが、「購買欲」はどんな人間にも潜在してます。
特に女性には顕著ですよ。」

「先日はニホンテイコクでアンリエッタ様が凄い買い物をしたとかで、
女王様にお尻を叩かれていましたが。」

「それが普通ですよ。彼女達もニホンの巨大なショッピングモールで眺めるだけでは
哀れでしたから。」

「所でどう言うプランをお持ちですか？」

オレはマザリーニに自分の考えてるプランを説明した。
まずは仕事だ。
どうしようも無いボンクラでも使い道はいくらでもある。
頭のネジの緩い人間には単純労働。
数字に強い人間は商売。
若い女性なら売り子と・・・。

「フム・・。
その様にお考えですか・・・。」

「ハイ。さすがに軍人、特に今回自分が立ち上げた銃士隊は簡単には増加できません。
まだまだ王家に不満を持つ人間が多すぎますからね。
大半は平民から採用するべきです。
元貴族には、文官が出来る人間には機密に触れない文官にも使える

でしょうが、
大多数の貴族はハッキリ言うと能無しです。
ですが、この国には遊ばせておく余裕は無いでしょ？
だったら使える仕事で働かせるべきです。」

「フム・・。中々楽しいプランですな。
そして働いたお金で買い物をすれば・・。」

「税が自動的に国に入るのですよ。売り上げに対し二割程度は税を取れますからね。」

「まずは国力を付けるのですね。」

「その通り。国で金が回る様になれば次には外国にも商売が出来る様になります。」

「なるほど・・。では細かい事も煮詰めて見ますか。」

「ハイ。女王様も交えて話すべきでしょう。」

オレとマザリーニは会談を終えるとマリアンヌ女王に面会を頼み、会議室で先程の話を煮詰める事にした。
マリアンヌも色々と心配してたらしく、二の句も無く賛成してくれた。
トリスティン王国だけでも、仕事がないと言う状態だけは無くしたい。
そう考え、日本に存在するハローワークを作れないか、相談して見た。
マリアンヌも喜んで賛成し、王宮の外にある城をトリスティン版ハ

ロワにする事も決まった。
使えない貴族は職業訓練学校に放り込み、鍛える事も追加したが。
そして犯罪を犯し逃亡してる元貴族の捜索にも言及した所・・。

「彼等の足跡がプッツリと消えてるのです。。」

何でも追手から逃げてる元貴族が国境内にも関わらず、足跡が消えてるとか・・。
ありえないとか想定外とは言わないが、何かが起こってるのかも。

「自分も空から調べて見ますので、銃士隊の連中にも絶対に分隊以下になるなと
厳命しててください。単独で追跡したら殺される危険性もあります。」

マリアンヌとマザリーニに彼等への指示をお願いしてオレは城を辞した。

現世（後書き）

色々と不穏になって参りました。
ハルケギニア版のハローワークが始まりそうです。
大半は単純労働も出来ませんけど。

消えた貴族（前書き）

今回は消えた貴族の足取りです。

消えた貴族

私の名はジャン・コルベール。
かつてはトリスティン魔法学院で火の魔法の教師をしてた。
だが私達の生活はルイズ嬢の召喚した
ニホンテイコクのサイトと言う人間に拠って一変してしまった。
まず、メイジの地位がアッと言う間に落ちてしまってたのだ。
本当に急降下と言うにも等しい落ち方だった。
我々の教育も悪かったのは認めるが、それにしても・・。
子供まで罪に問う事は無かったろうにと思う。

「たかが」平民を殺害した程度で・・・。

どうやら新女王となられたマリアンヌ様はメイジを見限られたらしい。
我々や貴族に対する冷遇がそれを現してる。
平民ばかりの雇用を増大し、我々元メイジの雇用は疎か。
その上に領地まで召し上げられ、給与とか言うスズメの涙みたいな金子の支給のみ。
それも仕事をしない貴族には基本給とか言う本当に僅かな金子のみらしい。
私も必死で嘆願した。
メイジには未来は無いのか?と・・。
だがマリアンヌ様はメイジが我が国を食い潰したのだ・・と、冷たく言われた。

しかし我々は国に忠誠を誓い、必死に頑張って来たでは無いか。
「たかが」平民を虐殺した程度で我々の功績は簡単に消える事は無いのだ。
だが女王は平民が居るからこその国なのだ。
何故平民を「たかが」と侮蔑出来るのか?と逆に問い返された。
我々は国のために働くのであって平民如きを食わせるために働くのでは無い。
そう言い返したら「悲しい方ですね。」と、言われ、城からたたき出されてしまった。

何故だ!!!

やがて私達は勤務先の魔法学院も解雇され、郷里のトリスティンの外れの小さな領に
帰る事になった。
しかしそこも平穏な住処では無かった。
ルイズ嬢の父上、ラ・ヴァリエール殿が出陣、城に攻め入ろうとした所を
王公軍に制圧、殲滅された事で、貴族の地位は完全に落ちた。
今まで持ってた領地は全て国に没収。
そしてメイジの杖は国が取り上げ魔法の行使は禁止。
杖の所持も禁止。
我々は生きる術も誇りも失う事になったのだ。
もうこの国では生きられない。
過去に平民を虐殺してたメイジは裁判にかけられ次々に処刑されてると聞く。
私は幸いにも近年は平民を虐殺していない。
覚えてるとしたらタングルテールの殲滅が最後だ。
あの時の気分は・・。
今、思うと最高に高揚してた・・。

部下のメンヌヴィルも嬉々として殺害してたな。
あの時に助けた子が居たが、どうなっただろう・・。
まあ過去はどうでも良い。
今は、この国を見捨てる事だ。
魔法も使えない国に居ても私には出来る事も無い。
私は僅かに残った資産を処分し、隠し持ってた杖を懐に忍ばせ夜半にトリスティンを
脱出する事にした。
途中で国境を警備する衛兵に見つかりそうになり、藪に隠れ、泥に潜り、
何とか見つからずに国境を抜け出す事が出来た。
だが、既にゲルマニアもガリアもニホンテイコクの影響下にあり、
魔法を行使する事を
禁じる方策だとか・・。
ゲルマニアの外れの小さな町で、私は隠匿生活を始めたのはその頃だ。
そして、逃げる場も無くなり途方に暮れてた私はかつての部下。
白炎のメンヌヴィルと出合ったのだ。
彼はタングルテールの騒ぎの時に失明してたが、今では目の開いてる人間よりも見えてるみたいだ。
私の気配も一発でバレてしまってた。

「おお、懐かしの隊長、コルヴェール殿では無いか！」

「人違いでは・・。」

今は乞食みたいな格好をして落ち延びてる私だ。
バレたら自分の身も危ない。
だが彼は私の「匂い」を覚えてたのだ。

「そんな事は無いぞ。私の嗅覚は犬の数倍は鋭い。
耳もだ。そして隊長の声も匂いもすべて一致してる。
ジャン・コルベール。何故、自分を隠す？」

「既にメイジが暮らせる世界では無いからだよ。
メンヌヴィル・・・。」

「ようやく認めたな。コルベール隊長。」

「隠しても無駄だろう？メンヌヴィル。」

「所で隊長、オレ達と戦う気は無いか？」

「戦うってどことだ？」

「今のハルケギニアの王室全部とだよ。」

「全部って・・。
ムリだろう！！」

「単純に考えればな。だが、一度私達の組織に来ないか？」

「ここでは話せないか・・。」

「その通り。さすがに誰が聞いてるか分からない場所ではな。」

「分かった。どうせ帰る国も無くなった私だ。
もう一度戦うのも良いだろう。」

「では明日の今の時間、この場所に来てくれ。

組織の連中との調整をしておくから。」

「分かった。明日・・だな。」

「ウム。待ってるぞ。コルベール隊長。」

「もう隊長は止めてくれ。」

「ワハハハハ。では明日。」

メンヌヴィルはそう言うと笑いながらどこかに消えて行った。
どんな組織かは分からぬが、このまま生きてても私も倒れるのみ。
もう一度、血に塗れるのもいいだろう・・。

コルベールは踵を返すと隠れ家まで帰る事にした。

消えた貴族（後書き）

コルベールとメンヌヴィルが再会しました。
原作では敵同士でしたが、本作では味方となります。

消えた貴族２（前書き）

メンヌヴィルとコルベールとの話し合いの続きです。

消えた貴族２

翌日、私は隠れ家を早めに出て、持ってる荷物もすべて持って出かけた。
恐らく今の隠れ家は捨てる事になる。
僅かな時間居ただけだが、とりあえず感謝しておこう。
我が隠れ家よ。

メンヌヴィルは指定の時間に遅れず私の前に現れた。

「隊長よ。来てくれたな。」

「もう帰る国も無い私だ。
どこへでも行くぞ。例え地獄でもな。」

「ある意味地獄かも知れぬが、メイジにはどこも地獄だろう？
私も魔法を捨てるなら死を選ぶ。」

「私もだ。
タングルテールでの事件以来、平民を虐殺していなかった善良な私をトリスティンは捨てた。
そんな世界になった今、私にはどこにも居場所が無い。
なら見つければ良いだけだ。」

「コルベール隊長。その通りだ。
炎蛇のコルベールに戻るのは今しか無い。」

「懐かしい二つ名だな。

近年は全く使って無かったが。」

「このままではジリ貧だろう。我々メイジは。
ならば強力な庇護者の元で狂えばいいのだ。
我々を見捨てたハルケギニアの王族に復讐し、庶民を皆殺しにしてな。」

「メンヌヴィル。
少し前までの私なら絶対に反対してただろう。
だが今なら同意だ。国から生きる術も誇りも故郷も取り上げられたのだ。
どれ程狂っても狂い過ぎとは思わぬ。
すべて愚かな国の王族が悪いのだからな。」

「さすが隊長。
あの頃の目に戻りましたね。これならは私も貴方の部下に戻れます。
今からある貴族の元に行きますが、宜しいですね？」

「何を今更。
私は帰る国も無い根無しメイジ。
前に進むしか無いのだ。」

「では今から我々の庇護者の元へ参ります。
言葉には気をつけてください。私も随分怒られましたから。」

「心配するな。
私は腐っても元は教師。言葉使いは得意だ。」

「それなら結構・・。」

私はメンヌヴィルの後を無言で着いて行く事にした。
しかしヤツは本当に目クラか??
どんな細かい石ころでも見えてるの如く避けて歩いてる。
長年の修練の賜物だろう。
そう・・・。
メイジの魔法も長年の・・六千年の先祖からの修練の結果なのだ。
それを捨てろって?
絶対に受け入れられないのが当たり前だ。
私は一言も喋らず、一人で考え歩いてた。
やがて森の中に入り、怪しげな屋敷の門に着いた。

「隊長、ここが我々の庇護者の居る屋敷だ。
名は彼から聞いてくれ。
恐らく驚くと思うが。」

「分かりました。
ではご挨拶に伺いますか・・。
我々の庇護者の方に。」

私とメンヌヴィルは門衛に案内され、広い屋敷の中庭（おそらく練兵場だろう。）を
通り抜け、屋敷の広間に通された。
広間には威厳のある人間、恐らく貴族か王族だろう・・。
数人が広いテーブルの中央に座ってた。

「ようこそ、元魔法学院教師、ジャン・コルベール殿。」

「始めまして。元教師のジャン・コルベールです。」

「もっともこの姿で会うのは初めてなだけだがな。」

「どう言う事でしょうか?ミスタ・・・・・。」

「まだ名乗っていなかったな。余は元トリスティン王国のラ・ヴァリエールだ。」

「ヴァリエール様ですと??確か、ヴァリエール様は・・。」

「そうだ。
余は一度死んだ。ニホンテイコクとトリスティンに拠ってな。
妻のカリーヌ、エレオノールや多くの貴族と共にな。
だが余は蘇った。
姿こそは別人だが、余はメイジとしてこのハルケギニアに再び立てたのだ。
偉大な始祖、ブリミル様の加護に拠りな。」

「ブリミル・・様ですか?」

「疑問に思うのが当然だろう。
余も蘇らなければ信じる事も出来なかった。
だが見ろ、余は蘇った。妻のカリーヌと共にな。」

「カリーヌ様も・・ですか。」

「その通りだ。娘達はさすがに連れて来れなかったが、メイジの世に戻した暁には
娘達も連れて来る。メイジの世界にな。
そのためにもコルベール。
余に力を貸してくれ。憎きニホンテイコクとトリスティンを倒すのだ。」

「彼等の力は強大です。どう戦われるのですか？」

「今のハルケギニアは揺れてる大地だ。
多くの貴族やメイジは現体制に不満が募っているだろう。
彼等に甘い言葉を囁き、誘惑すれば良いのだ。
杖を持てる世界に戻そうとな。」

「確かにそれは素晴らしい誘惑です。」

「そうだろう。だがヤツ等を侮ると余みたいに最後を遂げる事にもなる。
余の失敗は敵の戦力を侮った事だ。
当分は戦力となるメイジの拡大だ。
忙しくなるぞ。コルベール。」

「分かりました。このコルベール。
決死の覚悟でお力になります。」

「期待してるぞ。」

コルベールとヴァリエールはガッチリと握手を交わし、笑い合った。
その背後から隠れる様にブリミルが微笑んでたのを彼等は知らなかった・・。

フフフ・・。
これでヨシ。
ヤツ等が成功すれば嬉しいが、まあ失敗するだろう。

だが敵の手口を見るにはこれが最善だ。
不満を持つ貴族は山と居る。
まずは、アレで敵の基地を破壊するか・・。
待ってろ。ネ申とサイト・・・。

消えた貴族２（後書き）

物語りも佳境となって来ます。
ヴァリエールが蘇り、ブリミルも背後から暗躍します。
さて、人間には手の出せない世界にどうサイトは関与するのか・・。

敵襲（前書き）

考えもつかない方法で襲撃を受ける日本海軍基地。
初めての敗北です。。

敵襲

フフフフフ。
サイトよ。
魔法と余の恐さを思い知れ・・・・・。

敵襲！！！

まさに敵の襲撃だった。
それも考えもつかない方法で・・。

昨日までは穏やかだったトリスティン日本帝國海軍航空隊。
それが今は廃墟と化してた・・。

昨夜、夜半。
突然、我が軍の当直兵士十数名が蜂起。

基地の航空機をすべて破壊してしまったのだ。
そして弾火薬庫も破壊。
基地は轟音と罵声の地になってしまってた。

ぢゅどぉぉぉん、ぢゅどぉぉぉぉぉん・・。

爆弾が炸裂し、美しかった空燕や海燕が残骸となって逝く。
寝込みを襲われた非番隊員が駆けつけた時には、既に大半の航空機が破壊されてしまってた。
どうしてこうなったんだ・・。
彼等は悲観に暮れながらも、消火に当たり蜂起した隊員の捕縛に向かった。
彼等は反撃して来るのでもちろん射殺も視野に入れた反撃だったが。

（サイト、急いで基地に帰れ。）

夜半寝てるとネ申様がいきなりオレを起こしたのだ。
こんな事は始めてだ。
何やら緊急事態・・・と考えようとしたら、手元の携帯が鳴り響く。
それも普通の音では無い。
エマージェンシーコールだ。

「オレだ。どうした？」

「サイト様、大変です。
基地の当直兵士が十数人、突然、蜂起し基地の航空機を破壊。
そして弾火薬庫も破壊しました。」

「ナニ！！！」

オレは異常事態と判断し、急いで基地に帰った。

（シエスタ達は学院寮に居たので無事。）

基地に帰ると、阿鼻叫喚とはこの事か？と思う状態だった。
基地の航空機はすべて破壊され使用不能。
弾火薬庫も全滅。
滑走路と燃料庫は無事だったが、肝心の航空機が無くては・・。

破壊活動をした兵士の大半は射殺したが、数人は生き残ってた。
非番兵士は無事だったらしい。
彼等の身元はすべて平民上がり。
何故、こんな事件を引き起こしたのか・・。
とりあえず尋問だ。

倒れて気絶してる兵士に俺達は水をかけて目を覚まさせた。

「貴様、何故、我が基地を破壊した？」

「・・・・・。オレハシテナイ、オレハワルクナイ・・。」

何やらブツブツ言うだけで言質も取れない。

そこへ・・・。

（サイトよ、彼等を問い詰めても答えは得られぬぞ。）

ネ申様、どう言う事ですか？

（彼等はブリミルに意識と心を乗っ取られたのだ。）

やはり・・。
おかしいとは思ってたのですが。

（ブリミルがいよいよ我々の計画を本格的に邪魔立てしようとしてるのだ。）

困りましたね。さすがに兵士の心を乗っ取られる様では。

（ワシも対策は考えてたが、まさに想定外よの。）

ブリミルめ、人間では防げない方法で攻撃して来るとは・・。

（サイト、決して防げない方法では無いぞ。）

どう言う事ですか？

（まず、ワシが考えたこの装置をすぐにハルケギニア中の日本軍基地に設置しろ。
それも今日中にだ。）

ネ申様が「あぽ～～ん」と書いた機械をダンボール箱で渡してくれたのだ。

コレは？

（ブリミルの精神乗っ取り対抗の機械よ。
今朝完成してお主に渡そうとしてたのだが、
敵の襲撃の方が早かった。スマヌ・・。）

誰でも防げませんよ。人の心の中までは。

（ウム。
だがワシはブリミルがこうするだろうと予想はしてた。
お前に警告しておけばよかったと悔やんでる。）

過ぎた事は仕方ないです。で・・。
この装置は基地に一個で足ります？

（二個は設置してくれ。足りなかったコピーして送るぞ。）

分かりました。
では試しに脳を犯された兵士に試して見ますね。

オレはネ申様にそう言うと装置のスイッチを入れた。

「あぽ～～～ん♪」

バカなセリフを機械から発すると・・。

「こ、ココは・・・。」

操られてた兵士が正気に戻ったのだ。気絶してる兵士も無事だろう。

正気に戻った彼等を尋問すると、やはりいきなり脳に衝撃が起き、
気づいたら縛られて転がされてたと言う。
彼等に罪を説いても仕方ないだろう。
だが事実は事実。
彼等には悪いが、一応憲兵に引渡し数年は臭いメシを食べて貰おう。
基地の惨状を見せたら彼等も青白くなってしまってたが・・。

翌朝、オレは日本に緊急通信を送り航空機の調達。
兵器、弾薬、備蓄食料の緊急調達を頼んだ。
そして全基地の航空機を呼び寄せネ申様から贈られた機械
「あぽ～～ん」
を全基地に配備。

何やら危ない場面もあったそうだが、蜂起前に機械に拠って正気に
戻り事なきを得たとか。

それにしても痛い敗北だ。
ニホンテイコクとして、ハルケギニアに於いては最大の被害だった
と思う。
ネ申様の話ではブリミルは日本には干渉出来ないらしく、ハルケギ
ニア限定だとか。
それなら何とか出来るな・・。
ネ申様に「あぽー～～～ん」をさらに調達依頼をしたのは言うまで
も無い。
この機械を全ハルケギニアに設置するのだ。

敵襲（後書き）

ネ申様のオーバーテクノロジー機械。
「あぽ～～～ん」登場です。
強力な対精神破壊防御装置です。

あぽ～～～ん（前書き）

あぽ～～～んが各地で活躍します。

あぽ～～～ん

トリスティン海軍航空隊壊滅から数日。
各地の基地に最優先で配備された「あぽ～～～ん」は威力を発揮し出してた。

まず、洗脳された人間でも確実に正気に戻せるのだ。
例えエルフの毒を飲まされた被害者でも・・。
実際にタバサのオカンと同じ症状の人にテストしたら一発で正気に戻ったのだ。
これは凄い。
まさにオーバーテクノロジーだ。
難を言えば脱力する様な名前と音だけだが・・。
各都市には拡声器とあぽ～～～んが取り付けられ、時報代わりに定期的に
「あぽ～～～ん」と流す様にした。
街で洗脳に遭ってる人間でも一撃で正気に戻せる。
時間の告知にもなるといいこと尽くめだ。

やがてトリスティンだけでは無く、全ハルケギニアにも出荷した。
ただ魂まで乗っ取られた人間は別らしい。
既に魂の塗り替えもされてしまってるから、前の人格は死去と同意義らしい。
だが広範囲で精神の乗っ取りを防げる機械は凄い。
日本でもコピー出来ないか聞いて見たが・・。

（ワシ等が作ったから威力が出るだけで、人間が作ったらタダの機

械だぞ。）

らしいです。

ネ申様には負担をかけるが、しばらくは「あぽ~~~ん」の増産に頑張って貰おう。
ネ申様は萌えが好きらしいから、アキバの最新のフュギィアでも献上しますから・・。

「あぽ~~~ん」配備後、二度と先日みたいな事件は起きなくなったが、
さすがに今回だけは敗北と認めて良いだろう。
ネ申様の協力が無かったら確実に被害が拡大してたのは間違いない。

「ネ申様、今回は本当に助かりました。これはネ申様に対するお礼の貢物です・・。」

オレはしずしずとネ申様にアキバの帝王と言われるフュギィア作家に特別に作ってもらった
「ティファニアとシエスタ」のビキニのフュギィアを献上した。
二人の写真を元に作って貰ったのだが。
誰が作ったかって？
確か「山田太郎」って名前だったな・・・。

（おお、コレはテファたんとシエスタの萌え~~~~！！！ハァハァ・・。
凄いのぉぉ。
サイトきゅん。サンクスです♪）

ネ申様はフュギィアを大切に仕舞うと顔を元に戻した。

崩れた顔は見なかった事にしよう。
ウン。

それはさておき・・・。

「ネ申様、今回の騒ぎはやはり・・。」

（ブリミルとヴァリエールじゃ。
ヤツ等はタッグを組んでハルケギニアを再び魔法の国にしたいらしい。
困ったモンよな・・・。）

「ヴァリエールはコチラに？」

（ゲルマニアの貴族の魂を乗っ取ってしまいおった。
今の名はスターリンとか言うらしい。）

「ゲッ。
スターリンって旧ソ連の悪魔の名前ですよ。」

（どうもアレの生まれ替わりだったらしいぞ。コッチのスターリンも。
おかげで完璧にヴァリエールと魂が混ざってしまい、もう消すしか無い。）

「「あぽ～～ん」も利かないのですね。」

（アレは心を乗ったられたとか発狂してる人間には利くが、正常で魂も同化した人間はムリ。）

「う～～ん・・。厳しいっスね。
他国の大手の貴族だと下手に手も出せませんしね。」

（攻めて来るのを待つしか無いのぉ。
ワシ等も人事では無いから、今回の件に関しては神界でも全面的に協力するぞ。
安心しろとは言わぬが、まったく手が出ない訳でも無い。
国境の警備だけは万全にしておけ。ついでにガリアやゲルマニアには国境を無許可で
越える貴族は敵と認定すると通達を出しておけ。そしたら国との戦争にはならないだろ？）

まったくその通りだ。
後手ではあったがネ申様が居たのは本当にラッキー。
「あぽ～～～ん」にしてもネ申様頼みだが全面的に協力してくださると言う。
ネ申様、またフュギィアを作ってもらいますから、今後も是非協力してくだせ～～！！

追伸、マザリーニとマリアンヌ、ジョセフにも報告しといた。
何やらガリアもキナ臭いらしい。
ジョセフもすっかり魔法を嫌悪し、メイジから杖を取り上げてるとか。
そしてトリスティン同様に銃士隊を編成。
かならの戦果を上げてるとか。
特に国境付近に出没してる山賊狩りには最高らしい。
メイジが詠唱してる暇に射殺してしまうんだもん。

そりゃ勝てますって。

あぽ～～～ん（後書き）

あぽ～～～ん配備で何とかピンチを凌ぐ事が出来ました。
今回は敗北でしたが。

警戒（前書き）

ようやく警戒に入れます

警戒

手痛い敗北から数日。

ようやく基地の機能が回復した。

弾火薬庫は当座は土嚢で組んだシェルターに配備。

急突貫工事で弾火薬庫を建設してるが・・。

航空機は最新鋭の空燕と海燕を配備してもらった。

色々と替わってるらしいが・・。

機の配備と同時に国境上空からも「あぽ～～～ん」を流す事にしたのだ。

正直、今回の事件はネ申様が居たから助かったが、居なかったら・・。

手も打てずに完全に敗北してただろう。

やはりファンタジー世界は侮れない。

そして「あぽ～～～ん」を流してると面白い事も起きた。

まず異邦人種とも言えるゴブリンやオーク鬼の大半が人間に従順となったのだ。

エルフは元々人間に近い考えの主なので変わらないみたいだが、

オーク鬼がペットみたいに人間に従順になるとは・・。

投降して来た彼等には一部の森を与え、その森の中でのみ生活する様に指示。

もっとも閣下の狩りでオーク鬼はすっかり数も少なくなってたのだが。

そして覚せい剤や麻薬中毒の患者「でも」正常になるのだ。

どんだけ凄いんだ?この「あぽ～～～ん」は・・・。

完全に狂人でも正常に戻せる機械が日本でも作れたら、シャブ中とかも消えるだろう。
オヤジに頼んで日本でも「あぽ～～～ん」を配備して貰おう。
今でもシャブ中は沢山居るからな。
どこから仕入れてるんだ??
既に北半島も無いのに。南方列島となったアジア帝國関係かも知れない。
そこらはオヤジに頑張ってもらうか。

所変わって・・・。

「ブリミル様、どうやら作戦は一回限りのみしか成功しませんでした。」

（ヴァリエールよ。
それ位は折込済みだ。

まずは敵にコチラの意図を知られぬ事が大切。
ヤツ等も今は警戒してるだろう。まずは土メイジに命じて巨大なトンネルを作れ。
そして地下から敵の本陣を攻めるのだ。）

「ハハ。早速土メイジに命じて城から敵陣へのトンネル掘削にかかります。」

（油断するで無いぞ。）

「ハハッ。モチロンです。ブリミル様。」

ブリミルとヴァリエールの会話は「モチロン」ネ申様はコッソリと見てた。

（フム・・。地下から攻めて来るか・・。
いよいよモグラ化し始めたな。ブリミルめが。
だが我に秘策あり。ぐふふふふ。
楽しみに地獄を待てよ。ヴァリエールにブリミル・・・！）

（サイト、敵は地下から攻めて来るぞ。）

「やはり・・ですか。」

（予想はしてたのね。つまらん・・。）

「前回のガチで通用しなければ下から攻めると予想してましたから。
やはりモグラと土メイジですよね。」

（その通り。あぽ～～～んで魔法はともかく、モグラは召喚から解放されてしまうのにね。）

「あぽ～～～んの正体を知らないのでしょ？」

（そりゃ分からんと思うぞ。
ヤツ等はコチラを見る事が出来ぬ。
ワシの正体も知らんしね。）

＞（カトレアにも知られていません。ネ申様と言う名前のみです。）

「そうですか。それは何よりです。
とにかく敵には情報を知られたくないですからね。
ブリミルはどうするつもりでしょう。
また負けるのは確実なのに。」

（コチラの手口を調べてるのだろう。
どうしたら勝てるか？とな。
ヴァリエールは捨石代わりよ。不憫だがな。）

「何とかヤツを封印出来ませんか？」

（考えておる。だがそれに必要なのは・・。）

「徹底的な敗北を味わせる・・。」

（その通り。

とにかくヤツがムダと分かるまでは叩くしか無いぞ。）

「先は長いですね。」

ネ申様との会議は夜半までひっそりと続いた。
しかしモグラか・・。
いよいよ奴等も追い詰められて来たな。
ブリミルさえ倒せたら後は楽なのに。

ネ申様と言う頼もしい味方が居たからこそ、今回は凌げたと思う。
もし居なかったら・・。
手も足も出ず、武器を抱えたままあの世逝きだったな。
やはりファンタジー世界は侮れない。

警戒（後書き）

モグラ化して来たブリミル軍団です。

返り討ち（前書き）

いよいよヴァリエール（スターリン）を返り討ちにします。

返り討ち

常時赤外線サーチに拠り、ヴァリエールのモグラ部隊の監視を続けてたが、
いよいよトリスティンの国境近くまで掘り進んで来た。
ご苦労様な事です。

ゲルマニア側には、無視して欲しいと通達してある。
既にゲルマニアも日本との通商を開始してたのだ。
そしてゲルマニア側には、スターリン公の屋敷を焼き払って貰ってた。
そうとも知らずにヤツ等は・・・・。

「頑張れ、モグラに土メイジ。
もう少しで懐かしのヴァリエール領だぞ。」

そう・・。
忌々しいが敵に取られたヴァリエール領を攻めるのが今回の作戦だ。
我が家があった土地。
そこを地下から攻めなければならぬと言うのは大変な屈辱だ。
だが・・・。
今は諦めるしか無い。
まずは勝つ事だ。
勝てば我が家も取り返せる。
我が家から誇りも取り返すのだ。

ワッセワッセとモグラが掘り進んだ土を土メイジが固めてトンネル

を強化。
ウン。
やはり魔法はイイ。
魔法を廃れさせる王家など潰すべきよ。
余が新しいトリスティンを作るのだ。
そして国境を越えた・・・と思った辺りで・・・。

モグラが突然制御を離れ勝手にいずこへと消えてしまったのだ。

「こらっ、どこに消える!!」

契約したメイジが使い魔のモグラに呼びかけるがまったく無視。
モグラは消えてしまった・・。
どうなってるのだ??

「公爵閣下。モグラが消えました・・・。」

「見てたから分かる。どうなってるのだ??」

「分かりません。
国境までは従順でしたのにですが、越えた途端に制御から離れてしまいました。
使い魔としても終わってるみたいです。」

「消えたモノは仕方ない。
我々で掘り進むのだ。」

土メイジに命じてスコップとかツルハシを錬金させようとした・・。

だが・・・・・。

「閣下、魔法が発動しません。錬金も出来ません。」

「何故だ?余の魔法もカリンの魔法もダメだ。」

「このままではどうにもなりません。
ここは一旦引き返すべきです。」

「ムムムムムム・・。
口惜しいが仕方ない。我が領地は目の前なのに。」

ヴァリエール（スターリン）は口惜しくてどうしようも無い顔をして、
元のトンネルを引き返し始めました。
そしてようやく地上に着いた所・・。

「どう言う事だ??」

彼等の寝城が消えてたのです。
まさに廃墟です。
良く周りを見るとゲルマニア王国の旗が居立しています。
完全に周囲を包囲されてました。

「不味いぞ・・。コルベール。メンヌヴィル。敵を焼き払え。」

「了解です。閣下・・。」

メンヌヴィルとコルベールは部隊一の火の魔法使いとして重宝されてました。
事前に二人で合体魔法を発動させた所、森が一瞬で炭に替わった位

です。
ヴァリエールも彼等には部隊も任せる位、信頼していました。
だが・・・。

「隊長、どう言う訳か我々の魔法が。」

「ウム。発動せぬ。もしや・・・。」

「ワーハハハハハハ。
スターリンよ。
まさかこの世界にもお前が居たとはな!!」

見ると上空に怪鳥が一機飛行してました。
その怪鳥から奇怪な声が響くのです。
すると・・・。

ヴァリエール公の声が変わってたのです。
元の人格のスターリン公らしいです。

「何故、何故・・・。
どうしてルーデルがこの世界に居るのだ。
我が赤軍はヤツを撃墜したと聞いてたのに・・・。」

閣下はまたも単独で出撃されていたのです。
どんだけこの方は戦いに対する嗅覚が鋭いんスか?

「おお、その姿は赤軍の支配者。
我がドイツ第三帝國の怨敵。
スターリンではないか?
そうだ。

私はルーデル。
今の愛機はライデンよ。
スターリン。
今度こそお前の魂も消滅させてやる。」

ルーデルがそう叫ぶや否や・・。
スターリン（ヴァリエール）に向かって翼を翻し得意の急降下攻撃を開始したのです。
ジュリコのラッパの音も高らかに・・。

（ルーデルの機のみにサイレンを取り付けました。）

ぐおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん♪と鳴り響くジュリコのラッパ。
赤軍兵士の恐怖の音がハルケギニアにも蘇ったのだ・・。

「来たぞぉぉ。逃げろ～～～！！」

スターリン（ヴァリエール）も前線の将兵から散々聞かされてたジュリコのラッパの恐怖にオシッ○をチビりながら逃げるしかありません。
しかし魔法もＡＭＦで封じられ、フライも使えない彼等には逃げる術は・・。

二本の足のみです。

音速は出ないとは言え、航空機の速さから逃げられる訳がありません。

「ワーハハハハ。
ヘンシェル。

お前を川に追い落としたヤツ等に鉄槌を食わせろ。」

何故か閣下の機には後部にも銃座が設けてあります。
ヘンシェルの帰還後、後部銃座のエースのヘンシェルのために設置したそうです。
ガトリング砲が唸り、水平飛行状態でも後部銃座が咆哮を上げる。
大地は魔法も使えぬメイジ達が散逸し大騒ぎとなってます。

しかし周囲は既に封鎖され、逃げ場はトンネルしかありません。
彼等は大騒ぎでトンネルに逃げ込みましたが、大半は閣下の射撃に倒れてしまいました。
だがそのトンネルもやがては地獄となるのです。

「閣下、どうすれば良いのですか？
地上は制圧され、城は壊滅。
魔法は発動せず、使い魔も無い。逃げ場はありませんぞ。」

しかしヴァリエール（スターリン）は真っ青になって何やらブツブツと呟いています。
聞いて見ると・・・。

「ルーデル怖い、ルーデル怖い、ルーデル怖い……」

我々はこの戦い完敗だと確信した。
指揮官が戦意を失い、欝になるとは・・。

何とか白旗を揚げて降伏したいとは思うが、地下ではどうにも出来ない。
地上に出ようとすると銃撃の雨嵐。

どうにもお手上げだ。
魔法もダメとなると・・。
もう名誉ある戦死しか道は無い。

「メンヌヴィル。ここまで来たら我々には生きる道は無い。
共にハルケギニアのメイジとしての誇りを胸に逝こう。」

「コルベール隊長・・。
そうですな。オレも散々暴れて来たメンヌヴィル。
敵に捕縛されて処刑されるなんて冗談じゃ無い。
斃れるなら敵に向かって斃れたい。
逝きましょう。
隊長。」

私達は呆けてるヴァリエール公(スターリン)を放置して、残された兵士と共に剣を抜き・・。

「「「「「「ハルケギニア万歳!!!」」」」」」

突然地下からコルベールや兵士十数人が刀を手に飛び出して来た。
魔法も使えず最後と思い立ち上がったのだろう。

「相棒、ヤツ等も不憫だ。
相棒が介錯してヤリなよ。」

「そうだな・・。
全軍、敵の兵士に情けを掛けるので攻撃中止。
兵士は威嚇射撃のみ続けろ。
ヤツ等は俺達で撃つ。
ギーシュ、ワルド。久しぶりに剣で戦おう。銃士隊。
闘いが終わるまでは警戒しておけ。
我々が負けたら攻撃再開だ。負けるつもりはないがな・・。」

「おお、そこに見えるのはニホンテイコクのサイト殿では無いか？
私はコルベール。
元魔法学院の教師だった人間だ。」

「久しぶりですね。コルベールさん。
どうしてこうなったかは聞きませんが、敵対した以上は我々は馴れ合えません。
彼方達が剣で戦うなら我々も剣で闘います。」

「感謝するぞ。サイト殿。
もう一人はかつての同僚、メンヌヴィルです。」

「メンヌヴィルだ。
公平な決闘の場を用意して貰って感謝する。
我々は負けた。
だが名誉ある戦死を求めるために立ち上がった。
我々が敗れた後はどうにでもして欲しい。さっ。
いざ尋常に・・。」

「お待ち下さい。
ヒラガ司令。

そこに居るのは私の敵です。
今までは我慢してましたが、これが最後となるならば。
私も決闘に加えてください。」

アニエスが血の涙を流しながらオレに訴えて来た。
彼女も今までは任務として淡々と戦わせて来たが、今回の闘いがおそらくタングルテール作戦に
参加した敵の最後だろう。
彼女の願いを聞くべき・・だな。

「良かろう。ギーシュ、警戒に下がれ。
アニエス。剣を抜け。そしてヤツ等に名乗れ。」

「ありがとうございます。ヒラガ司令。
貴殿達は元トリスティン魔法研究所実験小隊の隊員、コルベールとメンヌヴィルだな。
私はお前等が壊滅、虐殺したタングルテール村の唯一の生き残り。
アニエス・シュヴァリエ・ド・ミランだ。
父母や村人の敵、今こそ私の手で果たす。」

アニエスはそう言うと剣を抜き、メンヌヴィルとコルベールに向かって叫んだ。
すると、コルベールが・・。

「そうか・・。あの時の女の子か。君が・・。
私達の攻撃は魔法研究所実験小隊の痛恨の過ちだった。
私も攻撃終了間際になってようやく気づき、既に手遅れだったが君だけを助けた。
その君が成長して私達を討ち取ってくれるなら、今生最後の闘いに相応しいだろう。

アニエス・シュヴァリエ・ド・ミラン殿。
そして他の皆様。
感謝する。では・・。」

コルベールとメンヌヴィルは剣を抜き、
構えると「ウオォォォォォォッ!!」と
叫んで我々に切りかかって来た。
二の太刀は考えない一撃必殺の構えだった・・。
オレとワルドはアニエスの援護に回り、極力アニエスに討たせる様
に誘導した。
彼等も勝つ事は全く考えて無かった。
ただ死ぬためだけに切りかかって来たのだ。
闘いは数分で終わった。
まず、メンヌヴィルが俺達の攻撃で手足を切られ息が上がった所を
アニエスの剣が
彼の胸を貫き、メンヌヴィルは笑いながら斃れた。
次にコルベールがアニエスの肩を剣で貫いたが、アニエスはモノと
もせず、コルベールの
胸板を貫き、彼は笑顔で倒れた・・。
最後に「済まなかった、ア・ニ・・・エ・・・。」と呟き逝ってし
まった。

「終わったな。アニエス。」

「ありがとうございました。ヒラガ司令。」

「アニエス。彼等はキミが葬ってやれ。
それが倒した人間の役目だ。」

「ハイ。モチロンです。キチンと立派な墓を作ります。」

アニエスはそう言うと兵士に彼等の遺体の保管を頼み傷の手当てに行った。

忘れてたが、穴の中のモグラ連中は全員捕縛済みだ。
ヴァリエール（スターリン）もモチロン捕縛した。
閣下が残念そうだったが、あの急降下だけで充分だったろう。
ジュリコのラッパは恐るべしだ・・。

こうしてゲルマニア、トリスティンを巻き込んだ騒乱はようやく終わった。
ネ申様の事や「あぽ～～～ん」に関しては知られていないと思う。
しかし危ない闘いだった。
元メイジの取り扱いには注意しないとな・・・。

返り討ち（後書き）

ようやく闘いが終わりました。
次回は閑話を入れますのでしばらく御待ちください。

（閑話）　エルヴィン・ヘンシェル（前書き）

非業の最期を遂げたヘンシェルの物語です。

（閑話）　エルヴィン・ヘンシェル

私の名はエルヴィン・ヘンシェル。
最終階級は兵長だった。
私はルーデル閣下の後部銃座手として閣下のナビを長く勤めてたと思う。
最後の闘いは１９４４年3月２０日、ヤンポール橋の破壊だった。
閣下がヘマをして墜落した同僚を救おうとして、着陸したがドロにハマリ、
我々の愛機が離陸不能となったのだ。
仕方なしに河を渡河して脱出しようとしたのだが・・。

氷点下に近い気温の河を生身で渡るのは無謀だったらしい。
私は閣下の叫びを聞きながら・・・・。

多分、死んだのだと思う。
閣下との出撃は楽しかったな・・。
もう一度紺碧の大空を閣下と飛びたい・・・。

苦しくも無く、ただポカポカした気分で私は漂ってた。
そして気づくと・・・。

「ヘンシェル～～～～～！！！！」

何と閣下が目の前に座って男泣きをしてたのだ。
もう一人は??誰だろう・・。

私は呆けた頭を何とか正気にしようとしたが・・。
どうも体力の限界だったらしい。
そのまま気絶してしまった・・・。

私はルーデルだ。
私の最高の相棒は今はガーデルマンだが、歴代で最高と言えば・・。

ヘンシェルだ。
彼は私の無茶な作戦の失敗の犠牲者だった。
私が部下を救おうとして、泥粘地帯に着陸し救出、離陸しようとしたが泥に車輪がハマり
離陸不可能となり、仕方なしに愛機を捨てて彼等と共にロ助から逃げようとした。
だが、、冬の北欧の川は冷たかったらしく、ヘンシェルは静かに河の中に消えてしまった。
私も救おうとしたが、他の部下の事もあり、見捨てねばならなかった。
どう謝罪しようと、彼はもう帰らない。
嗚呼、我が相棒のヘンシェル・・・。
その後のローストチキンとか言うコパイは使い物にならなかったな。
嗚呼、後部銃座に居るのかヘンシェルならな・・と何度思った事だろう。
こんな能無しなんて・・と思ってたらロートマンは何時の間にか消えてた。
名誉ある私の後部銃座に座れてたのに・・。

そして次のコパイは・・。
ガーデルマンだった。
彼は良い。イイ・・。
撃墜されてもすぐに飛び立てる辺りなどは私の相棒としては最高の属性だ。
ヘンシェルは後部銃座のエースだったが彼もその兆候がある。
地上砲火を何度も浴びたが我々は大した怪我もせずに、ロ助の戦車を潰し続けた。
ただあまりにも潰すと総統が休暇を取れとか煩いのだ。
部下にかなりの戦果を譲ったのだが、それでも総統は煩い。
仕方ないから勲章を貰う際に総統に地上勤務に就けとか言わないなら勲章を貰ってヤル。
そう言い渡すと、ゲーリングやヒムラーが目をヒン剥いてビックリしてたな。
ナニが面白いのだろう？

やがて１９４５年も明け、我が国の勝利はおよそ絶望的となった。
しかしガーデルマンは元気だ。
先日も撃墜された時に、引きずって飛行機に乗せたがケロリとしてる。

ウン。私の後ろを任せれる男はガーデルマンとヘンシェルだな。やはり。
そして最後の出撃の時。
何か胸騒ぎがして私はヘンシェルの写真と彼の新しい階級章と勲章をポケットに入れ、
出撃した。
攻撃は熾烈だったが、目標は無事殲滅。
部隊を率い、雲の中に消えようとした時・・。
地上砲火に私の愛機は捉えられたのだ。

バランスを崩した我が愛機は雲から転げ落ちる様に墜落を始めた。
私が最後に思った事は・・。
ヘンシェル。
お前に新しい階級章と柏葉剣付騎士鉄十字章を渡したかった・・。

だがどうやら我々は生きてたらしい。
気づくと異界の国に居座ってた。
そして未来のニホンテイコクから来たと言う部隊と出会い、私は再び空に舞う事が出来たのだ。
隊長が地上勤務をしろと煩いが、私は死ぬまでルーデルでありたい。
ルーデルは地上では死ねないのだ。
新しい愛機のライデンも楽しい。
残念ながらロ助は居ないが、オーク鬼とか言う害獣が居たので、それを狩って楽しんでる。
そんなある日。
珍しく全機オーバーホールをするとかで余暇が出来た私達はアルビオン基地の傍にある河に
釣りに出かけたのだ。
ガーデルマンとバカを言いながら釣りをするのも楽しいモノなのだな。
そしたら・・・。
大物が釣れたのだ。
それが・・・・・・。

「ヘンシェル～～～～～～～！！！！」

この異界で私が見捨てたヘンシェルが釣れたのだ。
どうしてこんな事がおきるのか？
ま、そんな事はどうでも良い。
ヘンシェルが居た・・。

それだけで私は幸せだ。
ガーデルマンと二人でヘンシェルを抱え、基地の医療室に運び込むとかなり危なかったらしいが、
何とか命には別状は無いらしい。
これでこそ我が後部座席のエースだ。

私は・・・・・。

ヘンシェル・・だよな?

「ヘンシェル、気づいたか?」

「閣下・・・、ルーデル閣下ではないですか!!」

「ヘンシェル。良くぞ生きてた。さすが我が最高の相棒。
後部座席のエースだ。そしてスマンかった。あの時は助けられずに。
また作戦も無謀だった。救助した隊員も捕らえられたか戦死したらしい。」

閣下はあの時の事を悔いていらっしゃるのだろう。

閣下に取っては日常の一こまだろうに??
私も大半の事に慣れてた。
閣下がアレなのは毎度の事だったし、どんな過酷な任務でも当然だ。
その中に私の戦死が入るのは当たり前の事。
それよりも、何故閣下が私の前に、それも綺麗な姿で居るのだ?
それに・・・ココはどこ???

「ヘンシェルよ。ここはドイツでもロ助の国でもない。」

「ココはどこでしょうか?閣下。」

「驚くと思うが、ココは異界だ。
私達の居た第三帝國、ドイツの無い世界だ。驚いたか?」

「あ、そうですか。それなら納得です。」

「お・・・お前。何故驚かぬ。」

「この程度ならラッキーと思いますよ。
閣下と飛び回った日常に比べたら、この程度は想定内です。
何が起こっても想定内の人生ですよ。
閣下と飛ぶならね。」

「やはり・・お前はオレの後部銃座のエースだな。」

「閣下と飛んだ二千時間を思えば、地獄だろうが天国だろうが。
そして異界だろうが、想定できます。」

「ヘンシェル。
お前の新しい階級章と勲章だ。

本当なら祖国で授けたかったが、勘弁してくれ。」

そう言うと閣下は柏葉剣付騎士鉄十字章と二等兵曹の階級章を私に授けてくれたのだ。

「始めまして・・だな。伝説の後部銃座エース、ヘンシェル。
私はお前の後々に後部銃座に就いたガーデルマンだ。ヨロシク。」

「おお、ヨロシクなのだ。ガーデルマン。」

初対面にも関わらずガーデルマンとヘンシェルは通じるモノがあったのだろう。
ガッチリと握手を交わし、数分後には無二の親友同様となったのである。
そしてガーデルマンから現状を聞き、それなら自分もルーデルの後部に乗ると言うので、
ガーデルマンと交互に後部銃座に乗る事になったのは後の話。

そして・・・。

「ワーハハハハハハ。
ヘンシェル、さすがにお前が乗るとライデンの機嫌は最高潮だな。」

「閣下、銃撃の軸線が数ミリズレてますよ。
しっかり照準してください。」

「む・・・。

そうか。さすが銃撃に関してはヘンシェルには適わないな。
では次のターゲットを指示してくれ。」

「了解っス。閣下。」

チ、チートがまた増えたんだな。
アルビオン航空隊の錬度はチート三人が居る事で頂点に達してた。
そしてガーデルマンが地上勤務に就く事も多くなった事により、
野中隊長はますますヒマになったそうだ。

「最近、野中隊長飛びませんね・・。」

「閣下に任せた方が部下も喜ぶだろうが。」

「まあそうですが。」

「しかしヘンシェルも凄いな。
あの閣下を指導出来る人間なんて始めて見たぞ。」

「私もビックラしました。
さすが伝説の後部銃座のエースです。」

こうしてヘンシェルは再度、ルーデル閣下の後部銃座に座り戦える
事になったのです。

（閑話）　エルヴィン・ヘンシェル（後書き）

ルーデルの次に飛んでたのがヘンシェルです。
彼もこの世界で元気に飛ぶでしょう。

闘いの結末（前書き）

ゲルマニアも巻き込んだ闘いが終わりました。

闘いの結末

ようやくヴァリエールとの闘いも終わりだ。
忘れてたが、ルイズの母、カリーヌも憑依してた。
だが普通のメイジだったので、以前みたいなチート魔法は使えず。
後方での援護が役目だったらしい。
俺達ニホンテイコクはゲルマニアに彼等の引渡しを求めた。
ゲルマニアも今回のターゲットがトリスティンだったので、引渡しに応じてくれた。
これからキチンと始末しないとな。
まず「あぽ～～～ん」でスターリン一族からヴァリエールの魂を引き離す作業を行った。
スターリンが覚醒してたので、引き離しは簡単に出来た。

「こ、ココは・・。」

（イヤだ～～～～！！現世に留まりたい。）

ヴァリエールは騒ぎカリーヌは静かに現状を無言で受け入れてた。
ヤツ等の魂はネ申様が引きずり地獄に落すとか・・。
転生も出来ない地獄だそうだ。
ナム～～～！！

スターリン一族や兵士は無実だとか騒いだが、証拠は山とある。
キチンと処刑しました。
ハイ。
兵士も蜂起したのは事実なので、隊長クラスは処刑。
平民兵士は奴隷にしました。

（地下の風石を掘り起こす作業員として、罪人を使っております。）

なを異界のルイズは未だに眠り続けてるそうです。
このまま永遠に眠ってて欲しいですよ。
そもそも騒ぎの根源はヤツの虚無（ゼロ）でしたからね。
今回現れなかったカトレアとエレオノールの魂は浄化して転生させたそうです。
また騒ぎを起こされたら適いませんからね。
生まれた先は、地球のアリとかミジンコみたいです。（大笑い）
彼等の処理？も終わり、ようやく一段落ってトコですね。
だが今回も直接ブリミルと会う事はなかった。
ヤツは背後から我々の手を読んでいるのだろうか・・・。

フフフフフ。
やはり負け犬はダメだな。
一度負けたら、二度と勝てぬと言うのは真実だ。
まぁ良い。
ヤツ等のおかげで手口も分かった。
次こそは・・・。

ブリミルが呟いてるのを影からコッソリとネ申様が覗いてるのを彼は気づいていなかったのだ。

ブリミルめが。
まだ次の手を考えてるな。
とにかくヤツを完璧に封印しないと、また第二のサイトが現れてしまう。
彼みたいな異界の犠牲者は二度と出してはならぬ。
ヤツを封印し、異界に召喚される地球世界の若者の悲劇を防がないと・・・。

闘いの結末（後書き）

短いですが、ブリミル対ネ申様の抗争の根源を表現しました。
サイトだけの問題では無かったのです。

悲劇の召喚の連鎖（前書き）

ネ申様が主役です。

悲劇の召喚の連鎖

ワシが神界に入って何千年が経過しただろう。
ワシは地球を守るネ申と呼ばれる存在だ。
だが、数万年もの間に幾人もの地球の若者が異界に拉致されてしまう悪魔の魔法があった。
召喚魔法と呼ばれる物騒な魔法だ。

アレで幾人の若者が異界で涙を飲んで消えただろうか・・。
諸悪の根源は最初に召喚を思いついたブリミルとか言う異界の悪魔だ。

ヤツが自分達の世界を守らせるため「だけ」に異界の若者を拉致召喚し、
使い魔とか英雄とか勝手な事を言い、若者の運命を変えて来た。

ヤツの世界と地球世界は時間の流れが違うので、危機が起きる度に色んな時間軸の若者を、
ヤツは召還してた。
若者の嘆きは何度聞いた事か・・。

彼等の悲哀をワシは影から見守るしか無かった。
何とかしたい・・。
だが彼等とワシは住む世界が違う。
どうにも出来ずに見守るだけの数千年が続いた。

多くの若者の悲劇が続き、サイトと言う若者がまたもブリミルに拉

致られてしまったのだ。
しかも彼は役目を終えても解放されず。
二度目の人生も最後まで使われ魂も封印されてしまってた。
これではあまりにも不憫だ。

ワシは彼を救う事にした。
ただ助言したりするだけではなく、直に手を貸すのだ。
おかげでかなり派手な事をしてしまったが、それはどうでも良い。
特に日本は某国に苛められていたからな。
彼の国、日本も巻き込み異界を狂わせてしまった。
どうせ地球を食い物にして反映してるだけのダニの世界よ。
滅びるならそれでも良い。
だが、庶民には罪は無い。
彼等だけは救うべきだろう。
ワシが憎むのはハルケギニアと言う異界とブリミルであって庶民には罪は無いのだ。
何とかしてあげないと・・。

ワシはサイトとその親族に「お願い」し、協力を仰いだ。
ワシが直接、ヤツ等に手出しは出来ないからだ。
さすがに神としては悪魔と言えども殺害とかは不可能。
魂なら扱い様もあるが、肉体に手出しは出来ぬ。
それでも出来る協力は全面的に行った。
おかげで実史の日本の進むべき世界とは懸け離れた世界となったが。
幾多ある世界の一つ。
日本「だけ」が幸せになれる未来も良いだろう。
我々神族にとって、日本は住み良い国だ。
幾多ある世界でも日本だけは神の扱いが違う。
幾多の神をすべて受け入れる懐の深い国は日本以外には無いだろう。
言い忘れてたが、ワシは幾多の地球世界を見守るネ申だ。

世界の行末は星の数程ある。
その中の一つが今関わってるブリミルとの戦いだ。
地球人類は地球人類のためだけに働けば良いのだ。
他の世界まで責任を負うべきではない。
ワシはこの闘いが終わった後は、ブリミル世界との門を完璧に閉ざすつもりだ。
もう二度と他の世界から我が地球世界の人類を召喚出来ない様にする。
それこそが今まで異界で涙を飲ませた若者達への謝罪だ。
サイトみたいな悲劇の人生を送らせてはならぬのだ。

追伸、やはり日本のフュギィアはいいのぉぉぉ。
萌えに関しては現代日本が歴史上でも最高レベルだ。
今日はＡＴ〇で「〇の落し物」がある。
早く帰ってテレビを点けないと・・・。

悲劇の召喚の連鎖（後書き）

ネ申様の独り言です。

サイト（前書き）

今回はサイトの独白です。

サイト

オレの名は平賀才人。
実年齢は１７だが、実際はこの三倍の年齢と思ってくれ。

何せ「三回目」の平賀才人。

若い癖に老けてるとか言われるが、それも当然だ。
オヤジが４５だが、オレもオヤジに近い年月を歩いてる。
おかげで良くオヤジと話の合う事。
異界のハルケギニアに再再度召喚されてしまったが、もう自分で活躍しようとか思わなくなった。
今回の闘いは殆ど部下や弟子の戦いとなってるのも特徴だろう。
オレは単なる上官で良いと思う。
闘いは準備段階で大半は勝負が決まる。
いかに訓練し、戦備を整え、作戦を練り。
それで闘いは決するのだ。
前の大戦での日本の敗戦は初期に勝利が続いたのは、戦備と訓練が充実してたからだ。
負け始めたのは、戦備が尽き、訓練を施した兵士の底が尽いたからに過ぎぬ。
まあ、陸海軍がケンカしてる状態では勝てる戦争も負けるのは当然だった。
あの戦争も陸軍と海軍の作戦が統合され、戦備を融通できてたら違った闘いになってたと

思うのは自分だけでは無いと思うぞ・・・。

まあ、オレは指揮官や管理職として今回は戦ってる。
デルフがオレっチって相棒の酒飲みツレかよ・・とグチってたが、
前世では散々戦った。
もうヨシと思ってくれよ。

ワルドやギーシュもこの世界では変わった。
特にこの世界のギーシュもかなり変わったと思う。
ヤツは当初は昔の世界のギーシュだったが、例の闘いの末、積極的
に関わったせいか、
以前のギーシュとは別物となった。
自分がハルケギニアを去った後はギーシュとワルド、アニエスが国
の軍隊を
率いてくれるだろう。
そこまで痛感出来る程、ヤツ等は変わった。
ワルドはもう少し若かったらパイロットにもしてあげれたかも知れ
ぬが、
やはり年が逝き過ぎてた。
可愛そうだが、指揮官として頑張って貰おう。
たまには乗せてやるからな・・。
アニエスも敵を討ち取りスッキリしたらしい。
前世ではコルベールが我々の味方だったので、かなり不憫だったが、
今回は敵。
思う存分討たせてやれた。
アレで彼女の望みはすべて適ったと思う。
今後は王城の守りの要として頑張ってもらおう。

しかし・・・前回の闘いは正直、危なかった。
ネ申様と言う味方が居たから勝てたが、居なかったら・・・。
負けてた可能性も高い。
いや、確実に負けてた。
さすがに霊魂や魂まで対策は出来なかったからな・・。
本国では真剣にＥＳＰ対策と霊魂対策を研究してる。
やはりファンタジー世界は侮れぬ。

最終的には日本が幸せになれる世界にしたい。
もちろんコチラの平民も・・・幸せにするがな。
貴族??
大半の連中は知らないって。
ヤツ等が平民を虐殺したり嫌ってるのを知り尽くしてるからな。
心を入れ替えた連中は良いが、それ以外のボンクラは知らない。
まあ、ハロワには協力したし、職業訓練も受けさせているから、働く貴族様は歓迎しとこ。
ボンクラはイラネっ。

だが・・・。
どうしてこうなったの???

「サイト様、本当にこの前はすみませんでした。
お詫びに私の身体を好きにしてください♪」＞シエスタです。

「サイト様、ごめんなさい。
私がバカでした。どうか愚かなテファを苛めて下さい。」
（ヲイ、誰だ?テファに亀甲縛りなんて教えたのは・・）

「サイト様、反省しています。

どうかこの愚かなアンを叩いてください。」
（マリアンヌさん・・。あまり叩くとダメでしょうが・・。
Mに目覚めたらどうするの??）

オレは彼女達の居る自分の居室から脱走し、兵士達と共に寝る日が続いてた。
誰か助けてください。

サイト（後書き）

最後はオマケです。

ゲルマニア（前書き）

ゲルマニアとの話し合いです。

ゲルマニア

前回の闘いではゲルマニア国軍にも協力をしてもらった。
俺達は彼等に礼を言うため、帝政ゲルマニアの首都ヴィンドボナを訪れてた。

元首、元首は皇帝アルブレヒト3世は諸国の貴族からはあまり人気が無いそうだが、
いやいや、前回の指揮は見事だった。
おかげでヤツ等の退治もスムーズに出来たのは彼等の協力のおかげだ。
我々も人間として彼等には感謝の言葉を伝えないとな・・。

「ゲルマニアの王、皇帝アルブレヒト3世殿に面会に伺ったサイト・ヒラガと申す。
連絡は通ってると思うが宜しく頼む。」

卑下にはならない様に、そして無礼にもならない様に言葉を選んで門兵に面会を頼むと・・。

「ニホンテイコクのサイト・ヒラガ様ですね。王より連絡が入っております。
どうぞ、宮廷にお入りください。」

衛兵にも連絡が入ってたらしい。
スムーズに城に入れてもらえ、接見の間に通してくれた。
接見の間には既に皇帝アルブレヒト3世が座って待ってた。

「ニホンテイコクのサイト・ヒラガ殿。
始めまして。私が皇帝アルブレヒト3世だ。」

彼はそう言うとオレに手を差し出した。
オレも手を握り握手をする・・。
中々気さくな王らしい。
やはりキュルケの国だけにあるな。

「まず謝罪しておこう。
我が国の元貴族、スターリン公が貴殿達の国に侵攻しようとしてた事を。」

彼はそう言うと立ち上がり頭を下げたのだ。

「皇帝アルブレヒト3世殿、頭を上げてください。
彼には元トリスティンの公爵、ヴァリエール公の怨霊も取付いてたのです。」

彼にそう言うと、やはりな・・と呟いてた。
何やら以前からおかしな事ばかり言う貴族だったとか・・。
（そりゃそうだよ。元はロ助の赤軍の首領だもん。）

「何と!!本当か・・。
道理でおかしな言動を繰り返すと思ってた。」

「しかも、アレは我が国の近隣諸国の悪魔でもあったのです。
まさかこの国に転生してたとはビックリしました。」

「フム・・。
やはり人間の魂は不思議だな。

国も国境も世界も越えてしまう。」

「その通りです。我が国の技術を持ってしても、世界を超える事など不可能。
やはり神界は永劫の謎の世界です。」

「そうじゃのぉ。
いかに魔法が発達しても魔法の根源は未だに解明されておらぬ。
あの凄まじい破壊力の兵器を持つニホンテイコクでも
分からぬ事が我等に理解出来るハズも無い。」

「分からぬなら分からぬままで居ても良くはありません。
ですから・・。
私達は神を味方に引き入れております。」

「何??神とは・・・。」

「そのままの意味です。宜しければココにも呼び出せますが。」

「本当か?一度神様とやらも会えるなら会って見たいと思ってた。
是非頼む。サイト殿。」

(ネ申様、お願い出来ますか?)

(任せろ。サイトきゅん♪)

そう言うが早いか、アルブレヒト3世の面前にいきなりネ申様が降臨されたのだ。

「ワシがサイトの言う神、ネ申じゃ。

お前がこの国の王か？」

「お、ハ・・・・・。
し、失礼しました。ネ申様。
私がゲルマニアの王、アルブレヒト3世です。
始めまして。」

「ウム。宜しくな・・。
所でどう言う用件でワシに会おうと考えたのじゃ？
アルブレヒト3世。」

「私も王とかは呼ばれておりますが、所詮は普通の人間。
まさか生きてる間に神様に会える機会があるとは思えず、疑う気持ちもありました。
ですが貴方様から得られる力は凄まじいオーラがあります。
普通の人間では持ち得ないオーラです。
私も魔法を扱う人間として精神力やオーラの事は知り尽くしております。
疑う余地も無く貴方は異界の神と信ずる事が出来ます。」

「フム・・。
さすが一国の王だけあるのぉ。
やはり王とは聡明で無くてはならぬ。
ワシも既に何万年もの長い間生きてるが、生者に顔を見せるのはこの世界では
お主が始めてよ。名誉に思え。」

「ハハッ、有難き幸せに思います。」

「所でお主は今回の騒ぎをどう思う？」

「考えられぬ事態と思います。
まさか他国の領土に地底から攻め入ろうとする貴族が居たとは。」

「まあヤツ等も色々とストレスが溜まってるのだろう。
だが愚か者は即刻排除するべきだぞ。
余の世界でも愚か者が出没して困っておるのじゃ。」

「神の世界でもですか？」

「その通り。お主も良く知るヤツだぞ。ソイツは。」

「誰でしょうか？」

「お主達の始祖と呼ばれるブリミルじゃよ。
ヤツが神の世界の困りモノよ。」

・・・・・。
何と！！
ブリミル様が神界の困り者とは・・。

「すいません。思考が止まってしまいました。
ブリミル様とは、あのブリミル様ですか？」

「お主達が始祖と崇めてるブリミルその人よ。」

「それは・・・また・・・。
どう言う訳で・・・。」

「そこに居るサイト・ヒラガも被害者の一人よ。

彼も異界からブリミルが定めた使い魔召喚の儀式に拠ってこの世界に飛ばされた人間。
アレは異界の人間やこの世界の幻獣を支配するための悪魔の術じゃ。」

何と彼が異界の民とは・・。
確かに我々とは違う考えや文化。
そして産物に兵器を所持してる。
それが使い魔召喚で呼び出されたとは・・。
だが我々王家にとっては今回の騒ぎは僥倖であった。
使えぬ貴族を駆逐するネタになったのだからな。
それにニホンテイコクから輸入されてる産物のレベルの高い事。
私も今まで、あそこまで細かく作られ、なをかつ長期保存に適してる食品は見た事がなかった。
あの「カンヅメ」とやらは、本当に美味であった。
そして先日の戦闘。
作戦も見事だったが、用いた兵器も別物。
だが、それも話の通りなら納得出来る。
我々の持つ技術や魔法では実現不可能でも異界の世界なら考える事も可能。
それがブリミル・・様の仕出かした事とは・・。

「お前等がブリミルを崇める気持ちを止める事はせぬ。
だが神界では既にヤツは魔界認定されてるケダモノだ。
それは頭に入れておいてくれ。」

「分かりました。神様。
私達は今後、どうすれば良いのでしょうか?」

「まあそれを考えるのはお前等の仕事と投げてしまえば、話は終わ

るのぉ。
ワシから言える事は、近隣諸国と仲良くし、平民を虐げない国に育てろ。
そしたら、お前等の世界も良い世界となるだろう。
魔法をムリに捨てろとは言わぬが、何時までも魔法に頼っててては一部の貴族が、
また蜂起したり庶民を虐待するぞ。
それは王の責任として絶対に防げ。
庶民が無い国は滅びるのみだ。」

「ごもっともです。
今回の騒ぎも私達の指導が温かったために起きたモノと反省しています。
今回の騒ぎを王の責任として全ゲルマニアに告示し、二度と起こさない様に致します。
加担してた貴族も領地没収等の責任を負わせます。」

「フム・・。まあ良い。
それは王のお前が決める事よ。
ワシは神じゃしのぉ。フォッフォッフォッ♪」

ネ申様、サイト、アルブレヒト3世との会議はその夜遅くまで続けられ、
日本帝國とゲルマニアの友好条約も可決されたと言う。

ゲルマニア（後書き）

アルブレヒト3世の前にネ申様が姿を現しました。

エルフ（前書き）

ようやくＰＣも復旧しました。
お待たせしました。
ビターシャル登場です。

エルフ

ゲルマニアから帰国し、基地に帰るとガリアのジョセフから電話が入ったのだ。

「サイト殿か？
先日は世話になったのぉ。
ガリアのジョセフだ。
今日はサイト殿にお願いがあって連絡（でんわ）をしたのだ。」

「これは・・。
ジョセフ殿から電話が入るとは思ってませんでした。
所でお願いとは？」

「ウム、ジツは・・・。」

何でも懇意にしてるエルフのビターシャルと言うヤツが自分に会わせろと煩いとか。
最近、サハラの上空の遥か彼方を飛ぶ怪鳥が我々の所有と知り、会いたいと騒ぎ出したそうだ。
フム・・どうしたモンかな・・。

「分かりました。
では先方に連絡して頂き、トリスティン国境近くの旧ヴァリエール領の
ニホンテイコク基地に彼を案内してください。
出来ましたらジョセフ殿もご一緒にお願い出来ますか？」

「モチロンだ。

余から持ち出した話だからな。
ああ、迎えは良いぞ。
今回はヤツも居るから馬車で向かう。」

ビターシャルか・・。
過去の世界ではタバサの母の心を壊し、魔法をカウンターで跳ね返す最強のエルフだったな。
今回の世界ではどうなるのだろ?
ま、一応逢うだけは会うか。
考えても仕方ない。

で、いきりコレですよ。
この方・・・。

「お前がニホンとか言う国から来た蛮人か?」

失礼って言葉はエルフには無いんですかね。
いきなり初対面から蛮人扱いですよ。

「・・・。
エルフって種族は誰にでも蛮人と言うんですか?
長耳のオッサンよ。」

「無礼なヤツだな。死にたいのか?」

「ケンカなら買いますよ。
我々は軍隊です。ケンカが仕事ですからね。
あ、危ないっスからジョセフ殿は離れててください。
今からコイツをブチっと潰しますから。」

「ま、待て・・。サイト殿。
ビターシャル殿、ケンカ腰に話すのは止めてくれと頼んでただろうが。
彼等は我等とも違う技術を持つ異国の方。
ケンカするなら帰って頂くぞ？」

「・・・。
スマン。私が浅はかだった様だ。
サイト殿で良かったかな？
今の私の言葉は忘れてくれ。」

そう言うとビターシャルは頭を下げたのだ。
あのビターシャルが・・・だ。

「フム・・。まあいいでしょう。
いきなりケンカ腰で蛮人呼ばわりされましたからね。
こう見えても私達は軍人。
舐められたら終わりです。
でも・・・。次はありませんからね。
私はニホンテイコクからハルケギニアに関しては全権を任されております。
例え戦争になったとしてもです。
エルフの国は確か・・・「ココ」ですよね？」

そう言うと軌道上から撮影したサハラの写真を奴等に見せた。

「こ、コレは・・・。」

「遥か彼方の空の上から撮影した地図ですよ。ちなみにハルケギニア大陸も、

すべて撮影して詳細な地図も完成しています。」

「この絵を私に見せた本音は何だ?」

「そりゃモチロン・・。」

「何時でも攻撃出来るぞ!との恫喝か?」

「さあ?どうでしょうね♪」

「喰えぬ人だ・・。(コノ野郎!!)」

「アっ、ジョセフ殿。
詳細な祖国の地図はまだ持っていませんよね?
先日作成したガリアの詳細地図です。
百枚程度作りましたから、これを複製して国の運営に使ってください。」

「おお、まことか。
助かる。
あの高みから写した我が国の絵を頂けるとは・・。
感謝する。サイト殿。」

「ジョセフ、あの高みとはどう言う事だ?」

「ビターシャル。
その話はサイト殿の許可が無い限り、我が口からは話せないのだ。」

「そうか・・・。
してサイト殿、その地図を私に見せた真意は何だ?」

「別に♪
ただ、貴殿の住む国がどこにあるのか確認しただけですよ。」

「ムムムム・・・。
先ほどの私の発言で気分を害してるならもう一度謝罪しよう。
だから教えてくれ。頼む。」

「まあ・・。良いでしょう。
「誇り高き」エルフの方の謝罪付きなんですからね。
地図を見せた真意は何時でも彼方達の国を滅ぼす事が可能と言うメッセージですよ。
もちろん敵対しないならしませんけどね。
ですが、我々に敵対するなら・・・。
殲滅します。
我々はそれが可能ですから。」

・・・。
この蛮人、否。
サイト殿の言う事は真か？
我々エルフの力は蛮人の使う魔法とはケタが違うと自負している。
だが奴等は我等を滅ぼす術を持つと言う。
それが事実なら、敵対するべきでは無いと思う・・が・・。
やはり本音では蛮人如きに頭を下げたく無い。
我等は誇り高きネフテスのエルフだからだ。

「サイト殿の話は良く分かった。
我等の魔法や飛竜でもこの様な高みから我が国を見るのは不可能と思う。
そこで・・だ。

貴殿の持つ兵器とやらを見せて頂く事は出来ぬか？」

この長耳のヲッさん、相変わらず食えんヤツだな。
まあ見せるだけなら問題無いか。
基地の内部での演習なら・・。
閣下にお願いするか。
まだ暴れ足りないとブツブツ言ってたらしいからな。

ビターシャルに閣下の演習（お遊び）を見てもらう事にしたのは数刻してからだ。

「ビターシャル、蛮人の演習を見せてやる。
あまりに幼稚だから泣くなよ。」

どうもビターシャルとはソリが合わないのか、ケンカ腰に話してしまう。
まだまだ若いな・・。オレも。

「サイト殿、もう許しては貰えぬか？
我が悪かった・・。」

何故かビターシャルが涙目で訴えるのだ。
オレが悪いのか・。

こうしてビターシャルに演習を見せる事になったのだ。
標的は・・。

彼女達にお願いしようっと♪

エルフ（後書き）

次回は閣下に演習をして貰います。
更新は時間かけて行います。
ストックが残っていませんのでお許しを。

演習（前書き）

閣下に演習して貰います♪

演習

ビターシャルに演習を見せる事になったのでアルビオン基地に通信を入れた。

「アルビオン基地か？
総司令の平賀才人だ。
旧ヴァリエール領の演習場で演習を披露する事になった。
閣下の率いる部隊を１５００（ヒトゴーマルマル）に演習場に寄越してくれ。
もちろんフル装備でな。
標的はゴーレムだ。
「「派手」」に破壊してくれ。」

オレはアルビオン基地に連絡するとマチルダとギーシュを呼び出した。

「ギーシュ、マチルダ。
悪いが久しぶりにゴーレムを作ってくれ。
演習の標的にするから強固に作って欲しい。」

「サイト司令、了解しました。
久しぶりにこの青銅のギーシュ。
完璧なゴーレムを作って見せます。
また閣下の雄姿が見られるのですからガッチリと強固に作ります。」

「サイト様、分かりましたわ。
このマチルダ、久しぶりに最強のゴーレムを作り上げておきます。」

二人とも快諾してくれた。
ただ破壊されるだけのゴーレムなのだが。
だが突っ立っているだけでは演習にならないので、適当に動かす様に指示しておいた。
閣下もお喜びになるだろう・・。

（追伸、ルーデル閣下は日本帝國内部で閣下で通っています。）

彼等には演習寸前まで精神力を貯めてもらい、強固なゴーレム練成を頼んだ。

演習場には来賓席を設け、事故を避けるためにシェルターも設けておいた。

ギーシュとマチルダには自由にゴーレムを操作させる様に指示しておいた。
閣下のライデンには的にしかならないのだが。

「ヴァリエール基地か？
こちらはルーデル大隊。
間もなくヴァリエール演習場に到着する。
標的は出来ているか？」

閣下から無線が入った。

「コチラ、ヴァリエール基地。サイト・ヒラガ総司令だ。
閣下、標的のゴーレムは巨大ゴーレムが二体。
ザコゴーレムが七体だ。閣下は巨大ゴーレムを破壊して欲しい。
出来る限り来賓席には破片が飛ばない様に頼む。

部下にはザコゴーレムを破壊してくれ。」

「了解した。編隊、聞いてたな？」

「「「「閣下、了解しています。
ザコゴーレムは我々にお任せください。」」」」

ギーシュが何かガックリしてるが、彼のゴーレムも兵士としては重要だ。
気は落すな、と告げておいた。

やがて１５００。
演習場に轟音が轟き、巨大ゴーレムが聳え立つ。
そして遥か彼方の空から高速の飛行物体が・・・。

「サイト殿、あの飛行物体は？」

「ビターシャル殿、黙って見ててください。
間もなく分かりますから。」

「サイト殿、楽しみじゃのお。
あの怪鳥の攻撃破壊力の威力は見ものだ。」

「ジョセフ殿、今回は手加減ナシの攻撃ですので、シェルターの中で待機してて貰います。
破片が飛び散ると思いますので。」

「ウム。了解した。
ビターシャル殿、危険だそうだからシェルターに入れと言う事だ。」

「・・・。分かった・。」

ビターシャルも黙ってシェルターに入ってくれた。
やがて、ギーシュとマチルダの作ったゴーレム目掛けルーデル大隊が大空から舞い降りて来た。

グおぉおぉおぉおぉおぉおぉーーーーん・・。

腹に響く重低音と高周波の入れ混じったジュリコのラッパが轟き、
ライデンの翼に装備した
五百キロ爆弾が見事にゴーレム直撃。

「お見事!!!」

閣下の投下した爆弾は見事にゴーレムを直撃。
巨大ゴーレムは木っ端微塵に砕け散る。
その後はルーデル大隊のライデンがギーシュの作ったザコゴーレムを襲撃。
数秒ですべてが灰燼と散ってしまった。

(な、ナンダ??アレは・・・。
あの巨大なゴーレムを粉微塵にするのは我々でも難しいのにあの怪鳥は一撃で砕いてしまった。
どうなってるのだ??)

「こちらルーデル。
既にゴーレムは壊滅した様だが。」

「こちら平賀だ。スマンが持たなかったみたいだな。
悪いが地上に置いてある標的目掛けて自由射撃して欲しい。

終わったら基地に着陸してくれ。
久しぶりに閣下とお茶を飲みたいと思うからな。」

「こちらルーデル。了解した。
演習完了後基地に着陸。
部下も降ろすぞ。」

「了解、マチルダに美味しい紅茶を準備させておく。
では仕上げを見せてくれ。」

閣下との通信を終えるとビターシャルとジョセフが放心してた。

「どうでしたか?
我が軍の演習は・・。」

「・・・・・。スマン。
呆けていた。凄まじい演習としか表現が出来ない。」

「ニホンテイコクで見た演習も凄かったが、今回の演習は目前であったただけに、
衝撃波とか轟音が凄かった。
アレが我々に歯向かったとしたら、防ぐ手立ても無い。」

「そうですか・・。
演習の目的は達成されたと思って良いですね。」

「演習の目的?」

「ハイ。
我が国は基本的に戦闘はあまり好まない民族です。

ですが敵対勢力に囲まれていた国家でもありました。
我々の国では、実際に戦争が始まるとどちらかの国が壊滅するのも必至です。
それでは国が持ちません。
ですので、定期的に演習を行い、敵対国家に「攻めたら火傷では済まないぞ。」と言う、
意思表示をする目的があるのです。」

（ムムムム。確かに。
あの怪鳥を叩き落せと言われれば一羽だけなら何とか出来るかも知れぬ。
だが、あの様に大量の怪鳥に襲われたら・・・・。
一たまりも持たないだろう。
ネフテスにも彼等に敵対する愚は犯すなと警告しておくべきだな。
蛮人とは言え、アレには我々も適わないと思う・・。）

ビターシャルもジョセフも演習の衝撃にかなり呆けていた。
やがて閣下も着陸。
王族にも負けない気高き閣下にジョセフは是非、我が友となってくれと頼み、
ビターシャルもルーデルにサインを求めてた。
閣下のカリスマは異界でも輝いているのだ。
この演習でエルフとも戦わなくて済む様になれば良いのだがな・・。

演習（後書き）

コテハンを変えました。
今後はモリノタゴサクとなります。
エルフとの戦いを避けられるかはまだ分かりません。

ネ申様との会談（前書き）

ネ申様とサイト、そしてハヤトとの会談です。

ネ申様との会談

ビターシャルとジョセフを見送り、オレは日本に一度帰国する事にした。

今後の方針をオヤジと会談するためだ。

さすがに重要な話は密室で話さないと・・。

空燕を駆り、大空に舞い上がり久しぶりに単独で帰国した。

羽田基地に到着し、オヤジの待つ大統領官邸までタクシーを飛ばす。

「オヤジ、大事な話があるので帰国した。」

「サイトか？
余程大切な話らしいな。どう言う内容だ？」

「エルフと接触した。ヤツ等との対決をどうするか相談に来たのだ。」

「サイトはどうしたいのだ？」

「出来れば・・。
戦いたく無い。
ヤツ等と敵対してたのは地球に飛ばされたロマリアだけだったからな。
コチラから争いを起こさなかったらヤツ等は砂漠で引き篭もってく

れる。」

「それなら放置で良いだろ？」

「だが全てのエルフが穏やかとは思えない。
特にエルフの魔法は脅威だからな。」

そこへ・・・。

「ハヤトよ、ヤツ等の牽制はワシに任せておけ。」

ネ申様が降臨されたのです。

「これは・・。
お久しぶりです。ネ申様。」

「ハヤト、サイトよ。
エルフのヤツ等はワシが管理する。
ヤツ等もブリミルを嫌っておるからな。」

「それは・・・。
どう言う事でしょうか？」

「簡単な事よ。
ブリミルの使い魔だった初代のガンダールヴはエルフの女、サーシャと言う。
だが彼女はどう言う訳かブリミルを裏切り、ブリミルを抹殺した。」

（原作での話が進展していませんので、ここ等は想像で書きます。）

「それは・・また・・。」

「エルフの部族にはサーシャの伝説も伝わっておる。
彼女がどうしてブリミルから逃れ、ヤツを抹殺したかもな。」

「そうでしたか。それなら彼等がブリミルに付く事はありえないですね。」

「その通り。だが人間から言われたらどう反応するかが読めぬ。
よってワシからヤツ等に接触し、ヤツ等をコチラに引きずり込むつもりだ。」

「そうして頂けると助かります。
彼等は人間を蛮人と呼び、敵視してますからね。」

「任せろ。
ワシもサイトに関わったからには最後まで責任を持つ。」

「ありがたい事です・・。」

「ハヤトよ。エルフとの事が終わったら・・。」

「例の計画通りに・・。」

「ウム・・。」

「楽しみですね。ネ申様。」

「フフフ・・・。ヤツ等の慌てる顔が楽しみだ。」

こうしてネ申様、オヤジを交えた秘密の会議は終わった。
その後は人間化したネ申様を引き連れ冠木町に出かけ御釜バー、伽場蔵をハシゴし、
楽しい夜を過ごした。
ネ申様が盛り髪の伽場嬢を持ち帰ると騒いだのには閉口したが・・。

ネ申様との会談（後書き）

話の終点が見えて参りました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6722w/

怨嗟の使い魔

2011年11月18日00時41分発行